秋田県文化財調査報告書第480集

横　枕　遺　跡

―一般国道７号象潟仁賀保道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―

２０１２・７

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992 年 8 月発見、高さ 7 ㎝、凝灰岩。

横枕（よこまくら）遺跡

―一般国道７号象潟仁賀保道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―

２０１２・７

秋田県教育委員会

1　北区調査区全景（上が西）

2　北区調査区遠景（南から）

1　南区調査区全景（上が西）

2　南区調査区遠景（南から）

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、秋田県がめざす活発な地域の交流と連携のための、根幹を成す開発事業であります。本教育委員会では、これらの開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道7号象潟仁賀保道路の建設に先立って、平成22・23年度に、にかほ市において実施した横枕遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査により、平安時代の竪穴建物跡や鍛冶作業を行ったと推定される炉跡などが検出され、平安時代に鍛冶作業に従事した人々の集落が営まれていたことがわかりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所、にかほ市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成24年7月

秋田県教育委員会

教育長　米　田　　進

例　　言

1　本書は、一般国道７号象潟仁賀保道路建設事業に伴い、平成22年度に北区、平成23年度に南区を発掘調査した、にかほ市所在の横枕遺跡の発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2　調査要項

遺　　跡　　名　横枕遺跡（よこまくらいせき）

遺　跡　略　号　６ＹＭ（北区：６ＹＭ－Ｎ　南区：６ＹＭ－Ｓ）

遺 跡 所 在 地　秋田県にかほ市平沢字横枕２番地外

調　査　期　間　北区：平成22年７月５日～11月５日　南区：平成23年６月６日～10月28日

調　査　面　積　北区6,200㎡　南区3,600㎡　合計9,800㎡

調 査 主 体 者　秋田県教育委員会

調 査 担 当 者　平成22年度

榮　　一郎　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　副主幹）

袴田　道郎　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事）

佐藤　幹子　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　調査・研究員）

藤本　玲子　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　調査・研究員）

平成23年度

袴田　道郎　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事）

山村　　剛　（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事）

総 務 担 当 者　平成22年度

久米　　保　（秋田県埋蔵文化財センター　主査）

高村知恵子　（秋田県埋蔵文化財センター　主任）

平成23年度

菊地　尚久　（秋田県埋蔵文化財センター　主査）

掘削作業管理業務　平成22年度　株式会社三共　（現場代理人　渡邊大樹）

平成23年度　株式会社三共　（現場代理人　土田嘉久、渡邊大樹）

調 査 協 力 機 関　国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所　にかほ市教育委員会

3　本書に使用した地図は、国土地理院発行の1/50,000『象潟』（第４図）及び国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所提供の1/1,000工事用図面（第５図）である。

4　遺跡基本層位と遺構覆土の土色の表記は、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』2006年版によった。

5　本書に使用した空中写真は、北区は株式会社北日本朝日航洋、南区は株式会社シン技術コンサルに撮影を委託したものである。

6　理化学的分析は、北区の植物珪酸体分析と花粉分析を株式会社古環境研究所に、北区及び南区の樹種同定分析、放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託した。

7　本書は各調査担当者が執筆した草稿を、北区については榮一郎が、南区については袴田道郎がそれぞれまとめ、全体の編集は袴田が行った。

凡　　例

1　遺構番号は、北区、南区でそれぞれ種類ごとに下記の略番号、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

SA：柱穴列　SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SI：竪穴建物跡　SK：土坑
SL：河川跡　SN：焼土遺構　SR：土器埋設遺構　SS：炉跡
SX：性格不明遺構　SKP：柱穴様ピット

2　遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構内層位にはアラビア数字を使用した。

3　挿図中の遺物番号は、各遺構ごとに土器・土製品・木製品・金属製品を問わず通し番号を付した。

4　古代の土器のうち、須恵器は断面を黒く塗りつぶし土師器と区別した。

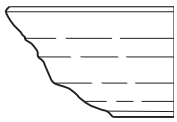
5　挿図に使用した網フセは、下記の通りである。

焼土　焼土（被熱）

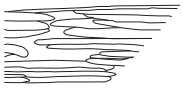
黒色処理　煤・炭化物

6　土器の実測図に用いた調整の表現は下記の通りである。

ロクロナデ

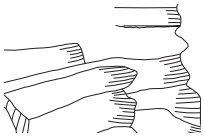


ミガキ



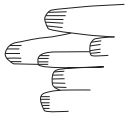
ケズリ

ヘラナデ



ハケメ

ユビナデ



目　次

巻頭図版・序・例言・凡例・目次(挿図・表・図版目次)
第１章　調査の経過…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　発掘調査の経過…… 2
　第３節　整理作業の経過…… 5
第２章　遺跡の位置と環境…… 6
　第１節　地理的環境…… 6
　第２節　歴史的環境…… 7
第３章　調査の方法と成果…… 13
　第１節　調査の方法…… 13
　　１　発掘調査…… 13
　　２　整理作業…… 14
　第２節　北区の調査…… 15
　　１　北区基本層序…… 15
　　２　北区検出遺構と遺物…… 25
　　（１）　概要…… 25
　　（２）　竪穴建物跡…… 25
　　（３）　土坑…… 31
　　（４）　炉跡…… 36
　　（５）　焼土遺構…… 38
　　（６）　土器埋設遺構…… 39
　　（７）　性格不明遺構…… 40
　　（８）　柱穴様ピット…… 40
　　（９）　遺構外出土遺物…… 40
　第３節　南区の調査…… 80
　　１　南区基本層序…… 80
　　２　南区検出遺構と遺物…… 86
　　（１）　概要…… 86
　　（２）　竪穴建物跡…… 86
　　（３）　掘立柱建物跡…… 88
　　（４）　溝跡…… 88
　　（５）　河川跡…… 90
　　（６）　土坑…… 91
　　（７）　焼土遺構…… 93
　　（８）　土器埋設遺構…… 95
　　（９）　柱穴様ピット…… 95
　　(10)　遺構外・調査区外出土遺物…… 95
第４章　理化学的分析…… 125
　第１節　横枕遺跡北区における植物珪酸体分析…… 125
　第２節　横枕遺跡北区における花粉分析…… 130
　第３節　横枕遺跡北区から出土した炭化材の樹種同定…… 134
　第４節　横枕遺跡北区における放射性炭素年代(AMS測定)…… 136
　第５節　横枕遺跡南区から出土した木材・炭化材・石材の種類…… 139
　第６節　横枕遺跡南区における放射性炭素年代(AMS測定)…… 143
第５章　総括…… 147
報告書抄録…… 173

挿図目次

第１図　遺跡位置図…… 6
第２図　地形区分図…… 10
第３図　鳥海山周辺地域の切峰面図…… 10
第４図　横枕遺跡と周辺遺跡位置図…… 11
第５図　周辺地形図・掲載遺物出土確認調査試掘溝位置図…… 12
第６図　北区基本層序位置図…… 18
第７図　北区東西畦１・２土層断面…… 19
第８図　北区N28-N29・N47-N49土層断面…… 20
第９図　北区 N36-N37 土層断面…… 21
第10図　北区南北畦１土層断面…… 22
第11図　北区南北畦２土層断面…… 23
第12図　北区遺構配置図…… 24
第13図　SI01…… 43
第14図　SI01遺物出土位置図・炭化物範囲図…… 44
第15図　SI01カマド…… 45
第16図　SI05…… 46
第17図　SI14…… 47
第18図　SI14カマド残存状況…… 48
第19図　SI45…… 49
第20図　SI45カマド完掘図…… 50
第21図　SI45遺物出土位置図・SK1・SN1・SN2…… 51
第22図　SI66・SI102…… 52
第23図　SI115…… 53
第24図　SK02・03・10…… 54
第25図　SK04・11・16…… 55
第26図　SK42・47・50…… 56
第27図　SK77…… 57
第28図　SK78・79・82…… 58
第29図　SK103・155・SN19・21…… 59
第30図　SS49・116・117・118・119…… 60
第31図　SN99・SR15・73…… 61
第32図　SX76・SI01位置関係図…… 62
第33図　北東部柱穴様ピット配置図…… 63
第34図　北区出土遺物図（１）…… 64
第35図　北区出土遺物図（２）…… 65
第36図　北区出土遺物図（３）…… 66
第37図　北区出土遺物図（４）…… 67
第38図　北区出土遺物図（５）…… 68
第39図　北区出土遺物図（６）…… 69
第40図　北区出土遺物図（７）…… 70
第41図　北区出土遺物図（８）…… 71
第42図　北区出土遺物図（９）…… 72
第43図　北区出土遺物図(10)…… 73
第44図　北区出土遺物図(11)…… 74
第45図　北区出土遺物図(12)…… 75
第46図　北区出土遺物図(13)…… 76
第47図　南区基本層序位置図…… 82
第48図　南区東西畦１・２・４土層断面…… 83
第49図　南区東西畦３土層断面…… 84
第50図　南区遺構配置図…… 85
第51図　SI02・30…… 99
第52図　SI06と周辺柱穴様ピット位置図…… 100
第53図　SB163…… 101
第54図　SD154…… 102
第55図　SD171…… 103
第56図　SD176・200…… 104
第57図　SD221・224・259…… 105
第58図　SL319・SK105・106…… 106
第59図　SD154・SK167・172…… 107
第60図　SK183…… 108
第61図　SK222・287・297・311…… 109
第62図　SN156・157・158・166…… 110
第63図　SR33・SKP202・211・212・213・223…… 111
第64図　南西下面区柱穴様ピット配置図…… 112
第65図　南区出土遺物図（１）…… 113
第66図　南区出土遺物図（２）…… 114
第67図　南区出土遺物図（３）…… 115
第68図　南区出土遺物図（４）…… 116
第69図　南区出土遺物図（５）…… 117
第70図　南区出土遺物図（６）…… 118
第71図　南区出土遺物図（７）…… 119
第72図　南区出土遺物図（８）…… 120
第73図　南区出土遺物図（９）・調査区外出土遺物図（１）…… 121
第74図　調査区外出土遺物図（２）…… 122
第75図　横枕遺跡北区南北畦２における植物珪酸体分析結果…… 129
第76図　横枕遺跡北区南北畦２における花粉ダイアグラム…… 133
第77図　暦年較正年代グラフ…… 146

表目次

第１表　横枕遺跡周辺の遺跡一覧…… 9
第２表　北区柱穴様ピット一覧…… 42
第３表　北区出土遺物一覧（１）…… 77
第４表　北区出土遺物一覧（２）…… 78
第５表　北区出土遺物一覧（３）…… 79
第６表　南区柱穴様ピット一覧（１）…… 97
第７表　南区柱穴様ピット一覧（２）…… 98
第８表　南区・調査区外出土遺物一覧（１）…… 123
第９表　南区・調査区外出土遺物一覧（２）…… 124
第10表　北区における植物珪酸体分析結果…… 128
第11表　北区における花粉分析結果…… 132
第12表　北区樹種同定結果…… 134
第13表　北区放射性炭素年代測定対象試料…… 137
第14表　北区放射性炭素年代測定結果…… 138
第15表　南区同定結果…… 139
第16表　南区放射性炭素年代測定対象試料…… 145
第17表　南区放射性炭素年代測定結果…… 145

図版目次

巻頭図版１　1　北区調査区全景（上が西）
　　2　北区調査区遠景（南から）

巻頭図版２　1　南区調査区全景（上が西）
　　2　南区調査区遠景（南から）

図版１（北区）　1　SI01完掘（南西から）
　　2　SI01カマド完掘（南西から）
　　3　SI01炭化物の広がりと遺物出土状況（南西から）
　　4　SI01土層断面（東から）

図版２（北区）　1　SI05完掘（西から）
　　2　SI14カマド完掘（南東から）
　　3　SI14完掘（西から）
　　4　SI14遺物出土状況（西から）

図版３（北区）　1　SI45完掘（北東から）
　　2　SI45カマド完掘（南東から）
　　3　SI45－SK1半截断面（東から）
　　4　SI45－SN1（南から）
　　5　SI45－SN2断ち割り（西から）

図版４（北区）　1　SI66・SI102完掘（北西から）
　　2　SI115新段階炉跡完掘（北東から）

図版５（北区）　1　SK02完掘・SK10遺物出土状況（南東から）
　　2　SK03半截断面（南から）
　　3　SK04完掘（南から）
　　4　SK11半截断面（南東から）
　　5　SK16完掘（西から）
　　6　SKP153完掘（東から）
　　7　SK42半截断面（北西から）
　　8　SK50貼面（南から）

図版６（北区）　1　SK47遺物出土状況（東から）
　　2　SK47半截断面（東から）
　　3　SK77土層断面（北から）
　　4　SK78完掘（北から）
　　5　SK79完掘（南から）
　　6　SK82完掘（南から）
　　7　SK103半截断面（西から）
　　8　SK155完掘（西から）

図版７（北区）　1　SS116・117・118確認（南東から）
　　2　SS116遺物出土状況（南西から）
　　3　SS117土層断面（南西から）
　　4　SS118半截断面（南西から）
　　5　SS119完掘（西から）

図版８（北区）　1　SS49土層断面（西から）
　　2　SN19断ち割り状況（南西から）
　　3　SN21遺物出土状況（南から）
　　4　SN99炉床面（西から）
　　5　SR15（北東から）
　　6　SR73（南から）
　　7　SX76とSI01遠景（南東から）
　　8　SX76・SI01完掘（南西から）

図版９（北区）　北区出土遺物（１）

図版10（北区）　北区出土遺物（２）

図版11（南区）　1　SI02・30完掘（南から）
　　2　SI06完掘（南から）

図版12（南区）　1　西端下面部全体（北から）
　　2　SD154礫群出土状況（北から）
　　3　SD176完掘（東から）
　　4　SD171南側完掘（東から）
　　5　SD171東側完掘（南から）

図版13（南区）　1　SD200完掘（東から）
　　2　SD200北端部完掘（北から）
　　3　SD221完掘（東から）
　　4　SD224土層断面（南東から）
　　5　SD259完掘（北から）
　　6　SL319完掘（西から）
　　7　SK105完掘（南から）
　　8　SK106土層断面（南から）

図版14（南区）　1　SK183完掘（北から）
　　2　SK297・311遺物出土状況（東から）

図版15（南区）　1　SK167完掘（東から）
　　2　SK172炭化物出土状況（西から）
　　3　SK222完掘（北から）
　　4　SN156確認状況（東から）
　　5　SN157半截状況（北から）
　　6　SN158半截状況（西から）
　　7　SN166確認状況（東から）
　　8　SR33遺物出土状況（西から）

図版16（南区）　南区出土遺物（１）

図版17（南区）　南区出土遺物（２）

図版18　北区の植物珪酸体（プラント・オパール）

図版19　北区の花粉・胞子

図版20　北区炭化材の組織写真（１）

図版21　北区炭化材の組織写真（２）

図版22　南区樹種同定　炭化材（１）

図版23　南区樹種同定　炭化材（２）

図版24　南区樹種同定　木材・酸性凝灰岩

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車道は、新潟から青森にかけての日本海沿岸や県内の高速交通体系の改善など、地域の生産活動と県民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的として計画された総延長約320㎞の国土開発幹線自動車道である。秋田県内においては、現在、高速自動車国道としての整備のほか、これに並行する一般国道自動車専用道路として象潟仁賀保道路及び仁賀保本荘道路、秋田外環状道路、琴丘能代道路、鷹巣大館道路、大館西道路などの整備を進め、小坂ジャンクション（Ｊ.Ｃ.Ｔ）で東北自動車道に接続する高規格幹線道路となる計画である。

現在、秋田県内の計画路線のうち平成９年に秋田南インターチェンジ（Ｉ.Ｃ）～昭和・男鹿半島Ｉ.Ｃ間、平成13年に河辺Ｉ.Ｃ～秋田空港Ｉ.Ｃ間、平成14年に琴丘・森岳Ｉ.Ｃ～能代南Ｉ.Ｃ間、昭和・男鹿半島Ｉ.Ｃ～琴丘･森岳Ｉ.Ｃ間、岩城Ｉ.Ｃ～秋田空港Ｉ.Ｃ間、平成18年に能代南Ｉ.Ｃ～能代東Ｉ.Ｃ間、平成19年に能代東Ｉ.Ｃ間～二ッ井白神Ｉ.Ｃ間、岩城Ｉ.Ｃ～仁賀保Ｉ.Ｃ間（暫定）がそれぞれ開通している。

横枕遺跡は仁賀保本荘道路と象潟仁賀保道路を繋ぐ仁賀保Ｉ.Ｃ（仮称）予定地南側に位置する。仁賀保本荘道路は平成３年12月に基本計画決定がなされ、以後、平成10年４月新規着工準備、平成12年４月事業化、平成14年７月工事着工、平成19年９月暫定部分11.2㎞の併用開始となっている。一方、象潟仁賀保道路は平成３年12月基本計画決定、平成12年４月新規着工準備、平成17年４月事業化、平成19年10月工事着工となっている。これら整備事業計画の進展に伴い、事業主体である国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所（以下、秋田河川国道事務所）から秋田県教育委員会に対し、平成18年度には仁賀保Ｉ.Ｃ（仮称）建設予定地周辺事業地内の埋蔵文化財分布調査について依頼があった（平成18年７月７日付、国東整秋二調第22号）。これを受けて秋田県教育委員会は、平成18年度から20年度にかけて当該地域の遺跡分布調査を実施した。その結果、横枕遺跡をはじめ、数遺跡を新たに発見[註１]し、秋田河川国道事務所に報告した（平成20年12月26日付、教生－1970ほか）。その後、秋田県教育委員会と秋田河川国道事務所との協議の上、横枕遺跡については、平成21年３月９日から３月19日、同５月11日から６月10日の日程で路線内の30,000㎡を対象に秋田県埋蔵文化財センターが遺跡確認調査を実施した。その結果、遺跡は古代の集落跡であり、工事区域内の南北２か所（北区及び南区）、合計9,800㎡について発掘調査が必要であることが判明[註２]し、その旨、秋田県教育委員会から秋田河川国道事務所に報告した（平成21年８月31日付、教生－1225）。これを受けて、平成22年４月に秋田河川国道事務所が横枕遺跡の土木工事等のための発掘通知を秋田県教育委員会に提出し（平成22年４月28日付、国東整秋二調第３号）、同年５月に秋田県教育委員会が工事着手前の発掘調査及び工事の際の立会調査が必要である旨通知した（平成22年５月13日付、教生－414）。その後の両者の協議の結果、最終的に、発掘調査は秋田県埋蔵文化財センターが担当し、平成22年度に北区6,200㎡を、平成23年度に南区3,600㎡をそれぞれ発掘調査することとなった。

第２節　発掘調査の経過

《**北区**》北区の発掘調査は、平成22年７月５日から11月５日まで実施した。最初に７月５日から７月13日まで重機による表土除去を行い、その後、７月20日から調査員、現場代理人及び発掘作業員による発掘作業を11月５日まで行った。各週ごとの調査経過は次の通りである。

【第１週】７月５日～７月９日　調査員２名、現場代理人１名、バックホウ２台、クローラキャリア４台の体制で遺跡の表土除去を実施。旧市道部分を除き９日までにほぼ完了する。また、調査区最低位部の南西端地点は、近現代の畑地造成時に大きく削平され、遺構・遺物は分布しないことが表土除去の結果判明し、当該地点に調査区から流出する汚水処理用の沈泥池を重機により掘削・造成した。

【第２週】７月12日～７月13日　重機により旧市道部分の路盤を除去し、調査区の表土除去作業を完了する。なお、７月14日には重機によりベルトコンベア及び発電機を調査区内に搬入。また、12日から三栄測量(株)による方眼杭の打設作業が開始される。

【第３週】７月20日～７月23日　発掘機材等を搬入、調査員４名、現場代理人１名、発掘作業員52名の体制で人力での発掘作業を開始する。調査区内に南北・東西各２本の基本土層観察用畦を設定し、当該畦沿いに試掘溝の掘り下げを行う。併せてベルトコンベア30台を調査区北半部に配置する。20日に櫻田所長来跡し、作業開始に当たっての挨拶を行う。また、20日までに方眼杭打設作業は完了する。

【第４週】７月26日～７月30日　基本層序観察用畦沿いの試掘溝掘り下げを継続し、一部の畦の土層断面の記録作成を行う。ベルトコンベアを稼働し、調査区北端部･北東部･中央部の掘り下げも開始する。27日に児玉中央調査班長来跡し、調査指導を行う。30日は降雨のため現場作業を休止する。

【第５週】８月２日～８月６日　基本層序観察用畦土層断面の記録作成を継続。調査区北端部・北東部・北西部・中央部の掘り下げを行う。北東部では地滑り起源の地割れが存在し、当該地点周辺には主に基盤土を敷き均した古代の整地層が広がることが判明する。２日に新海文化財保護室文化財主任来跡し、発掘調査状況を視察する。

【第６週】８月９日～８月10日　基本層序観察用畦土層断面の記録作成を継続し、調査区北端部・北東部・北西部・中央部の掘り下げ及び遺構精査を行う。北西部は近現代の畑地造成による削平のため遺構は確認できず、精査をほぼ完了する。８月11日から８月17日までは盆休みとして現場作業を休止。

【第７週】８月18日～８月20日　調査区北端部・北東部・中央部の掘り下げ及び遺構精査を行う。北端部では袖部に大形円礫を据えたカマドを伴う古代の竪穴建物跡(SI14)を確認する。調査区北西部は基盤層上面の地形測量を実施し、調査を完了した。

【第８週】８月23日～８月27日　調査区北端部・北東部・中央部の掘り下げ及び遺構精査を継続。中央部東端側で土師器甕内に土師器坏２個を納めた土器埋設遺構(SR15)を確認する。23日に宇田川文化財保護室文化財主任が来跡、発掘調査状況を視察。24日に久米主査・高村主任来跡、書類検査を行う。

【第９週】８月30日～９月３日　調査区北端部・北東部・中央部の掘り下げ及び遺構精査を継続する。中央部で焼土面・大形円礫・土師器などを同一面上で確認し、竪穴建物跡(SI45)に伴うカマド等と判断する。８月31日に矢口国土交通省監督官・新海文化財保護室文化財主任来跡し、発掘調査状況を視察する。９月３日に児玉中央調査班長来跡し、調査指導を行う。

【第10週】９月６日～９月10日　調査区北端部・北東部・中央部の掘り下げ及び遺構精査を継続する。

北端部の精査は完了する。また、一部のベルトコンベアを調査区南半部へ移動し、当該地点の掘り下げを開始する。７日は降雨のため現場作業を休止。

【第11週】９月13日～９月17日　調査区北東部・中央部・南半部の掘り下げ及び遺構精査を継続。中央部東半は基盤層上面の地形測量を除き、調査を完了した。南半部西側で東西辺長５m以上の古代の竪穴建物跡(SI01)を確認。15日に矢口国土交通省監督官ほか３名が来跡し、発掘調査状況を視察する。

【第12週】９月21日～９月24日　調査区北東部・中央部・南半部の掘り下げ及び遺構精査を継続。中央部西端で土師器坏を正位に埋めた土器埋設遺構(SR73)を確認する。22日は調査員が職員技術研修会に参加するため、現場作業を休止。

【第13週】９月27日～10月１日　調査区北東部・中央部・南半部の掘り下げ及び遺構精査を継続。北東部で竪穴建物跡(SI05)を確認する。周辺には炉跡の可能性ある焼土面が４か所以上分布し、当該遺構は工房跡の可能性が推定される。

【第14週】10月４日～10月８日　調査区北東部・中央部・南半部の掘り下げ及び遺構精査を継続。中央部は西端側の沢状落ち込み部分を除きほぼ調査を終了。南半部は西側のSI01竪穴建物跡以外の遺構精査はほぼ完了する。SI01竪穴建物跡ではカマド周辺の床面及び壁溝内に比較的多量の遺物とともに炭化物層が堆積することを確認し、ある種の廃絶儀礼が行われた可能性が推定される。４日に齋藤副所長が甘粛省物古研究所呉莊交流員を伴い来跡し、発掘調査状況を視察するとともに調査指導を行う。

【第15週】10月12日～10月15日　調査区北東部・中央部西端・南半部SI01竪穴建物跡周辺の掘り下げ及び遺構精査を行う。北東部を除き、遺構精査はほぼ完了する。また、遺跡空中写真撮影のための調査区内の除草など清掃作業を開始する。12日に児玉中央調査班長来跡し、調査指導を行う。

【第16週】10月18日～10月22日　調査区北東部の遺構精査を継続。調査区北東部・南半部等の基盤層上面の地形測量を実施する。また、遺跡空中写真撮影のための清掃作業を継続するとともに、調査区内のベルトコンベアを撤収する。22日に児玉中央調査班長来跡し、調査指導を行う。

【第17週】10月25日～10月29日　空中写真撮影のための調査区内の清掃作業を継続し、28日にラジコンヘリコプターによる遺跡空中写真撮影を実施する。写真撮影終了後、調査区北東部の遺構群の断ち割りを行い、下部遺構の有無を確認する作業を開始する。同時に、基本層序観察用畦沿いの試掘溝を深掘りし、遺跡基盤層の堆積状況も確認する。また、基盤層上面地形について補足の測量も行う。29日に矢口国土交通省監督官、新海文化財保護室文化財主任、児玉中央調査班長が参加し、発掘調査完了に伴う遺跡引き渡しに係る現地協議を行い、基本的に現状のまま引き渡すことで合意する。

【第18週】11月１日～11月５日　調査区北東部遺構群の断ち割り及び基本層序観察用畦沿い試掘溝の深掘りを４日まで継続する。５日に出土品及び発掘機材等を中央調査班へ搬出し、現場作業を完了する。併せて、櫻田所長が来跡し、発掘調査終了に当たっての挨拶を行う。

《南区》南区の発掘調査は、平成23年６月６日から10月28日まで実施した。６月６日から６月15日まで重機による表土除去を行い、その後、７月４日から調査員、現場代理人及び発掘作業員による発掘作業を10月28日まで行った。各週ごとの調査経過は次の通りである。

【第１週】６月６日～６月10日　調査員１名(初日のみ２名)、現場代理人１名、バックホウ３台の体制で遺跡の上面から表土除去を実施。併せてベルトコンベアを随時遺跡内に搬入した。

【第２週】６月13日～６月17日　15日には調査区の表土除去作業を完了。続けて排土置き場造成のため

の掘削を行い、発電機やトイレ等を設置できるよう造成を開始。

【第３週】６月20日～６月24日　排土置き場の造成を完了。20日から鈴木測量事務所(株)による方眼杭の打設作業が開始される。

【第４週】６月27日～７月１日　コンテナハウス、発電機等機材を設置。併せて駐車場整備を行った。また、３日までに方眼杭打設作業は完了する。

【第５週】７月４日～７月８日　発掘機材等を搬入し、調査員２名、現場代理人１名、発掘作業員26名の体制で人力による発掘作業を開始。調査区内に東西４本の基本土層観察用畦を設定し、当該畦沿いに試掘溝の掘り下げを開始。併せてベルトコンベア25台を調査区上面に配置する。４日に高橋所長、榮中央調査班長、利部調査班長が来跡し、作業開始に当たっての挨拶を行う。

【第６週】７月11日～７月15日　基本層序観察用畦沿いの試掘溝掘り下げを継続。一部の畦の土層断面の記録を作成。ベルトコンベアを稼働し、調査区北端部・南端部の掘り下げを開始。北端部から土器埋設遺構(SR33)を検出。11日に佐々木国土交通省監督官、宇田川文化財保護室文化財主査が来跡し、南端部の早期引き渡しに関し現地協議を行う。15日に榮中央調査班長来跡し、調査指導を行う。

【第７週】７月19日～７月22日　基本層序観察用畦土層断面の記録作成を継続。調査区北端部・南端部の掘り下げを行う。北端部では斜面際に多くの柱穴を検出するが、現代のものも見受けられる。南端部は調査を終了。小型の竪穴建物跡(SI06)１棟を検出。北端部、南端部ともに地滑り起源の地割れが多数存在することが判明。22日に齋藤副所長、榮中央調査班長来跡し、調査指導を行う。

【第８週】７月25日～７月29日　北側平坦面、北側下斜面部の掘り下げを開始。北側平坦面から竪穴建物跡２棟(SI02、SI30)を検出。

【第９週】８月１日～８月５日　北側平坦面の精査を継続。北側下斜面部の精査を完了。遺構は確認できず、細かい地割れを多数検出。中央部掘り下げを開始。中央部から沢状の地滑り、地割れを検出。１日に佐々木国土交通省監督官、宇田川文化財保護室文化財主査が来跡し、南端部の早期引き渡しに関し再度現地協議を行う。

【第10週】８月８日～８月12日　北側平坦面の精査、中央部掘り下げを継続。確認調査で遺構と思われたものの多くが地割れであることが判明。11日に榮中央調査班長来跡し、調査指導を行う。

【第11週】８月15日～８月19日　盆休みとして現場作業を休止。

【第12週】８月22日～８月26日　北側平坦面の精査、中央部掘り下げを継続。北側平坦面の調査を終了。続けて西端下面部に繋がる斜面部の掘り下げを開始。23日に佐々木国土交通省監督官、宇田川文化財保護室文化財主査が来跡し、南端部の早期引き渡し箇所の変更に関し現地協議を行う。

【第13週】８月30日～９月２日　西端下面部に繋がる斜面部の掘り下げを継続し終了する。急斜面部のため遺構は見受けられない。29日は職員技術研修会のため現場作業を休止。30日に利部調査班長が来跡し、調査指導を行う。31日に久米副主幹、小松主査、菊地主査が来跡し、会計書類検査を行う。

【第14週】９月５日～９月９日　西端下面部の掘り下げを開始。各所に点在する地割れと思われる黒色土の調査を開始。５日に佐々木国土交通省監督官、宇田川文化財保護室文化財主査、榮中央調査班長が来跡し、南端部と斜面部の引き渡しに関して現地協議を行う。

【第15週】９月12日～９月16日　西端下面部の掘り下げを継続。13～15日の３日間、遺跡の現地公開を行い、のべ42名が見学に訪れる。12日から現場代理人が土田代理人から渡邊代理人に交代。13日は

降雨のため現場作業を中止。

【第16週】９月20日～９月22日　台風15号接近による降雨、暴風のため、20、21日は暴風対策を行い、22日には西端下面部の掘り下げを継続。22日に佐々木国土交通省監督官、宇田川文化財保護室文化財主査、榮中央調査班長が来跡し、南端部と斜面部の引き渡しを行う。

【第17週】９月26日～９月30日　西端下面部の掘り下げ遺構精査、各所の地割れ調査を継続。西端下面部では焼土面を３か所検出、周囲を溝で囲まれていることが判明。当該地区は工房跡と推定される。28日に高橋所長、榮中央調査班長が来跡し、調査指導を行う。

【第18週】10月３日～10月７日　西端下面部の掘り下げ遺構精査を継続、中央沢部掘り下げを開始。

【第19週】10月11日～10月14日　西端下面部の遺構精査を継続、第１面の精査を終了する。翌週の空中写真撮影のため、全域の清掃を開始し、ベルトコンベアの撤去を行う。12日より(有)サン測量設計事務所による地形測量が開始。14日齋藤副所長が来跡し、調査指導を行う。

【第20週】10月17日～10月21日　遺跡全域の清掃を行い、18日にラジコンヘリコプターによる遺跡空中写真撮影を行う。写真撮影終了後、西端下面部の第２面への掘り下げ、中段中央部の大規模な地割れに埋積する黒色土の掘り下げを開始する。

【第21週】10月24日～10月28日　西端下面部の第２面の精査、大規模地割れ埋積土の掘り下げを継続。西端下面部より土坑、柱穴等を検出。大規模地割れからは、石匙等の石器が３点出土し、当該地割れは縄文時代に起きたと推定される。27日に佐々木国土交通省監督官、宇田川文化財保護室文化財主査、榮中央調査班長が来跡し、遺跡の引き渡しに係わる現地協議を行う。28日に出土品及び発掘機材等を中央調査班へ搬出し、現場作業を完了する。併せて高橋所長、榮中央調査班長が来跡し、発掘調査終了に当たっての挨拶を行う。

第３節　整理作業の経過

《北区》北区の整理作業は、平成22年11月１日から平成23年３月31日まで実施した。遺構図の整理はパーソナルコンピューターにより継続的に実施。遺物整理は、おおよそ11月に洗浄･注記･種類別選別･計量･計数を行い、12月に報告書掲載土器類の接合・復元。1月から実測を開始、２月から並行してデジタルトレースを行い、３月には編集を行った。

《南区》南区の整理作業は、平成23年10月１日から平成24年５月31日まで実施した。遺構図の整理は第２原図を手作業で、トレースをパーソナルコンピューターにより継続的に実施。遺物整理は、おおよそ10、11月に洗浄・注記・種類別選別・計量・計数を行い、12月に報告書掲載土器類の接合・復元。１月から実測を開始、２月から並行してデジタルトレースを行い、３月には編集を行った。４月から北区のものと併せて製本のための編集を行い、収蔵のためのデータ作成、整理を行った。

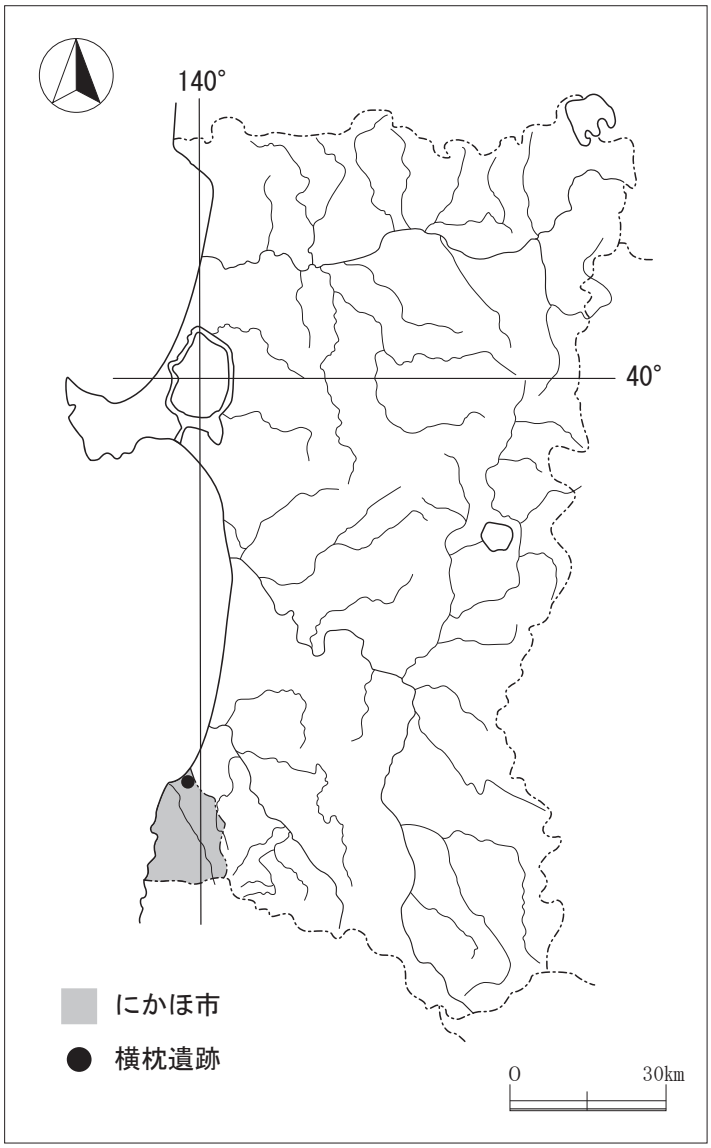
註１　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第420集　2007(平成19)年
　　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第439集　2008(平成20)年
　　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第446集　2009(平成21)年
註２　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第456集　2010(平成22)年

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

横枕遺跡の所在するにかほ市は、秋田県南西部の沿岸に位置し、平成17(2005)年３月に仁賀保町・金浦町・象潟町の３町が合併して誕生した。北側と東側は由利本荘市、南側は山形県と接し、西側は日本海に面している。その面積は240.0㎢で東西に約16㎞、南北に約23㎞の範囲に広がる。県内では積雪量の少ない最も温暖な地域である。市域は、南東にある独立峰の標高2,236mの鳥海山を取り巻く同心円のほぼ北北西～西側部分を占め、西方～北西方向の海岸線に向かって規則的に高度を下げ、傾斜する(第３図)。

にかほ市を構成する地形は、鳥海火山近傍に位置していることを反映して、火山活動に起因する地形を主としている。しかし横枕遺跡は、非火山性の仁賀保丘陵地(Ⅰa)上にあり、南北方向に伸びた「仁賀保高原」の一部である。この丘陵地は新第三系天徳寺層・笹岡層、第四系西目層の堆積岩から構成される海底隆起地塊であり、西縁に沿って南北方向に仁賀保衝上断層群が認められる。本遺跡は笹岡層上西端に位置し低地との境にある。西には、仁賀保沖積低地(Ⅲa)が隣接して広がり、北と西方の海岸線には仁賀保新期砂丘地(Ⅲe)が細長く縁取って分布する。南西方向には鳥海噴火に起因する象潟泥流台地(Ⅱc)が象潟に至るまで大きく広がっている(第２図)。



第１図　遺跡位置図

本遺跡は、およそ北緯39度17分49秒、東経139度58分04秒にあり、にかほ市の北端の旧仁賀保町、ＪＲ羽越本線仁賀保駅より東約0.8㎞、ＴＤＫ株式会社秋田工場(立沢遺跡)の東に国道７号線を挟み隣接した標高20～40mの仁賀保丘陵西側斜面裾部に立地する。遺跡北側には両前寺川を挟み、家ノ浦・家ノ浦Ⅱ遺跡、前田表・前田表Ⅱ遺跡、阿部舘遺跡があり、南側には琴浦川が丘陵地から西流し対岸1.5㎞ほどに清水尻Ⅰ・Ⅱ遺跡がある。遺跡北側は両前寺川、南側は琴浦川にそれ

ぞれ画され、遺跡西側境界は丘陵地と沖積低地との境界に対応すると判断される。遺跡東側の範囲は道路建設用地東側境界よりもさらに東に広がるものと推定されるが、現時点ではその詳細は不明である。今回の一般国道７号象潟仁賀保道路建設事業に係わっては、道路建設用地内のうち、遺構及びまとまった遺物が分布する北端部と南端部とをそれぞれ北区、南区として調査を行った。

本遺跡では、縄文時代の遺物及び近世以降の遺構・遺物が僅かに確認されているものの、ほとんどの遺構･遺物は平安時代中期に属する。当該時期が本遺跡の最盛期ととらえることができる。現状では、遺跡周辺は一部段々畑状となる畑地であるが、平安時代の旧地形は、主に地滑りに起因する起伏に富む急傾斜面～緩傾斜面を呈していたものと判断される。当時においては、比較的傾斜が緩やかな地点を選択し、少数の竪穴建物等を営んでいる。大規模な平坦地を欠く地形に規制され、多数の竪穴建物が密集するような大集落が形成されることはなく、単独もしくは極めて少数の竪穴建物が緩斜面に散在するような集落景観を呈していたものと推定される。本来、本遺跡西側沖積低地の両前寺川左岸微高地に立地する立沢遺跡や両前寺川対岸の家ノ浦遺跡、家ノ浦Ⅱ遺跡、前田表遺跡などの平安時代中期の集落遺跡群と一体で評価すべきものと考えられる。本遺跡の一部の地点では、鍛冶作業などと関わる工房跡と推定される遺構群が検出されていることなどから、上記遺跡群の中で、特定の生産活動を担っていた可能性も予想される。(註１)

第２節　歴史的環境

この地域は古代から近世にわたって、史料にたびたび登場すると共に、遺跡や文化財が随所に存在する。地理的な環境と同じく鳥海山が歴史に与えた影響も大きい。ここでは、旧仁賀保町地域を中心に歴史的な環境を概観する。

この地域の縄文時代の遺跡は、紀元前466年の鳥海山の山崩れに伴う岩屑なだれに覆われてしまった可能性があり、確認されている遺跡が少ない。縄文時代中期の土器片が出土している前川谷地中遺跡(33)と鹿島台遺跡(34)は大森山が盾となって岩屑なだれを免れたためその存在が確認できている。第４図にある縄文時代の遺跡は岱山Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡(35～37)、黒潟遺跡(22)、晩期の土器が出土している高田遺跡(23)、縄文時代のＴピット(陥し穴)と平安時代の竪穴建物跡が検出された複合遺跡の下岩ノ沢遺跡(29)などである。この地域では旧石器時代や弥生時代の遺跡は確認されていない。

古代になるとこの地域は、８世紀には律令体制下に組み込まれ、出羽国飽海郡に属していた。『延喜式』によれば蚶方駅(象潟に比定)が置かれ、秋田城へ続く駅路が設けられていた。古代の遺跡は先述の下岩ノ沢遺跡の他、立沢遺跡(15)、前田表遺跡(３)、前田表Ⅱ遺跡(２)、家ノ浦遺跡(７)、家ノ浦Ⅱ遺跡(８)、阿部舘遺跡(６)、清水尻Ⅰ遺跡(13)、清水尻Ⅱ遺跡(14)、上谷地Ⅱ遺跡(17)、六日市遺跡(19)、猿田遺跡(39・40)などがある。下岩ノ沢遺跡からは鉄滓、鍛冶滓など製鉄に関連する遺物が検出されている他、土師器・須恵器などが出土しており、９世紀末から10世紀前半に営まれた集落跡と考えられている。(註２) 立沢遺跡からは掘立柱建物跡、製塩遺構が検出され、墨書土器、円面硯が出土しており官衛と関係を持つ遺跡であると考えられている。(註３) 立沢遺跡周辺には平安時代の遺跡が集中しており、水路・板塀に画された前田表Ⅱ遺跡、(註４) 鍛冶など生産活動が行われ経塚と思われる集石遺構下に珠洲系四耳壺が出土した前田表遺跡、(註５) 掘立柱建物跡を主とする集落跡である家ノ浦遺跡、(註６) 鍛冶関連

の工房や祭祀の場である家ノ浦Ⅱ遺跡(註７)、９世紀代の大溝が検出された阿部舘遺跡(註７)、当時の畑跡が検出された清水尻Ⅰ遺跡(註７)、官道とみられる道路跡が検出された清水尻Ⅱ遺跡(註７)など周辺遺跡との関連の研究が待たれる。

また古代において鳥海山は、大物忌神として畏敬の対象であった。初見は『続日本後紀』承和５(838)年で、この年の５月に従五位上から正五位下に位階を与えられたことを皮切りに徐々にその位階は上がり、元慶４(880)年には従二位が与えられている。『三代実録』では貞観13(871)年４月に噴火し、その悲惨な情景が記されている。「鳥海山」の名が歴史上に登場するのは室町時代に入ってからである(註８)。

中世の遺跡では、山根館跡(26)・安倍館跡(４)・鴻ノ巣館跡(12)・平沢館跡(21)・美濃輪館跡(24)・待居館跡(27)・黒川館跡(25)・丸山館跡(28)・赤石館跡(30)・中山館跡(31)・栗山館跡(32)・天狗平館跡(38)などの中世城館が数多く確認されている他(註９)、先述した家ノ浦遺跡では、1,201枚の埋納銭が出土している。県指定史跡である山根館は仁賀保氏が135年間居城した山城で、仁賀保氏が関ヶ原での戦功により常陸武田に転封し、慶長７(1602)年に廃城となっている。帯郭、空堀、空堀に沿った古道、また大手道などが確認されている他、礎石約200個が検出され、それにより１間６尺６寸の寸法で、４棟ほどの建物があったとされている。中世の由利郡について概観すると、鎌倉初期の奥羽合戦後、他地域のように関東武士団が地頭に任命されず、平安時代以来の在地領主であった由利氏がそのまま本領を安堵されたが、没落し地頭職を奪われ大弐局の支配下となる。室町時代になると大井(矢島)氏・仁賀保氏・赤宇津(赤尾津)氏・岩屋(岩谷)氏・下村氏・玉米氏・打越(内越)氏・滝沢氏・羽川氏など、俗に言う由利十二頭がそれぞれ領地を支配したが、戦国時代に入ると安東氏や最上氏・小野寺氏など周辺の影響を受けて争うようになる。しかしこの由利諸氏の抗争も天正18(1590)年の奥州仕置きで終焉を迎え、豊臣秀吉が仁賀保氏・赤尾津氏・滝沢氏・打越氏・岩谷氏を由利五人衆に定めた。

関ヶ原の戦の後、慶長７(1602)年の仁賀保氏の転封後、由利５万５千石は最上義光領となり、仁賀保では新田開発が進められが、最上氏が元和８(1622)年に改易され、その後本多正純領となるが、これも翌年改易となり、元和９(1623)年に六郷氏・岩城氏・仁賀保氏・打越氏が入部した。旧領である仁賀保領には大坂にいた仁賀保挙誠が、平沢以南から庄内藩境に至る１万石を賜って旧領へ戻るが、翌年に挙誠が亡くなり、寛永３(1626)年に長男良俊が７千石を相続し、象潟の塩越城に本拠を置き大名扱いされ仁賀保藩主となるが、寛永８(1631)年に嗣子なく断絶、一時庄内藩酒井氏の預かりとなる。また次男誠政が２千石、三男誠次が千石を相続し、平沢に陣屋(20)を置いて旗本となり、幕末に至っている。その間、旧領の１万石は旗本仁賀保氏２家、矢島藩生駒氏、本荘藩六郷氏に分割され、１つの村を複数の領主が分割支配する「相給村」が３村もできている。

その後、明治２(1869)年の版籍奉還により酒田県、翌年には山形県の管轄となり、明治４(1871)年に秋田県へ移管され、現在へ続いている(註10)。

註１　本節の地形、地層等に関する記述は次の文献に基づく。秋田県『土地分類基本調査象潟・吹浦』　2003(平成15)年

註２　仁賀保町教育委員会『下岩ノ沢遺跡発掘調査報告書』　1986(昭和61)年

註３　仁賀保町教育委員会『立沢遺跡発掘調査報告』　1987(昭和62)年

註４　秋田県教育委員会『前田表Ⅱ遺跡―一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―』　秋田県文化財調査報告書第451集　2010(平成22)年

註５　秋田県教育委員会『前田表遺跡―一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―』　秋田県文化財調査報告書第469集　2011（平成23）年

註６　秋田県教育委員会『家ノ浦遺跡―一般国道７号仁賀保本荘道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ―』　秋田県文化財調査報告書第473集　2012（平成24）年

註７　秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報30　平成23年度』　2012（平成24）年

註８　須藤儀門『鳥海考』　1988（昭和63年）年

註９　秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年

註10　本節の、歴史的見解に関する記述は次の文献に基づく。

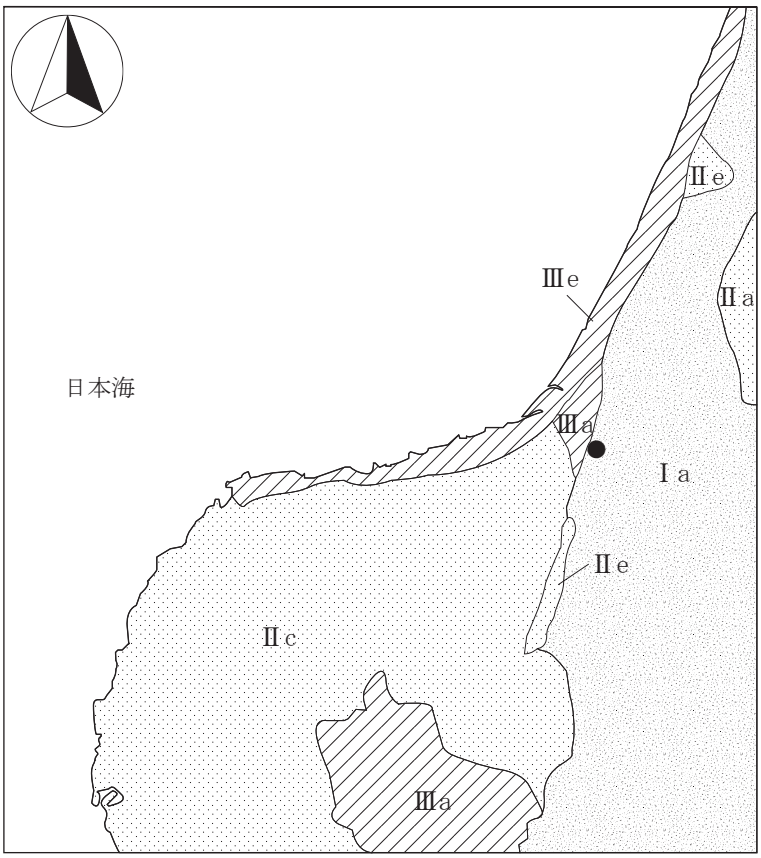
秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（由利地区版）』　2001（平成13）年

仁賀保町教育委員会『仁賀保町史　普及版』　2005（平成17）年

第１表　横枕遺跡周辺の遺跡一覧

番号	遺跡地図番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	備考
1	214-35-62	横枕	集落跡	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、炉跡、土師器・須恵器・鉄滓	
2	214-35-57	前田表Ⅱ	集落跡	土坑・溝跡、土師器・須恵器・須恵系陶器・土製品など	
3	214-35-36	前田表	集落跡	竪穴建物跡、土師器・須恵器	
4	213-35-30	安倍館	館跡	空堀	市指定史跡
5	214-35-15	阿部堂	遺物包含地	古銭（開元通宝・宗元通宝）など約360枚	
6	214-35-68	阿部舘	集落跡	掘立柱建物跡・土坑・溝跡、土師器・須恵器など	
7	214-35-61	家ノ浦	集落跡	竪穴・掘立柱建物跡、土坑、古銭・土師器・須恵器・鉄滓	
8	214-35-65	家ノ浦Ⅱ	集落跡	掘立柱建物跡・土坑・溝跡、土師器・須恵器など	
9	214-35-16	旧熊野神社	寺院跡	鉄滓、羽口	
10	214-35-49	須郷谷地	遺物包含地	鉄滓	
11	214-35-48	出ヶ沢	遺物包含地	土師器・須恵器	
12	214-35-39	鴻ノ巣館	館跡	空堀	
13	214-35-66	清水尻Ⅰ	集落跡	畑跡、土師器・須恵器・鉄滓	
14	214-35-67	清水尻Ⅱ	集落跡	道跡、竪穴建物跡、縄文土器、土師器・須恵器・鉄滓	
15	214-35-34	立沢	集落跡	掘立柱建物跡、土師器・須恵器・木製品など	
16	214-35-59	上谷地Ⅰ	遺物包含地	土師器・須恵器	
17	214-35-60	上谷地Ⅱ	集落跡	掘立柱建物跡・土坑・溝跡、土師器・須恵器	
18	214-35-58	新脇田	遺物包含地	土師器・須恵器	
19	214-35-64	六日市	集落跡	竪穴建物跡、土師器・須恵器・鉄滓	
20	214-35-13	仁賀保家陣屋	陣屋跡	堀跡	
21	214-35-53	平沢館	館跡		
22	214-35-47	黒潟	遺物包含地	縄文土器、土師器・須恵器	
23	214-35-52	高田	遺物包含地	縄文土器（晩期）	
24	214-35-37	美濃輪館	館跡	土塁	
25	214-36-5	黒川館	館跡		
26	214-35-②	山根館	館跡	礎石建物跡、土塁、石塁、空堀	県指定史跡
27	214-35-32	待居館	館跡		市指定史跡
28	214-35-38	丸山館	館跡		
29	214-35-35	下岩ノ沢	集落跡	竪穴建物跡、縄文土器、土師器・須恵器・鉄滓	市指定史跡
30	214-36-14	赤石館	館跡		
31	214-35-54	中山館	館跡		
32	214-35-31	栗山館	館跡	空堀	
33	214-36-19	前川谷地中	遺物包含地	縄文土器（中期）	
34	214-36-18	鹿島台	遺物包含地	縄文土器（中期）	
35	214-35-44	岱山Ⅱ	遺物包含地	縄文土器	
36	214-35-43	岱山Ⅰ	遺物包含地	石鏃・石匙	市指定史跡
37	214-35-45	岱山Ⅲ	遺物包含地	縄文土器	
38	214-35-28	天狗平館	館跡		
39	214-35-55	猿田	集落跡	溝跡、土坑、土師器・須恵器・製塩土器・灰釉陶器	
40	214-41-6	猿田	集落跡	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器	

本表は第４図　横枕遺跡と周辺遺跡位置図に対応。



Ⅰ　山地・丘陵
非火山性丘陵
Ⅰa　仁賀保丘陵地

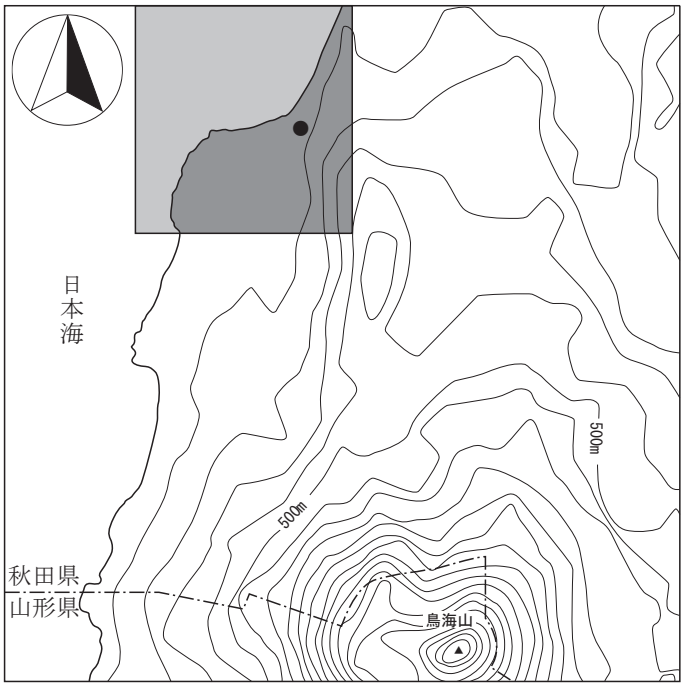
Ⅱ　台地
Ⅱa　鳥海火山噴出物台地
Ⅱc　象潟泥流台地
Ⅱe　仁賀保古期砂丘地

Ⅲ　低地
Ⅲa　仁賀保沖積低地
Ⅲe　仁賀保新期砂丘地

● 横枕遺跡

秋田県『土地分類基本調査　象潟・吹浦』
2003 年(平成 15)年に基づく。

第２図　地形区分図



※幅２km 未満の谷を埋積して作成
※等高線間隔は 100m

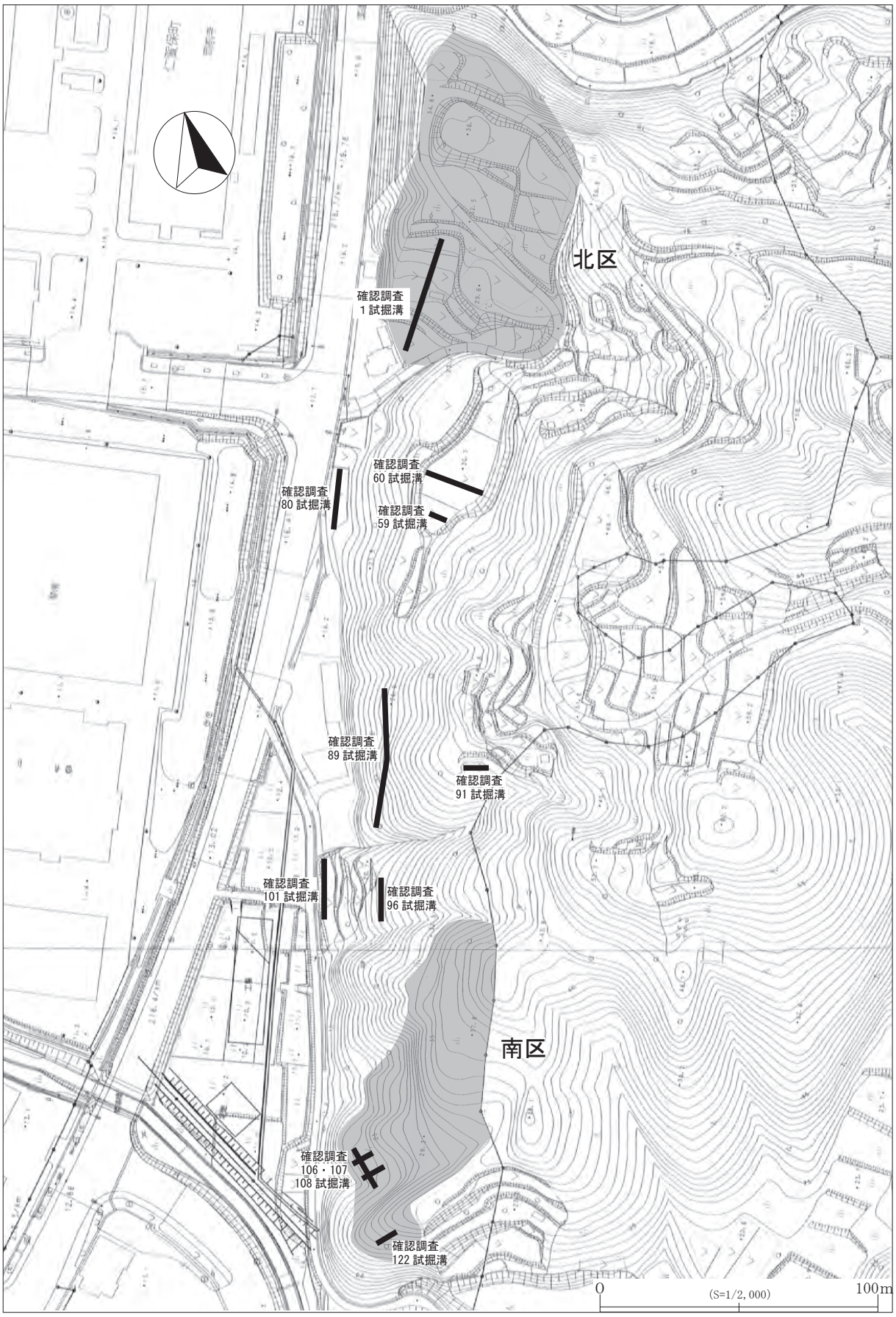
● 横枕遺跡
第２図 地形区分図範囲

秋田県『土地分類基本調査　象潟・吹浦』
2003 年(平成 15)年に基づく。

0　(S=1/300)　10km

第３図　鳥海山周辺地域の切峰面図

第４図　横枕遺跡と周辺遺跡位置図



第５図　周辺地形図・掲載遺物出土確認調査試掘溝位置図

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査

発掘調査においては、仮設施設の設営、重機による表土掘削作業、発掘作業員による掘削業務の管理等については、「掘削作業管理業務」として一括して外部委託した。これらの業務については、受託者が現場に常駐させる現場代理人が管理監督した。

北区の発掘調査では、現在の畑地作土を中心とした表土層はバックホウにより掘削し、クローラキャリアで掘削土を調査区外に搬出した。バックホウによる平均掘削深度は20㎝前後であった。表土層より下位には部分的に畑地造成土が厚く堆積しているが、若干の遺物を包含することから、当該造成土以下は、基本的に人力で掘り下げた。調査区内の層序は一様ではないが、過半の地点では、表土層直下及び畑地造成土層直下が基盤層となり、これらの地点では基盤層上面まで掘り下げた後、当該基盤層上面を精査し、遺構検出作業及び検出遺構の調査を行った。一方、表土層及び畑地造成土の下位から基盤層の間に堆積層が存在する地点では、遺物等がまとまって確認される面までスコップで掘り下げた後、ジョレン、移植ゴテ等を用いて、面的に精査しながら掘削し、遺構確認に努めた。

測量・実測作業においては、遺跡全域に４ｍ区画の方眼を設定し、南北両調査区の方眼交点に方眼杭を打設して当該作業の基準点とすることとした。方眼原点（MA50）は、平面直角座標第Ｘ系のＸ＝－78,300.000ｍ、Ｙ＝－74,000.000ｍとし、座標北方向の南北線及びこれに直交する東西方向の東西線により原点を起点に４ｍ区画の方眼を組んだ。南北線は東から西に向かって、MA、MB、MCと昇順となるアルファベット２文字の組み合わせで、東西線は南から北に向かって、50、51、52と昇順となるアラビア数字でそれぞれ呼称する。なお、南北線のアルファベットはＡ～Ｔまでの20文字の繰り返しとした。個々の４ｍ区画は南東隅を画する南北線と東西線の呼称を組み合わせて「MA50」のように呼ぶ。

北区では遺構等の平面実測及び地形測量は、原則としてトータルステーションを用いた遺跡測量システム（CUBIC社製「遺構くんCubic」）により行った。遺物出土状況等の微細図などは４ｍ区画の方眼杭を基準とした手作業による平面実測も併用した。また、土層断面図も手作業により作成した。

遺構は、北区では検出順に01からの通し番号を付して遺構種別を表すアルファベットの記号を組み合わせてSI01のように呼称した。遺構は形態・規模に応じて、原則として２分割もしくは４分割して掘り下げた。覆土の堆積状況を検討し、併せて遺構覆土の土層断面図を作成し、写真撮影を行った。ただし、小形の柱穴様ピットでは、土層断面図作成や写真撮影を行わず、文章によって断面形態や覆土の特徴を記録するにとどめた場合がある。覆土土層の記録作成後、覆土を完掘し、完掘平面図の作成及び完掘写真の撮影を実施した。

遺物は原則として出土区もしくは出土遺構と出土層位及び出土年月日の記録を付けて取り上げた。遺構内出土遺物のうち、意図的な廃棄等が推定されるものや一定範囲に面的に広がって分布するものなどは、遺物出土地点のドットマップ図や大縮尺の遺物出土状況微細図を作成した後に取り上げを

行った。

写真撮影は、原則として35㎜判のカラーポジフィルムとモノクロネガフィルムを使用して行い、併せて約600万画素のコンパクトデジタルカメラでも撮影した。一部の遺構については、ブローニー判のカラーポジフィルムによる撮影も併用した。また、委託によるラジコンヘリコプターを使用した遺跡の空中写真撮影も行った。

南区の発掘調査では、現在の畑地作土を中心とした表土層はバックホウにより掘削し、掘削土を調査区外に搬出した。バックホウによる平均掘削深度は30㎝前後であった。表土層以下は、人力で掘り下げた。掘り下げ方法、精査方法は北区と同様である。測量・実測作業においては、方眼杭は北区のデータに基づき北区の方眼をそのまま南へ広げる形で設置した。南区では遺構等の平面実測は、４ｍ区画の方眼杭を基準とした手作業による平面実測を行った。また、土層断面図も手作業により作成した。地形実測はトータルステーションによる測量を(有)サン測量設計事務所に委託した。

遺構は、南区でも検出順に01からの通し番号を付して遺構種別を表すアルファベットの記号を組み合わせてSI02のように呼称した。調査方法、遺物取り上げ方法、写真撮影方法は北区と同様である。

２　整理作業

北区発掘調査の整理作業では、遺構図の整理はパーソナルコンピューターに導入した遺跡測量ソフト(CUBIC社製「遺構くんCubic」)及び遺構トレースソフト(CUBIC社製「トレースくんCubic」)を用いて行った。報告書掲載用の個々の遺構図面は、手実測による土層断面図をスキャニングし下図としてデジタルトレースし、現場で測量作成した平面図と組み合わせて全体を調整して作成した。

遺物は、洗浄・注記した後、土器類については接合作業を行った。土器類は接合作業後に、種類及び器種に分類し、それぞれの重量と底部点数を計量・計数した。計量・計数後に報告書掲載土器類を選別し、遺存状態により、必要に応じエポキシ樹脂充填による復元作業を行った。

報告書掲載遺物図面については、実測図作成後、当該図をスキャニングして下図としてドローイングソフト(アドビ　システムズ社製「Illustrator」)を用いてデジタルトレースして作成した。必要に応じ、拓本も作成し、同様にスキャニングしてトレース図と組み合わせた。

遺構・遺物等のデジタルトレース図は、最終的にドローイングソフト(アドビ　システムズ社製「Illustrator」)を用いてレイアウトし、挿図原稿を作成した。

南区の整理作業では、遺構図の整理は手作業で行い、ドローイングソフト(アドビ　システムズ社製「Illustrator」)を用いてデジタルトレースして作成した。遺物の整理、図面作成は北区と同様である。

第２節　北区の調査

１　北区基本層序

横枕遺跡は、新第三紀に属する天徳寺層及び笹岡層、第四紀更新世の西目層から構成される仁賀保丘陵の西端部に立地する。横枕遺跡北区は、調査開始前の現況は西向きの丘陵斜面に造成された畑地が過半を占め、一部は灌木が繁茂する急傾斜の荒れ地などであった。また、国道７号線から分岐する市道7704号線が調査区内をつづら折り状に大きく蛇行しながら横断していた。畑地の区画は40 ～ 300㎡前後とバラつきがあり、一部は段々畑状を呈する。調査においては、畑地区画を傾斜方向に沿って縦断するよう南北方向基調に２本の基本層序観察用畦（南北畦１・２）を、さらに、これに直交するように東西方向基調にも２本の基本層序観察用畦（東西畦１・２）を設定した（第６図）。

調査区の畑地造成前の旧地形は、丘陵西斜面に南西方向の地滑りが生じたことが直近の要因となり、中央部が北西方向に向かって傾斜する浅い窪地状を呈し、全体としてかなり起伏に富む急斜面～緩斜面であったと判断される。また、この地滑りに伴って、調査区北東端部から中央西端に向かう地割れが発生し、そのうち、地割れ北東部（LB94区、LC93・94区、LD93区周辺）は明褐色砂質シルトによって比較的短期間のうちに埋積されたものと推定される。当該砂質シルトは調査区北東端部（LA94区周辺）で丘陵基盤のにぶい黄褐色粘土層（以下、「基盤粘土」とする）の上位で部分的に認められるテフラを母材とする古土壌であった可能性も想定されるが、確実ではない。北東部の地割れ地点周辺では、この明褐色砂質シルト上面が古代における当初の地表面であったと判断される。さらに、その上位には基盤粘土を供給源とする古代の整地層が部分的に広がっている（第10図）。

地割れは北東部からやや西寄り下方地点周辺（LE91・92 ～ LG91・92・93・94区周辺）では、僅かに低い帯状の窪地となっており、最大層厚40㎝前後の比較的均質な褐色シルトが堆積する。当該地点では古代の竪穴建物跡（SI45）が立地しており、この褐色シルト層中に古代の地表面が存在したものと推定されるが、明瞭に確認できない。本層も古代竪穴建物等の遺構覆土も全体に黒みが弱い土色を呈する。安定した植生形成を欠き、腐植の生成が乏しかったものと推測される。

調査区中央部周辺（LJ94・95 ～ LM96・97・98区周辺）では地割れは西向きの最大深さ２ｍ前後の沢状の落ち込み（以下、「沢」）となる。西側（LM97区）下底近くからは弥生時代前期ごろと推定される壺形土器（第46図139）が出土しており、現状では当該時期が地滑り発生の下限時期である。沢は最終的に近現代に至って完全に埋積される。沢内埋積層には相対的に腐植に富む暗色帯が上下２枚認められる。上位暗色帯は部分的に褐色砂質粘土を挟み、さらに細分される。近世以降の陶磁器破片などが僅かに出土しており、近世以降の堆積と判断される。上位暗色帯下には最大層厚約60㎝の腐植が相対的に乏しい褐色シルトが堆積する。当該層の中位から上位にかけての層準からは土師器破片及び須恵器破片が少量出土し、本層は主として古代の堆積と判断される。さらに本層下位から上述の弥生時代の壺形土器が出土し、本層堆積の上限時期は少なくとも弥生時代までさかのぼるものと判断される。その下位の沢底直上に層厚10㎝程度の黒泥状の褐色粘土（下位暗色帯）が堆積する。本層からは確実な出土遺物はない。上述の遺物出土状況から、その形成は弥生時代以前、おそらくは縄文時代であったと考えられる。なお、沢中央部では、埋積層の下底から中位にかけての範囲が部分的にグライ化している。沢がほぼ埋積後に沢中央部下底周辺が滞水層となったことによる可能性も想定されるが、詳細な成因

は不明である。この沢の堆積物については、植物珪酸体分析及び花粉分析を(株)古環境研究所に委託した(第４章第１節、第２節)。両分析結果からは、下位暗色帯堆積時前後は、比較的湿潤な堆積環境であったことが推測される。より上位の堆積環境は判然としない。(註１)

このほかに、斜面下方の調査区南西側では、基盤粘土層直上に暗褐色シルトから成る暗色帯が部分的に認められる。さらに、調査区南端側の一部の地点(LN86区周辺)では、その上位に堆積する褐色シルト層の中位にやや黒みをおびた層厚10 ～ 20㎝前後の薄い暗色帯が認められる。これらの上下の暗色帯は明確な時期比定はできず、沢地点の上下の暗色帯とそれぞれ直接対応するかは不明である。ただし、現時点では沢部と同様に下位暗色帯を古代よりも旧い時期に、上位暗色帯を近世以降の時期にそれぞれ想定しても、明確な齟齬はない。よって、以下の基本層序の記載では、沢と調査区南西側の暗色帯を上位暗色帯と下位暗色帯とに一括することとする。

調査区北端は両前寺川に開析された崖面で、両前寺川からの崖面の高さはおよそ20m前後である。標高31 ～ 32m前後の崖面中位には小規模な地滑りによって、東西14m、南北８ｍ前後の狭小な平坦面が形成され、当該面には古代の竪穴建物跡(SI14)が構築されている。平坦面南側の後背部には、地滑りに伴う地割れ起源の沢状落ち込みが存在する。当該落ち込みには暗褐色～褐色粘土が埋積し、下位の炭混じりの褐色粘土層中からは土師器破片が出土している。SI14竪穴建物構築時には、落ち込みは完全には埋積されず開口状態であったと判断される。調査区中央部から南西部にかけての地滑りよりは新しい時期の地滑りであったと推定される。平坦面は、当初西側から東側に向かって傾斜していたと見られるが、現代の畑地造成時に主に西側を削って、ほぼ水平に造成されたものと判断される。

以上のような旧地形の形成状況に加えて、近現代における畑地の造成によって地点により遺跡層序はかなり変化している。調査区北西部(LF97・98 ～ LL100・101区周辺)や南半部の北寄りの畑地(LI85・86 ～ LK86・87区周辺)では、基盤粘土層直上に層厚20㎝ほどの畑地作土が不整合に堆積しており、畑地造成時に基盤まで掘削し、平坦面を作出した状況が認められる。一方、調査区中央部(LH90 ～ LI90・91区周辺)や南半部南西側の畑地(LP84・85・86 ～ LR85・86・87区周辺)では、作土直下に褐色シルトが斜面下方側に厚く堆積する。少量の古代の遺物のほかに、近現代の陶磁器破片等の遺物を含む場合があり、大半は、近世以降、おそらくは現在の畑地造成の際に相対的な高位側を削土し、低位側に盛土し平坦にしたものと判断される。

以上をふまえ、北区の基本層序は、推定堆積時期と成因を元に以下のⅠ～Ⅺ層に大きくまとめる。

Ⅰ層　褐色シルト(10YR4/4)　表土。主として畑地作土である。調査区中央東端側の急斜面(LF88・89・90 ～ LH88・89・90区周辺)では表土直下が基盤粘土層となる。また、調査区北東部では土壌化が進行しており、現状では、見かけ上、古代の整地地業層(Ⅴ層)の直上に本層が堆積している。

Ⅱ層　暗褐色シルト(10YR3/4)　畑地造成土。主として基盤粘土層及びその上位に堆積する褐色シルトを供給源とする。斜面の相対的な高位部の削平土を低位部に盛り、平坦な畑地を造成したものと見られる。沢部周辺の調査区中央部や調査区南西側などで認められる。地点によっては下位層の褐色シルト層との層界が不明瞭で識別が困難となる。本層下面で近世以降の溝跡(SD81)を検出しており、本層は近世以降の造成層と判断される。

Ⅲ層　褐色シルト(10YR6/4)　上位暗色帯直上に堆積する腐植が乏しいシルトである。沢最上位(LK95・96区、LL96・97区、LM97区など)、調査区南端側(LN86区周辺)などで分布を確認した。また、

調査区中央南西寄りのLH90区周辺では、本層相当層はやや暗色を呈し、土壌層位Ｂ層に対比される。Ⅲ層は上位暗色帯（Ⅳ層）との層位関係等から近世以降の堆積と推定される。

Ⅳ層　暗褐色シルト～砂質粘土（10YR3/3）　相対的に腐植に富む上位暗色帯。沢上位、調査区南西側に分布するものをまとめる。沢では小規模で薄い間層を挟み、二分される。既述のように各地点の暗色帯が同一層準に対比できるかは不明だが、いずれも近世もしくはそれ以降の形成と推定される。当該時期において相対的に安定した植生形成期が存在したことを示すものと判断される。

Ⅴ層　にぶい黄褐色シルト（10YR6/4）　古代整地地業層。調査区北東端部から中央部西端に延びる地割れの北東部分（LC94区周辺）に分布する。前段階の古代地表上面（地割れ埋積層上面）に基盤粘土を盛土し整地している。本層の下面及び上面がそれぞれ古代遺構の確認面となっている。

Ⅵ層　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）　上位暗色帯の下位層準に位置する、腐植が少なく比較的均質なシルトである。沢部分の本層相当層は相対的に粘性が強く、静止水域下で堆積した可能性が認められるが、それ以外の地点では風成堆積を主体とするものと推定される。主に調査区中央東側（地滑り凹地）、南西側などに分布するが、堆積が認められない地点も多い。斜面地形のため、表土が安定していなかったこと、畑地造成時に大きく削平されたことなどが想定される。本層中からは、少量の土師器等の破片が出土し、主として古代前後の堆積と判断される。

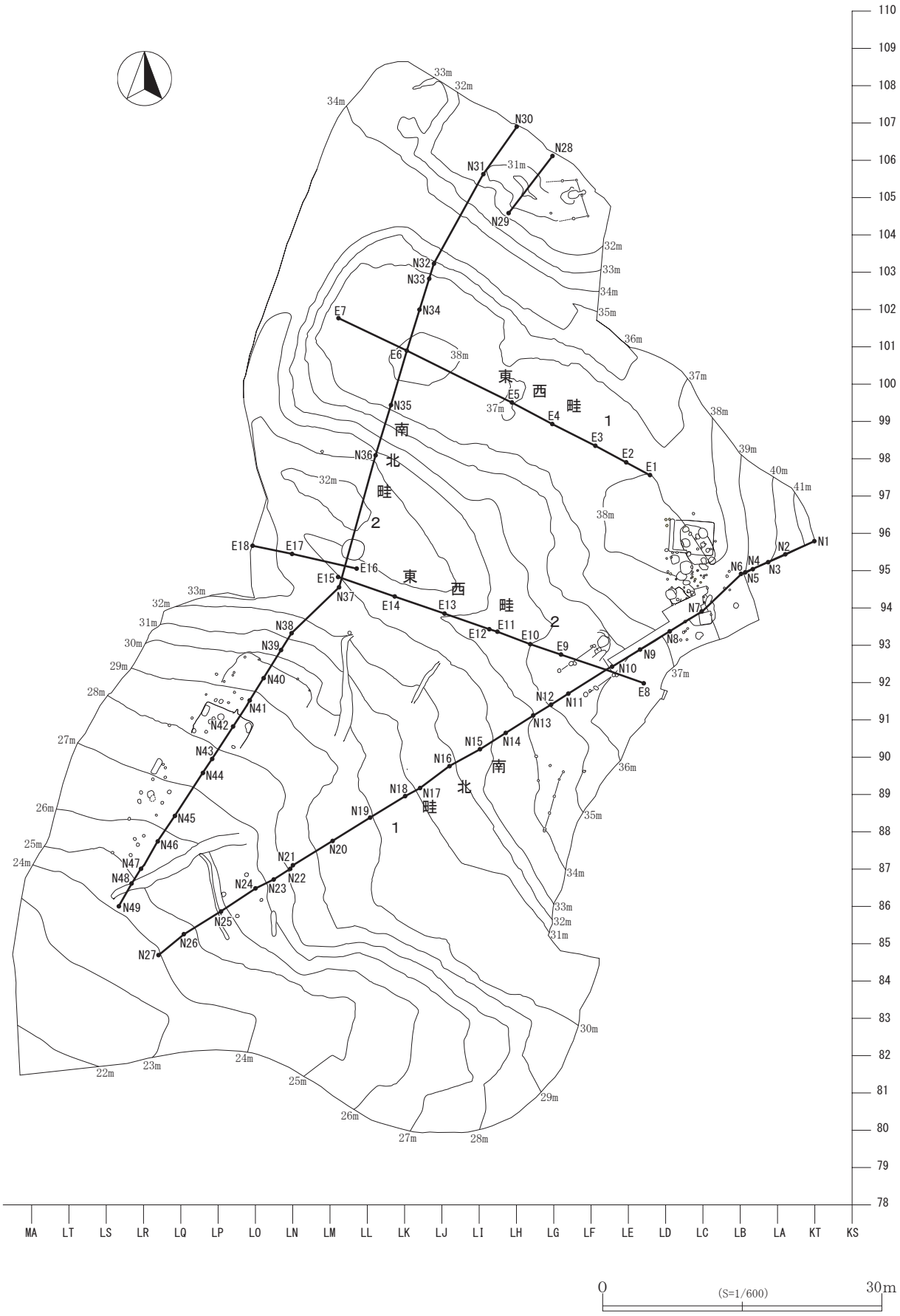
Ⅶ層　褐色～暗褐色粘土（10YR4/4 ～ 10YR3/4）　調査区北端部の地滑りに伴う地割れ埋積層。比較的炭化物粒を含むほか、土師器破片を含み、古代の堆積層と判断される。

Ⅷ層　暗褐色シルト～粘土（10YR3/3）　相対的に腐植に富み、黒みが強い下位暗色帯。暗色帯層直下は基盤（土壌層位Ｂ層）である。沢では黒泥状を呈し、水成堆積層と推定される。古代より旧く、縄文時代以前に形成された可能性が高い。

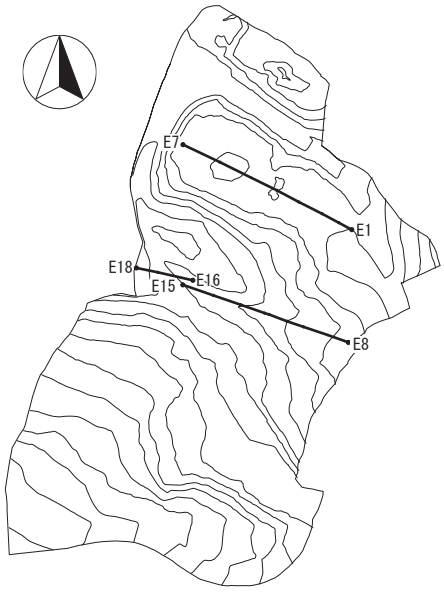
Ⅸ層　明褐色砂質シルト（7.5YR5/6）　北東部地割れ埋積層。LB94区、LC93・94区、LD93区周辺で堆積を確認した。最上位部は土壌化しており、黒みがあり、土師器破片などの遺物も少量含んでいる。最上位よりも下位はかなり固化している。上位をⅨa層、その下位をⅨb層に分ける。また、沢部分の下底から基盤粘土層中に斜めに貫入する層群（第９図22 ～ 24層）も本層と対応するものと考えられる。

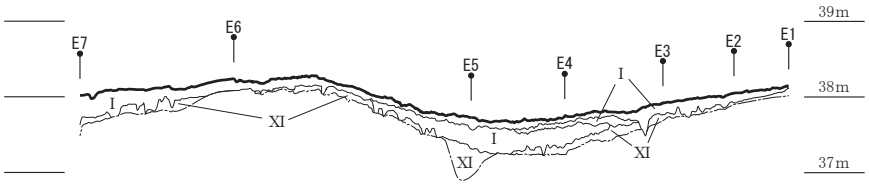
Ⅹ層　暗褐色シルト（10YR3/4）　丘陵基盤粘土層最上位部の風化層。LG・LH92・93区周辺などでは、いわゆるソフトローム状を呈する。

Ⅺ層　にぶい黄褐色粘土（10YR6/4）　遺跡の基盤粘土層。仁賀保丘陵地構成層である。部分的に砂岩等の小円礫を含み、湖沼環境下での堆積層と推定される。固結度は弱く、酸化鉄が脈状に沈着する。LH90区などでは60㎝程度下位には固結した灰色泥岩が堆積する。また、調査区北東端部（LB94区周辺）では直上にテフラと見られる灰色シルト質砂が部分的に遺存する。鳥海山起源のテフラ堆積物の可能性も推測されるが、未分析のため、詳細不明である。

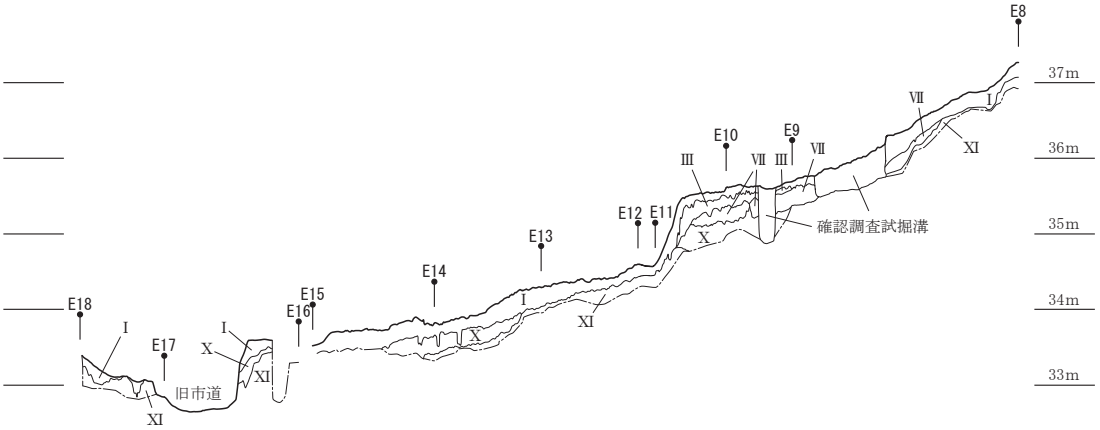


第６図　北区基本層序位置図

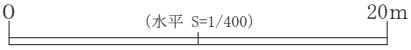




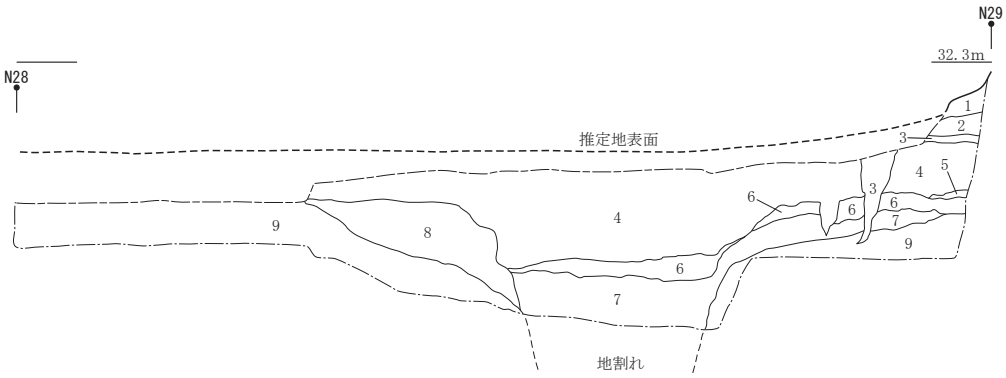
北区東西畦１土層断面（水平：1/400　垂直：1/100）



北区東西畦２土層断面（水平：1/400　垂直：1/100）



第７図　北区東西畦１・２土層断面



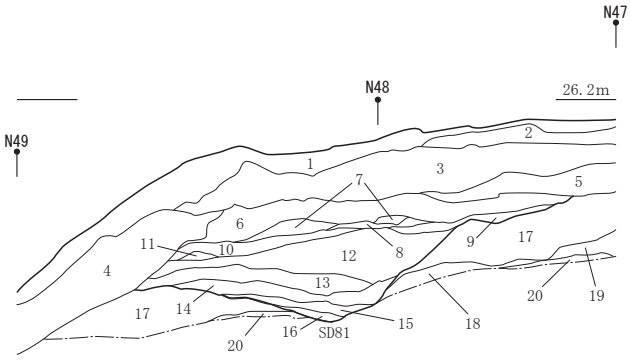
Ⅰ層
1　にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)　粘性中　硬度中　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)塊少量含む
2　褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度中　炭化物微量含む

Ⅳ層
3　暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性中　硬度中　炭化物微量含む

Ⅵ層
4　暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性弱　硬度中　炭化物微量含む

Ⅶ層
5　暗褐色砂質粘土(10YR3/3)　粘性中　硬度中　炭化物少量含む
6　褐色砂質粘土(10YR4/4)　粘性中　硬度中　暗褐色砂質粘土(10YR3/3)塊・にぶい黄褐色粘土 (10YR5/3)塊中量含む　炭化物少量含む
7　にぶい黄褐色粘土(10YR5/3)　粘性強　硬度中　炭化物少量含む
8　にぶい黄褐色粘土(10YR5/3)　粘性強　硬度強　炭化物少量含む

Ⅺ層
9　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)　粘性中　硬度強　酸化鉄縞状沈着



盛土
1　褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度中　小円礫少量含む
2　褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度中　炭化物微量含む

Ⅰ層
3　暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性弱　硬度中　炭化物少量含む　表土

Ⅱ層
4　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)　粘性弱　硬度弱　炭化物微量含む
5　暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性弱　硬度中　炭化物微量含む
6　暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性弱　硬度中　炭化物微量含む

SD81 溝跡覆土
7　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)　粘性弱　硬度中　炭化物微量含む
8　褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度中
9　暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性弱　硬度中　炭化物多量含む
10　褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度中　炭化物微量含む
11　褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度中　炭化物微量含む
12　暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性中　硬度強　炭化物微量含む
13　暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性弱　硬度強　炭化物微量含む
14　黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性弱　硬度強
15　褐色シルト(10YR4/4)　粘性中　硬度強
16　黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性弱　硬度中

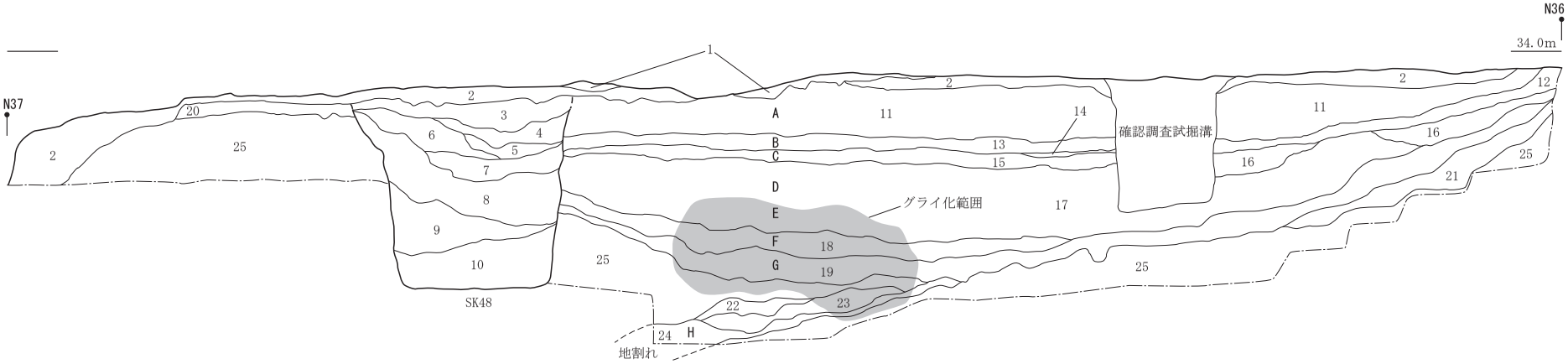
Ⅵ層
17　暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性弱　硬度強　炭化物微量含む
18　暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性弱　硬度弱　小円礫少量含む

Ⅷ層
19　黒褐色シルト(10YR3/2)　粘性弱　硬度中　小円礫少量含む

Ⅺ層
20　にぶい黄褐色粘土(10YR6/4)　粘性中　硬度強

0　(S=1/60)　2m

第８図　北区N28-N29・N47-N49土層断面



※A ～ H は土壌試料採取地点

Ⅰ層
1　褐色粘土(10YR4/4)　粘性中　硬度中
2　褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度弱

SK48 土坑覆土（掘削土埋め戻し）
3　褐色シルト(10YR4/6)　粘性弱　硬度中
4　黄褐色シルト(10YR5/6)　粘性弱　硬度中
5　オリーブ褐色シルト(2.5Y4/6)　粘性弱　硬度中
6　褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度弱
7　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)　粘性弱　硬度弱
8　明黄褐色粘土(10YR6/8)　粘性中　硬度弱
9　にぶい黄色粘土(2.5Y6/4)　粘性中　硬度弱
10　灰オリーブ色粘土(5Y6/2)　粘性中　硬度弱

Ⅲ層
11　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3)　粘性弱　硬度中

Ⅳ層
12　褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度中
13　暗褐色シルト(10YR3/3)　粘性中　硬度弱　炭化物微量含む　小円礫微量含む
14　褐色砂質粘土(10YR4/4)　粘性中　硬度中
15　暗褐色砂質粘土(10YR3/4)　粘性中　硬度中

Ⅵ層
16　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)　粘性中　硬度中　塊状構造
17　褐色砂質粘土(10YR4/4)　粘性中　硬度弱　炭化物微量含む
18　褐色砂質粘土(10YR4/4)　粘性中　硬度中　灰色粘土塊(2.5GY5/1)多量含む　粗砂～小礫少量含む

Ⅷ層
19　褐色粘土(10YR4/4)　粘性中　硬度中

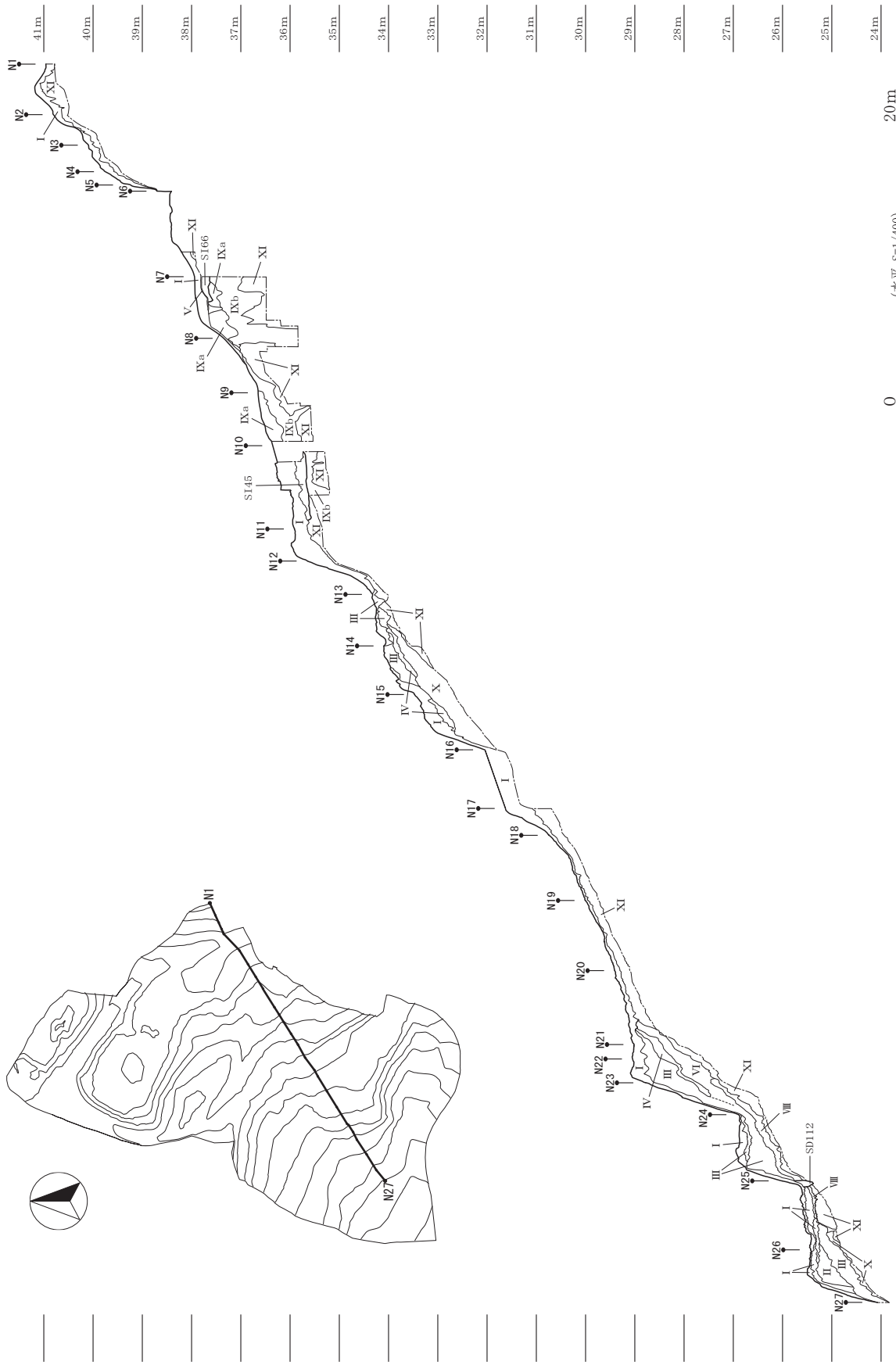
Ⅹ層
20　褐色シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度弱
21　にぶい黄橙色粘土(10YR6/3)　粘性弱　硬度弱

Ⅸ層
22　褐色粘土(10YR4/4)　粘性中　硬度中
23　にぶい黄色砂質粘土(2.5Y6/3)　粘性弱　硬度弱　酸化鉄沈着
24　にぶい黄褐色砂質粘土(10YR4/3)　粘性中　硬度弱

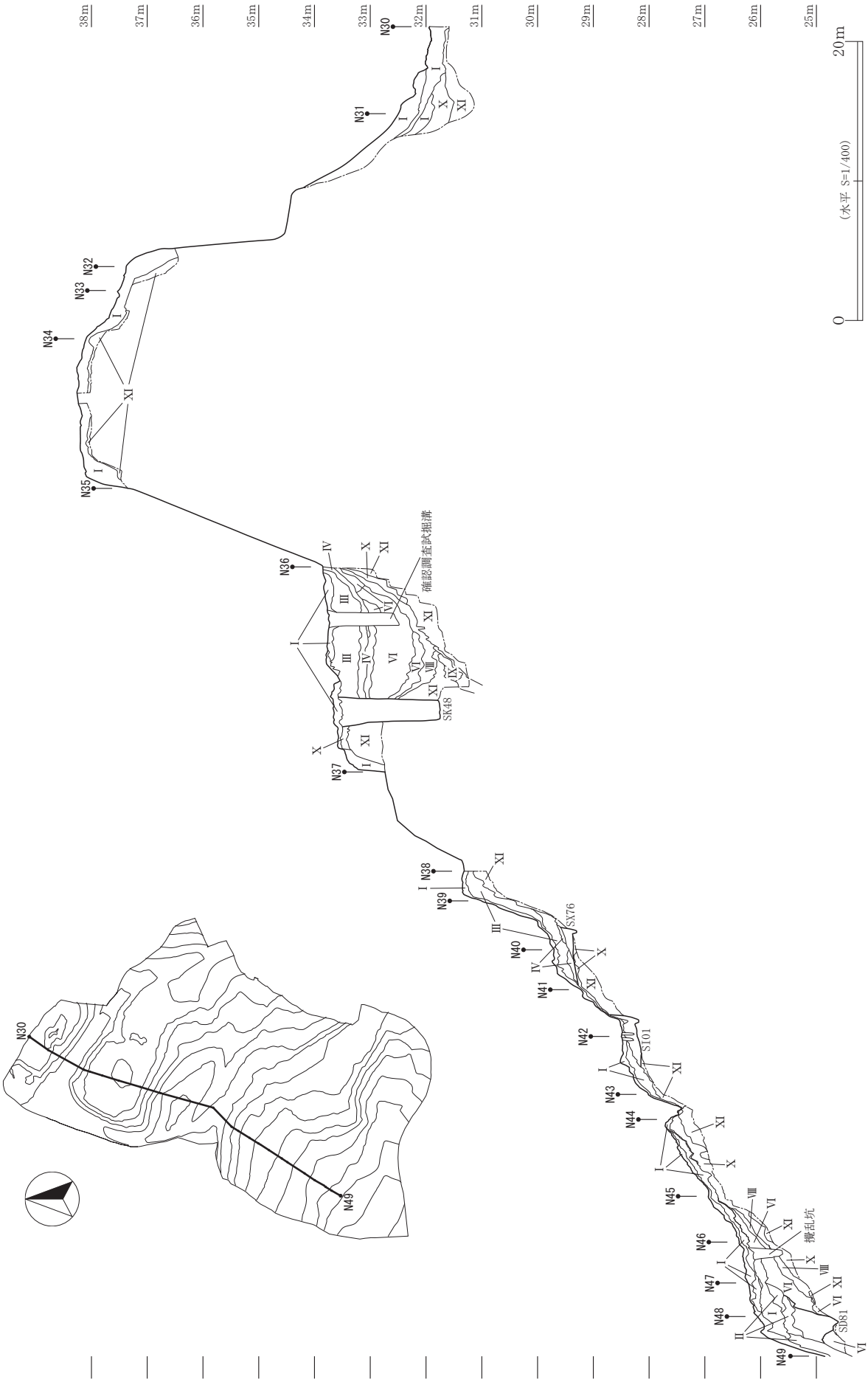
Ⅺ層
25　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)　粘性中　硬度中　酸化鉄縞状沈着

0　(S=1/60)　2m

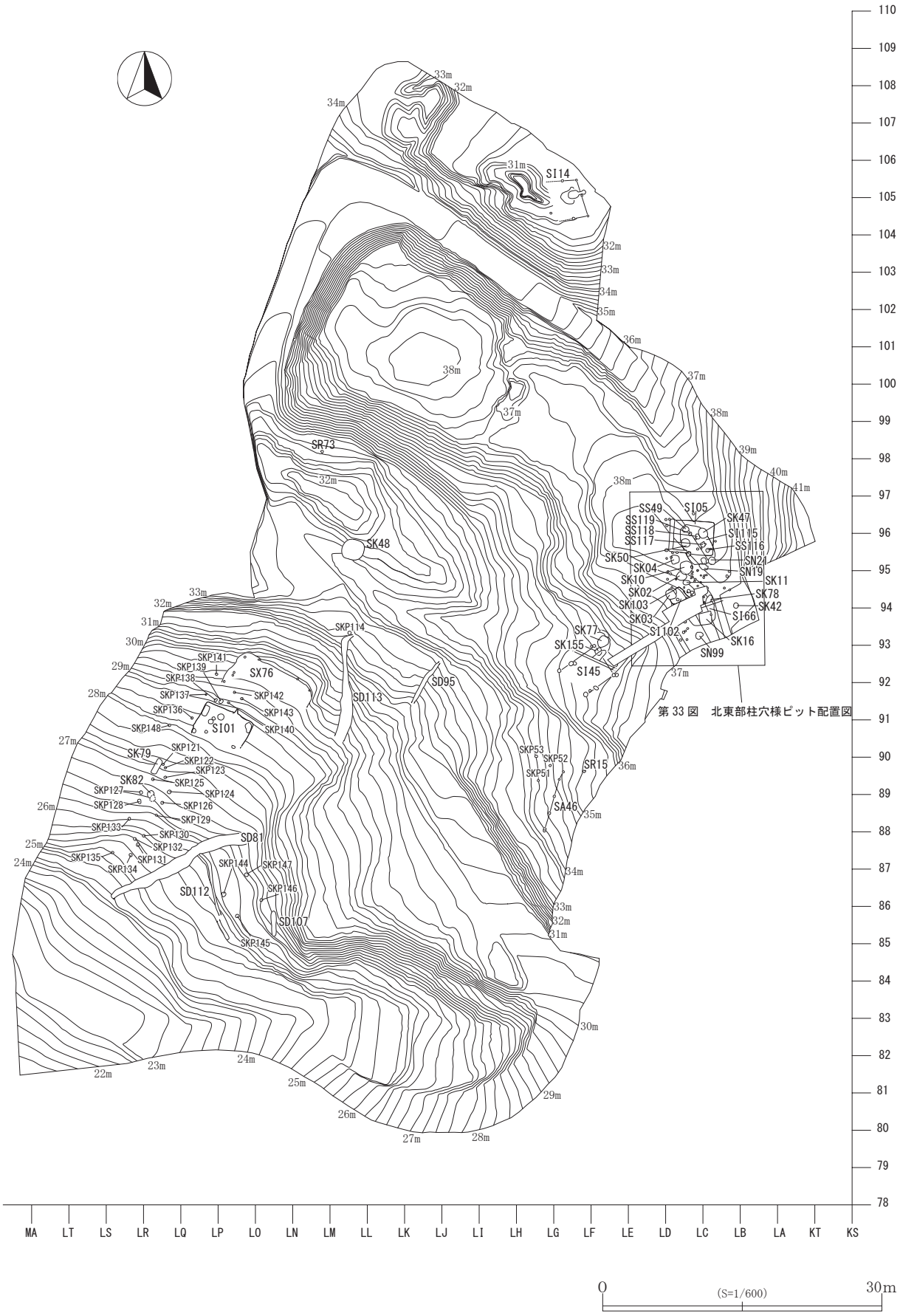
第９図　北区N36-N37土層断面



第10図　北区南北畦１土層断面（水平：1/400　垂直：1/120）



第11図　北区南北畦２土層断面（水平：1/400　垂直：1/100）



第12図　北区遺構配置図

２　北区検出遺構と遺物

（１）概要

横枕遺跡北区では、平安時代に属すると判断される遺構として、竪穴建物跡７棟、土坑15基、炉跡５基、焼土遺構３基、土器埋設遺構２基、性格不明遺構１基を確認した。また、柱穴様ピット89基を検出し、その内の数基を除き、大半は平安時代に属すると推定される。

当該期の遺構分布を見ると、竪穴建物跡の内の３棟は、丘陵斜面の中で、相対的に傾斜が緩やかな地点に各１棟ずつ散在し、周囲には同時期の遺構はほとんど認められない。残りの竪穴建物跡４棟は、調査区最高位部に当たる標高38m前後の北東部の比較的平坦な地点に集中し、一部の竪穴建物跡は重複している。さらに周囲には、土坑、炉跡、焼土遺構などが比較的まとまって分布している。当該地点周辺は、鍛冶作業等に係わる工房施設群が一定期間継続して営まれ、何段階かの変遷をたどったものと想定される。

このほか、出土遺物や掘り込み面、覆土の特徴などから近世以降に属すると判断される遺構として、土坑１基（SK48）、溝跡５条（SD81・95・107・112・113）、柱穴列１条（SA46）を検出した。これらの内、土坑や溝跡は近世以降の畑地耕作等と係わる施設と推定されるが、本書では、個別の報告は割愛する。

（２）竪穴建物跡

SI01竪穴建物跡（第13～15図、図版１）

【確認状況】標高約28m、北側から南方向への緩斜面の中腹LO90・91、LP90・91区の基盤粘土層（Ⅺ層）上面に位置する。南北畦２断面及び基盤粘土層面で基盤粘土塊と炭化物を多量にを含む黒色土の広がりを認め、遺構の存在を確認した。

【重複】溝状や土坑状の掘り込みが重複するが、いずれも現代のもので、撹乱とした。

【規模・形態】南側ほど大きく削平を受け、南西壁は残存していない。このため、正確な形状は掴めなかった。主軸方位は25度ほど東に傾き、北東壁が長さ5.6mほどある。残存している柱穴から考えて北西長3.8m、南東壁長3.4mほどの長方形を呈する。南西側は失われているが、その南側は元からかなり急に低くなる地形であったとみられることから、竪穴は南西側に大きくは広がらず、おおよそ６×４ｍほどの規模と思われる。北東壁は40cmほど基盤粘土層を緩やかに掘り込んでおり、北西壁、南東壁は垂直に立ち上がる。北東、南東壁を壁溝が巡っており、南東壁側は元々基盤に混在していた経80cm以上の亜角礫の存在のため溝幅が大きく広がっている。北西、北東隅には柱穴を伴う大きな掘り込みがあり、北西側柱穴（Ｐ２）は長軸120cm、短軸60cmの隅丸方形平面で床面から約40cm掘り下げられている。北東側柱穴（Ｐ３）は壁溝内にあり長軸110cm、短軸50cm、深さ約20cmほどで不整形である。明確な柱痕跡は見られなかった。その他南西、南東隅と思われる位置に直径10cmほどの柱穴（Ｐ１・Ｐ７）があり、北西側中央部床面にも３基の柱穴（Ｐ４～６）が並んでいる。掘形底面は緩斜面の基盤粘土層を掘り込み、ほぼ水平に整えている。

【覆土の特徴】カマド構築土由来と思われる粘土層と炭化物を多量に含む層が交互に積層しているが、所により入り乱れることから、炭化物の中にカマドを壊した土が混じったものと考える。壁溝や柱穴跡の底部にも多量の炭化物があることから、本住居跡は廃絶時に火を焚いてからカマド構築材などで

埋め戻しを行っていると思われる。その上位は周囲からの流入土によって埋まったものと考えられる。
【カマド】北東壁の中央、若干東よりの位置に煙道出口を持ち、規模は、長さ225㎝、幅80㎝で、主軸は北東を向いている。煙道掘り込みと構築土の最下部と燃焼部が残存していた。煙道は、やや大きめに掘り込んだ後、粘土質の構築材と一部土器を貼って構築する。竪穴壁から50㎝ほど北東へ延び緩やかに傾斜する。袖は主に煙道と同じ黄褐色の粘土で作られており、一部土器が混和材として使用されている。周囲には炭化物と共に黄褐色粘土が堆積しており、カマド本体はこの土により作られていたと推測される。燃焼部底面は周囲の床面と大きな違いはない。燃焼部底面中央部分と西側袖部分に坑が見られ、中央のものは支脚を、西袖部のものは袖石を抜き取った跡と思われる。煙道東脇の壁溝にその袖石と思われる石も残されていた。カマド東側30㎝ほどに直径70㎝、深さ10㎝の浅い土坑（SK1）があり、底部に比較的形状の残る炭化材が残っていた。規模や形態、位置関係からカマドに付随する炭溜め穴と思われる。カマドの南側前方の床面にもう一つ燃焼面が見られたが、焼け方が弱いことやこの燃焼部を中心に周囲に炭が広がる様子から建物廃絶時にこの場所で火を焚いたものと考える。
【遺物等の検出状況】土師器坏2,145.7g、甕4,899.5g、内黒土師器坏611.8g、両黒土師器坏104.1gが出土した。須恵器は出土しなかった。遺物の出土状況から多くは建物上屋解体後、廃絶儀礼のためにカマドや住居を廻る壁溝の要所に置かれたものと、カマドの構造材として使用されたものが残っていたものと考えられる。第34図１・２はカマド煙道部西脇の壁際に２枚重ねで置かれていた坏である。同じ状況がSI14でも見られ、カマド廃絶儀礼の方法と思われる。５はカマド燃焼部の東脇に伏せられて、７は煙道部東の壁際に置かれていた。11 ～ 13は高台付の内黒土師器の坏で、11は北西壁の南端床面に、12、13は北西壁の北端に置かれていた。14 ～ 17は土師器甕で、14は全面が著しく被熱しており、支脚に転用された可能性がある。支脚は元の位置から袖石と共に抜き去られており、この土器も袖石と見られる石もカマド脇の壁溝に置かれていた。15は大型の甕で煙道部周辺の床面に散乱しており、一部煙道内にも貼られていることから煙道の構築材に利用されたものと考える。16・17は甕である。口縁部が緩く外反し、口唇部は無調整で一部歪み、垂れ下がる。SI14出土の甕と類似している。
【所見】遺物の特徴から10世紀前半の住居跡と思われる。覆土に多量の炭化物が含まれていたが、燃えた柱材などは見受けられず火事などの突発的な状況ではない。柱穴底部にも炭化物が入り込んでることから、廃絶に際して柱材などを抜き取り、カマドも意図的に壊し、支脚や袖石も抜き、壁溝沿いやカマド周辺に土器を配置した後、火をつけたと思われる。廃絶に係わる儀礼的行為と推定される。

SI05竪穴建物跡（第16図、図版２）

【確認状況】標高39m、調査区最上位部のLB95・96、LC95・96区基盤粘土層（Ⅺ層）上面で、暗褐色～黒褐色粘土層の広がり及び土師器破片等のまとまった遺物の分布により確認した。畦を設定し覆土掘り下げを進めたが、遺構形状は判然としなかったため、畦沿いに断ち割りを行った結果、畦断面で基盤粘土から成る複数の貼床層を確認した。また、西側でＬ字形に巡る壁溝跡を検出し、最終的に、遺構平面形状は必ずしも明瞭ではなかったが、本来、方形平面の掘り込みを伴う竪穴建物跡と判断した。
【重複】SI115竪穴建物跡を切る。
【規模・形態】竪穴掘り込みは、推定で東西長4.7m、南北幅3.6mの東西軸の方形平面をなす。確認面からの深さは約0.15mである。壁は残存していない。竪穴西端から南端西半にかけて幅24 ～ 44㎝、深さ15㎝前後の壁溝が巡る。貼床層は最大厚10㎝前後で、現状で２枚の床面が認められる。これらの床

面に伴って、土坑２基(SK47・50)、炉跡５基(SS49・116 ～ 119)が分布する。これらの遺構については、それぞれ土坑と炉跡の項目で個別に報告する。このほか、床面及び竪穴周辺では直径20 ～ 40㎝、深さ６～ 47㎝の柱穴14基を確認した。このうち竪穴西隣に分布する柱穴群(SKP60 ～ 63・68)からは、貼床及び壁溝よりも外側に上屋が広がっていた可能性が認められるが、具体的な上部構造は不明である。このほか、カマドは未確認である。

【覆土の特徴】１層は遺構廃絶後の堆積層である。上位はほとんど削平されたものと推定され、貼床範囲よりも内側に不整形に遺存していた。黒ボク土系の暗褐色砂質粘土に基盤粘土塊が混入し、土師器破片、炭化物粒などを包含する。下位の２層から５層は主として基盤粘土塊から成る貼床層である。２層上面及び３層上面がそれぞれ第２次と第１次の床面と見られ、前者にSK50土坑、SS49・119炉跡、後者にSK47土坑、SS116・117・118炉跡などが伴うと判断される。２層及び３層は炭化物を多量に含んでおり、これらは炉操業時の燃料材に由来する可能性も想定される。

【遺物の出土状況】主に１層から土師器坏1,255.6g、甕1,307.0g、内黒土師器坏43.8g、須恵器甕226.6gが出土した。遺構廃絶後に流入したものと推定される。性格不明の鉄製品破片１点が伴う可能性があるが、詳細な出土状況は不明である。このほか、鉄滓、鍛造剥片等の鍛冶関連遺物は未確認である。

【所見】本遺構にはカマドは未確認であり、方形平面の貼床を主な作業面とする古代の工房跡であったと推定される。貼床面は現状で第１次と第２次の２面を認めることができ、少なくとも１度の改築が行われている。それぞれの床面には炭化物を多量に含む土坑１基と複数の炉跡が伴うものと判断される。鍛冶関連遺物は未確認であるが、鍛冶作業に係わる施設であった可能性が高いものと推定する。下位で検出したSI115竪穴建物跡もほぼ同様の鍛冶関連の工房跡と推定されるが、両者は竪穴主軸方位が異なり、連続した建て替えかは判断し難い。

SI14竪穴建物跡(第17・18図、図版２)

【確認状況】標高約31m、遺跡北端、両前寺川に下る急斜面の中腹に地滑り起源と推定される東西14m、南北８mほどの小さな平坦面があり、その西端LF104・105区の基盤粘土層(Ⅺ層)上面及び地割れが埋まった黄褐色土上に位置する。耕作土を除去したところ、焼土と炭化物を含む黒褐色粘土の広がりでカマドを確認した。竪穴状の掘り込みを探したが、上面は大きく削平をうけており、掘り込みは未確認である。検出した一部の柱穴の配置から、本来は竪穴建物跡であろうと判断した。

【重複】重複する遺構はない。

【規模・形態】上面、南西側が大きく削平を受けており、南西側は柱穴も未確認のため正確な形状は掴めなかった。平面形は方形ではなく菱形をしており、東壁は長さ４mほどある。南西側は失われている。幅が５mもない平坦面に立地するため、おそらく歪な形状であったことが予想される。

【覆土の特徴】削平のため、覆土はカマド掘り込み部と柱穴に残された基盤粘土塊を含む褐色土が残されているのみである。

【カマド】東壁の若干南よりの位置に煙道出口を持ち、本体の長さ195㎝、幅85㎝で、主軸は北東を向いている。燃焼部を囲むように床面より一段前庭部及び、カマド本体も周囲より掘り下げられているため、その部分が削平を免れ残存していた。煙道部、本体袖部共に掘り込んだ後に黒褐色粘土を壁に貼り、盛ることでカマドを構築している。覆土には構築土の崩落土が多く見られ２・４層は天井、５・６・７層は壁からの崩落土である。両脇に被熱した袖石が残されており、一部土器の甕を構築材として利

用している箇所も見られた。中央に支脚が完形で残され、煙道出口とカマド掻き出し口に炭化材が広がっていた。燃焼部は周囲の床面と異なる特別な構造は認められない。

【遺物等の検出状況】土師器甕3,104g、坏316.2g、支脚が出土した。須恵器は出土していない。遺物の多くはカマドを中心に出土した。第35図21・22は土師器の坏で、SI01竪穴建物跡と同じように、カマド煙道南西横に２枚重ねで置かれて、廃絶儀礼の様子を窺わせる。23・24は小型の甕底部で、いずれもカマドから出土し被熱している。25 ～ 27は大型の甕で、25・26はカマド燃焼部から出土し被熱しており、構造材として利用したものと推測する。27は体部は周囲に散乱していたが、口縁部が煙出穴を塞ぐように逆位に置かれていた。底部は出土せず、儀礼のためのものか判然としていないが、おそらく廃絶時に煙道を塞いだものと推測する。28は支脚で、燃焼部に完形で据えられ残されていた。

【所見】遺物の特徴からSI01竪穴建物跡とほぼ同時期の10世紀前半の住居跡と思われる。遺構のすぐ西山側には大規模な地割れ跡があり、堆積状況から古代当時には埋まりきっておらず、凹地となっていたものと考えられる。地割れも考慮するとあまりに狭小な場所にある。西南側を山としているため海風が届かないことが選地の一因かと思われる。

SI45竪穴建物跡（第19 ～ 21図、図版３）

【確認状況】標高36m前後のLE・LF91 ～ 93区Ⅸ層（北東部地割れ埋積層）中に位置する。東西畦２断面及びその周辺で炭化物粒を伴う焼土面、被熱した大型円礫、土師器甕などを確認し、竪穴建物跡に付設するカマドの存在を想定した。調査の結果、平面・断面ともに明確な竪穴状の掘り込みは認められなかったが、カマドと周辺で検出された柱穴の配置から竪穴建物跡と判断した。

【重複】SK155土坑の上位に位置する。

【規模・形態】明確な竪穴状の掘り込み及び壁溝は検出されなかったため、遺構の全体については不明である。柱穴は全部で10基検出した。重複があるため建て替えの可能性も考えられるが、Ｐ１～６を最終的な建物の柱穴と判断した。柱穴の配置から想定される建物の規模は、北西壁長約4.8m、北東壁長約4.2m、南東壁長約4.0mを測る。南西側は不明だが、平面形は長方形を呈すると推測される。主軸方位は北からおよそ55°東へ傾く。柱穴の平面形は略円形または楕円形を呈し、規模は長径24 ～ 56㎝、確認面からの深さは、浅いもので10㎝、深いもので44㎝を測る。

【付属施設】SN1焼土遺構は確認調査時の試掘溝掘削により上面および周辺を削平され、残存状況は良くなかった。断面観察により、被熱範囲はSI45竪穴建物跡床面まで達しており、確認された焼土は当該竪穴建物跡床面上に設けられた炉跡と判断した。掘り込みは伴わず、基盤粘土を竪穴建物跡床面に貼り付け炉底としたことが推測される。鍛冶炉であった可能性も想定されるが、周辺からは鉄滓、鍛造剥片等の鍛冶関連遺物は未検出であり、詳細な性格は不明である。

SN2焼土遺構は、規模は異なるが、同様に掘り込みを伴わず、基盤粘土を竪穴建物跡床面に貼り付けて炉底を構築している。ただし想定される建物範囲の外側に位置することと、古い時期の建物跡の柱穴と想定されるP8に切られるため、SI45竪穴建物跡に付属しない可能性もある。

【覆土の特徴】堆積土は、カマドの掘り込みなどの一部において、基盤粘土塊・炭化物粒を含んだ暗褐色土を確認できるのみであるが、その堆積状況から一括の埋め戻し土と推定できる。柱穴の覆土も建物跡と同様、柱材の抜き取り後に一括して埋め戻されたと考えられる。

【カマド】北東壁の北寄りに付設する。上部構造は不明だが、燃焼面と煙道部の一部が残存し、袖部構

造材と思われる被熱した大型円礫やその抜き取り痕跡が確認できた。カマドの主軸方位は北からおよそ51°東へ傾き、規模は残存部の計測で全長214cm（煙道推定長156cm、燃焼部長58cm）、燃焼部内法幅48cm、煙道部壁外推定長68cmを測る。カマド底面には褐色シルト質粘土（カマド9・10層）が貼られており、燃焼面（カマド6～8層、6層が最も強く被熱硬化している）はこの上面に形成されている。煙道部は緩い傾斜をなし、底面には炭化物の堆積が認められる（カマド3層）。また、カマド燃焼部手前に位置するSK1土坑からは須恵器甕（第37図37）が出土しており、覆土に基盤粘土塊と炭化物粒や焼土塊を含むことから、カマド内の掻き出しあるいは廃棄に関わる掘り込みかと推測される。

【遺物等の検出状況】土師器坏355.7g、甕3,067.5g、羽釜59.3g、須恵器坏3.1g、甕129.7gが出土した。坏は土師器、須恵器共に小片のみで図化しなかった。第36図29は底部に網代痕を残す小型の土師器甕である。カマド燃焼部右袖より出土し外面が被熱している。31～35は中型の甕である。31～33は全面が被熱しており、カマド右袖から出土した。胎土、器形共にSI14竪穴建物跡から出土したものと類似する。34・35は胎土の色の赤味が強くカマド煙道部入口の炭層から出土した。内面が強く被熱していることから構造材として利用されたものと推測する。これらはSI01出土の甕と類似している。遺物は燃焼部付近に比較的まとまって出土しており、廃絶時に意図的に残置された可能性があろう。

【所見】本遺構は、本来、北東方向主軸の方形平面竪穴を伴う建物跡であったと想定される。竪穴北東壁の中央やや北西寄りに北東向きのカマドが付属すると判断される。柱穴は竪穴の四隅及び長辺側壁の中央からやや南西寄りに各１基伴う可能性がある。さらに、柱穴が重複することから、建て替えられたものと推測される。竪穴床面及びその隣接地点では、鍛冶炉の可能性がある焼土遺構が２か所分布しており、本建物跡は、鍛冶工人の住居兼工房であった可能性があろう。建物跡内からの出土遺物から、10世紀代に廃絶されたものと判断される。

SI66竪穴建物跡（第22図、図版４）

【確認状況】LB・LC93区Ⅸa層（地割れ埋積層上位）中に位置する。南北畦１北端断面で焼土面を確認し、竪穴状の遺構が存在することを予想した。しかし、黒ボク土状を呈する旧表土層中に構築されているため、平面形は明確ではなかった。相対的に黒みが強い範囲を竪穴範囲と認定した。

【重複】SK16土坑と重複する。SK16土坑の下位にある。また、古代の整地層（Ⅴ層）に覆われる。

【規模・形態】西側は試掘溝１掘り下げにより消失している。南北長３m以上、東西幅3.1m前後の隅丸方形平面をなすと推定される。壁はわずかに開き気味に立ち上がり、壁高は20cm前後である。床面は南端側はほぼ平坦であるが、中央から北側は深さ８cmほど浅く窪む。窪み南寄り中央には、長径50cmほどの地床炉（SN1）を伴う。炉床部分は地割れ埋積層（Ⅸa層）を平坦に掘り込んだのみで、粘土の貼り付けは認められない。炉床面直下は最大厚10cm程度まで焼土化している（８層）。南西壁寄り床面上には、長径30cmほどに広がる焼土面（SN2）がある。柱穴は竪穴北側壁沿いで１基確認した（P1）。径50cm前後のほぼ円形平面で、竪穴壁側が一段深くなる。床面からの深さは、最大40cmである。柱痕は無く、柱は抜き取られたものと推定される。このほかに、カマド、壁溝等の施設は確認できなかった。

【覆土の特徴】竪穴覆土は黒ボク土系の褐色シルト（４・５層）である。上位にSK16土坑が構築されていることを勘案すると、周囲の表土をまとめて埋め戻したものと推定される。床面は地割れ埋積層（Ⅸa層）を掘り込んだのみで、貼床面は認められない。SN1地床炉南側周辺には多量の焼土塊と炭化物起源の黒褐色シルト粒を含む暗褐色シルト堆積する（６層）。基質は竪穴覆土と共通しており、竪穴覆土と

一連の埋め戻しの可能性が高い。

【遺物等の検出状況】覆土中から床面にかけて土師器坏破片700g(内底部破片14点)、同甕破片922g(内底部破片１点)、内黒土師器坏破片52g(内底部破片１点)が出土した。完形若しくはそれに近い大型破片はなく、覆土埋め戻し時に混入したものと推定される。このほか、柱穴P1から椀形鍛冶滓破片１点38ｇが出土している(図版10⑩)。柱抜き取り後に流入したものと推定される。

【所見】遺構認定時には西側部分は試掘溝掘り下げにより既に削平していた。しかし試掘溝掘り下げ時にはカマドは確認されず、本遺構にはカマドは伴わないものと判断される。地床炉SN1及び焼土面SN2は、鍛冶作業等に係わる施設の可能性も想定され、全体が工房施設であった可能性も考えられる。しかし、柱穴P1出土の鍛冶滓は、本竪穴建物使用時に直接関係するものとは断定できず、このほかには鍛冶関連遺物などは未検出である。よって、本遺構の性格は特定し難い。

SI102竪穴建物跡(第22図、図版４)

【確認状況】LC94区地割れ埋積層(基本層序Ⅸa層)中に位置する。南北畦１の断面で基盤粘土(基本層序Ⅺ層)塊を含む貼床層及びその上面で焼土面を確認し、竪穴建物跡が存在することを想定した。平面及び断面では竪穴掘り込みは明瞭に確認できず、最終的に貼床範囲を竪穴範囲と認定した。

【重複】SK03・SK103土坑、SKP54・96・101柱穴様ピットに切られ、SKP161柱穴様ピットが貼床層下位にある。また、調査区北東部の地割れ部分中心に行われた古代の整地地業よりも以前の構築である。

【規模・形態】東側は試掘溝１掘り下げにより消失する。貼床の範囲は、現状で南北長1.7m以上、東西幅約1.8mのほぼ方形平面と推定される。後述するように貼床面直上には使用時に関連すると推定される暗褐色シルトの薄層(３層)が堆積することから、竪穴であったと判断されるが、竪穴壁は判然としない。また、貼床層よりも下方には竪穴掘り込みは明確に確認できず、竪穴底直上に貼床を構築したものと判断した。試掘溝により過半が消失しているが、床面上には推定で径20㎝前後の焼土面がある(SN1)。さらにその北側約15㎝に径30㎝、深さ12㎝の椀形の掘り込み(Ｐ１)が存在する。Ｐ１の掘り込み底には貼床層から連続して、基盤粘土粒混じりのシルト(７層)を貼り付けており、その直上には炭化物起源の黒褐色シルトの薄層(４層)が堆積する。当該層は焼土面形成時の燃料材を埋めた可能性があり、両者は相互に関連する施設であろう。このほか、貼床範囲内にはカマド、柱穴、壁溝等は確認できなかった。貼床に隣接するSKP163は本遺構に伴う可能性もあろう。

【覆土の特徴】貼床層は径１～10mm前後の基盤粘土(基本層序Ⅺ層)塊を含む褐色砂質シルト層(８層)から成る。層厚は中央周辺で６㎝前後、北東端側では２㎝程度と次第に薄くなる。貼床面直上には厚さ３㎝前後の暗褐色シルトの薄層(３層)がほぼ全面に堆積する。堆積の形態から床面上の板材あるいは敷物など、竪穴使用時に関係する有機物起源の層であった可能性が推定されるが、その由来を具体的に特定することはできない。その上位には褐色砂質シルト(２層)が堆積する。整地地業時に周囲の表土を埋め戻した層の可能性が高いものと想定する。

【遺物等の検出状況】SN1炉跡掘り込み内覆土から土師器破片が１点出土した。埋め戻し時に混入したものと推定する。このほか、貼床層中から土師器坏破片47g(内底部破片１点)を検出した。

【所見】本遺構確認時には東側部分は試掘溝掘り下げにより既に削平していた。しかし試掘溝掘り下げ時にはカマドは確認されず、本遺構にはカマドは伴わないものと判断される。周辺に分布する遺構群の性格等も勘案すると、居住施設ではなく、工房施設であった可能性もあるが、断定できない。

SI115竪穴建物跡（第23図、図版４）

【確認状況】LB・LC95・96区において、SI05竪穴建物跡の断ち割り断面及びSI05竪穴建物跡掘り下げ後の基盤粘土層（Ⅺ層）上面で基盤粘土塊を多量に含む隅丸方形の貼床面を確認した。SI05竪穴建物跡とは、ほぼ同位置に重なるが、平面主軸方位がずれることから、別遺構と判断した。断ち割り断面で新旧２枚の貼床面を確認し、本遺構では新旧２段階の変遷を認定した。

【重複】SI05竪穴建物跡、それに伴うSK47・50土坑、SS117 ～ 119炉跡と重複し、その下位に位置する。

【規模・形態】南北長約4.8m、東西幅約3.0m、最大深さ0.14mのやや不整の隅丸長方形平面を呈する竪穴掘り込み内に新旧２枚の床面が構築されている。竪穴長軸方位は概ね南北方向である。当初の旧段階の竪穴は、底面中央部分が長軸約2.5mの隅丸方形状に一段深く掘り込まれている。当該部分底面には凹凸があり、窪んだ部分に基盤粘土由来のにぶい黄褐色粘土を充填し、ほぼ平坦な貼床面を造成する。全体では、旧段階の床面は中央部が南北長約2.5m、東西幅約1.5mの隅丸方形状に深さ約６㎝窪んだ形状をなす。床面中心部には推定径25㎝の焼土面を残す地床炉が形成される。床面中央部の窪み及び貼床は地床炉に伴う作業と直接係わる構造の可能性があろう。新段階では、旧段階炉床周辺をそのまま残し、その周囲に厚さ５～ 10㎝前後に基盤粘土を埋め立てて、新段階の貼床面を構築する。新段階の炉は、旧段階とほぼ同一箇所に位置し、長軸約1.0m、短軸約0.8mの不整円形平面の深さ８㎝の浅い椀形を呈する。このほか、カマド、柱穴、壁溝などの施設は新旧両段階とも未確認である。

【覆土の特徴】新段階の炉内には、多量の炭化物を含む黒褐色シルト（１層）が埋積し、炉底には炭化物層（２層）や焼土塊（３層）が堆積している。貼床層は新旧両段階とも基盤粘土由来のにぶい黄褐色粘土塊が主体をなし、少量の褐色砂質粘土がにぶい黄褐色粘土塊間を充填する状態で混在する。新段階の貼床層（５層）中には炭化物に加え、一定量の土師器破片も含んでいる。これらの土師器破片などは貼床の混和材として埋め込んだ可能性が想定される。旧段階の炉床面から貼床上面（７～９層上面）にかけては極めて薄い炭化物層が堆積している。

【遺物等の検出状況】新段階の貼床中からは一定量の土師器坏破片が出土した。全体で550g（内底部破片９点）に達する。このほか内黒土師器坏破片13g（内底部破片１点）も出土している。上述したように、いずれも貼床の混和材として利用した可能性が想定される。調査時にSX120性格不明遺構としたものは、新段階の貼床中に完形の土師器坏１個体（第38図46）と別個体の土師器坏底部破片を逆位に並べて埋め込んだものである。現時点では単なる貼床の混和材であったか、儀礼的な意図も含むものかは判断できない。このほかに、直径5.8㎝の凝灰岩球礫１点（第38図49）も出土している。

【所見】本遺構には炉跡は存在するものの、カマドは伴わないことから、居住施設ではなく、工房施設と推定する。鉄滓、鍛造剥片等の鍛冶関連遺物など施設内での活動痕跡を示す遺物は未確認であるが、鍛冶作業と係わる施設の可能性があるものと想定される。直上にSI05竪穴建物跡が重複するため、明確に確認できていないが、本来竪穴構造であったと推定される。

（３）土坑

SK02土坑（第24図、図版５）

【確認状況】LC94・95区の古代整地地業層（基本層序Ⅴ層）上面で確認した。

【重複】SK10土坑に切られる。

【規模・形態】長径1.05m、短径0.94mの円形平面を呈す。平面長軸方向はほぼ東西方向である。掘り込みは椀形で壁は緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは約0.19mである。

【覆土の特徴】覆土中位に堆積する基盤粘土層塊が集中する薄層（２層）を境に全体を３層に分けた。いずれも基盤粘土塊を含み、基本的に連続した埋め戻し層と推定される。

【遺物等の検出状況】土師器坏143.5g、内黒土師器坏21.1g、支脚245.5gが出土した。いずれの遺物も埋め戻し時に混入したものと判断される。

【所見】SK10土坑など周辺に分布する遺構と類似した、鍛冶作業等の生産活動に関わる施設であった可能性も想定されるが、詳細な性格は不明である。

SK03土坑（第24図、図版５）

【確認状況】LC94区古代整地地業層（基本層序Ⅴ層）と地割れ埋積層（基本層序Ⅸa層）の境界で確認。

【重複】SK103土坑を切る。古代整地地業層（Ⅴ層）の上位に位置する。

【規模・形態】長径約1.2m、短径約1.0mの不整楕円形平面で、平面主軸方位は北西方向である。底面は平坦で、壁はほぼ直立気味に立ち上がる。確認面からの深さは約0.2mである。

【覆土の特徴】地割れ埋積層由来の暗褐色砂質シルトを基質とし、基盤粘土塊が混入する。基盤粘土の混入度の差で上下に二分したが、基本的に連続した埋め戻し層と推定される。

【遺物等の検出状況】土師器坏216.1g、甕142.2gが出土した。このうち形状が判明する柱状高台付坏１点のみを図示した（第38図51）。

【所見】出土遺物から、本遺跡の古代遺構の中では最も新しい時期に属する可能性がある。本遺構の詳細な性格については不明である。

SK04土坑（第25図、図版５）

【確認状況】LC95区の古代整地地業層（基本層序Ⅴ層）上面で確認した。当初、炭化物塊を含む暗褐色～褐色粘土の円形の分布を認め、当該範囲を土坑として完掘した。その後の古代整地層掘り下げ後に掘り込みが南側に広がることを確認し、補足調査を行った。

【重複】SKP58柱穴様ピットを切る。

【規模・形態】径約1.0mの不整円形平面をなす。壁は緩やかに椀状に立ち上がり、底面も緩やかに湾曲している。確認面からの深さは約0.12mである。

【覆土の特徴】当初掘り上げた部分の覆土は、大型炭化物及び基盤粘土塊と黒褐色シルト質粘土塊を含む。下位は相対的に炭化物が減少し、上下で大きく二分した（１・２層）。補足調査で掘り上げた３層は炭化物を含まない褐色粘土層である。土坑掘削当初の埋め戻しの可能性があろう。

【遺物等の検出状況】土師器坏60.7g、甕31.3gが底面直上周辺から出土した。

【所見】詳細な時期及び性格は不明である。

SK10土坑（第24図、図版５）

【確認状況】LC94・95区の古代整地地業層（基本層序Ⅴ層）上面で確認した。

【重複】SK02土坑を切る。

【規模・形態】長径約1.5m、短径1.3mの不整楕円形平面を呈する。長軸方向は南北方向である。壁はやや直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは約0.24mである。

【覆土の特徴】覆土中位に厚さ５㎝前後の炭化物層が堆積し（２層）、底面直上には基盤粘土由来と推定

される、にぶい黄褐色砂質粘土層（５層）が堆積するなど、覆土は層厚５～10㎝前後の５枚の薄層に分けた。２層周辺からは、土師器破片や被熱痕跡のある大型円礫などが比較的まとまって出土するほか、５層からも同一個体と認められる土師器破片が出土することなどから、覆土は基本的に連続して埋め戻されたものと推定される。

【遺物等の検出状況】土師器坏1,027.2g、甕4,385.5g、内黒土師器坏293.7g、須恵器甕24.3gが出土した。１層からの出土量は少なく、２層からが多い。被熱痕跡のある大型円礫なども出土している。５層からは土師器甕の底部が多量に出土し、２層出土のものと同一個体と見られるものも存在する。第39図55は柱状高台付坏で、坏部分が皿状に広がる。SK03の出土例と類似する。そのほか磨石が出土した。

【所見】出土遺物から、本遺跡の古代遺構の中では最も新しい時期に属する可能性がある。本遺構の詳細な性格は不明である。

SK11土坑（第25図、図版５）

【確認状況】LC94区の整地地業層（基本層序Ⅴ層）上面で確認した。

【重複】なし

【規模・形態】長径0.8m、短径0.5mの楕円形平面をなす。平面長軸は東西方向で、壁は緩やかに椀状に立ち上がり、東側には段がある。底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは約0.2mである。

【覆土の特徴】覆土は３層に分けた。底面直上に堆積する３層は基盤粘土塊及び土器破片を含む。１・２層は基盤粘土塊や土器破片のほかに大型炭化物を多量に含み、連続した埋め戻し層と考えられる。

【遺物等の検出状況】１層と３層から土師器片が少量出土した。

【所見】大型炭化物などを多量に含む覆土上半の堆積層は、ある種の炉の操業と関わる可能性も推定されるが、確実ではない。本遺構の詳細な性格は不明である。

SK16土坑（第25図、図版５）

【確認状況】LB・LC93区の地割れ埋積層（基本層序Ⅸa層）上面で暗褐色粘土の広がりを確認した。

【重複】SKP39柱穴に切られ、SI66竪穴建物跡の上位に位置する。

【規模・形態】長さ約1.4m、幅約1.3mの方形平面をなす。長軸はほぼ南北方向である。壁はほぼ直立し、底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは約0.2mである。

【覆土の特徴】暗褐色粘土が堆積する単層だが、底面直上には部分的に基盤粘土を主体とする厚さ１～２㎝前後の薄層が堆積する箇所がある。当該部分は貼床層であった可能性が想定される。覆土は地割れ埋積層（基本層序Ⅸa層）に由来するものと判断される。

【遺物等の検出状況】土師器坏426.1g、甕240.9g、羽釜74.9g、内黒土師器156.8g、支脚42.4g、不明鉄製品が出土した。第40図70は高台付坏で床面から正位の状態で出土した。周辺からは鍛冶滓が出土したが、本遺構に伴うものかは不明である。

【所見】方形平面の掘り込み底面に貼床状の堆積層が一部に伴うことから、竪穴状遺構と捉えることも可能である。ただし、かなり小規模で、かつ柱穴は確認できないことから、ここでは土坑として報告した。現時点では、詳細な性格は不明である。

SK42土坑（第26図、図版５）

【確認状況】LB94区の基盤粘土層（Ⅺ層）上面で確認した。

【重複】なし

【規模・形態】直径約0.6mの円形平面をなす。掘り込みは皿状を呈し、深さは約0.05mに過ぎない。

【覆土の特徴】暗褐色シルト質粘土の単一層である。薄層のため、詳細な性格は判然としない。

【遺物等の検出状況】土師器片が１点出土した。

【所見】現状では、本遺構の詳細な性格は不明である。

SK47土坑（第26図、図版６）

【確認状況】LB95・96、LC95・96区SI05竪穴建物跡貼床面中位で確認した。

【重複】SS118炉跡を切る。

【規模・形態】長径約1.1m、短径約0.9mの楕円形平面をなす。平面長軸は北西方向である。壁は僅かに外傾し、底面は平坦である。確認面からの深さは約0.2mである。

【覆土の特徴】基盤粘土塊を主体とする薄層と炭化物を主体とする薄層とが互層状に堆積する。市道の直下に当たるため、覆土は固化している。

【遺物等の検出状況】土師器坏336.4g、甕59.0gが出土した。

【所見】確認面から、本遺構はSI05竪穴建物跡第１次貼床に伴うものと判断される。炭化物層と基盤粘土塊層が互層状に堆積する覆土の特徴から、同一貼床面で確認されるSS118炉跡操業などと関わる施設であった可能性も想定される。ただし、鉄滓等の鍛冶関連遺物は未検出である。

SK50土坑（第26図、図版５）

【確認状況】LC95区SI05竪穴建物跡貼床上面で確認した。

【重複】SI05竪穴建物跡に伴う。

【規模・形態】長径約0.9m、短径約0.8mの楕円形をなす。長軸は東西方向である。壁は僅かに外傾し、底面は僅かに凹凸がある。確認面からの深さは約0.2mである。

【覆土の特徴】基盤粘土塊を主体とする層と炭化物を主体とする層が互層に堆積する。覆土の堆積状況は、SK47土坑と共通する。

【遺物等の検出状況】確認面及び基盤粘土塊を主体とする層の上面で比較的遺物がまとまって出土する。全体で、土師器坏260.5g、甕260.5gが出土した。このほか、円礫も出土している。

【所見】確認レベルからSI05竪穴建物跡第２次貼床面に伴うと判断される。覆土の特徴は第１次貼床面に伴うSK47土坑と共通し、同じく、炉跡操業に関わる施設であった可能性が想定される。ただし、鉄滓、鍛造剥片、鉄製品等の鍛冶関連遺物は未検出である。

SK77土坑（第27図、図版６）

【確認状況】LE92・93区地割れ埋積層（基本層序Ⅸa層）上面に位置する。

【重複】なし。

【規模・形態】遺構上面は耕作により削平を受けているため、上部構造は不明である。平面形状は直径2.48mの円形を呈する。壁は大きく開きながら立ち上がり、中位でくびれて段をなす。中段のくびれ部分の平面長径は1.28m、短径は1.08mである。底面はほぼ水平な平坦面である。確認面からの深さは0.56mである。

【覆土の特徴】４層に分層した。１・２層は基盤粘土の混入度の差で分けたが、基本的に連続した埋め戻し土と判断される。３層は焼土層であり、上位壁面被熱部分の崩落土と想定される。４層は土坑底面及び壁面の被熱による焼土化範囲である。

【遺物等の検出状況】土師器坏313.7g、甕395.7gが出土した。埋め戻し時に混入したか、意図的に埋めたかは現状では判断し難い。

【所見】隣接するSI45竪穴建物跡と直接の重複関係はないが、より下位面で確認したことから、SI45竪穴建物跡よりも古い時期の遺構の可能性が想定される。被熱痕跡は高温下で形成されたとは認められず、本遺構は炉跡等の施設とは想定し難い。土坑内で火を焚いた後に一気に埋め戻したものと推測されるが、本遺構の具体的な性格は不明である。

SK78土坑（第28図、図版６）

【位置・確認状況】LB94区古代整地地業層（基本層序Ⅴ層）上面で確認した。南側は試掘溝掘削によって消失している。

【重複】SI66竪穴建物跡の上位に位置する。

【規模・形態】現状で、北北東向きの不整の溝状を呈する。残存長は約1.0m、幅は0.53mである。壁は大きく開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.14mである。

【覆土の特徴】暗褐色シルトの単一層である。埋め戻しの可能性があるが、断定できない。

【遺物等の検出状況】遺物は未検出である。

【所見】整地地業層面に分布する古代の遺構の可能性があるが、詳細な性格は不明である。

SK79土坑（第28図、図版６）

【位置・確認状況】標高約27m、北側から南方向への緩斜面の中腹LQ89区の基盤粘土層（基本層序Ⅺ層）上面に位置する。範囲確認調査畦１床面及び基盤粘土面で褐色土の広がりで確認した。

【重複】北東側が撹乱されているが、重複はない。

【規模・形態】南へ向って傾斜する緩斜面に高位側を深さ30㎝ほど掘り込み、水平に南側に床面を整形する。南壁は残っていない。平面形は長軸北東－南西方向の長方形をしており、長軸が170㎝、短軸が60㎝ほどある。

【覆土の特徴】茶褐色土単一層の人為的な埋め戻しである。

【遺物等の検出状況】土師器坏11.3gが出土した。

【所見】SI01竪穴建物跡を下ってすぐに位置し、副葬品こそ見られなかったが、土坑の形態から土坑墓であったと可能性がある。

SK82土坑（第28図、図版６）

【位置・確認状況】標高約26m、南方向への緩斜面の中腹LQ89区の基盤粘土層（基本層序Ⅺ層）上面に位置する。範囲確認調査試掘溝１床面及び基盤粘土層上面で褐色土の広がりを認め、土坑と判断した。

【重複】南西側に撹乱を受けるが重複はない。

【規模・形態】南へ向かって傾斜する緩斜面に、不整形な楕円状に床面が水平になるように30㎝ほど掘り込まれている。平面形は長軸が80㎝、短軸が60㎝ほどある。

【覆土の特徴】茶褐色土単一層の人為的な埋め戻しである。

【遺物等の検出状況】遺物は未検出である。

【所見】SK79土坑に隣接し覆土も類似する。しかし規模が小さく、現状では詳細な性格は不明である。

SK103土坑（第29図、図版６）

【確認状況】LC94区の地割れ埋積層（基本層序Ⅸa層）上面で黄色粘土塊を多量に含む覆土の堆積を部分

的に確認した。遺構確認面は古代の整地地業層（Ⅴ層）の下位に当たる。

【重複】SK03土坑に切られ、SI102竪穴建物跡貼床を切る。

【規模・形態】長径0.95m、短径0.70mの楕円形平面をなすものと推定される。確認面からの深さは0.16mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに開きながら立ち上がる。

【覆土の特徴】地割れ埋積層（基本層序Ⅸa層）由来の褐色砂質シルトを基質とし、基盤粘土（Ⅺ層）由来の黄色粘土塊を多量に含む単一層である。地割れ周辺の整地地業時に埋め戻された可能性が強い。

【遺物等の検出状況】土師器坏小破片0.5g１点が出土した。

【所見】具体的な性格は不明である。

SK155土坑（第29図、図版６）

【確認状況】LE92区の地割れ埋積層（基本層序Ⅸa層）上面で確認した。

【重複】なし。

【規模・形態】長軸北端側が突出する長径0.80m、短径0.75mの不整楕円形平面を呈する。平面長軸方位は南北方向である。椀形の掘り込みで、確認面からの深さは0.25mである。

【覆土の特徴】覆土は大きくは上下に二分できる。下半（３層）は基盤粘土に由来すると判断され、土坑掘削当初の残土等の堆積層と推定される。上半（１層）は周囲の地割れ埋積層（基本層序Ⅸa層）に由来する褐色シルト層である。焼土化した大形の基盤粘土塊（２層）を含んでいる。短期間のうちに埋め戻されたものと判断される。また、掘り込み北側の突出部側底面は被熱により一部焼土化している。

【遺物等の検出状況】土師器坏破片11g（内底部破片１点）、甕破片６gが出土した。

【所見】SI45竪穴建物跡の推定北壁の北側に隣接し、被熱痕跡を伴う突出部はSI45竪穴建物跡のカマドの推定延長線上付近に位置する。SI45竪穴建物跡の旧い段階に伴うカマド煙道の煙出し部底面の掘り込みであった可能性も推定されるが、確実ではない。

（４）炉跡

SS49炉跡（第30図、図版８）

【確認状況】LC96区のSI05竪穴建物跡貼床上面で被熱した暗赤褐色粘土の分布を検出した。

【重複】SI115竪穴建物跡を切る。

【規模・形態】長軸0.70m、短軸0.55mの楕円形平面で、深さ約0.08mの浅い皿状の掘り込み内に粘土を埋め込み、炉床を構築する。掘り込み長軸方向は、ほぼ東西方向である。

【覆土の特徴】掘り込み覆土は基本的に基盤粘土を埋め込んだものと見られる。粘土には焼土塊、炭化物を含む。覆土上位は被熱により赤変している（１層）。

【遺物等の検出状況】土師器坏2.3g、同甕5.0gが出土した。

【所見】SI05竪穴建物跡第２次貼床に伴う炉跡である。炉上位は削平され、炉底部分のみが遺存する。鉄滓、鍛造剥片等の鍛冶関連遺物は未検出であるが、炉底規模及び構造から、鍛錬鍛冶炉であった可能性があろう。

SS116炉跡（第30図、図版７）

【確認状況】LB95区でSI05竪穴建物跡貼床掘り下げ中に小円形の被熱範囲を確認した。

【重複】SI05竪穴建物跡貼床中位にあり、SI115竪穴建物跡を切る。

【規模・形態】直径0.47mの円形平面で深さ0.12mの浅い椀形の掘り込み内に土師器破片とともに粘土を埋め込み炉床を構築している。炉上半はSI05竪穴建物跡第２次貼床構築時に削平され、炉床最下部のみが遺存したものと判断される。

【覆土の特徴】掘り込み内には基盤粘土を埋めたものと考えられる。炉床上半は被熱痕跡が認められる。１層は青灰色を呈し、還元化しており、２・３層は暗赤褐色の被熱痕を留める。

【遺物等の検出状況】炉床上位（１・２層）から土師器甕の大形破片（第41図82）が出土したほか、少量の土師器坏破片、支脚破片も出土した。全体重量は約280gである。炉床粘土の混和材として埋め込んだ可能性があろう。

【所見】SI05竪穴建物跡貼床中位から検出し、第１次貼床面上に構築されたものと考えられる。鍛冶滓、鍛造剥片などの鍛冶関連遺物は未検出であるが、規模及び形態からは、鍛錬鍛冶炉であった可能性があろう。

SS117炉跡（第30図、図版７）

【確認状況】LB95・LC95区でSI05竪穴建物跡貼床掘り下げ中に焼土塊と周囲の被熱痕跡を確認した。

【重複】SI05竪穴建物跡貼床中位にあり、SI115竪穴建物跡を切る。

【規模・形態】長軸北西－南東方向、長径0.47m、短径0.33mの楕円形平面で、現状で深さ0.05m前後の浅い皿状の掘り込み内に、焼土起源の暗赤褐色砂質粘土塊や基盤粘土が混在した状態で埋積する。さらに掘り込み下底から周囲にかけて、被熱によりSI05竪穴建物跡貼床が赤変した焼土化範囲が広がる。北東側には不整形の小規模な浅い落ち込みが２か所ある。

【覆土の特徴】掘り込み覆土（１・４層）及び浅い落ち込み覆土（２・３層）は共に焼土塊や基盤粘土が混在する。これらは炉操業後に炉底部まで取り壊した痕跡に埋積したものと見られ、炉本来の形状は基本的に留めていないと判断される。掘り込み底面下に最大厚さ６㎝前後の焼土化層（５層）が広がる。

【遺物等の検出状況】確実に本遺構に伴う遺物は未検出である。遺構下位から性格不詳の鉄塊が出土したが、正確な出土位置は不明である。

【所見】SI05竪穴建物跡第１次貼床面に構築された小形の炉跡と判断される。炉は操業後に炉底まで破壊されたものと推定される。鍛冶滓、鍛造剥片などの鍛冶関連遺物は未検出であるが、規模から鍛錬鍛冶炉であった可能性があろう。

SS118炉跡（第30図、図版７）

【確認状況】LC95・96区でSI05竪穴建物跡貼床掘り下げ中に焼土面を確認した。

【重複】SI05竪穴建物跡貼床中位にあり、SI115竪穴建物跡貼床面上位に位置する。

【規模・形態】範囲は長軸0.55m、短軸0.42mの楕円形に広がる。長軸方向はほぼ南北方向である。

【覆土の特徴】SI05竪穴建物跡第１次貼床面が最大で深さ５㎝程度まで被熱により焼土化する。

【遺物等の検出状況】遺物は未検出である。

【所見】SI05竪穴建物跡第１次貼床に伴う炉跡である。炉の大半は削平され、被熱により焼土化した炉床下面部分のみが遺存したものと見られる。鍛冶滓、鍛造剥片等の鍛冶関連遺物は未検出であるが、規模から鍛錬鍛冶炉であった可能性があろう。

SS119炉跡（第30図、図版７）

【確認状況】LC96区でSI05竪穴建物跡貼床上位で炉床と推定される還元化した粘土とその周囲の被熱面

を確認した。確認時には南西半はSI05竪穴建物跡範囲を確認するための試掘溝により削平していた。
【重複】SI115竪穴建物跡の上位に位置する。
【規模・形態】上半は大きく削平されており、現状では長軸南北方向、長軸0.25m、短軸0.21mの楕円形平面である。深さ0.04mの皿形の浅い掘り込み内に粘土を貼り込んだ炉床の最下底部分が遺存するのみである。
【覆土の特徴】炉床部分の粘土は被熱により還元化し灰白色を呈する（１層）。その周囲の貼床面には長径0.35mほどの暗赤褐色を呈する酸化傾向の被熱面（２層）が広がっている。
【遺物等の検出状況】遺物は未検出である。
【所見】SI05竪穴建物跡貼床中位で確認したSS116・117・118炉跡よりも上位に位置し、第２次貼床面に伴うものと判断される。鍛冶滓、鍛造剥片等の鍛冶関連遺物は未検出であるが、小規模で下部構造などは伴わない形態であったと見られることから、鍛錬鍛冶炉であった可能性があろう。

（５）焼土遺構

SN19焼土遺構（第29図、図版８）
【確認状況】LB・LC95区整地地業層（基本層序Ⅴ層）上面で被熱により硬化した赤褐色焼土面を検出。
【重複】SI115竪穴建物跡と重複し、本遺構が上位に位置する。東側に隣接してSN21焼土遺構が分布する。
【規模・形態】長径１m余りの不整形の範囲が焼土化している。
【遺物等の検出状況】焼土内から遺物は検出されなかったが、周辺から土器片がまとまって出土した。
【所見】本遺構の周囲には鍛冶作業等に関わると推測される遺構群が集中していることから、鍛冶作業等に関わる施設であった可能性も想定されるが、詳細な性格は不明である。

SN21焼土遺構（第29図、図版８）
【確認状況】LB95区整地地業層（基本層序Ⅴ層）上面～基盤粘土層（基本層序Ⅺ層）上面で不整楕円形に広がる焼土と、その周囲の円形の掘り込み平面を確認した。
【重複】SI115竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。西側に隣接してSN19焼土遺構が分布する。
【規模・形態】掘り込み平面は長軸北西－南東方向で、0.87×0.80mの不整円形を呈する。壁は緩やかに椀状に立ち上がり、底面は平坦である。確認面からの深さは0.08mである。
【覆土の特徴】本来、整地地業層（基本層序Ⅴ層）由来と想定される基盤粘土を埋め戻した単一層と考えられる。覆土中央部上位（１層）が被熱により焼土化している。
【遺物等の検出状況】覆土からは、土師器坏破片423.7g、甕522.1gがまとまって出土している。焼土面周辺からは支脚破片が出土している。本来、据えられていた可能性があるが、遺存状態が不良で断定できない。また、南端側の土師器甕片下からは球状の石製品が２点出土した（第42図89）。
【所見】焼土面の存在と中心部から支脚が出土したことなどから、本遺構は本来カマドであった可能性も推測される。しかし、煙道や袖部の痕跡などは未確認であり、本遺構が伴う可能性がある竪穴建物跡等も確認していないことから、本遺構の詳細な性格は特定できない。

SN99焼土遺構（第31図、図版８）
【確認状況】LC93区の表土層直下の地割れ埋積層（基本層序Ⅸa層）上面で確認した。
【重複】なし。

【規模・形態】径0.8m前後の不整円形状に被熱によって地割れ埋積層（基本層序Ⅸa層）が焼土化している。焼土化した厚さは確認面以下10cm程度までである。
【覆土の特徴】焼土面の上位には焼土粒を含む褐色砂質シルトが堆積することを部分的に確認した。焼土面直上はほとんどが土壌化した黒ボク土層であり、掘り込みやその覆土は明瞭に確認できない。
【遺物等の検出状況】土師器坏破片34g、同甕破片145g（内底部破片２点）が出土した。燃焼と灰や炭の掻き出しなどが継続的に繰り返された際に混入したものであろう。
【所見】本来、竪穴建物跡床面上の炉跡もしくはカマド火床面であったと推定される。しかし、直上まで土壌化が及んでおり、竪穴の詳細は不明である。また、周囲には柱穴や壁溝なども未確認である。

（６）土器埋設遺構

SR15土器埋設遺構（第31図、図版８）
【確認状況】LF89区表土層直下の基盤粘土層（基本層序Ⅺ層）上面で掘り込み内に埋めた土師器甕体部を確認した。
【重複】なし。
【規模・形態】長径30cm、短径25cmほどの不整形平面の掘り込み内の西側壁に接するように土師器甕を正位に埋設する。掘り込みの深さは現状で約10cmである。土師器甕は口縁部から体部上半、及び底部の下端を欠き、残存器高約13cm、胴径約20cmである。甕内には径約14cmの土師器坏２個体を正位に重ねて納めている。
【覆土の特徴】甕内覆土は、周辺表土（基本層序Ⅰ層）に類似する褐色シルトが埋積する。未固結であり、甕埋設時は、内部は空洞状態であった可能性も想定される。掘り込み覆土は基盤粘土由来の褐色シルトである。
【遺物等の検出状況】土師器甕（第42図94）の底部は埋設時には既に剥離している。甕の西側20cmに位置する近現代の撹乱と推定される表土層の小規模の落ち込み内から同一個体と判断できる土師器甕胴部破片１点が出土している。当該破片は埋設された甕とは直接接合せず、より上位部分の破片である。このことから、甕の上半部は近現代に削平された可能性が強いと推定される。甕内覆土の特徴からは、甕には蓋状のものが伴っていた可能性もあるが、現状では埋設時の本来の状況は不明である。甕内部からは２個体の土師器坏（第42図92・93）以外の出土遺物はない。
【所見】遺構は比較的急傾斜の斜面に位置し、周囲には直接関連すると考えられる古代の遺構はない。地鎮のような儀礼的行為と係わる施設であった可能性があろう。

SR73土器埋設遺構（第31図、図版８）
【確認状況】LM98区の急斜面下の基盤粘土の再堆積層（基本層序Ⅵ層相当層）上面で、完形の土師器坏１個体を確認した。周囲を精査した結果、掘り込みを認め、掘り込み内に坏を埋め込んだ土器埋設遺構と判断した。
【重複】なし。
【規模・形態】土師器坏を埋設する掘り込みは、径29cm前後の不整形平面で、底面も不整で凹凸がある。確認面からの最大深さ７cmである。掘り込み内には口径約12cmの坏１個体を正位に埋設する。坏は僅かに斜面下方の南側に傾いている。

【覆土の特徴】掘り込み覆土及び土師器坏内覆土は共に基盤粘土粒を含む褐色シルトを基調とし、類似する。埋設時に掘り込み内に土師器坏を埋め込んだものと推定される。
【遺物等の検出状況】埋設された坏（第42図95）は、ひび割れが生じ、一部が破片となっているが、本来、完形の状態で埋められたものと判断される。掘り込み内の埋め土及び坏内部からの出土遺物はない。
【所見】遺構は南向きの急斜面の裾部に位置し、その下方南側には地割れ起源の沢状の落ち込みが存在する。沢状の落ち込み内からは少量の土師器破片及び須恵器破片が出土するのみで、本遺構の周囲には直接関連すると考えられる古代の遺構はない。地鎮のような儀礼的行為と係わる施設であった可能性があろう。

（７）性格不明遺構

SX76性格不明遺構（第32図、図版８）
【位置・確認状況】標高約29m、北側の山側から南方向への緩斜面に変わる急斜面の裾、LM ～ LO91・92区の基盤粘土層（基本層序Ⅺ層）上面に位置する。基盤粘土面で褐色土の広がりで確認した。SI01竪穴建物跡の北6.5mに位置する。
【重複】重複はない。
【規模・形態】北側斜面を竪穴状に掘り込み、床面を水平に整形している。北壁が９mの幅があり主軸方向は斜面にあわせ、SI01竪穴建物跡と同じ向きである。壁に沿って幅30 ～ 80㎝、床面からの深さ５～ 12㎝の壁溝が掘られており、南側では消失する。壁に添うように杭穴が７基廻っている。
【覆土の特徴】上面は流入土で埋まっていたが、壁溝部分には水分を多く含み、青みがかった水成堆積の可能性がある地山質の粘土が堆積していた。
【遺物等の検出状況】壁溝から土師器坏29.1g、甕29.1g、支脚74.0ｇが出土した。
【所見】壁溝と杭穴があることから板を用いた柵を設置していたものと思われる。SX76性格不明遺構から北側上方は急斜面になっており、土砂や雪の流入を防ぐためのものではないかと想像される。

（８）柱穴様ピット

調査区全域から柱穴様ピット89基を検出した。これらの柱穴様ピット群には規則的な配列が認められなかったが、覆土の特徴からほとんどが平安時代に属すると推定される。なお、各位置については遺構配置図（第12図）及び密集する北東部に関しては別に北東部柱穴様ピット配置図（第33図）を掲載。個々の規模については北区柱穴様ピット一覧（第２表）に掲載した。また遺物に関してはSKP24から出土した土師器坏のみ図示した（第42図96）。

（９）遺構外出土遺物（第42 ～ 46図、図版10）

遺構外からは、土師器坏6,059.7g、甕7,642.1g、内黒土師器坏27.5g、両黒土師器坏83.7g、須恵器坏14.1g、甕1,110.1g、支脚126.9gなどのほか、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓、弥生土器、近代陶磁器、寛永通宝等銭貨が少量出土した。遺構外からの出土量は少なく、全体的に摩滅している物が多く、成形、調整方法が不明なものが多かった。
【土師器（内黒土師器・両黒土師器）】坏は97 ～ 112の16点を図示した。全てロクロ成形、切り離し方法

不明なものもあるが、高台付の110を除き総じて回転糸切り技法により作られている。102 ～ 106はロクロ使用時に外面にヘラを使用して整形しており、ロクロ目の段が激しく沈線状になっている。107・108は表面が剥離しているが黒色を呈する部分僅かに残っており、本来は内黒土師器と思われる。109は口縁部を研磨して再加工し使われたものである。110・111は高台付坏で、110は回転ヘラ切りによる切り離しのものである。ヘラによる切り離しのものは本例のみである。他のものに比べ硬く、作りもしっかりしている。112は両黒土師器の高台付坏である。

甕は113 ～ 116の４点を図示した。113は底部に葉脈痕が残るもの。114は小型甕の口縁部。115・116は大型甕の口縁部。117は羽釜の取手部分で、取手は欠損しているが取り付け痕が残る。

【須恵器】須恵器の出土は少量であった。特に坏は少なかった。118・119は坏の口縁部。120は小型の壺肩部で頸付け根にロクロを使用し棒状のものをあてたと思われる沈線が残る。121は外面にカキメを残す甕。122・123は外面に平行タタキ目、内面に平行アテ具痕が残るもの。124 ～ 132は外面に平行タタキ目、内面に青海波文アテ具痕を残すものである。128 ～ 132は表面は灰色だが、胎土は生焼けな状態で赤味のある土師質を呈する。129 ～ 132は同一個体の物と思われる。沼沢地であったと思われるLM97区から出土している。

【土製品】133 ～ 135は土師質の土錘破片である。135は貫通孔入口部分のみ方形に作られている。

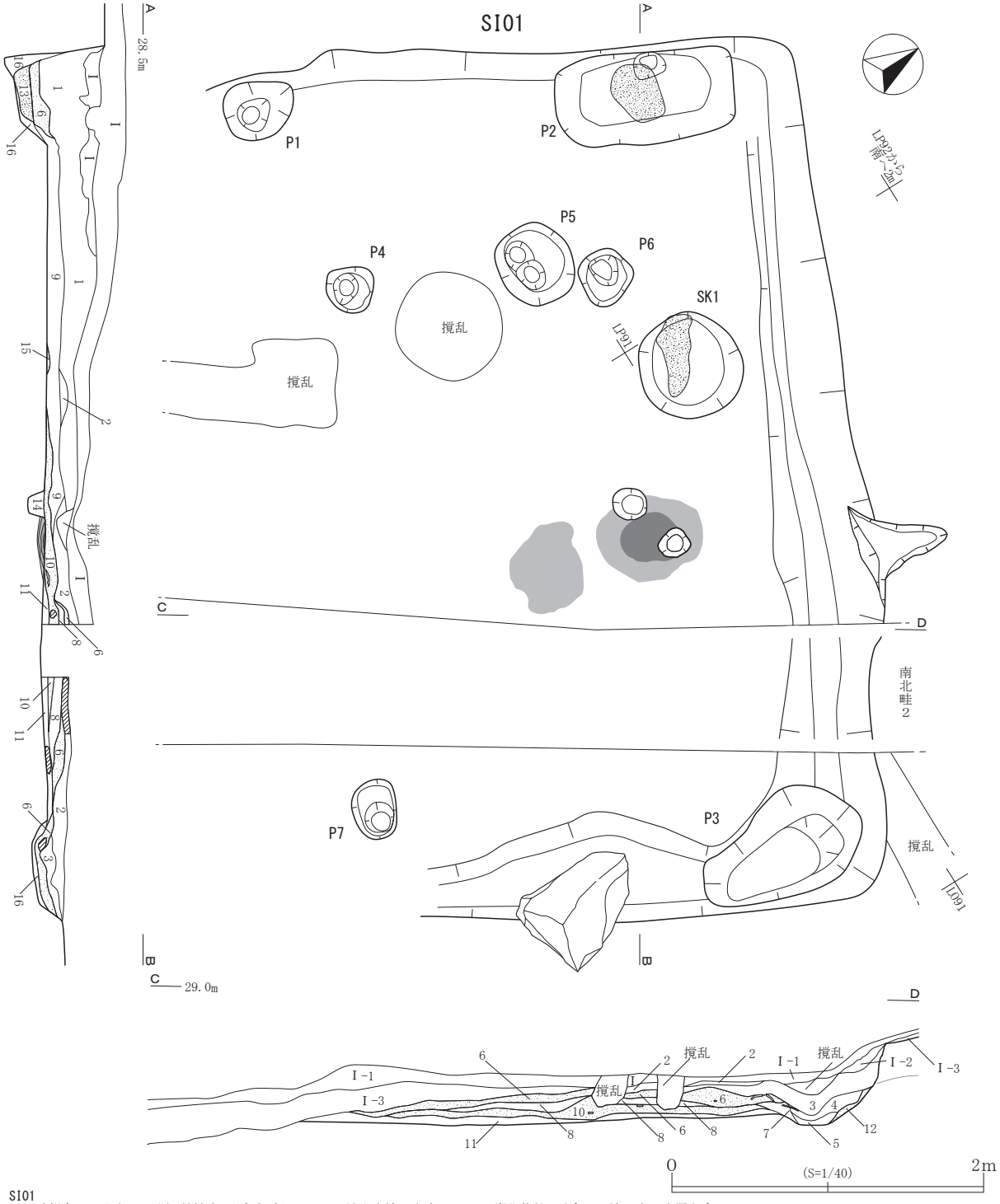
【石製品】136・137は砥石で、共に一部折れているが残り５面は全て使用された研ぎ痕が残る。136の目は細かく仕上げ用、137は目が粗く荒削り用であろう。138は硯で、上面は外壁を彫りこみ、しっかり作られており、擦り面には擦り痕が残る。裏面にも作ろうとしたのか、失敗したのか彫り途中の様子が窺える。

【弥生土器・石器】139は沼沢地であったLM97区から出土した弥生時代前期ごろと推定される壺である。体部と口縁部に縄文が残り、口縁～肩部にかけて５条の沈線が廻る。140は先端部及び茎部を欠損する有茎鏃である。

【時代不明土器】141は土師器質の完形の椀で、西側頂上部の崖面から出土している。時代などの詳細は不明である。

第２表　北区柱穴様ピット一覧

SKP	区	検出層位	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	時期	特記事項
23	LB94	Ⅸa	22.0	18.0	17.0	37.810	古代	
24	LC94	V	20.0	15.0	17.0	37.739	古代	SKP25を切る。
25	LC94	V	20.0	17.0	16.0	37.750	古代	SKP24に切られる。
26	LC94	V	27.0	22.0	11.0	37.829	古代	
28	LC94	V	23.0	18.0	22.0	37.709	古代	
32	LC96	XI	27.0	25.0	10.1	38.680	古代	SI05関連か? 土師器片出土。
34	LC94	V	18.0	15.0	20.0	37.710	古代	
35	LC94	V	14.0	12.0	19.0	37.810	古代	
36	LB94	V	25.0	19.0	22.0	37.769	古代	
37	LB94	V	17.0	17.0	9.0	37.910	古代	
38	LB94	V	20.0	17.0	9.0	37.910	古代	
39	LB93	V	26.0	24.0	10.0	38.020	古代	SK16を切る。
40	LC94	V	24.0	18.0	30.0	37.550	古代	
41	LC94	V	19.0	16.0	26.0	37.679	古代	
51	LG89	XI	23.0	21.0	20.0	33.700	近現代か	
52	LG89	XI	26.0	22.0	19.0	34.100	近現代か	
53	LG89・90	XI	30.0	24.0	17.0	34.030	近現代か	
54	LC94	V	28.0	20.0	37.0	37.409	古代	
55	LC94	V	22.0	21.0	37.1	37.449	古代	土師器片出土。
57	LC95	XI	22.0	17.0	9.0	37.930	古代	
58	LC95	XI	20.0	18.0	6.0	37.960	古代	SK04に切られる。
59	LC95	XI	25.0	21.0	19.0	37.820	古代	SI05関連か?
60	LC・LD95	XI	38.0	31.0	14.0	37.979	古代	SI05関連か?
61	LC96	XI	25.0	23.0	17.0	38.009	古代	SI05関連か?
62	LC・LD96	XI	24.0	23.0	11.0	38.050	古代	SI05関連か?
63	LC96	XI	22.0	20.0	18.0	38.940	古代	SI05関連か?
68	LC95	XI	20.0	17.0	15.0	37.919	古代	
71	LC94	V	23.0	22.0	35.0	37.550	古代	
72	LC94・95	V	25.0	20.0	9.0	37.859	古代	
75	LB94	Ⅸa	22.0	20.0	9.0	37.880	古代	
83	LB94・95	Ⅸa	24.0	22.0	27.0	37.850	古代	土師器片出土。
85	LB94	Ⅸa	16.0	15.0	33.0	37.580	古代	
86	LB94	V	17.0	15.0	31.0	37.619	古代	
87	LB94	V	28.0	27.0	11.0	37.949	古代	
88	LC94	V	40.0	35.0	31.0	37.550	古代	SKP97と切り合い。
89	LC94	V	20.0	17.0	22.0	37.730	古代	
90	LC93	Ⅸa	25.0	24.0	26.0	37.109	古代	
91	LC93	Ⅸa	27.0	25.0	25.0	37.300	古代	土師器片出土。
92	LC93	Ⅸa	23.0	20.0	19.0	37.310	古代	土師器片出土。
93	LC93	Ⅸa	20.0	17.0	21.0	37.349	古代	土師器片出土。
94	LC93	Ⅸa	23.0	20.0	16.0	37.450	古代	土師器片出土。
96	LC94	V	18.0	16.0	9.0	37.600	古代	
97	LC94	V	15.0	12.0	8.0	37.600	古代	SKP88と切り合い。
100	LC95	SI05貼床上	25.0	24.0	33.0	37.559	古代	覆土炭化物大量。
101	LC94	Ⅸa(V上か)	21.0	17.0	19.0	37.409	古代	杭痕か。黄色粘土ブロック覆土。土師器片出土。
104	LC95	SI05関連か?	22.0	20.0	35.0	37.520	古代	灰色粘土の覆土　SI115より新しい。SS118を切るか。
105	LC94	V上か	20.0	15.0	11.2	37.570	古代	黄色粘土覆土。
106	LC94	V上か	17.0	18.0	13.0	37.510	古代	方形平面。黄色粘土ブロック覆土。
108	LC94	Ⅸa	18.0	14.0	15.0	37.600	古代	黄色粘土粒含む。整地層(V層)上方か。
109	LC95	V上か	38.0	24.0	15.0	37.650	古代	黄色粘土覆土。SK10に切られる。
110	LB95	SI05貼床上	22.0	19.0	21.0	37.750	古代	旧表土の黒ボク土覆土。土師器片底から出土。
111	LC95	SI05貼床上	20.0	16.0	9.0	37.850	古代	SI05付属SS117に隣接。覆土は炭化物多量に含む黄色粘土及び灰色粘土。
114	LL93	XI	39.0	37.0	19.0	32.010	江戸?	SD113に伴う。
121	LQ89	XI	25.0	23.0	16.0	27.010	古代	
122	LQ89	XI	25.0	24.0	16.0	26.990	古代	
123	LQ89	XI	30.0	25.0	24.0	26.750	古代	
124	LQ89	XI	42.0	40.0	33.0	26.450	古代	
125	LQ89	XI	27.0	23.0	25.0	26.580	古代	
126	LQ88	XI	33.0	30.0	19.0	26.290	古代	
127	LR89	XI	33.0	37.0	22.0	26.440	古代	
128	LR88	XI	47.0	35.0	24.0	26.240	古代	
129	LQ88	XI	25.0	20.0	14.0	25.980	古代	
130	LQ・LR87	XI	30.0	27.0	32.0	25.350	古代	
131	LR87	XI	36.0	34.0	25.0	25.120	古代	
132	LR87	XI	34.0	30.0	31.0	25.110	古代	
133	LR88	XI	34.0	27.0	28.0	25.660	古代	
134	LR87	XI	35.0	33.0	27.0	24.930	古代	
135	LR87	XI	30.0	25.0	18.0	24.810	古代	
136	LP91	XI	26.0	25.0	21.0	28.150	古代	SI01西壁すぐ。
137	LP91	XI	20.0	17.0	17.0	28.590	古代	
138	LP91	XI	36.0	26.0	33.0	28.440	古代	
139	LO91	XI	47.0	36.0	30.0	28.510	古代	
140	LO91	XI	26.0	20.0	20.0	28.620	古代	
141	LP92	XI	30.0	25.0	13.0	29.220	古代	
142	LO91	XI	25.0	24.0	27.0	28.797	古代	
143	LO91	XI	27.0	23.0	19.0	28.790	古代	
144	LO86	XI	53.0	46.0	35.0	25.510	古代	
145	LO85	V	40.0	35.0	30.0	25.840	古代	
146	LN86	XI	33.0	27.0	26.0	26.370	古代	
147	LO86	XI	44.0	41.0	32.0	26.230	古代	
148	LQ90	XI	28.0	26.0	36.0	27.670	古代	
151	LB94	Ⅸa	23.0	21.0	26.0	37.550	古代	黄色粘土ブロック30%。
153	LC95	V	45.0	42.0	47.0	37.510	古代	黄色粘土ブロック覆土。整地時柱抜き取り埋めか。
154	LC93	Ⅸb	30.0	27.0	21.0	37.330	古代	南北畦1断面にかかる。
160	LB95	XI	25.0	16.0	24.8	37.589	古代	底面に亜角礫。
161	LC94	Ⅸa	20.0	17.0	7.4	37.289	古代	SI102の下。南北畦1にかかる。ピットかは不明確。
163	LC94	Ⅸa	38.0	33.0	21.0	37.250	古代	SI102下。SK164の東。SI102に伴うか。貼床上では確認できず。
165	LC94	V	23.0	20.0	22.0	37.709	古代	
166	LC94・95	V	20.0	18.0	6.0	37.949	古代	

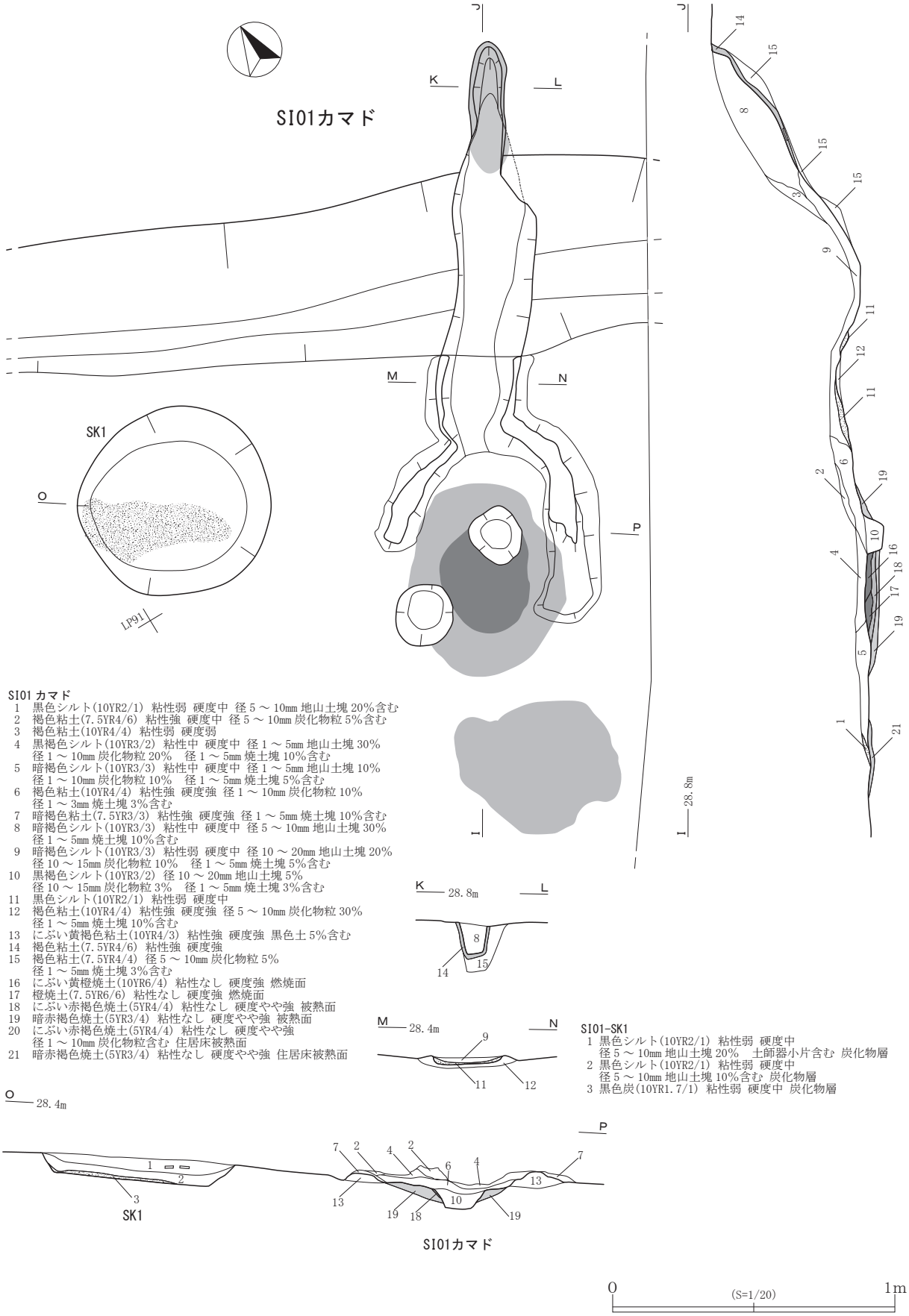


SI01
1　暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性中 硬度中 径５～30㎜ 地山土塊 1% 径１～５㎜ 炭化物粒 1%含む　流入土　土器を含む
2　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性中 硬度中 径５～10㎜ 地山土塊 3% 径１～５㎜ 炭化物粒 2%含む　自然流入土
3　暗褐色シルト質粘土(10YR3/3) 粘性やや弱 硬度中 径５～10㎜ 地山土塊 3%　径１～５㎜ 炭化物粒 2%　径１～５㎜ 焼土塊 5%含む　周辺からの流入土
4　にぶい黄褐色粘土(10YR5/4) 粘性中 硬度中 径５～10㎜ 地山土塊 3%含む 溝部堆積土　裏込め土由来
5　にぶい黄褐色粘土(10YR4/3) 粘性やや弱 硬度中 径１～10㎜ 地山土塊 2%　径10㎜ 炭化物片 7%含む 溝部堆積土　裏込め土由来
6　黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性中 硬度中 径５～30㎜ 地山土塊 7%　径５～10㎜ 炭化物粒 5%含む 5層との層界に伏せた土師器坏を検出
7　にぶい黄褐色粘土(10YR4/3) 粘性やや弱 硬度中 径10～20㎜ 地山土塊 3%　径１～５㎜ 炭化物粒 1%含む 溝部堆積土　裏込め土由来
8　にぶい黄橙色粘土(10YR6/4) 粘性やや弱 硬度やや強 径10～30㎜ 地山土塊 10%　径１～５㎜ 炭化物粒 3%　黒色土斑状に 5%含む 埋め戻し時の投入土
9　褐色粘土(10YR4/4) 粘性強 硬度中 径10～50㎜ 地山土塊 50%含む 住居廃絶時の埋め戻し投入土
10　黒褐色土(10YR3/2) 粘性中 硬度やや強 径５～10㎜ 地山土塊 10%含む 炭化物層
11　黄褐色粘土(10YR5/6) 粘性中 硬度やや強 径５～10㎜ 黒色土塊 3%含む 住居廃絶時の埋め戻し投入土
12　黒色土(10YR2/1) 粘性中 硬度中 径５～10㎜ 地山土塊 3%含む 炭化物層　壁板由来
13　黒色土(10YR1.7/1) 粘性中 硬度中 径５～30㎜ 地山土塊 5%含む 炭化物層
14　黒褐色シルト(10YR3/2) 径10～20㎜ 地山土塊 5%　径10～15㎜ 炭化物粒 3%　径１～５㎜ 焼土塊 3%含む カマド構築材抜き取り後の埋土
15　黒色土(10YR2/1) 粘性弱 硬度中 径５～10㎜ 地山土塊 10%含む 炭化物層　SK1 内堆積土　12層に同じ
16　にぶい黄褐色粘土(10YR5/4) 粘性中 硬度やや強 径５～10㎜ 地山土塊 3%含む 溝部堆積土　裏込め土由来

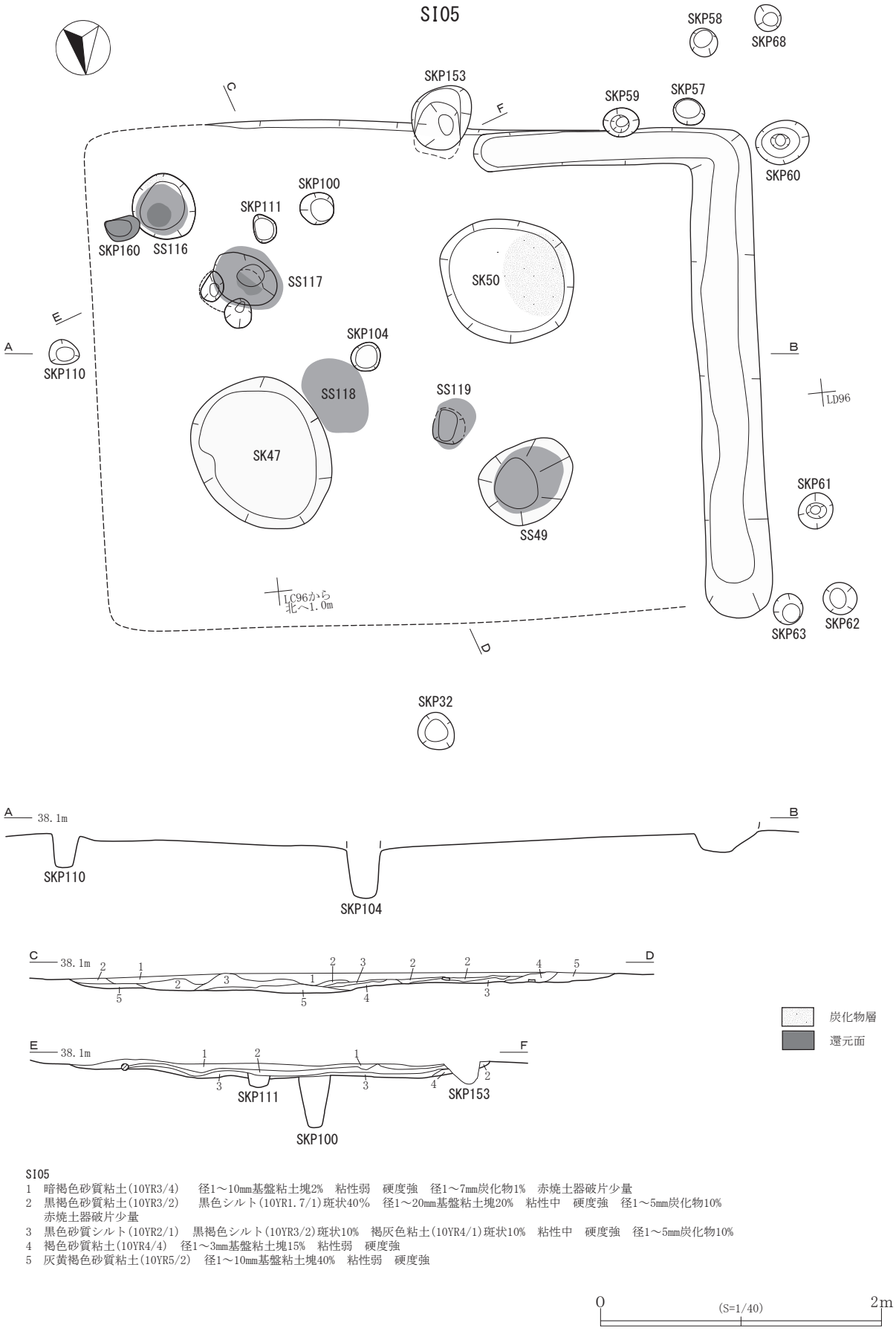
基本土層Ⅰ(表土・耕作土)
Ⅰ-1　褐色シルト(10YR4/4) 粘性弱 硬度中 根草含む現表土
Ⅰ-2　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 硬度中 径10～30㎜ 地山土塊 7% 径５～10㎜ 焼土塊 1%含む
Ⅰ-3　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 硬度中 径５～30㎜ 地山土塊 3% 径１～５㎜ 炭化物粒 2%含む

第13図　SI01

第14図　SI01遺物出土位置図・炭化物範囲図

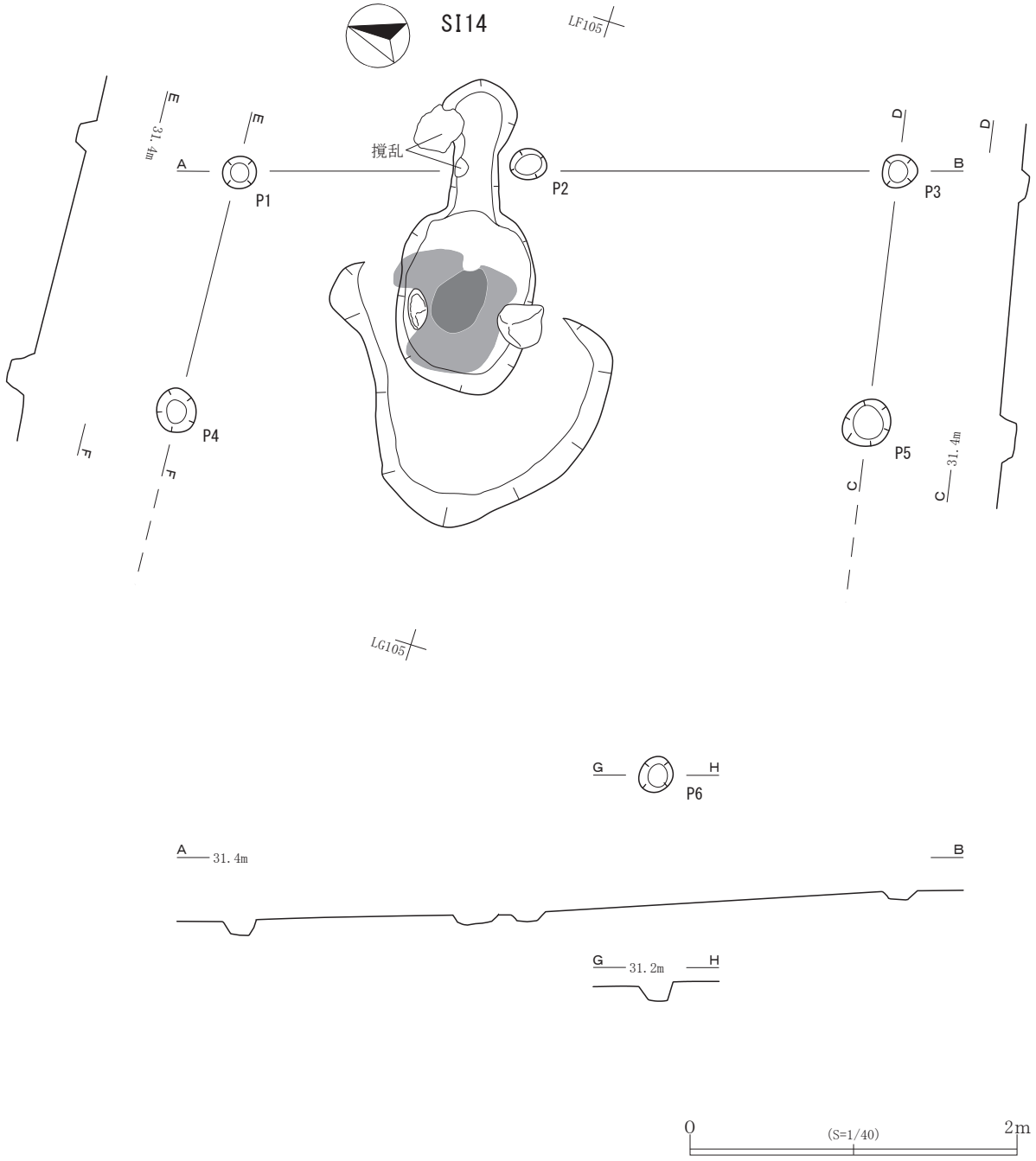


第15図　SI01カマド



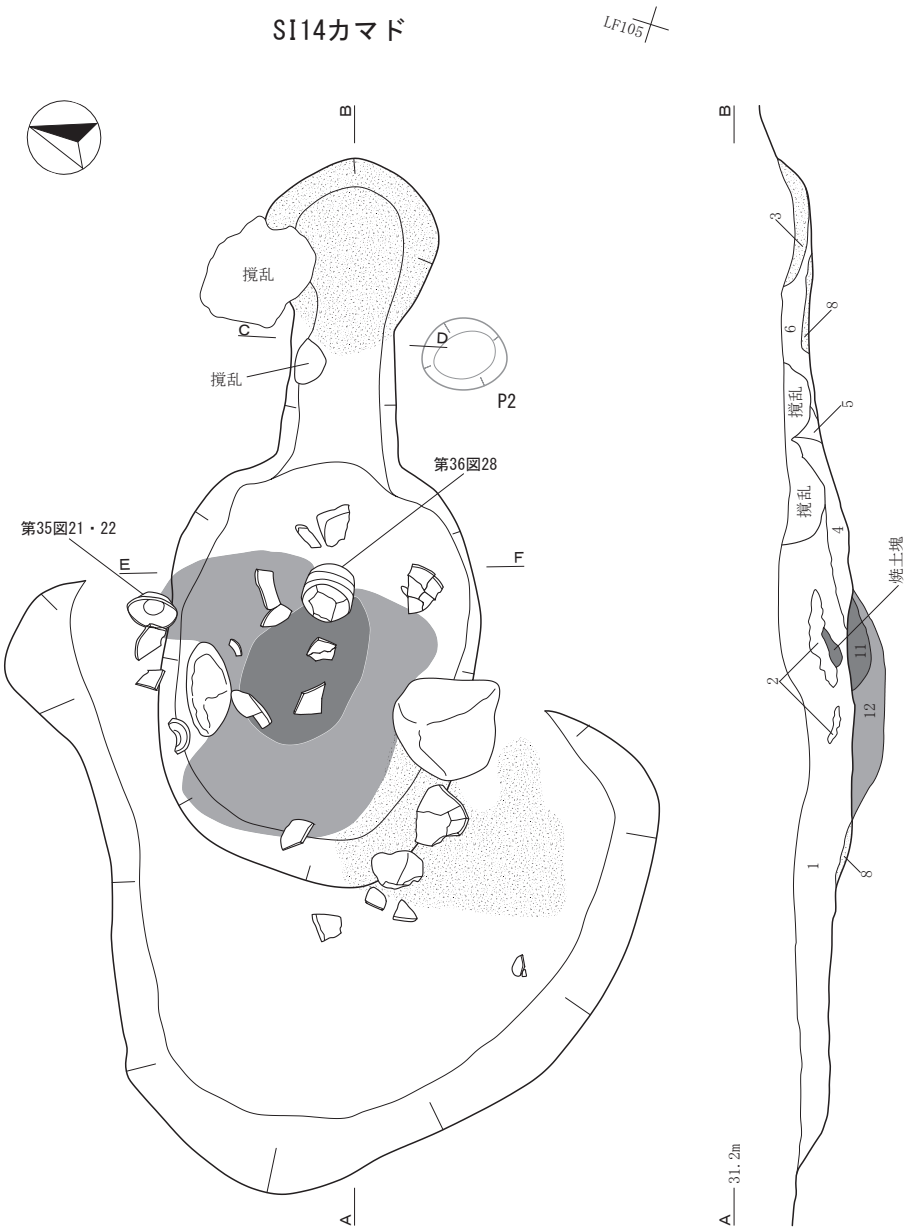
SI05
1　暗褐色砂質粘土(10YR3/4)　径1～10mm基盤粘土塊2%　粘性弱　硬度強　径1～7mm炭化物1%　赤焼土器破片少量
2　黒褐色砂質粘土(10YR3/2)　黒色シルト(10YR1.7/1)斑状40%　径1～20mm基盤粘土塊20%　粘性中　硬度強　径1～5mm炭化物10%
　赤焼土器破片少量
3　黒色砂質シルト(10YR2/1)　黒褐色シルト(10YR3/2)斑状10%　褐灰色粘土(10YR4/1)斑状10%　粘性中　硬度強　径1～5mm炭化物10%
4　褐色砂質粘土(10YR4/4)　径1～3mm基盤粘土塊15%　粘性弱　硬度強
5　灰黄褐色砂質粘土(10YR5/2)　径1～10mm基盤粘土塊40%　粘性弱　硬度強

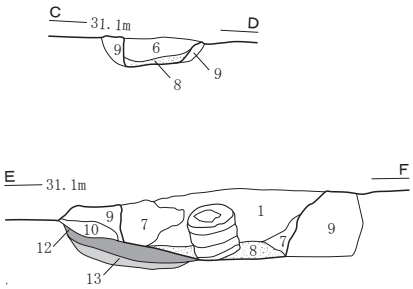
第16図　SI05


SI14
LF105
LG105
撹乱
P1
P2
P3
P4
P5
P6
A
B
C
D
E
F
G
H
31.4m
31.2m
0
(S=1/40)
2m

第17図　SI14

SI14カマド

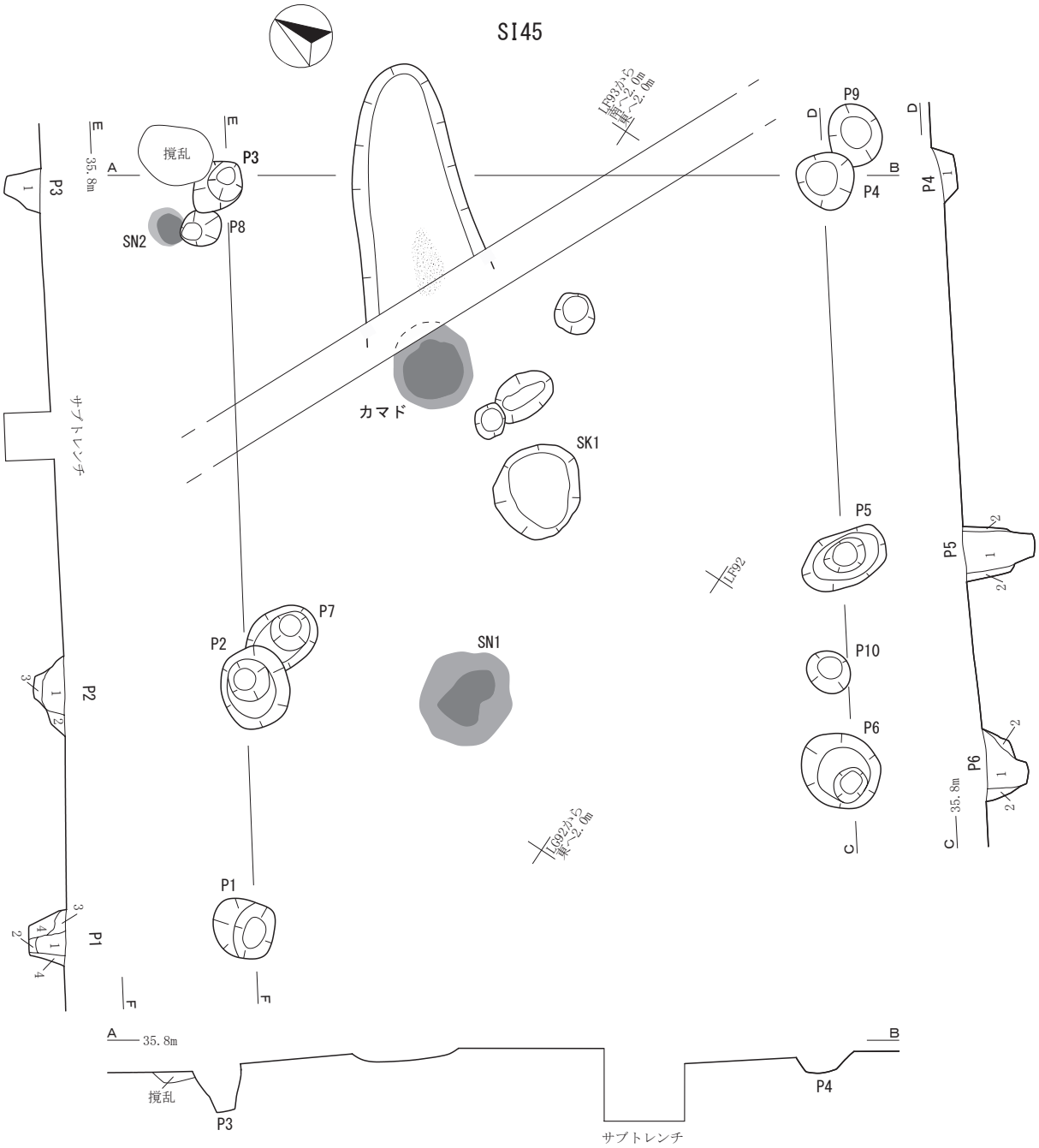




SI14 カマド
1　褐色シルト(10YR4/4) 粘性弱 硬度弱 径 10 ～ 100㎜ 黄褐色粘土塊 20%
　径 0.5 ～ 3㎜ 炭化物粒 3%含む
2　黒褐色粘土(10YR2/3) 粘性中 硬度中 径 0.5 ～ 3㎜ 炭化物粒 3%含む
3　黒色シルト(10YR2/1) 粘性なし 硬度弱　径 0.5 ～ 3㎜ 炭化物粒 80%含む
4　黒褐色粘土(10YR2/3) 粘性中 硬度中 径 0.5 ～ 3㎜ 炭化物粒 3%含む
5　褐色粘土(10YR4/4) 粘性弱 硬度弱 径 10 ～ 100㎜ 黄褐色粘土塊 20%
　径 0.5 ～ 3㎜ 炭化物粒 3%含む
6　黒褐色粘土(10YR2/3) 粘性中 硬度中 径 0.5 ～ 3㎜ 炭化物粒 3%含む
7　黒褐色粘土(10YR3/2) 粘性強 硬度中 径 0.5 ～ 2㎜ 炭化物粒 1%含む
8　黒色シルト(10YR2/1) 粘性なし 硬度弱　径 0.5 ～ 3㎜ 炭化物粒 80%含む
9　黒褐色粘土(10YR3/2) 粘性強 硬度中 径 0.5 ～ 2㎜ 炭化物粒 1%含む
10　褐色粘土(10YR4/4) 粘性中 硬度中 径 10 ～ 100㎜ 黄褐色粘土塊 20%
　径 0.5 ～ 3㎜ 炭化物粒 1%含む
11　赤褐色焼土(5YR4/8) 粘性なし 硬度強 燃焼面
12　褐色焼土(7.5YR4/6) 粘性弱 硬度中 被熱面
13　明褐色シルト質粘土(7.5YR5/8) 粘性中 硬度中 被熱土

0　(S=1/20)　1m

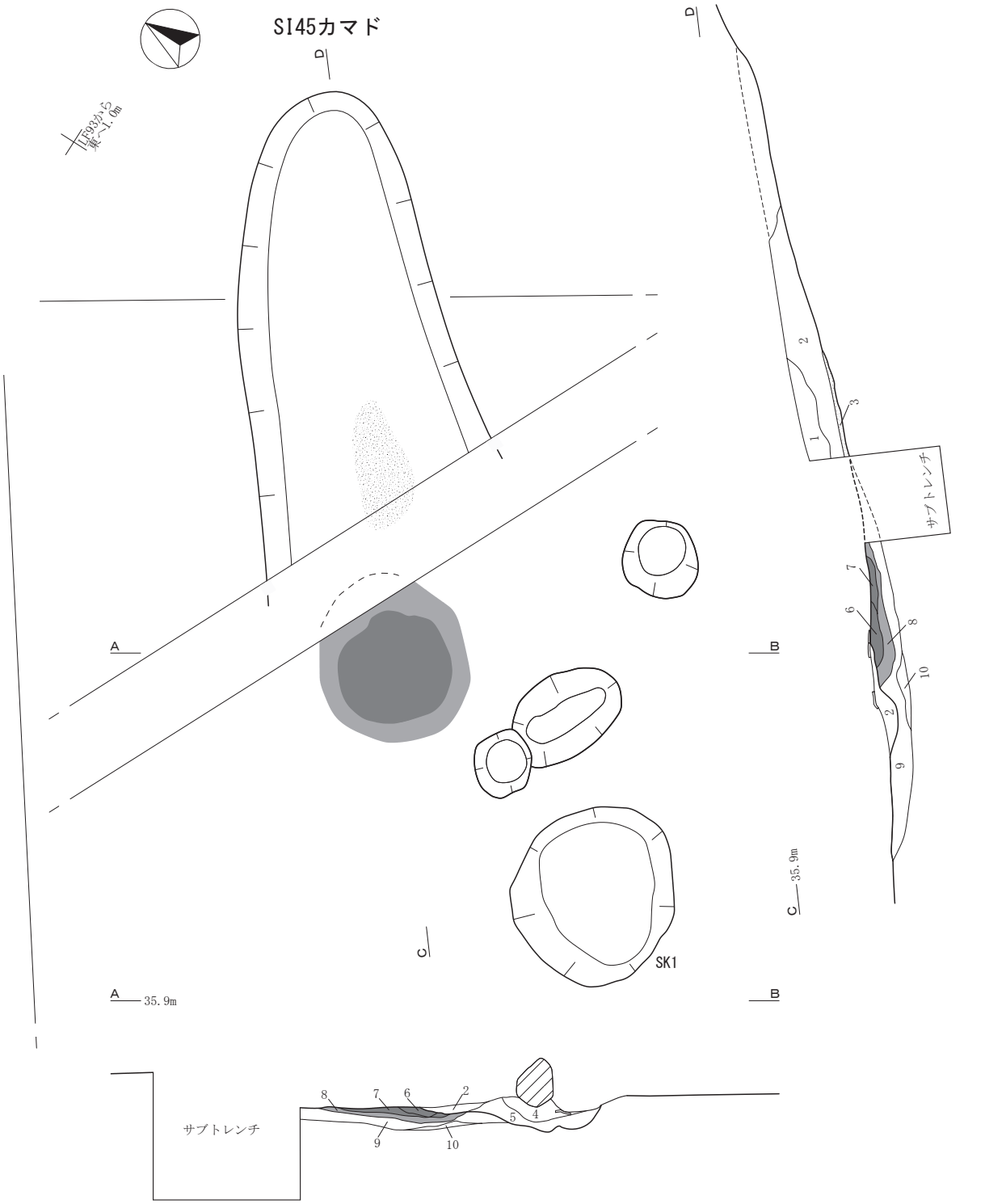
第18図　SI14カマド残存状況



SI45-P1
1　黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性弱 硬度弱～中 径５～10mm 地山土塊 3% 径１～５mm 炭化物粒 1%含む 柱痕跡
2　暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性弱 硬度中 黒色土粒斑状に含む 柱痕跡
3　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 硬度中 径５～20mm 地山土塊 10%含む　裏込め土
4　褐色シルト質粘土(10YR4/4) 粘性弱 硬度中～強 暗褐色土粒を 10%含む　裏込め土
SI45-P2
1　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 硬度弱～中 径５～10mm 地山土塊 2% 径１～５mm 炭化物粒 1%含む 柱材抜き取り後の埋め戻し土
2　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 硬度中～強 径 10～20mm 地山土塊 7%含む　裏込め土
3　褐色シルト質粘土(10YR4/4) 粘性弱 硬度中～強 暗褐色土粒を 10%含む　裏込め土
SI45-P3
1　褐色砂質シルト(7.5YR4/4) 粘性弱 硬度弱～中 径 5mm 地山土塊 5%含む　土師器片出土 柱材抜き取り後の埋め戻し土
SI45-P4
1　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 硬度弱～中 径５～10mm 地山土塊 2% 径１～５mm 炭化物粒 1%含む 柱材抜き取り後の埋め戻し土
SI45-P5
1　暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性弱 硬度中 径５～10mm 地山土塊 2% 径１～５mm 炭化物粒 1%含む 底面付近に土器片あり 柱材抜き取り後の埋め戻し土
2　褐色シルト質粘土(10YR4/4) 粘性弱 硬度中～強 径 10～20mm 地山土塊 5%含む　裏込め土
SI45-P6
1　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性弱 硬度中 径５～20mm 地山土塊 7% 径１～10mm 炭化物粒 2%含む 柱材抜き取り後の埋め戻し土
2　褐色シルト質粘土(10YR4/4) 粘性弱 硬度中～強 径 10～20mm 地山土塊 20%含む　裏込め土

0　(S=1/40)　2m

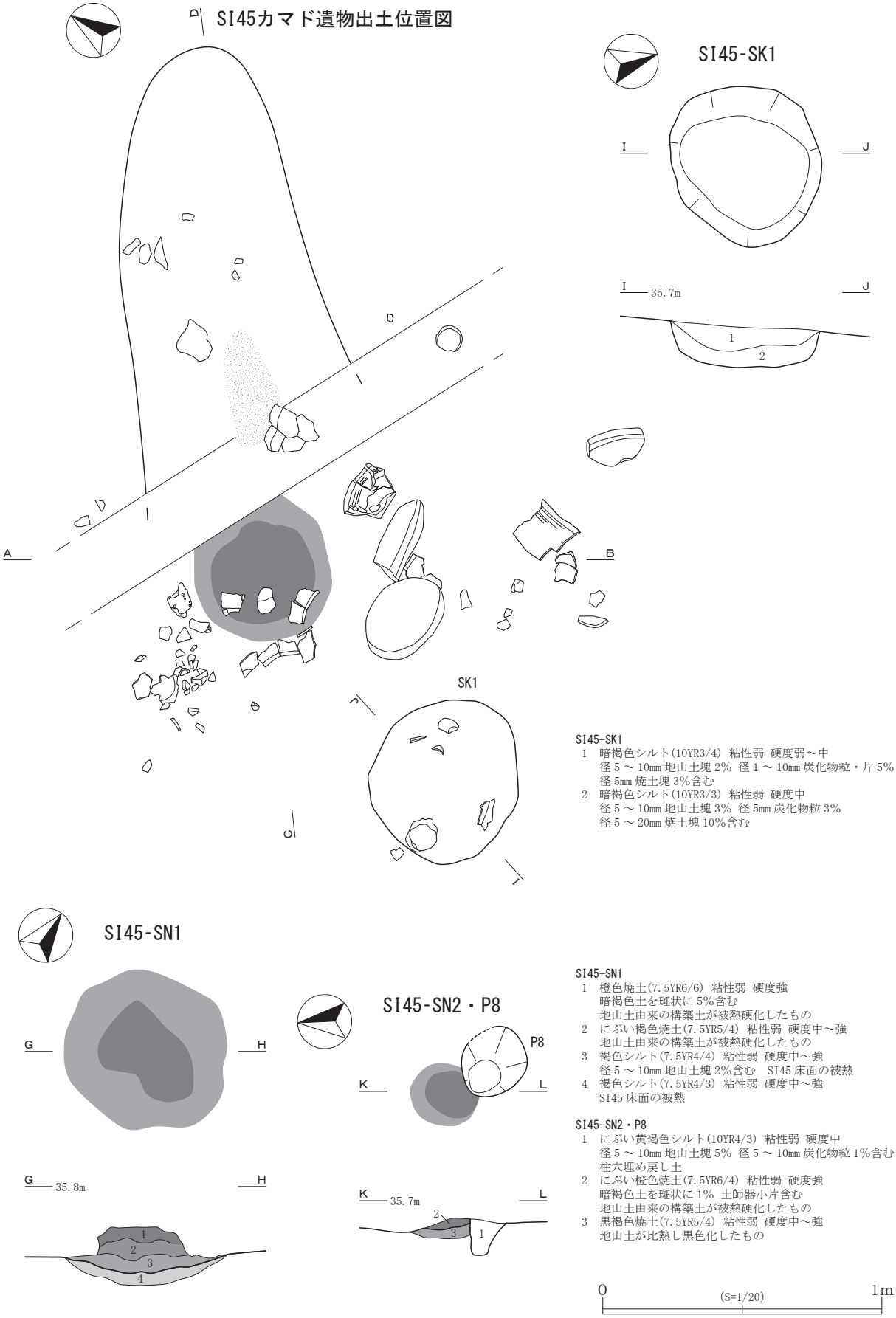
第19図　SI45



SI45-カマド
1　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱～中 硬度中 径5～20mm地山土塊10% 径1～10mm炭化物粒1% 住居跡埋土
2　暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性弱～中 硬度中 径5～20mm地山土塊3% 径1～10mm炭化物粒3% 土師器小片含む　住居跡埋土
3　黒色炭化物(10YR1.7/1) 粘性中 硬度弱 径1～5mm地山土塊2%含む 粒状の炭化物の層　煙道部底面に堆積した煤に由来
4　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 硬度中～強 径1～10mm炭化物粒3% 土師器小片含む　カマド構築土由来
5　褐色シルト質粘土(10YR4/4) 粘性弱 硬度中～強 暗褐色土を斑状に1%含む カマド構築土由来
6　にぶい赤褐色焼土(5YR5/4) 粘性弱 硬度強 暗褐色土を斑状に1%　カマド燃焼(火床)面
7　赤褐色焼土(5YR4/6) 粘性弱 硬度中～強 カマド燃焼(火床)面　1層土よりは還元が弱い
8　暗褐色焼土(7.5YR3/3) 粘性弱 硬度中～強 径5～10mm地山土塊2%含む　床面の被熱
9　褐色シルト質粘土(10YR4/6) 粘性弱 硬度中～強 暗褐色土を斑状に1% 径1～5mm炭化物粒2%含む カマド底面に貼られた土
10　褐色シルト(10YR4/4) 粘性弱 硬度中～強 暗褐色土を斑状に1%含む カマド底面に貼られた土か

0　(S=1/20)　1m

第20図　SI45カマド完掘図

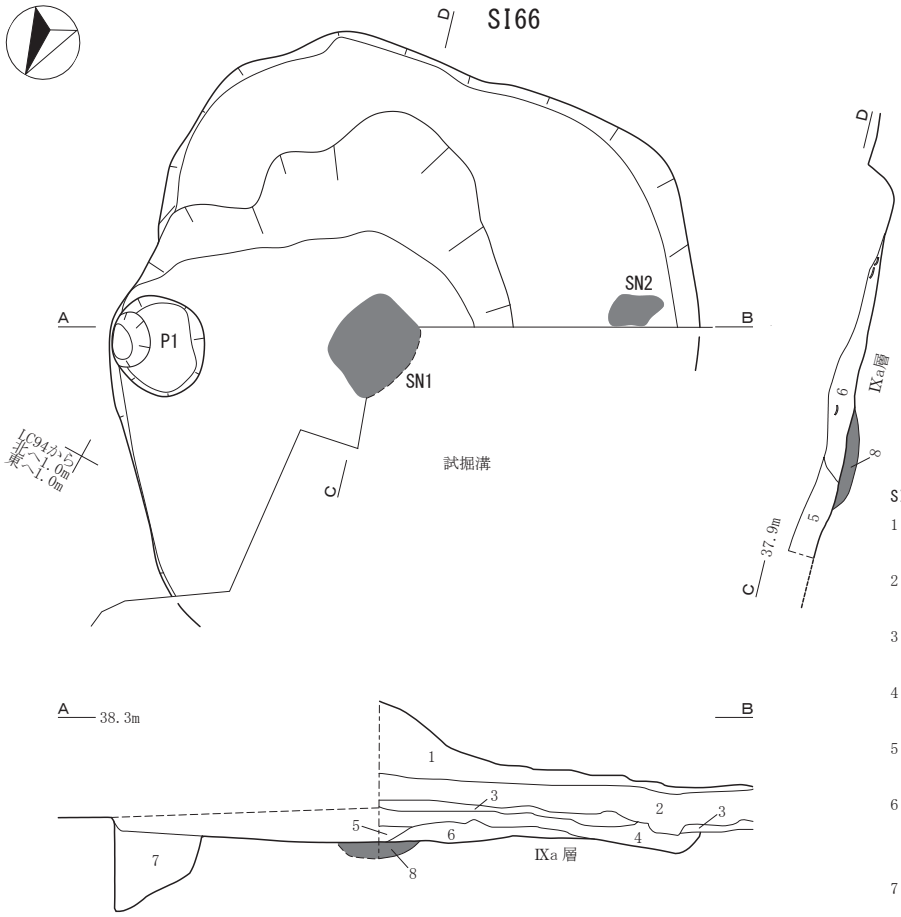


SI45-SK1
1　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 硬度弱～中
　径５～10mm 地山土塊 2% 径１～10mm 炭化物粒・片 5%
　径 5mm 焼土塊 3%含む
2　暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性弱 硬度中
　径５～10mm 地山土塊 3% 径 5mm 炭化物粒 3%
　径５～20mm 焼土塊 10%含む

SI45-SN1
1　橙色焼土(7.5YR6/6) 粘性弱 硬度強
　暗褐色土を斑状に 5%含む
　地山土由来の構築土が被熱硬化したもの
2　にぶい褐色焼土(7.5YR5/4) 粘性弱 硬度中～強
　地山土由来の構築土が被熱硬化したもの
3　褐色シルト(7.5YR4/4) 粘性弱 硬度中～強
　径５～10mm 地山土塊 2%含む　SI45 床面の被熱
4　褐色シルト(7.5YR4/3) 粘性弱 硬度中～強
　SI45 床面の被熱

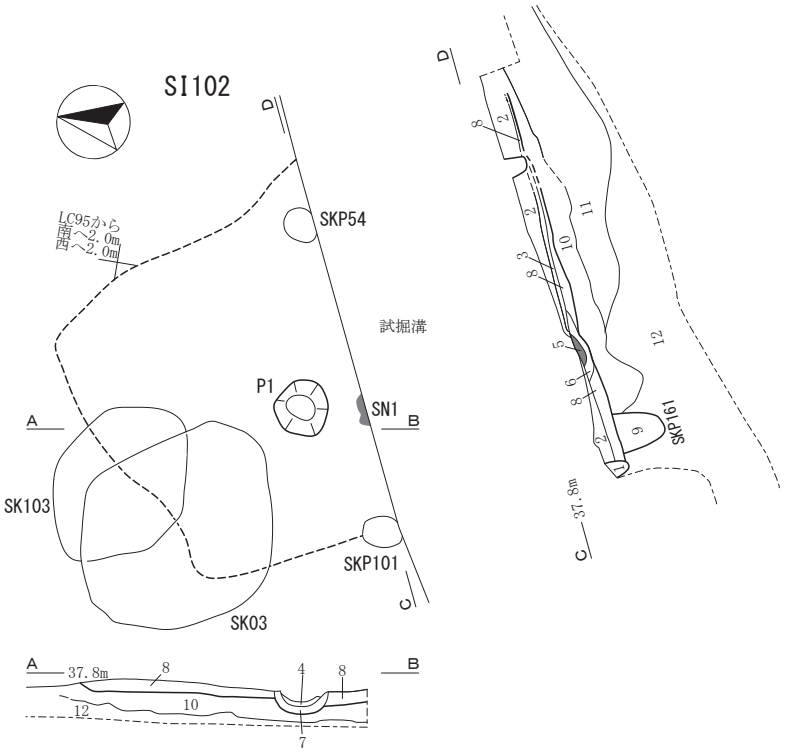
SI45-SN2・P8
1　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性弱 硬度中
　径５～10mm 地山土塊 5% 径５～10mm 炭化物粒 1%含む
　柱穴埋め戻し土
2　にぶい橙色焼土(7.5YR6/4) 粘性弱 硬度強
　暗褐色土を斑状に 1% 土師器小片含む
　地山土由来の構築土が被熱硬化したもの
3　黒褐色焼土(7.5YR5/4) 粘性弱 硬度中～強
　地山土が比熱し黒色化したもの

第21図　SI45遺物出土位置図・SK1・SN1・SN2



SI66

1　暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性弱
　硬度弱　基本層序Ⅰ層
2　暗褐色シルト(10YR3/4)　粘性中
　硬度強　基本層序Ⅰ層相当
3　にぶい黄褐色シルト(10YR4/6)　粘性弱
　硬度強　基本層序Ⅴ層
4　褐色シルト(7.5YR4/4)　粘性弱　硬度強
　径１～10mm 炭化物少量
5　褐色砂質シルト(10YR4/4)　径５～10mm
　円礫少量　粘性弱　硬度弱
6　暗褐色シルト(10YR3/4)
　径 5mm 黒褐色シルト(7.5YR3/2) 粒少量
　径５～50mm 焼土塊多量　粘性弱　硬度弱
7　暗褐色砂質シルト(7.5YR3/4)　粘性弱
　硬度弱　P1 柱抜き取り埋め戻し
8　赤褐色砂質シルト(2.5YR3/4)　粘性弱
　硬度弱　IXa 層焼土化範囲

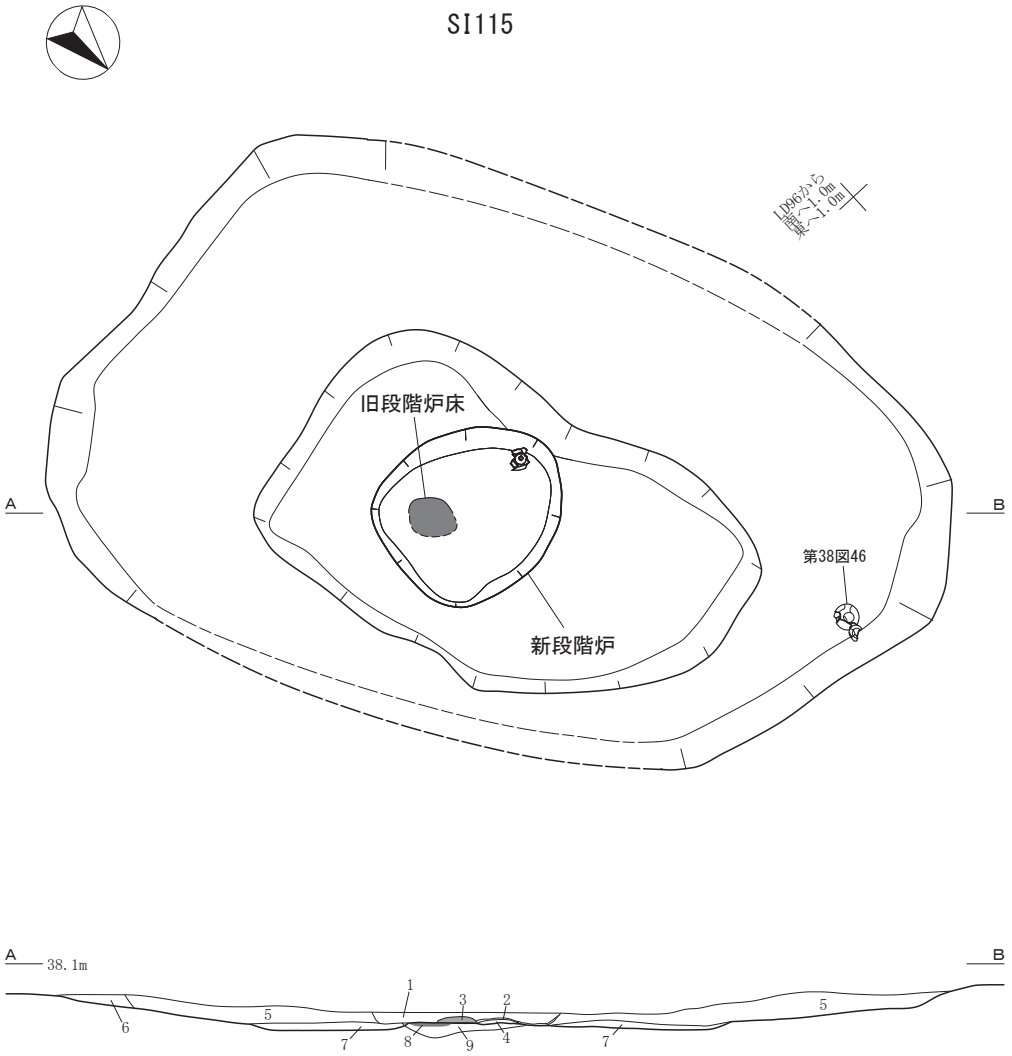


SI102

1　にぶい黄褐色粘土(10YR6/4)　褐色砂質シルト
　(7.5YR4/4) 少量　粘性弱　硬度弱　SKP101 覆土
2　褐色砂質シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度弱
3　暗褐色砂質シルト(10YR3/3)　粘性弱　硬度弱
　有機物起源か
4　黒褐色シルト(10YR2/3)　粘性弱　硬度弱
　P1 底面粘土貼り付け層直上炭化物起源層
5　にぶい赤褐色粘土(5YR4/4)　粘性弱　硬度弱
　SF1 炉床粘土貼り付け層焼土化範囲
6　にぶい黄橙色粘土(10YR6/4)　粘性弱　硬度弱
　SN1 炉床粘土貼り付け層
7　褐色砂質シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度弱
　径１～10mm にぶい黄褐色粘土塊(10YR6/4) 多量
　P1 掘り込み底面粘土貼り付け層
8　褐色砂質シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度弱
　径１～10mm にぶい黄褐色粘土塊(10YR6/4)少量
　貼床層
9　褐色砂質シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度弱
　SKP161 覆土
10　褐色砂質シルト(10YR4/4)　小礫微量　粘性弱
　硬度中　炭化物微量　基本層序IXa 層
11　褐色砂質シルト(10YR4/4)　粘性弱　硬度中
　炭化物微量　基本層序IXa 層
12　褐色砂質シルト(7/5YR4/4)　粘性弱　硬度強
　基本層序IXb 層

0　(S=1/40)　2m

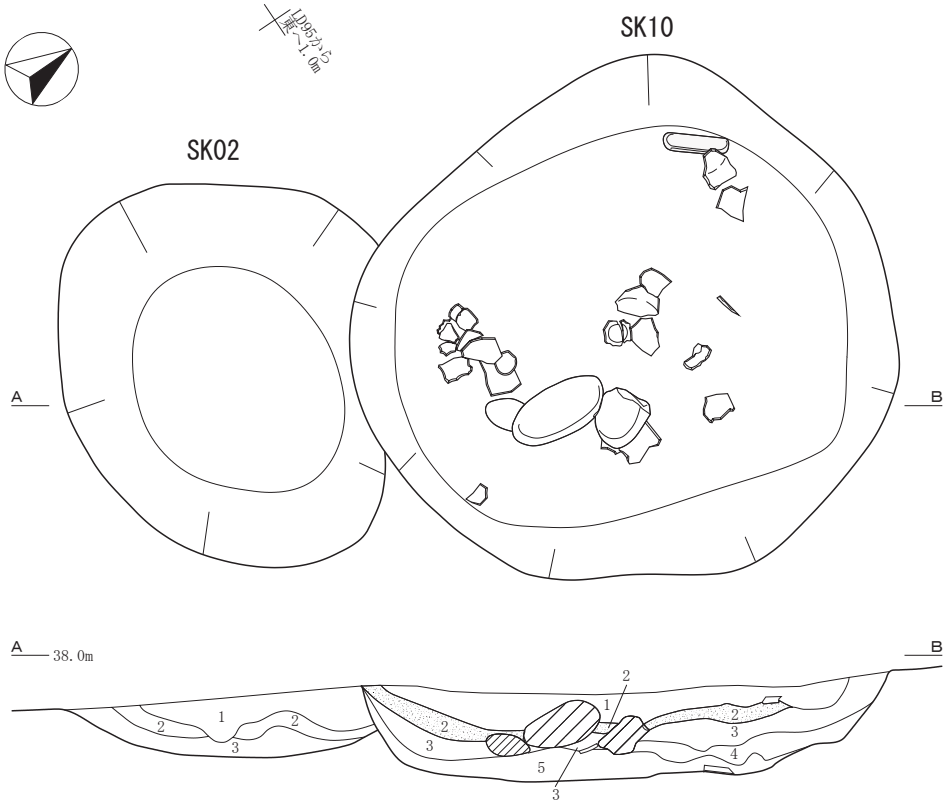
第22図　SI66・SI102



1　黒褐色シルト(10YR2/2)　径１～50㎜基盤粘土粒10%　炭化物多量　粘性弱　硬度中　新段階炉覆土
2　黒色炭化物(10YR1.7/1)　粘性弱　硬度弱　新段階炉底炭化物薄層
3　明褐色粘土(7.5YR5/8)　粘性弱　硬度強　新段階炉内焼土塊
4　にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)　粘性弱　硬度中　新段階炉床層
5　にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)　褐色砂質粘土(10YR3/3)20%　炭化物多量　粘性弱　硬度中　赤焼土器破片含む　新段階貼床層
6　褐色砂質粘土(10YR4/4)　粘性弱　硬度弱　新段階周辺部貼床層
7　にぶい黄橙色粘土(10YR6/4)　褐色砂質粘土(10YR3/3)10%　粘性中　硬度強　旧段階貼床層
8　明赤褐色粘土(5YR5/6)　粘性弱　硬度強　旧段階炉床焼土化範囲
9　暗褐色粘土(10YR3/3)　粘性弱　硬度中　旧段階炉床被熱痕跡範囲

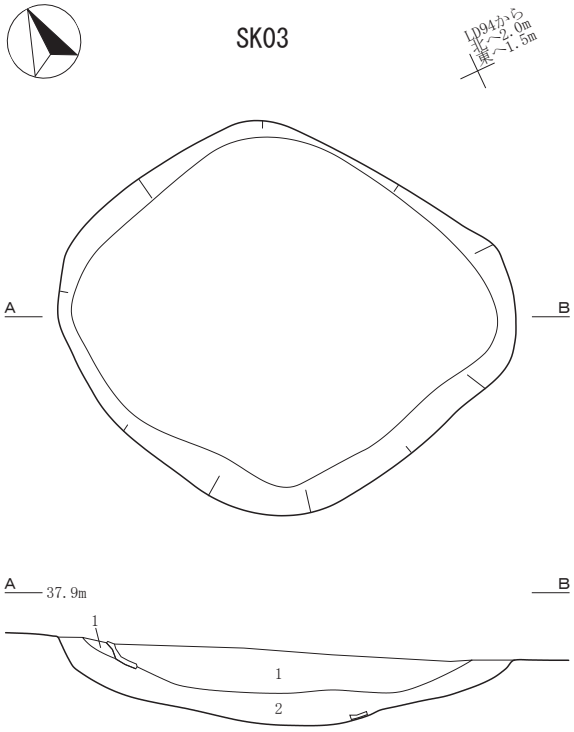
0　(S=1/40)　2m

第23図　SI115



SK02
1　暗褐色シルト質粘土(10YR3/3)　粘性弱　硬度強
　径１～20㎜ 地山黄色土塊径 1%　径１～20㎜ 炭化物 1%　土師器片少量
2　基盤黄色土塊層　粘性弱　硬度強　１層土斑状 5% 土師器片少量
3　にぶい黄褐色シルト質粘土(10YR4/3)　粘性弱　硬度強
　径１～5㎜ 炭化物 1%　径１～10㎜ 基盤黄色土塊 2%　土師器片少量

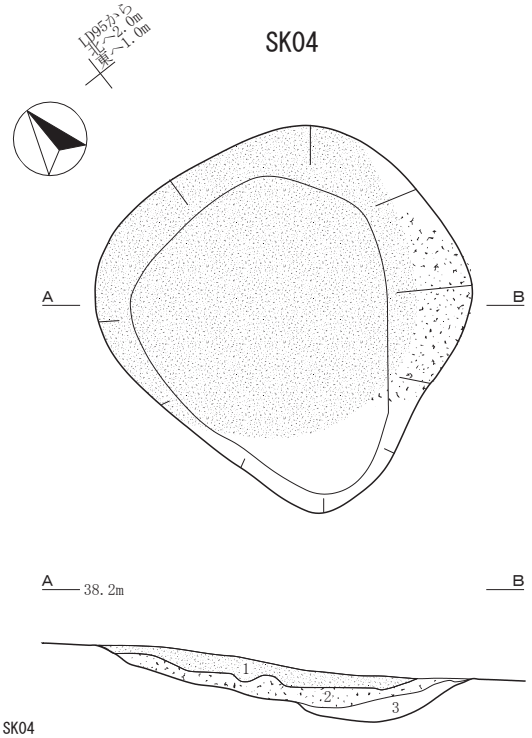
SK10
1　暗褐色シルト質粘土(10YR3/4)　粘性弱　硬度強　径１～3㎜ 炭化物 1% 未満
　土師器片少量　径１～3㎜ 基盤黄色土粒 1%
2　炭化物　１層土斑状 3% 径１～3㎜ 基盤黄色土粒 1%
3　黒褐色シルト質粘土(10YR3/2) 粘性弱　硬度強　径１～3㎜ 炭化物 1% 未満
　土師器片少量　径１～30㎜ 基盤黄色土粒 7%
4　黒褐色シルト質粘土(10YR3/１) 粘性弱　硬度強
　径１～50㎜ 基盤黄色土粒 15%
5　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 質粘土　粘性弱　硬度強
　径１～20㎜ 明褐色土塊(7.5YR5/8)3%(地山塊の酸化)



SK03
1　暗褐色シルト質粘土(10YR3/4) 粘性やや弱　硬度強　径５～20㎜ 炭化物 2%
　径５～10㎜ 基盤黄色土塊 10%　径５～10㎜ 基盤青灰塊 2%　土師器片少量
2　暗褐色シルト質粘土(10YR3/4)　粘性中　硬度強　径1～5㎜炭化物1%
　径1～5㎜基盤黄色土塊1%　土師器片少量

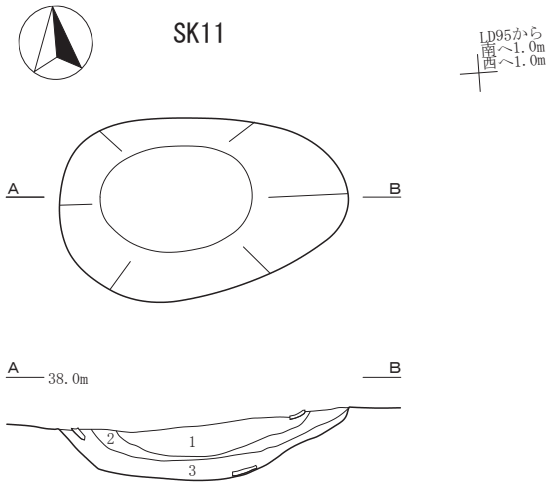
0　(S=1/20)　1m

第24図　SK02・03・10



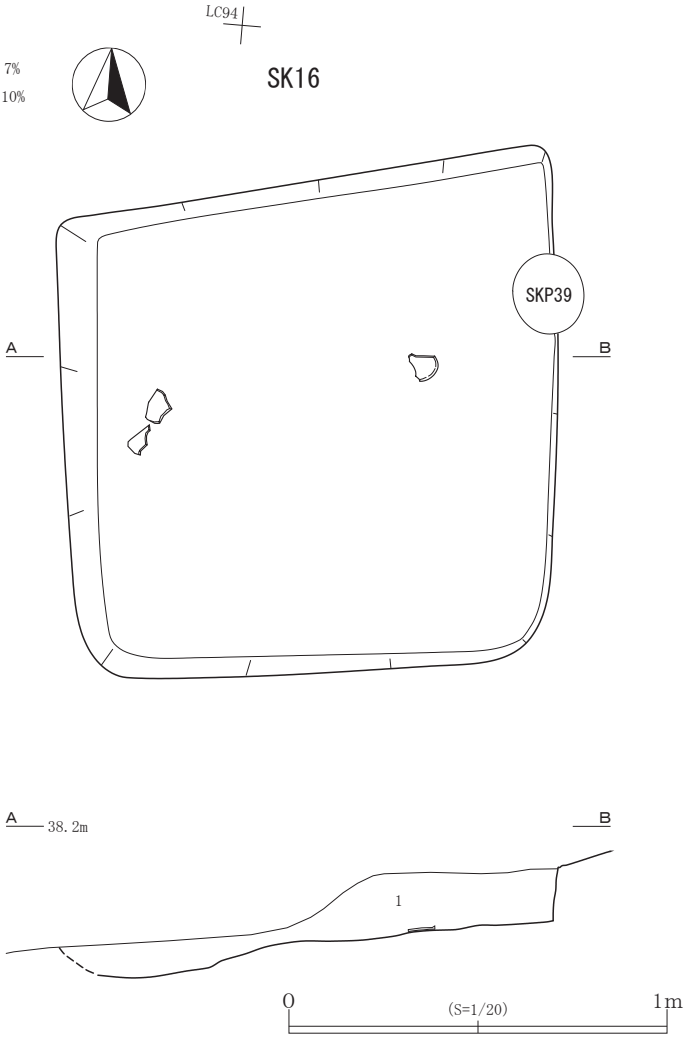
SK04

1　暗褐色シルト質粘土(10YR3/4)　粘性やや弱　硬度強
　径１～20mm 炭化物 30%　径５～10mm 基盤黄色土塊 2%
　径５～10mm 基盤青灰土塊 2%　黒褐色シルト質粘土(7.5YR2/2)斑状 7%
2　褐色シルト質粘土(10YR4/4)　粘性中　硬度強　径１～10mm 炭化物 10%
　径 10～20mm 基盤黄色土塊 2%　径５～30mm 基盤青灰土塊 3%
3　褐色シルト質粘土(10YR4/6)　粘性やや強　硬度強
　径１～5mm 基盤黄色土塊 1%　径１～7mm 基盤青灰土塊 1%



SK11

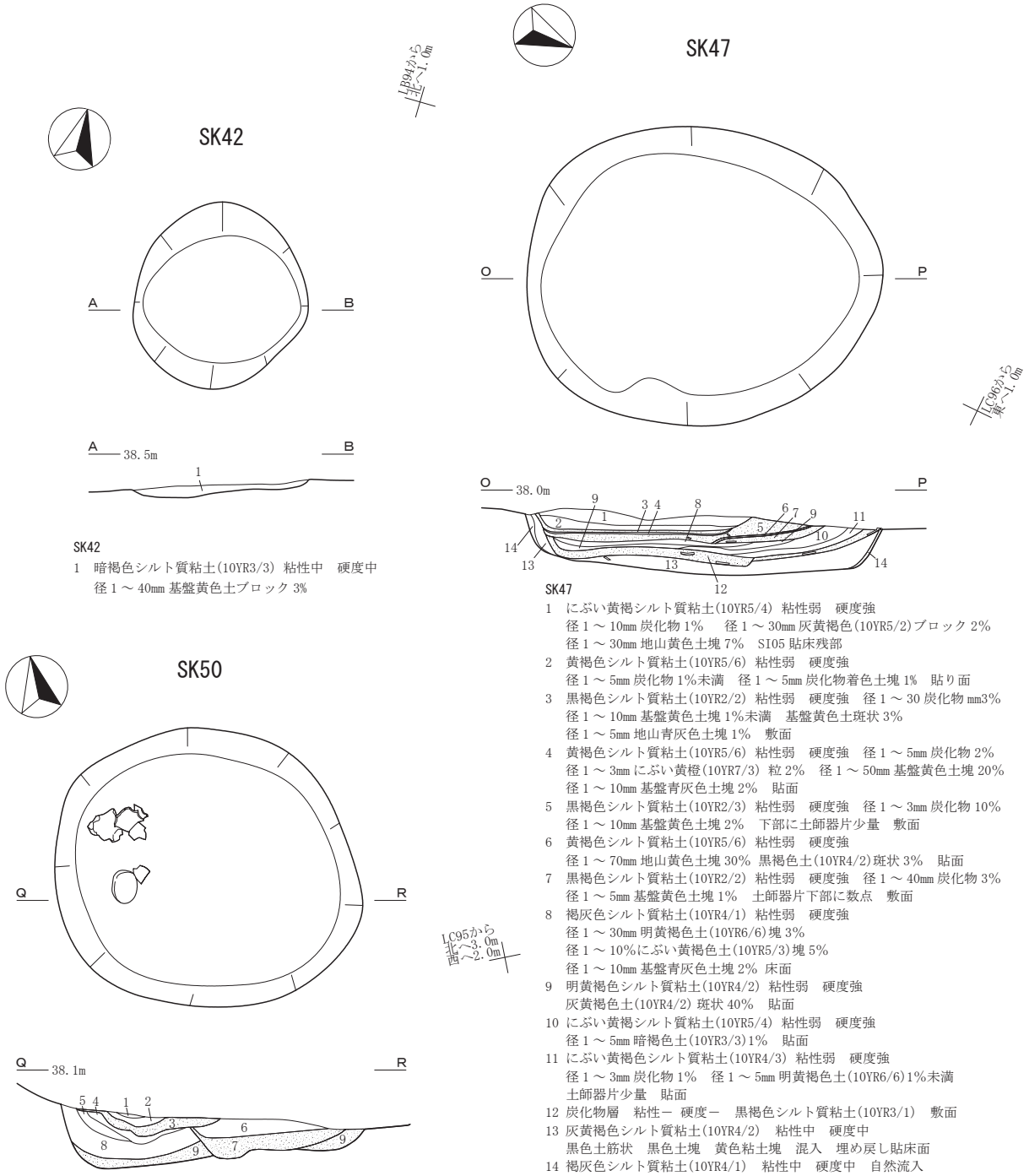
1　暗褐色シルト質粘土(10YR3/3)　粘性弱　硬度強　径１～10mm 炭化物 1%
　径１～10mm 基盤黄色土塊 2%　径１～5mm 基盤青灰色土塊 2%　土師器片少量
2　基盤黄色土塊　粘性弱　硬度強　径５～10mm 炭化物 1%
　径 10～40mm 基盤黄色土塊 3%
3　黒褐色シルト質粘土(10YR2/3)　粘性やや弱　硬度強　径１～20mm 炭化物 2%
　径１～20mm 基盤黄色土塊 1%　径１～30mm 明赤褐色土塊(5YR5/8)
　土師器片少量



SK16

1　暗褐色質シルト粘土(7.5YR3/4)　粘性弱　硬度やや弱
　径１～7mm 基盤黄色土塊 1%　植物遺体 1%

第25図　SK04・11・16



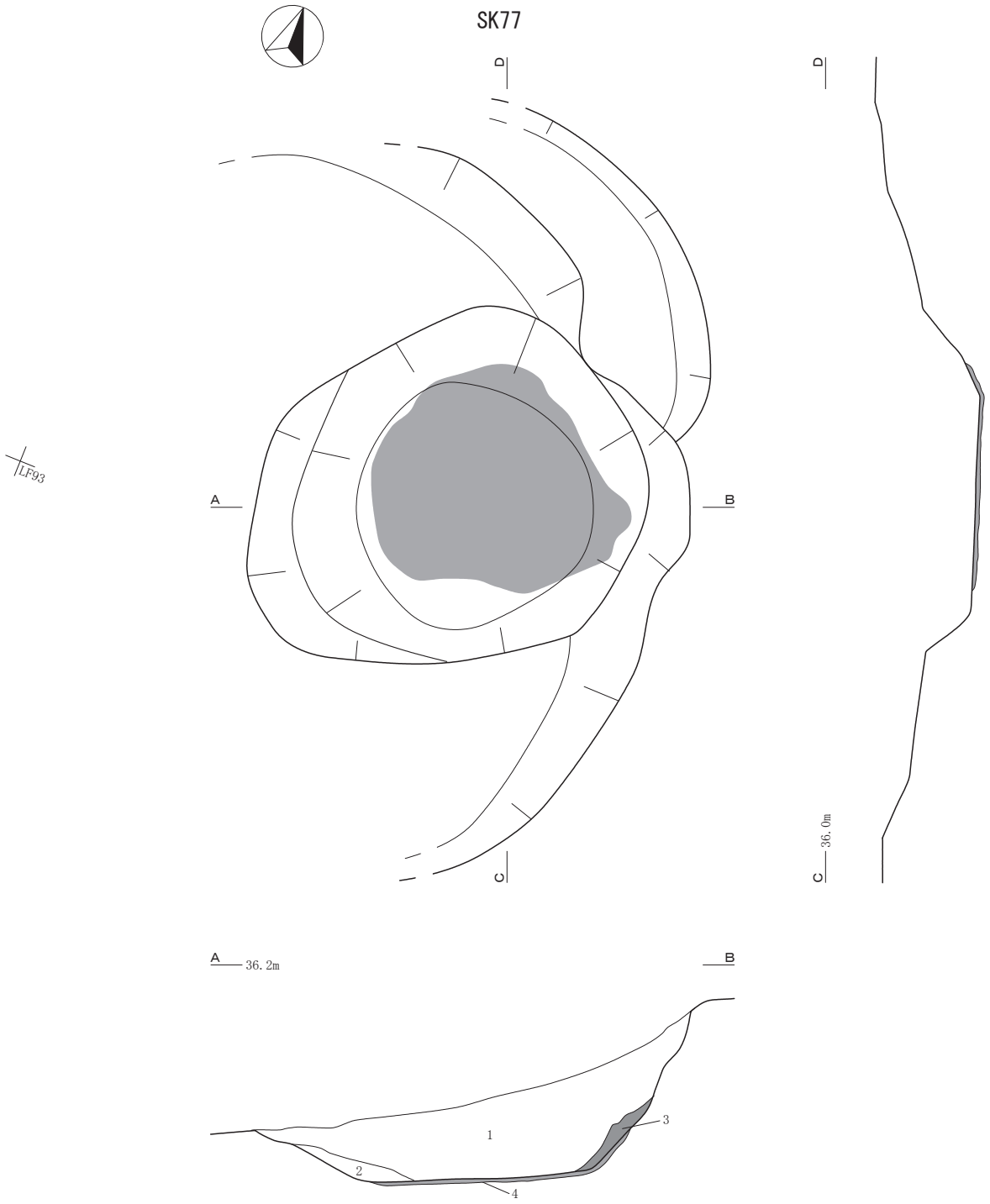
SK42
1　暗褐色シルト質粘土(10YR3/3) 粘性中　硬度中
　径１～40mm 基盤黄色土ブロック 3%

SK47
1　にぶい黄褐シルト質粘土(10YR5/4) 粘性弱　硬度強
　径１～10mm 炭化物 1%　　径１～30mm 灰黄褐色(10YR5/2)ブロック 2%
　径１～30mm 地山黄色土塊 7%　SI05 貼床残部
2　黄褐色シルト質粘土(10YR5/6) 粘性弱　硬度強
　径１～5mm 炭化物 1%未満　径１～5mm 炭化物着色土塊 1%　貼り面
3　黒褐色シルト質粘土(10YR2/2) 粘性弱　硬度強　径１～30 炭化物 mm3%
　径１～10mm 基盤黄色土塊 1%未満　基盤黄色土斑状 3%
　径１～5mm 地山青灰色土塊 1%　敷面
4　黄褐色シルト質粘土(10YR5/6) 粘性弱　硬度強　径１～5mm 炭化物 2%
　径１～3mm にぶい黄橙(10YR7/3) 粒 2%　径１～50mm 基盤黄色土塊 20%
　径１～10mm 基盤青灰色土塊 2%　貼面
5　黒褐色シルト質粘土(10YR2/3) 粘性弱　硬度強　径１～3mm 炭化物 10%
　径１～10mm 基盤黄色土塊 2%　下部に土師器片少量　敷面
6　黄褐色シルト質粘土(10YR5/6) 粘性弱　硬度強
　径１～70mm 地山黄色土塊 30%　黒褐色土(10YR4/2)斑状 3%　貼面
7　黒褐色シルト質粘土(10YR2/2) 粘性弱　硬度強　径１～40mm 炭化物 3%
　径１～5mm 基盤黄色土塊 1%　土師器片下部に数点　敷面
8　褐灰色シルト質粘土(10YR4/1) 粘性弱　硬度強
　径１～30mm 明黄褐色土(10YR6/6)塊 3%
　径１～10%にぶい黄褐色土(10YR5/3)塊 5%
　径１～10mm 基盤青灰色土塊 2%　床面
9　明黄褐色シルト質粘土(10YR4/2) 粘性弱　硬度強
　灰黄褐色土(10YR4/2) 斑状 40%　貼面
10 にぶい黄褐シルト質粘土(10YR5/4) 粘性弱　硬度強
　径１～5mm 暗褐色土(10YR3/3)1%　貼面
11 にぶい黄褐色シルト質粘土(10YR4/3) 粘性弱　硬度強
　径１～3mm 炭化物 1%　径１～5mm 明黄褐色土(10YR6/6)1%未満
　土師器片少量　貼面
12 炭化物層　粘性－ 硬度－　黒褐色シルト質粘土(10YR3/1)　敷面
13 灰黄褐色シルト質粘土(10YR4/2)　粘性中　硬度中
　黒色土筋状　黒色土塊　黄色粘土塊　混入　埋め戻し貼床面
14 褐灰色シルト質粘土(10YR4/1)　粘性中　硬度中　自然流入

SK50
1　黒褐色砂質シルト(10YR2/2) 粘性弱　硬質強　径１～2mm 炭化物 2%
　極暗褐色土(5YR2/4) 斑状 10%　径１～3mm 黄褐色土塊(10YR5/8)20%
2　黄褐色シルト質粘土(10YR5/6) 粘性中　硬質強　貼面
3　黒褐色シルト(10YR2/2) 粘性弱　硬質強　径１～10mm 炭化物 40%　敷面
4　黄褐色シルト質粘土(10YR5/6) 粘性弱　硬質やや弱　炭化物斑状 20%　貼面
5　黄褐色シルト質粘土(10YR5/6) 粘性弱　硬質中　径１～3mm 炭化物 2%　貼面
6　青灰色シルト質粘土(5B6/1)　粘性中　硬質強　土師器片　還元面
7　黒色シルト(10YR2/1)　粘性弱　硬質中　径１～5mm 炭化物 2%
　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 斑状 3%　敷面
8　にぶい黄褐色シルト質粘土(10YR4/3)　粘性弱　硬質強
　明赤褐色土シルト(5YR5/8) 斑状 2%　炭化物 2%　貼面
9　黒褐色シルト質粘土(10YR2/2) 粘性弱　硬質強
　黒色土(10YR2/1)斑状 30%　径１～7mm 炭化物 30%　敷面

0　(S=1/20)　1m

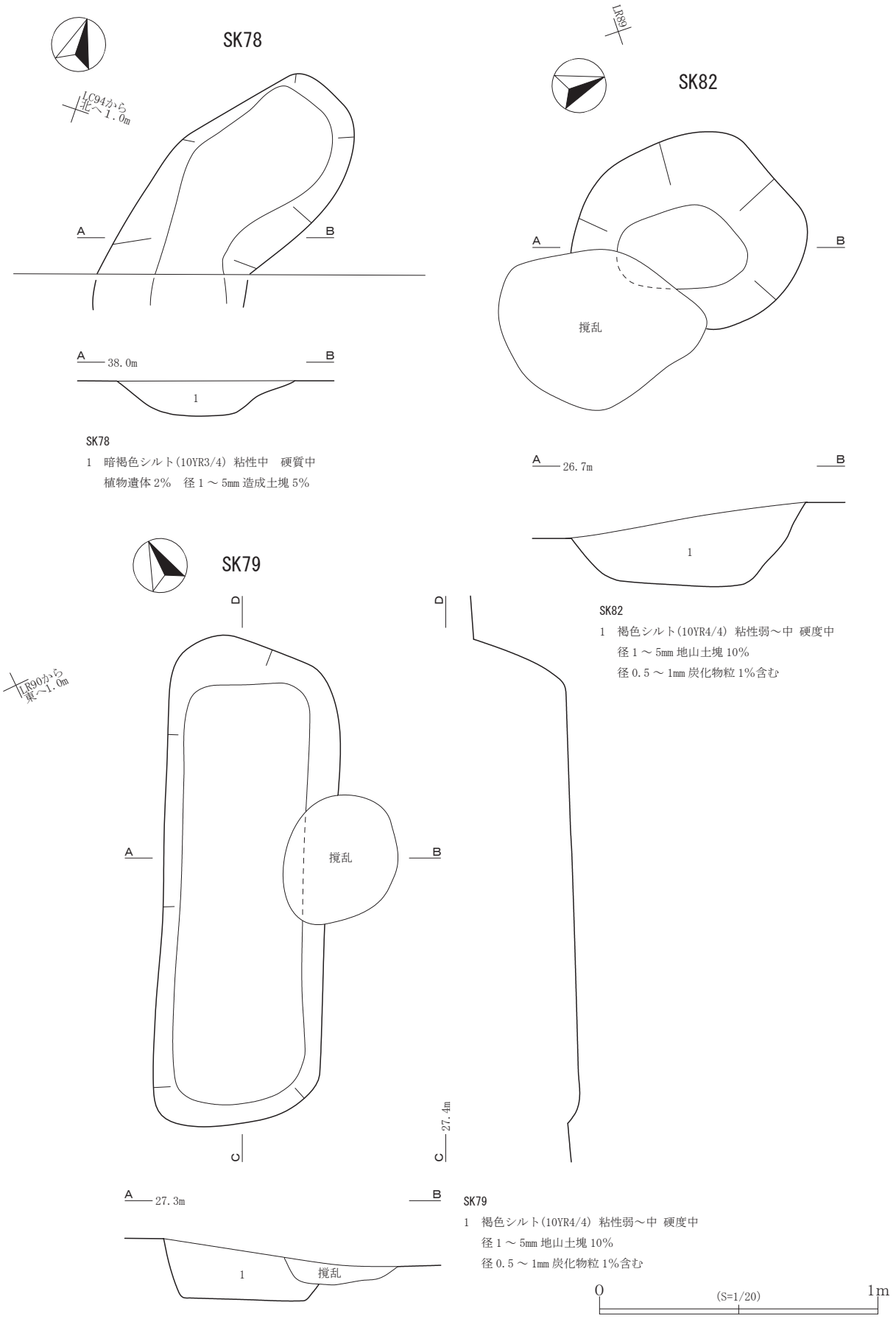
第26図　SK42・47・50



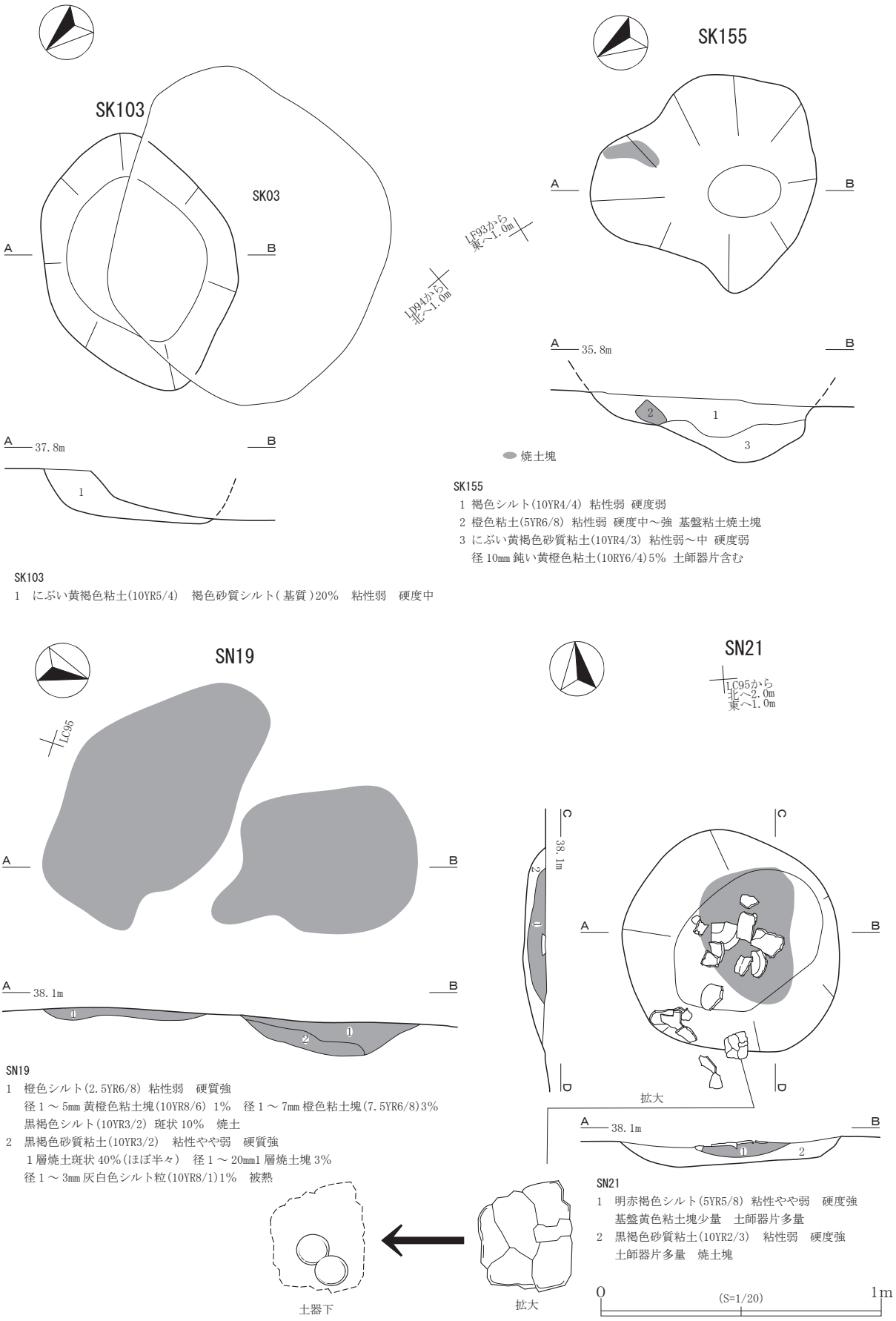
SK77
1　にぶい褐色シルト質粘土(10YR4/3) 粘性弱～中 硬度弱～中 径 10㎜ 基盤土塊 5%、径 1 ～ 5㎜ 炭化物粒 10%、土師器片含む 埋め戻しによる
2　にぶい褐色シルト質粘土(10YR4/3) 粘性弱～中 硬度弱～中 径 10㎜ 基盤土塊 10%、径 1 ～ 5㎜ 炭化物粒・片 20%含む 埋め戻しによる
3　橙色粘土(5YR6/8) 粘性弱 硬度中～強 壁面被熱部の崩落土？
4　橙色粘土(5YR6/8) 粘性弱 硬度中～強 土坑底面および壁面被熱部
※　1・2 層の差異は混入の程度であり、土坑は基本的には一括で埋め戻されている。

0　(S=1/20)　1m

第27図　SK77



第28図　SK78・79・82



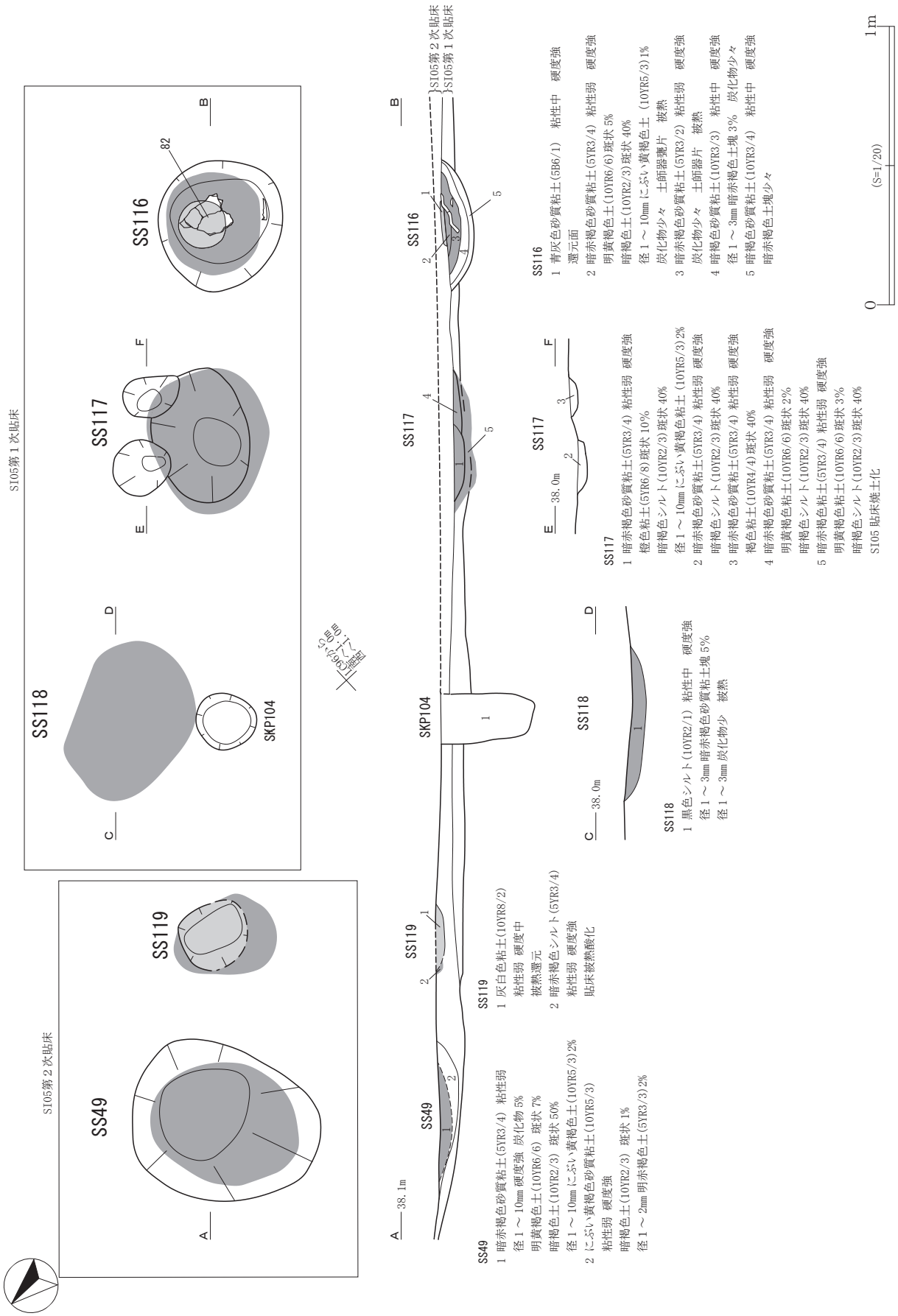
SK155
1 褐色シルト(10YR4/4) 粘性弱 硬度弱
2 橙色粘土(5YR6/8) 粘性弱 硬度中～強 基盤粘土焼土塊
3 にぶい黄褐色砂質粘土(10YR4/3) 粘性弱～中 硬度弱
径 10mm 鈍い黄橙色粘土(10RY6/4)5% 土師器片含む

SK103
1 にぶい黄褐色粘土(10YR5/4) 褐色砂質シルト(基質)20% 粘性弱 硬度中

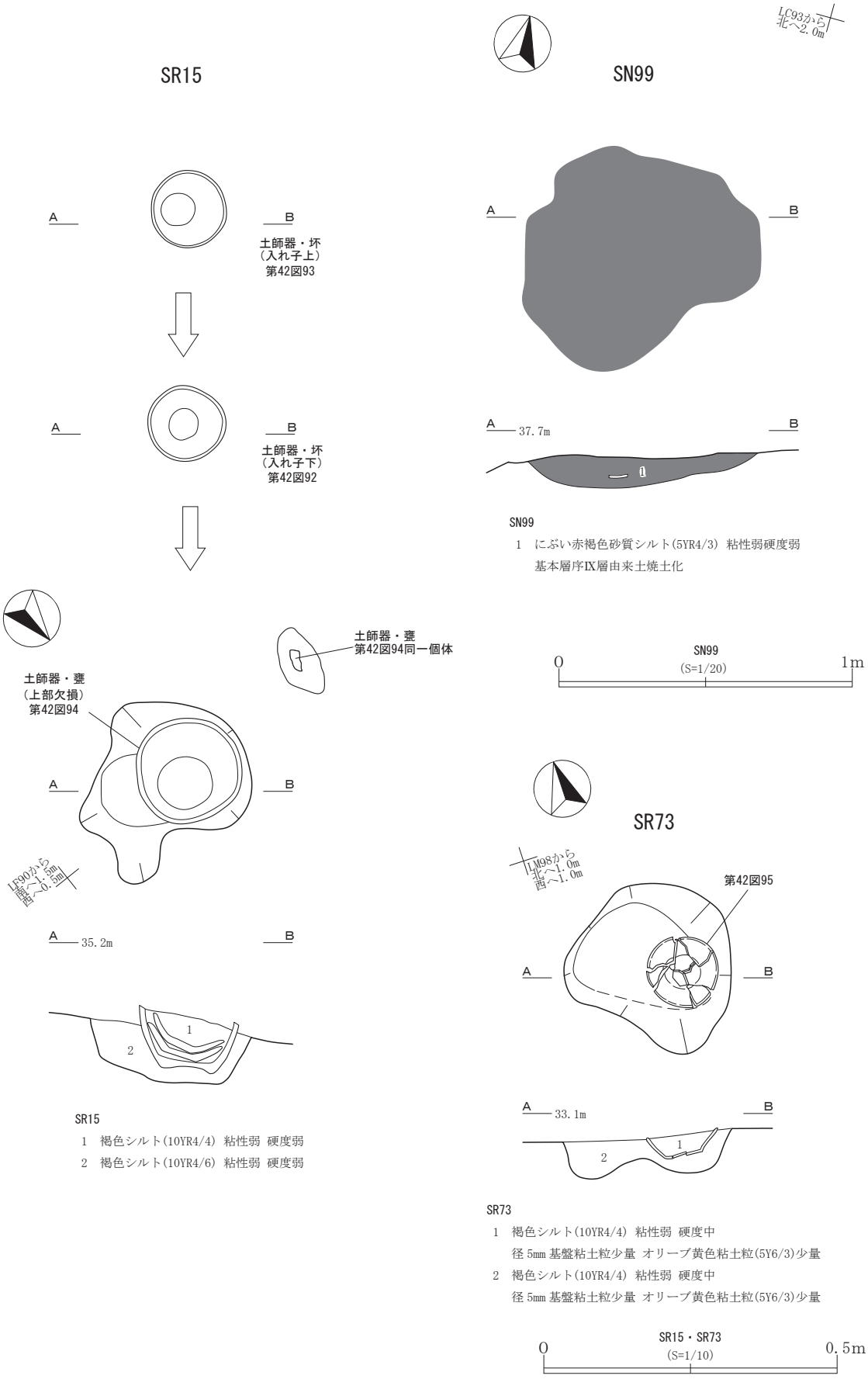
SN19
1 橙色シルト(2.5YR6/8) 粘性弱 硬質強
径１～5mm 黄橙色粘土塊(10YR8/6) 1% 径１～7mm 橙色粘土塊(7.5YR6/8)3%
黒褐色シルト(10YR3/2) 斑状 10% 焼土
2 黒褐色砂質粘土(10YR3/2) 粘性やや弱 硬質強
１層焼土斑状 40%(ほぼ半々) 径１～20mm1 層焼土塊 3%
径１～3mm 灰白色シルト粒(10YR8/1)1% 被熱

SN21
1 明赤褐色シルト(5YR5/8) 粘性やや弱 硬度強
基盤黄色粘土塊少量 土師器片多量
2 黒褐色砂質粘土(10YR2/3) 粘性弱 硬度強
土師器片多量 焼土塊

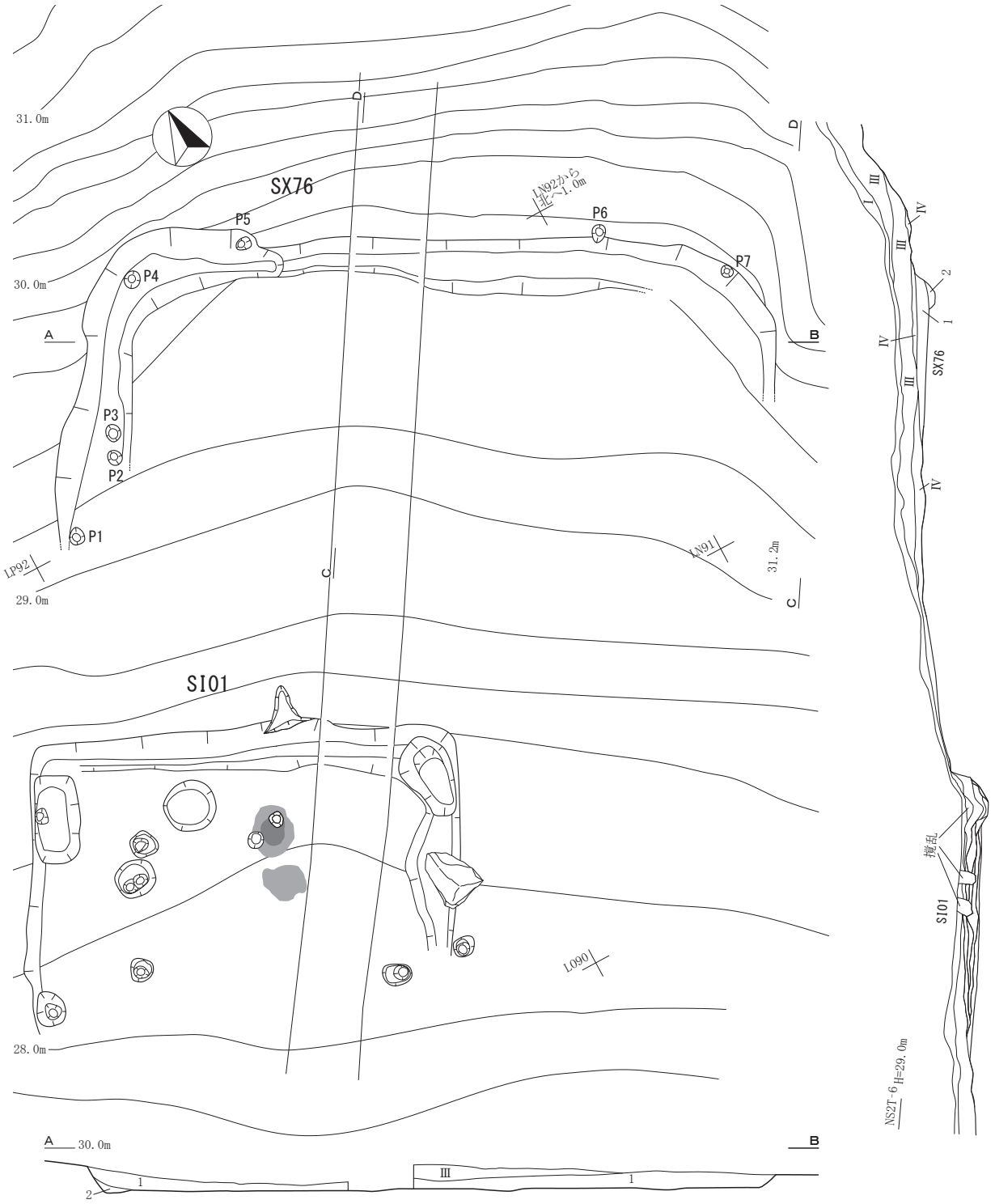
第29図　SK103・155・SN19・21



第30図　SS49・116・117・118・119



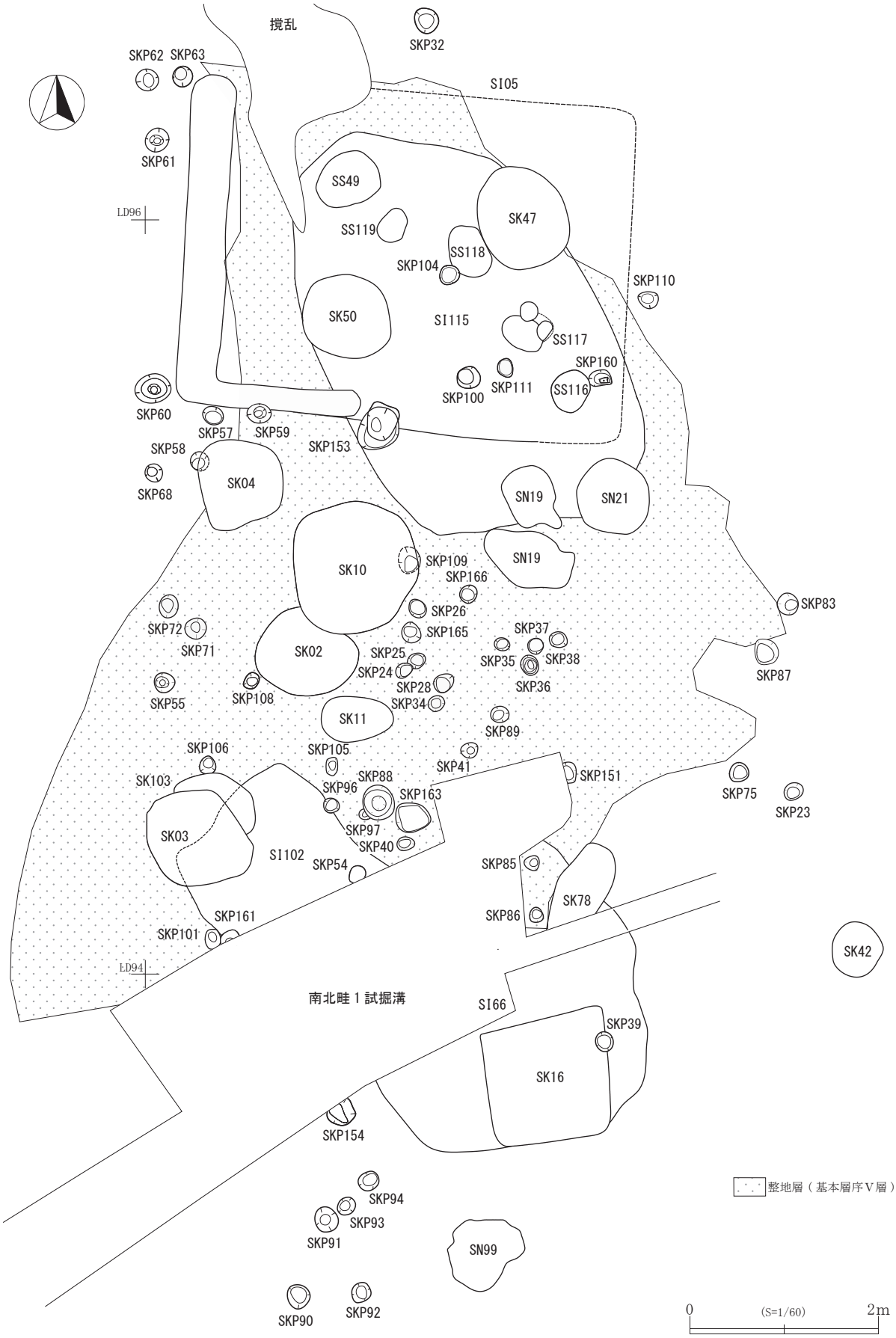
第31図　SN99・SR15・73



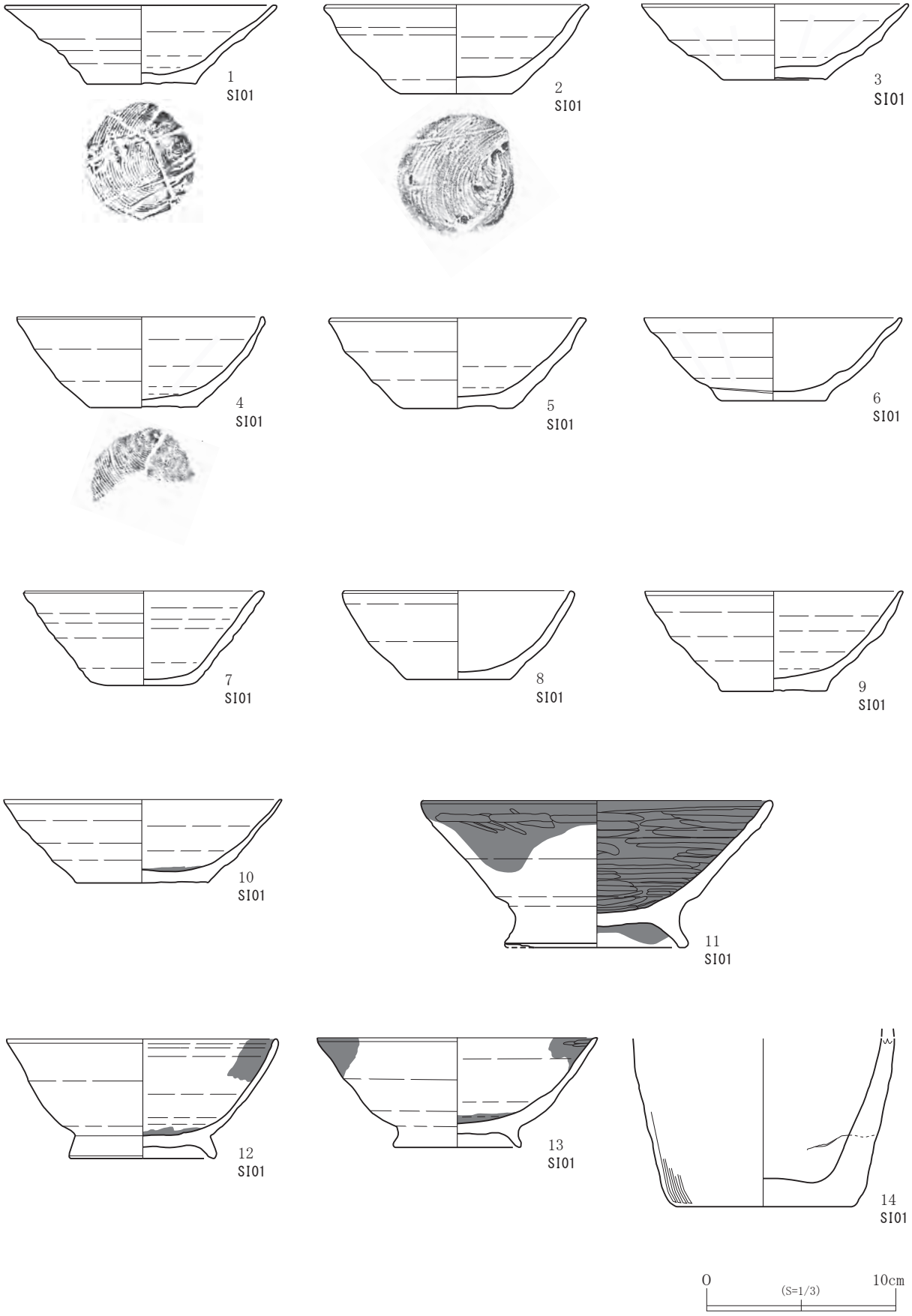
SX76
1　褐色シルト(10YR4/4) 粘性弱～中 硬度中
　径1～5mm地山土塊15% 径1～5mm酸化物粒10%含む
2　にぶい黄褐色シルト(10YR5/3) 粘性中 硬度弱
　径1～2mm地山土粒15% 径1～5mm炭化物粒1%含む
　基盤土由来　1層土に比べやや灰色

0　(S=1/80)　4m

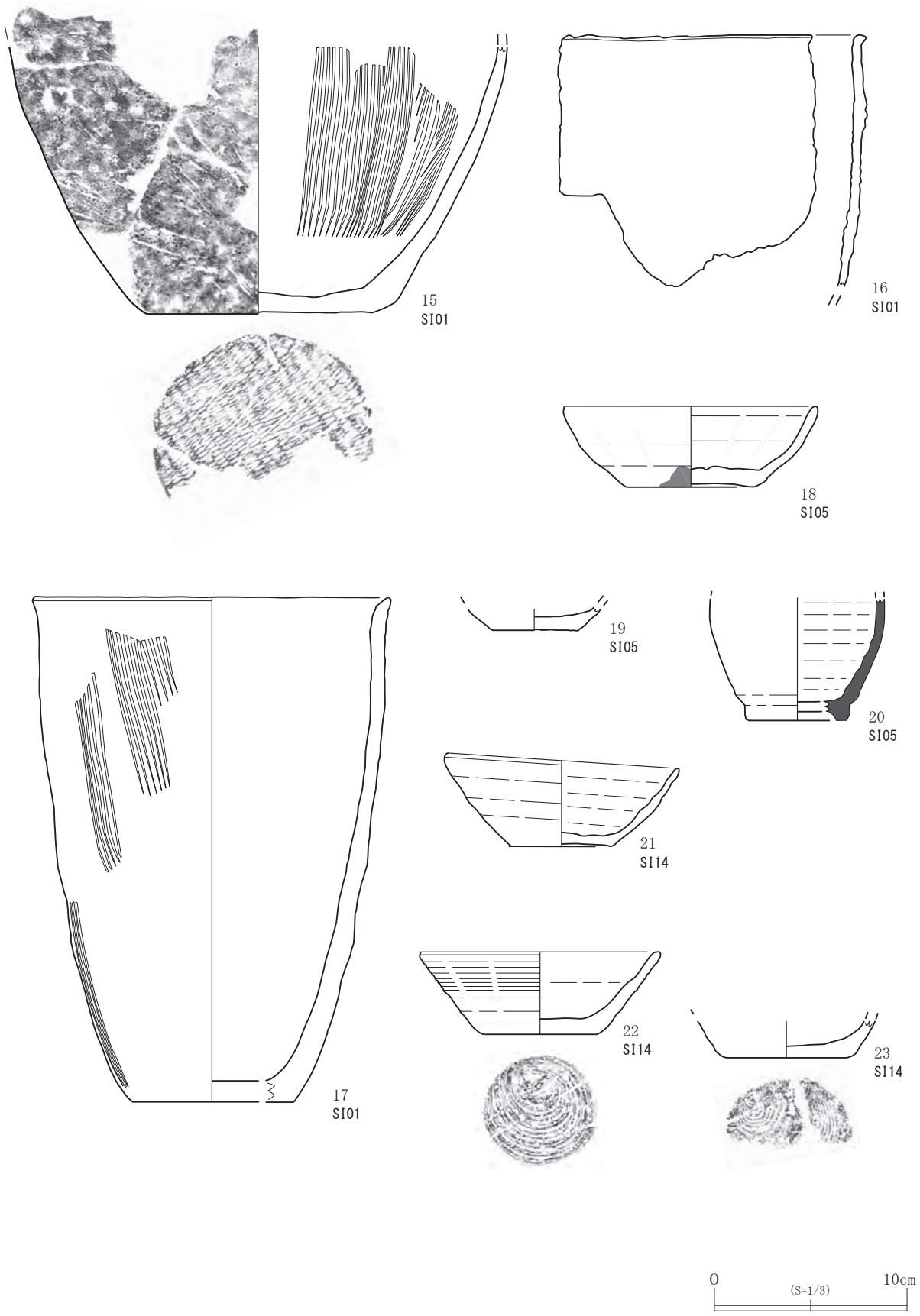
第32図　SX76・SI01位置関係図



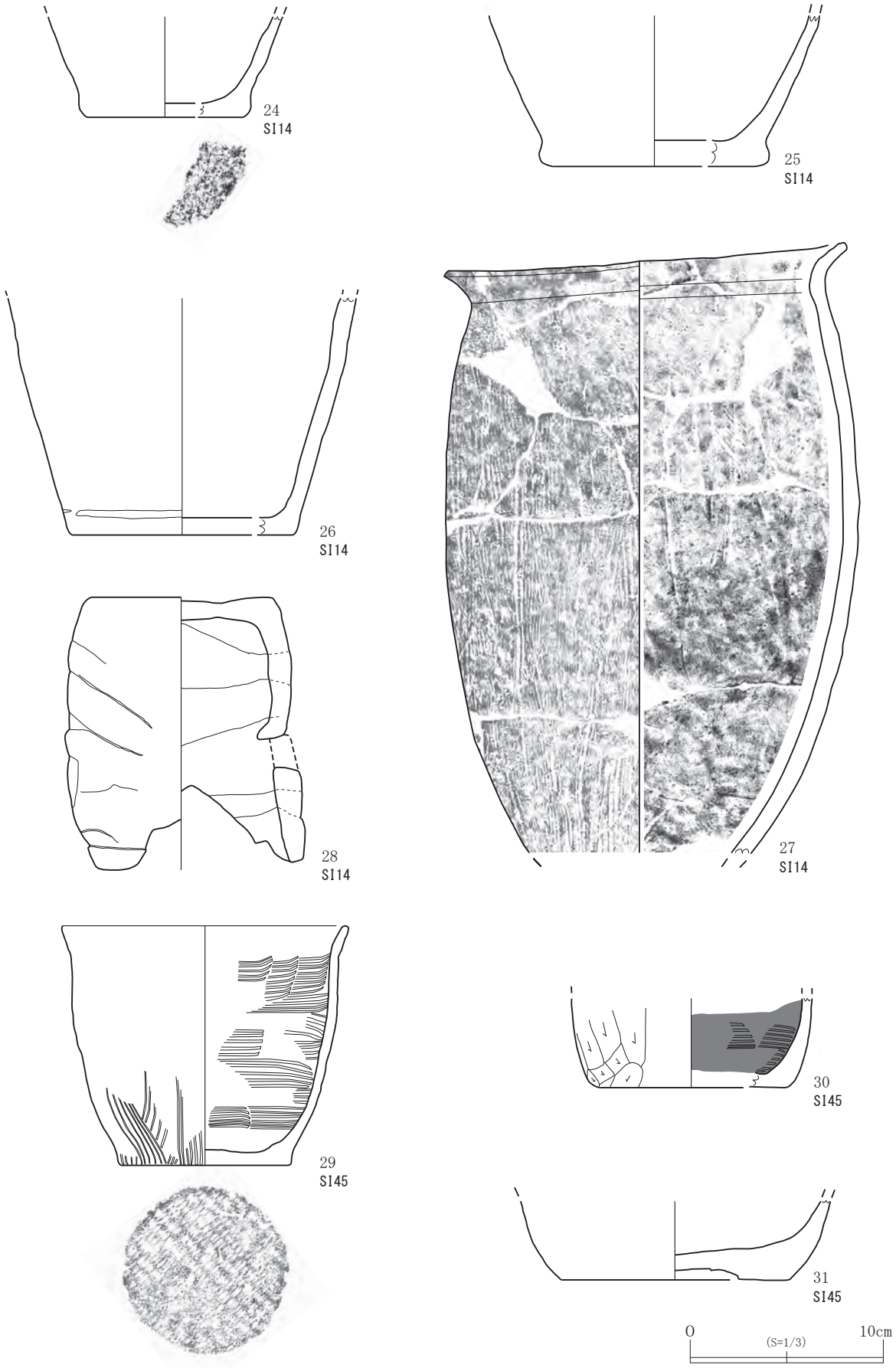
第33図　北東部柱穴様ピット配置図



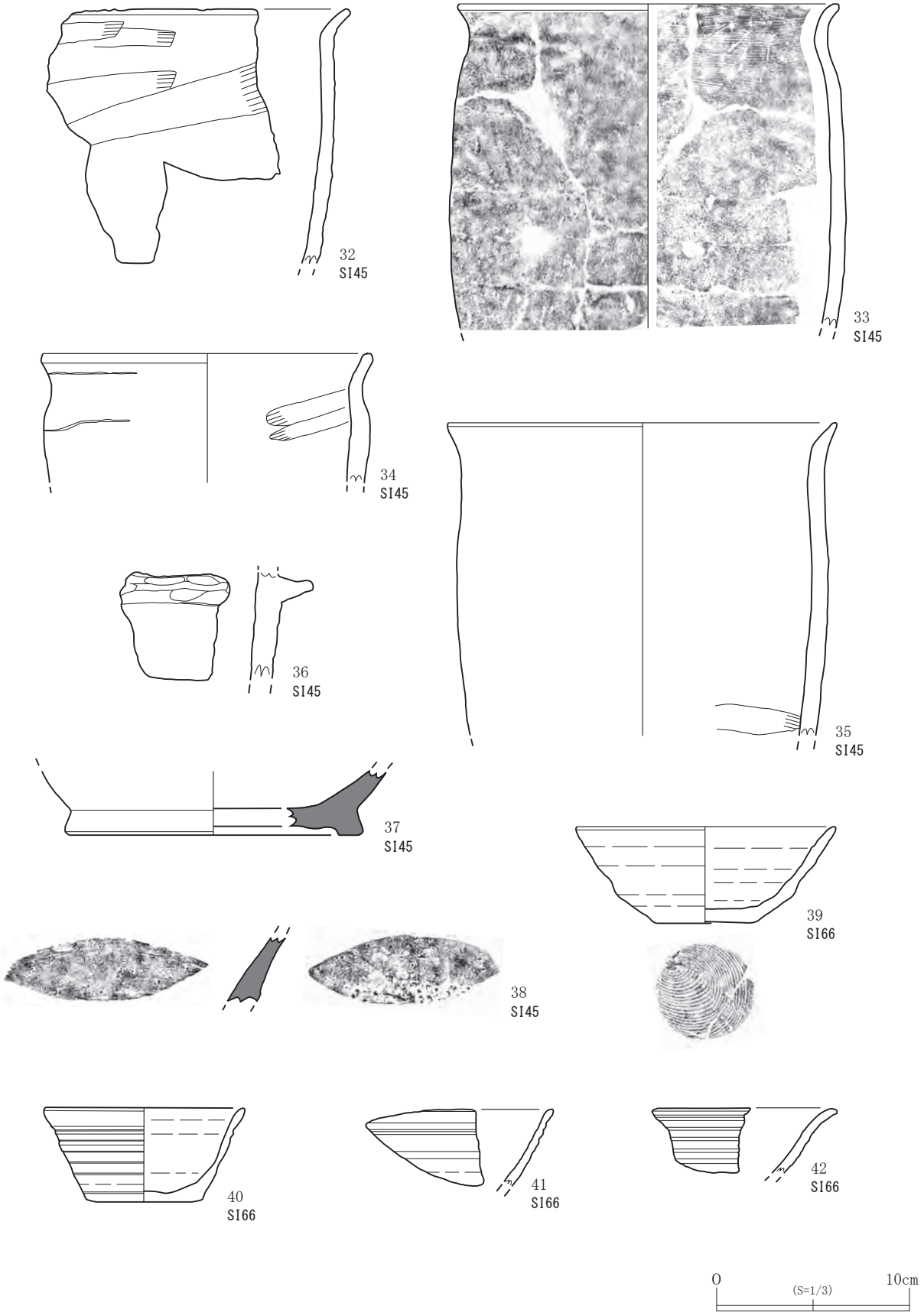
第34図　北区出土遺物図（１）



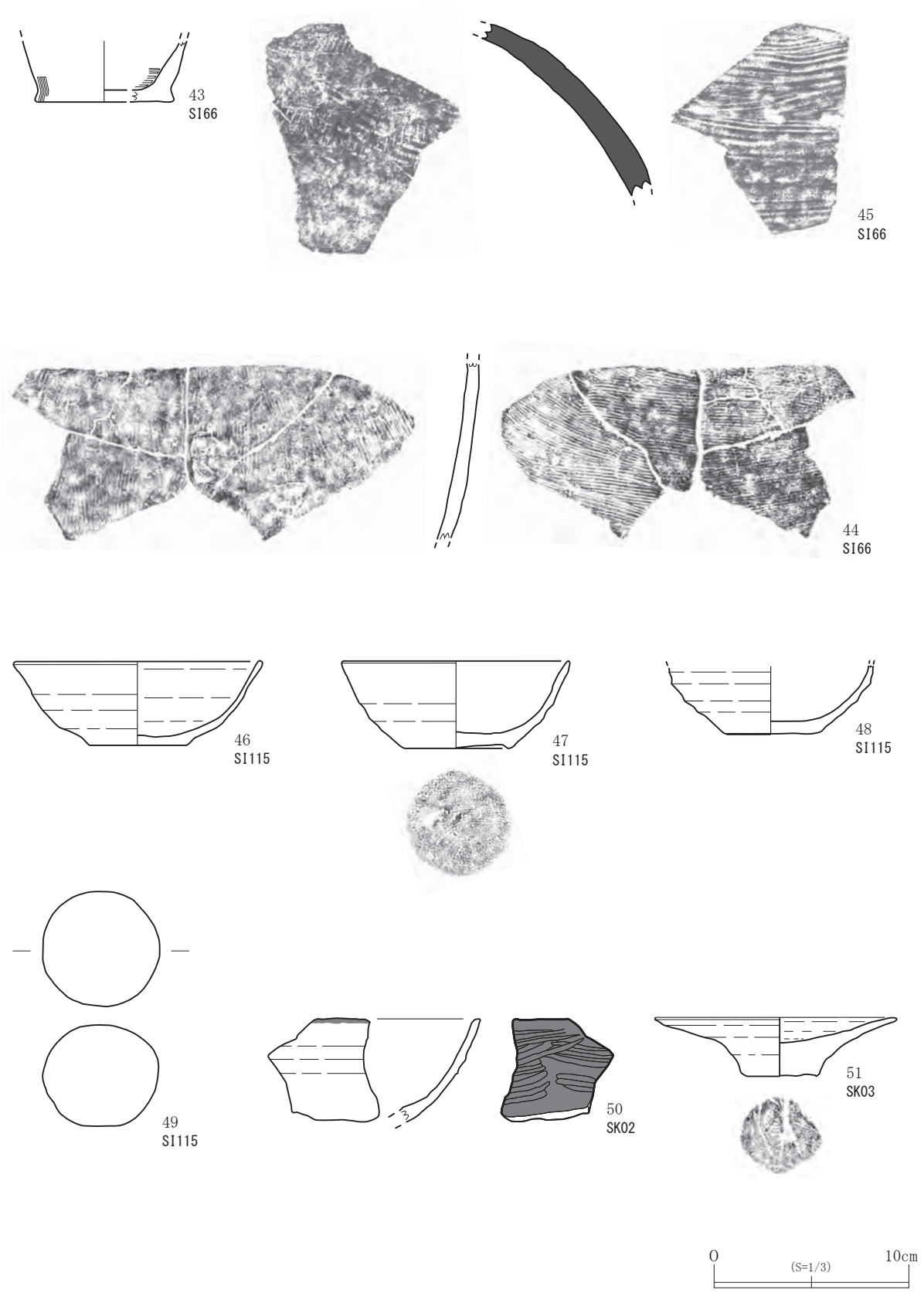
第35図　北区出土遺物図（２）



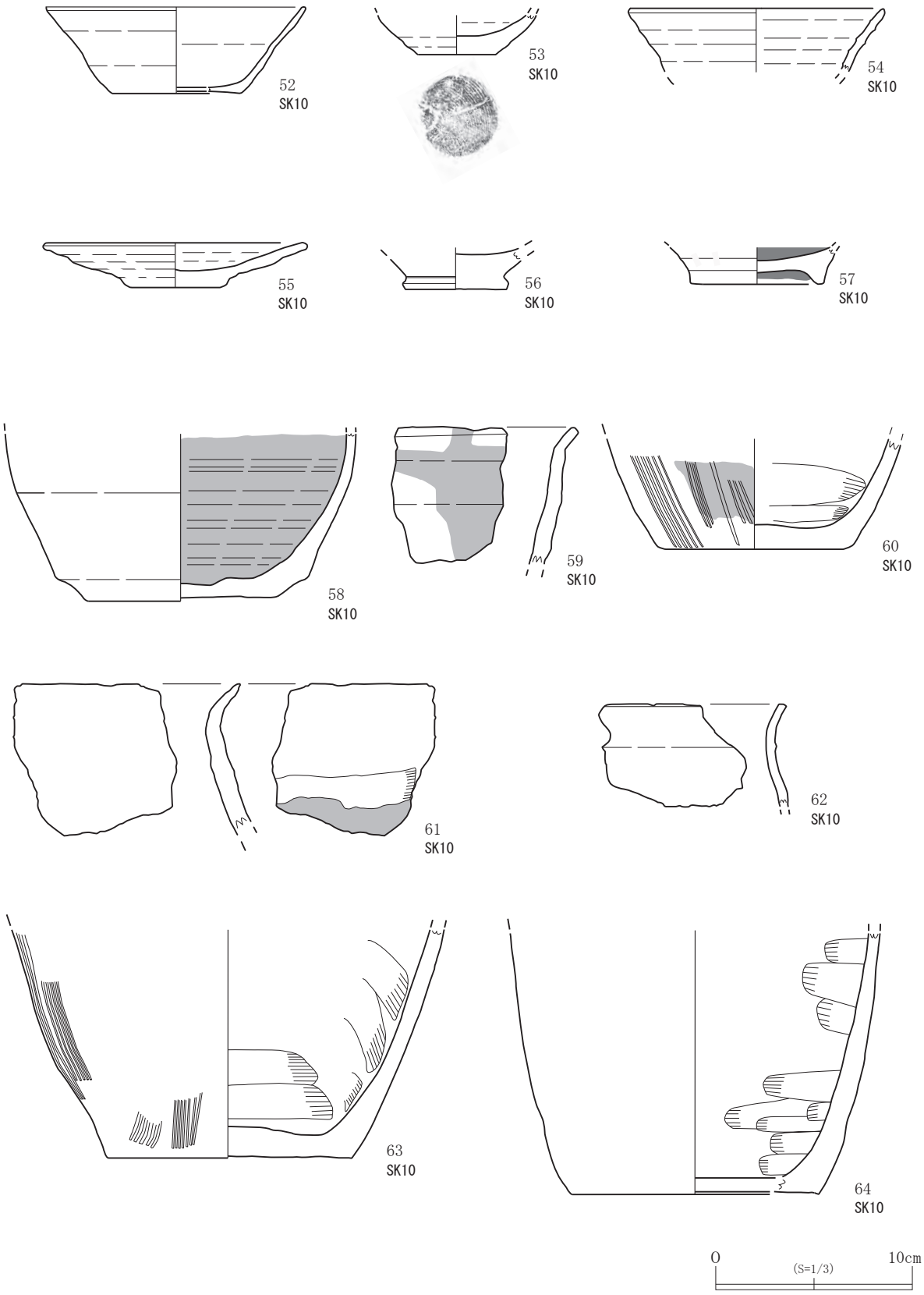
第36図　北区出土遺物図（３）



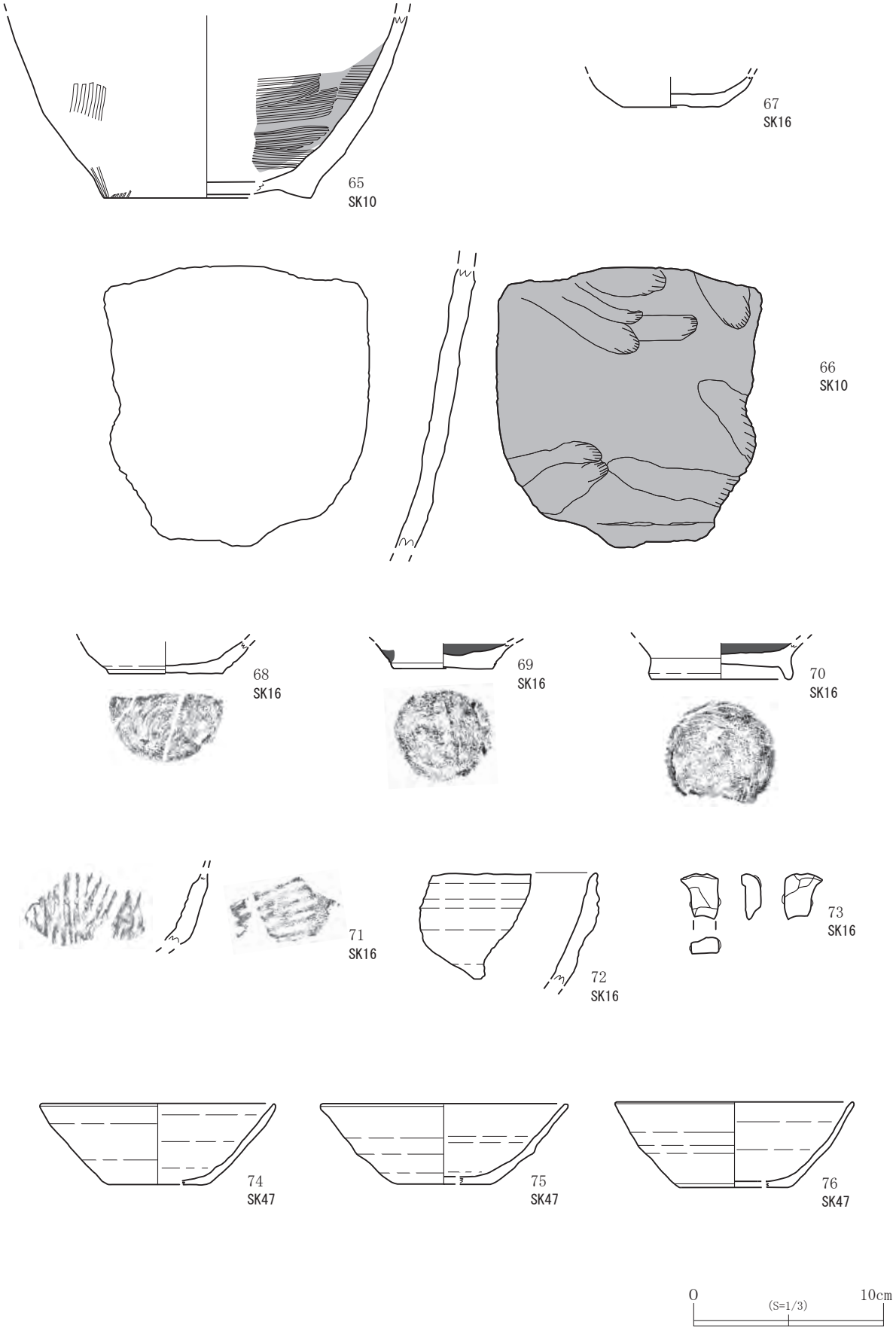
第37図　北区出土遺物図（４）



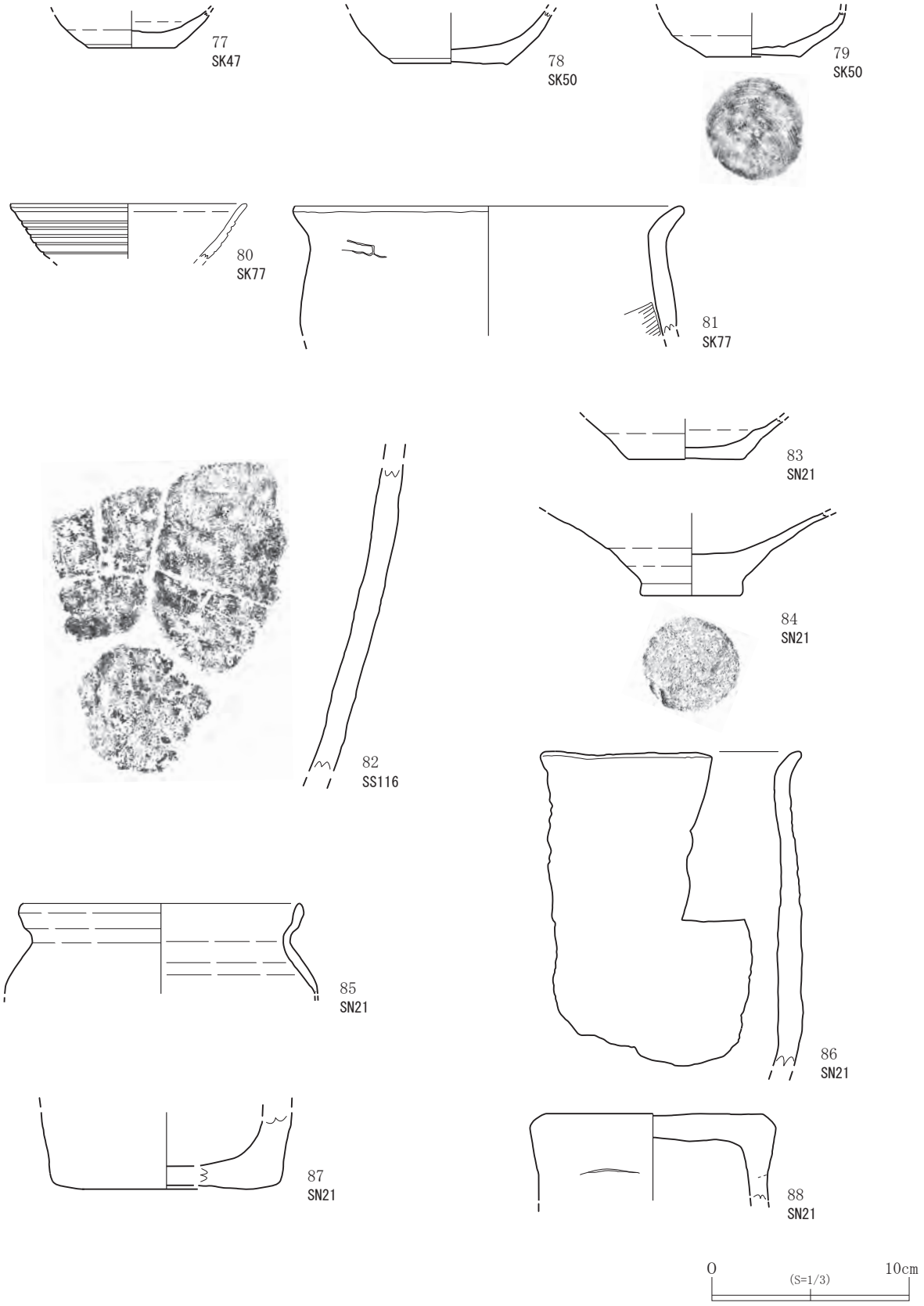
第38図　北区出土遺物図（５）



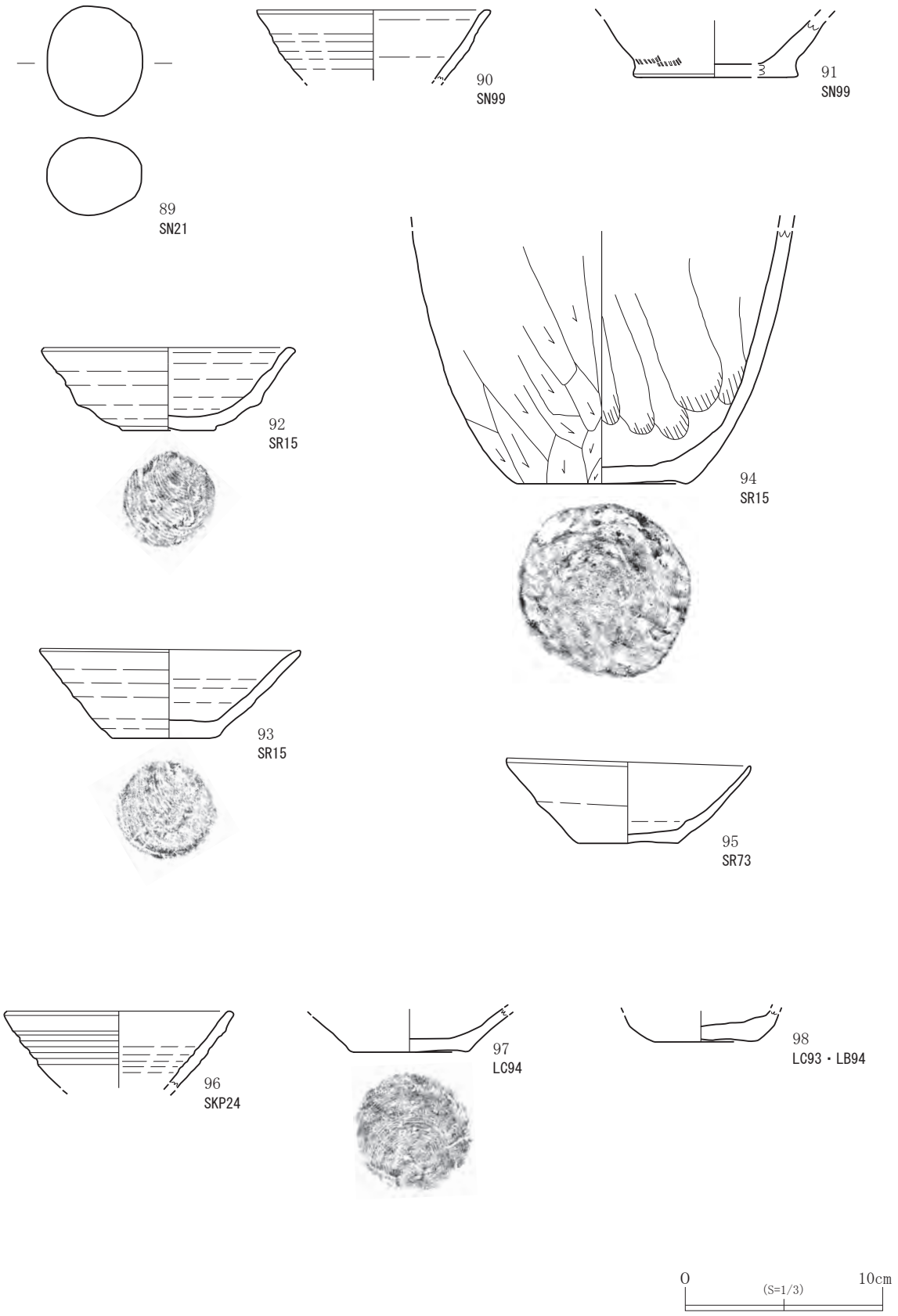
第39図　北区出土遺物図（６）



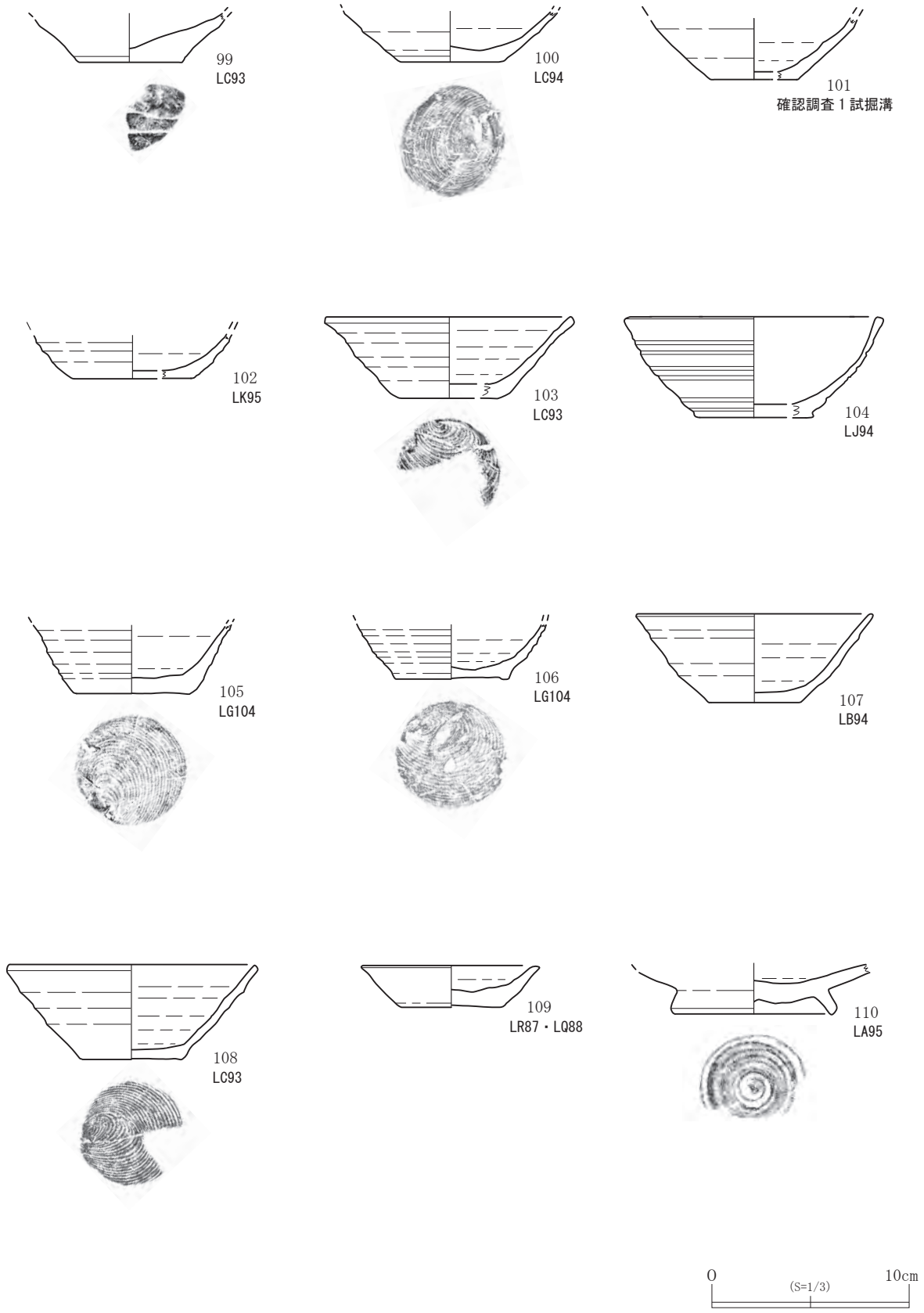
第40図　北区出土遺物図（７）



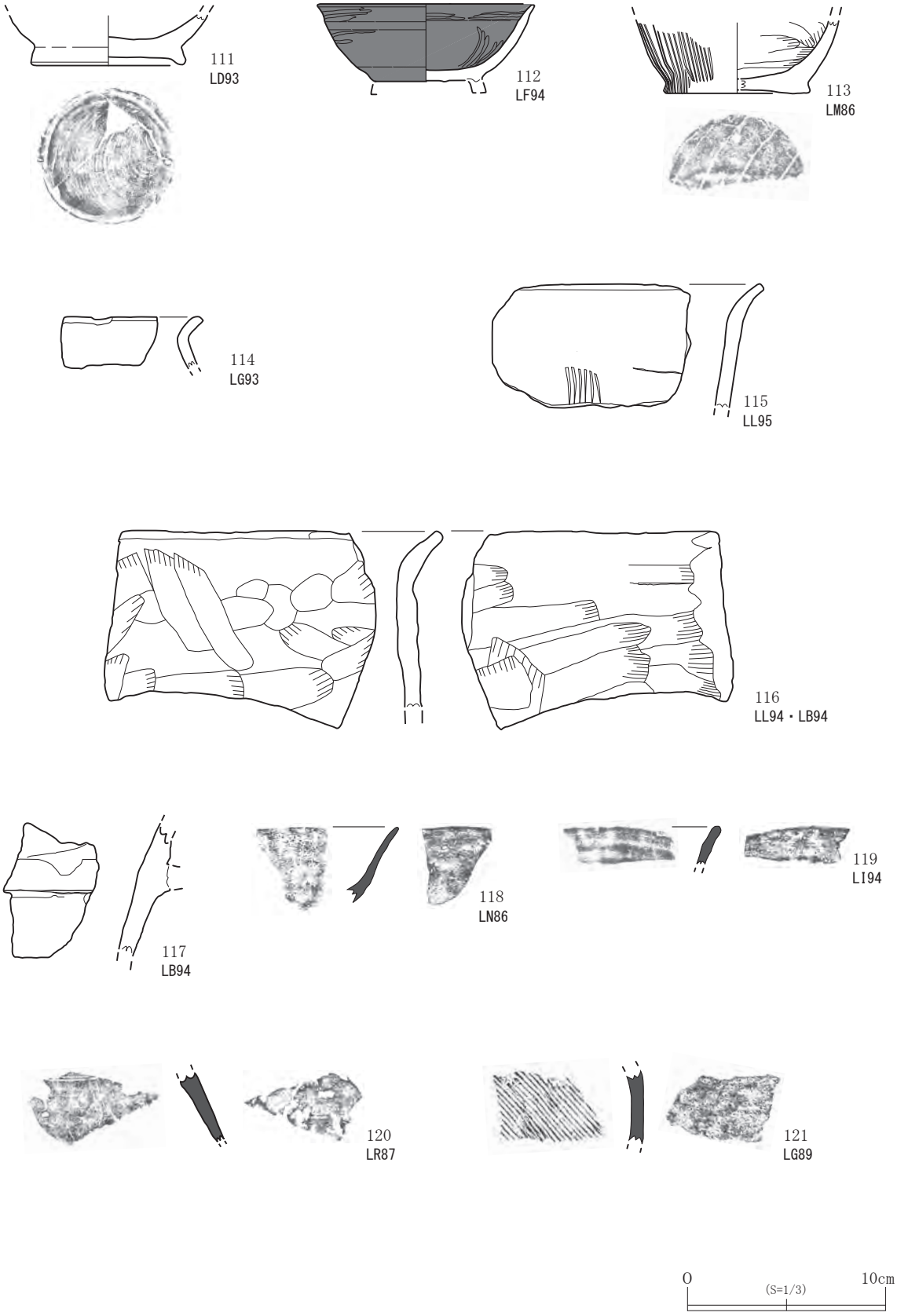
第41図　北区出土遺物図（８）



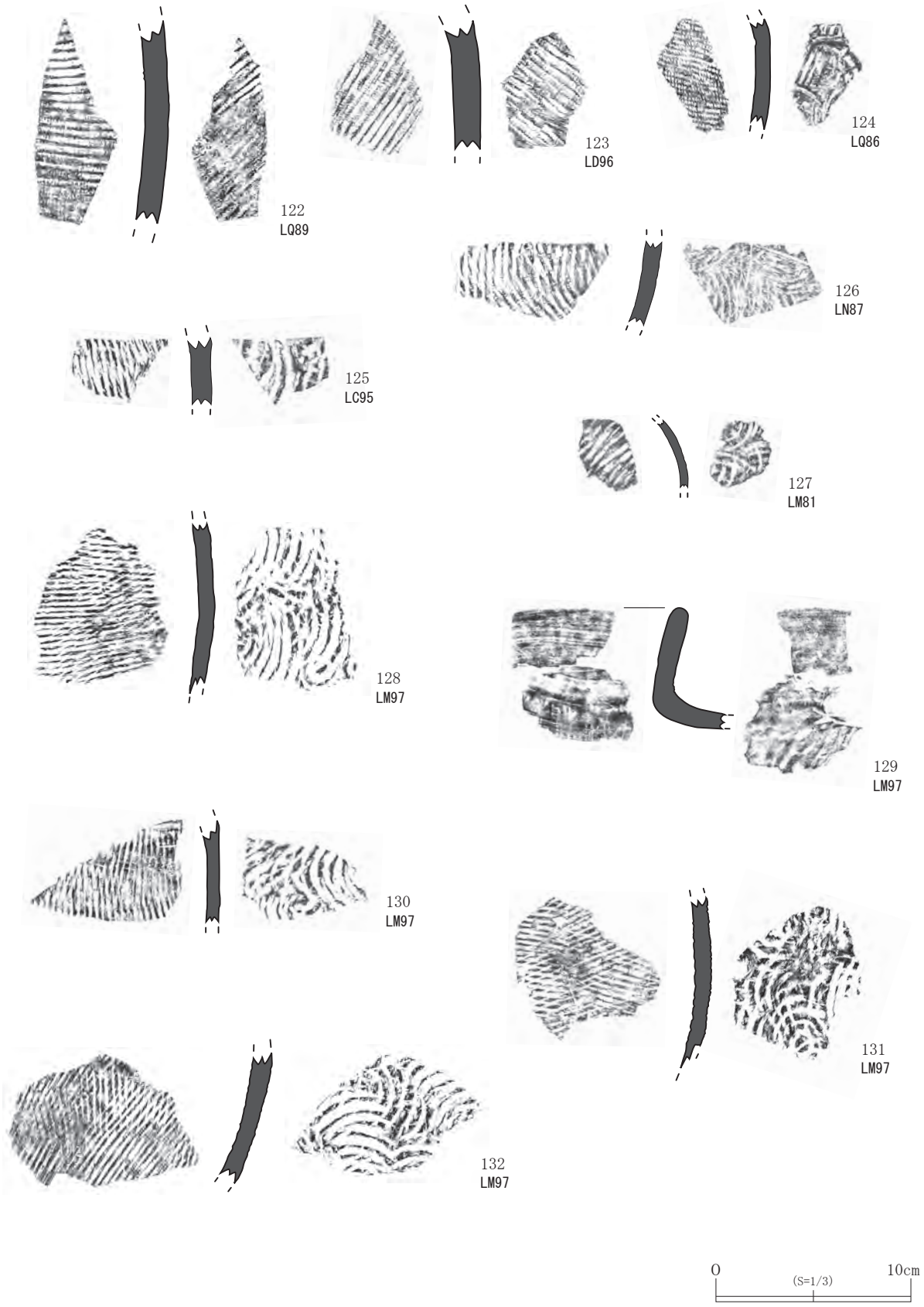
第42図　北区出土遺物図（９）



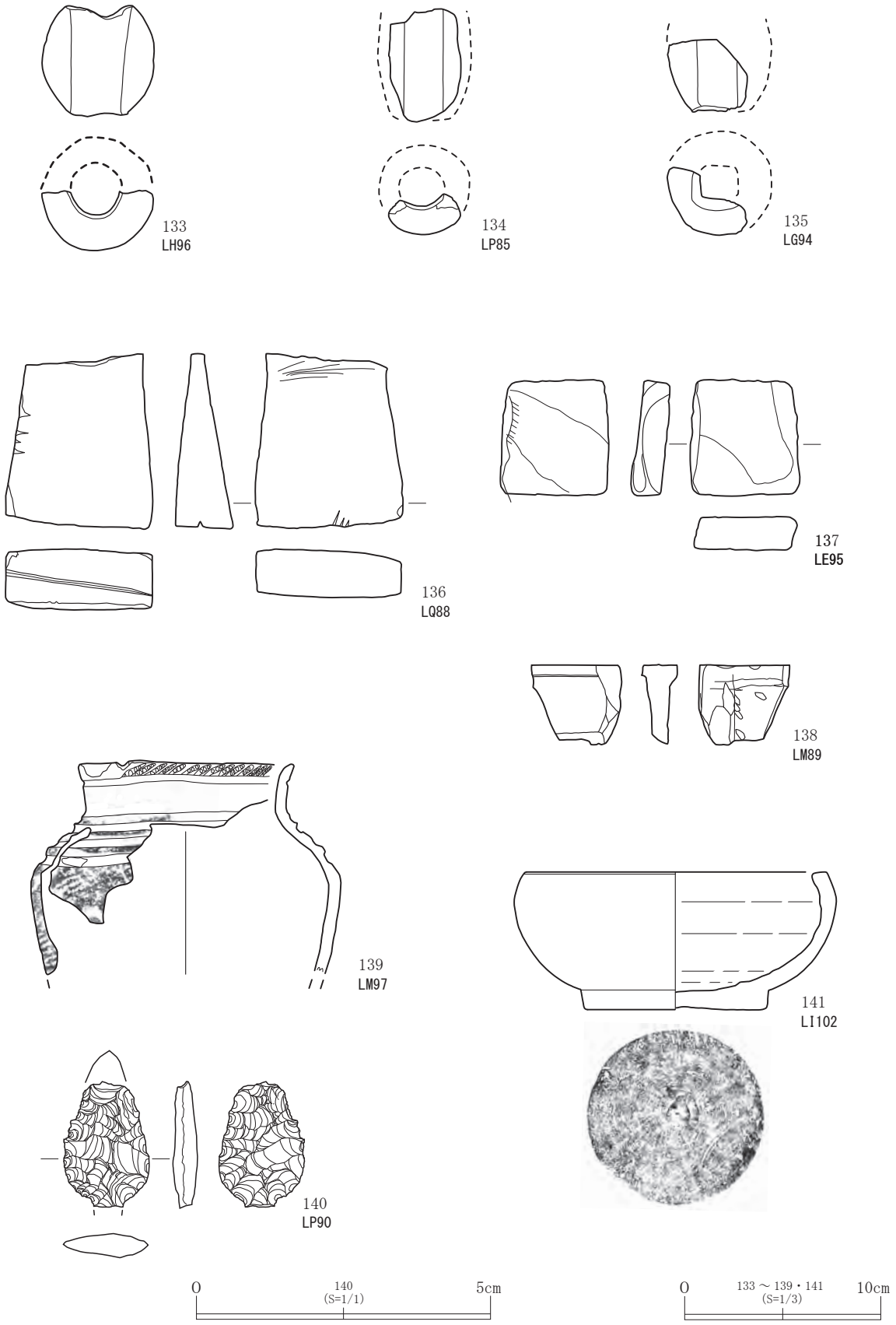
第43図　北区出土遺物図(10)



第44図　北区出土遺物図(11)



第45図　北区出土遺物図(12)



第46図　北区出土遺物図(13)

第３表　北区出土遺物一覧（１）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	器面調整等	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	備　　考	図版番号
34	1	土師器	坏	SI01	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	14.5	5.8	4.2	SI01カマド西脇に2枚重ねで置かれていた物の内側。	9①
34	2	土師器	坏	SI01	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	14.0	5.8	4.7	１の外側。外面摩滅、ヘラを使用したロクロメ痕。	9②
34	3	土師器	坏	SI01	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	14.2	5.7	4.0	外面摩滅。	
34	4	土師器	坏	SI01	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	13.0	5.6	4.8	全面摩滅。	
34	5	土師器	坏	SI01	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	13.6	5.6	4.8	全面摩滅。	
34	6	土師器	坏	SI01	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	13.6	5.6	4.4	全面摩滅。外面ヘラ使用によるロクロメ。下部に糸切り時の沈線。	
34	7	土師器	坏	SI01	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	12.8	4.0	5.0	全面摩滅。外面ヘラ使用によるロクロメ。下部に糸切り時の沈線。	9③
34	8	土師器	坏	SI01	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	12.2	5.6	4.7	全面摩滅。外面下部に糸切り時の沈線。	
34	9	土師器	坏	SI01	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	13.6	5.6	5.3	全面摩滅。胎土に砂粒が多く含有。	
34	10	土師器	坏	SI01	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	14.7	5.8	4.4	全面摩滅が激しく内外面に黒色処理と思われる跡があるが詳細不明。	
34	11	内黒土師器	高台付坏	SI01	外面：ロクロナデ→回転糸切り→高台、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	18.6	9.7	7.8	外面口縁部もミガキ、黒色処理。ミガキに伴う沈線が1条廻る。	9④
34	12	内黒土師器	高台付坏	SI01	外面：ロクロナデ→ヘラ切り→高台、内面：ロクロナデ→黒色処理	14.4	7.5	6.3	全面摩滅。	
34	13	内黒土師器	高台付坏	SI01	外面：ロクロナデ→切り離し不明→高台、内面：ロクロナデ→黒色処理	14.8	6.7	5.8	全面摩滅。外面口縁部も黒色化。	
34	14	土師器	甕	SI01	底部：ヘラ起こし、楕円形、外面：ハケメ、内面：粘土紐痕	－	9.2	(8.9)	全面摩滅、被熱し焦げている。	
35	15	土師器	甕	SI01	底部：網代痕、外面：粘土紐痕、内面：縦位ハケメ	－	11.8	(13.7)	全面摩滅、被熱焦げ痕。形状から外面ケズリ調整と推測。	
35	16	土師器	甕	SI01	口縁部：緩く外反	－	－	(13.1)	口縁部。全面摩滅。胎土に砂礫多く含有。	
35	17	土師器	甕	SI01	口縁部：緩く外反、外面：縦位ハケメ、内面：粘土紐痕	18.6	8.4	26.3	口縁～胴部。全面摩滅。胎土に砂礫多く含有。	
35	18	土師器	坏	SI05	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	13.2	6.6	4.2	底面に被熱焦げ痕。	
35	19	土師器	坏	SI05	調整、切り離し不明	－	4.6	－	全面摩滅。	
35	20	須恵器	高台付壺	SI05	外面：ロクロナデ→切り離し不明→高台、内面：ロクロナデ	－	5.3	(6.4)	小型壺（瓶?）胴～高台部。	
35	21	土師器	坏	SI14	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	12.2	5.3	4.7	外面摩滅。内面ヘラ使用ロクロメ。カマド西脇出土の2枚重ね外側。	9⑤
35	22	土師器	坏	SI14	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	12.5	6.0	4.2	内面摩滅。外面被熱、ヘラ使用ロクロメ。カマド西脇出土の2枚重ね内側。	9⑥
35	23	土師器	甕	SI14	底部：回転糸切り、外面：調整不明、内面：ロクロナデ	－	6.2	(1.9)	小型甕。摩滅し不明だが、形状から外面ケズリ調整と推測、被熱焦げ。	
36	24	土師器	甕	SI14	調整不明	－	8.2	(5.3)	小型甕底部。全面摩滅、表面剥離。内面被熱。	
36	25	土師器	甕	SI14	調整不明	－	10.4	(7.8)	甕底部。全面摩滅、表面剥離。内面被熱焦げ痕。底面も被熱。胎土砂礫多。	
36	26	土師器	甕	SI14	内面：粘土紐痕、ヘラ押し痕。	－	11.6	(12.2)	全面摩滅。外面下部にヘラによる不正規な沈線１条。形状からケズリ調整と推測。	
36	27	土師器	甕	SI14	口縁部：緩く外反、外面：縦位ハケメ、内面：横位ヘラナデ	20.8	－	(31.6)	底部欠損。全面に被熱焦げ痕。	9⑦
36	28	土製品	支脚	SI14	粘土紐痕、無調整	10.9	9.4	13.7	脚部前後、胴部左右に空気穴が開けられている。全面被熱。	9⑧
36	29	土師器	甕	SI45	口縁部：緩く外反、外面：縦位ハケメ、内面：横位ハケメ、底面：網代痕	14.8	8.8	12.4	小型甕。	10①
36	30	土師器	甕	SI45	外面：ケズリ、内面：横位ハケメ	－	10.0	(4.6)	小型甕底部。内面被熱焦げ痕。外面摩滅。	
36	31	土師器	甕	SI45	調整不明	－	11.8	(4.1)	底部。全面摩滅。形状から外面ケズリ調整と推測。胎土砂礫多。	
37	32	土師器	甕	SI45	口縁部：緩く外反、外面：横位ヘラナデ、内面：調整不明	－	－	(13.2)	口縁～肩部。全面摩滅。	
37	33	土師器	甕	SI45	口縁部：緩く外反、外面：縦位ハケメ、内面：横位ヘラナデ	19.8	－	(16.8)	口縁～胴部。全面被熱焦げ痕。	
37	34	土師器	甕	SI45	口縁部：緩く外反、外面：粘土紐痕、内面：指ナデ	17.0	－	(6.7)	口縁～肩部。胎土砂礫多。	
37	35	土師器	甕	SI45	口縁部：緩く外反、外面：調整不明、内面：横位ヘラナデ	20.2	－	(16.1)	口縁～肩部。全面摩滅。内面に被熱焦げ痕。胎土砂礫多。	
37	36	土師器	羽釜	SI45	輪積み成形、全面調整不明	－	－	(5.6)	取手部、指押痕。胎土砂礫多。	
37	37	須恵器	高台付甕	SI45	外面：ロクロナデ→切り離し不明→高台、内面：ロクロナデ	－	15.0	(3.3)	底部。内面に灰釉多量付着。	
37	38	須恵器	高台付甕	SI45	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	－	－	(3.3)	37と同一個体の胴部。内外面に灰釉付着。	
37	39	土師器	坏	SI66	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	13.4	5.2	(5.0)	口縁部に被熱焦げ痕。	10②
37	40	土師器	坏	SI66	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	10.4	5.0	(4.8)	外面摩滅、ヘラによる沈線状ロクロメ。	
37	41	土師器	坏	SI66	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	－	－	(4.4)	口縁～胴部。全面摩滅。外面ヘラによる沈線状ロクロメ。	
37	42	土師器	坏	SI66	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	－	－	(3.3)	口縁～胴部。外面ヘラによる沈線状ロクロメ。口縁部被熱焦げ痕。	
38	43	土師器	甕	SI66	外面：縦位ハケメ、内面：横位ハケメ	－	7.0	(6.1)	小型甕底部、網代痕。全面摩滅。	
38	44	土師器	甕	SI66	外面：縦位ハケメ、内面：横位ハケメ	－	－	(8.9)	胴部。	
38	45	須恵器	壺	SI66	外面：平行タタキ→カキメ、内面：指頭押え→カキメ	－	－	(8.2)	胴部。	
38	46	土師器	坏	SI115	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	12.8	5.0	4.3	全面摩滅、被熱焦げ痕。	10③
38	47	土師器	坏	SI115	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	11.6	5.6	4.5	全面摩滅、被熱焦げ痕。	
38	48	土師器	坏	SI115	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	(10.4)	5.0	(4.5)	全面摩滅。	

（　）内残存値

第４表　北区出土遺物一覧（２）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	器面調整等	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	備　　考	図版番号
38	49	石製品	球状石製品	SI115		5.9×6.0×5.0			堆積岩表面を丸く成形。若干扁平する。	
38	50	内黒土師器	坏	SK02	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	－	－	(5.3)	口縁～胴部。	
38	51	土師器	高台付坏	SK03	外面：ロクロナデ→柱状高台→回転糸切り、内面：ロクロナデ	12.4	3.9	3.1	柱状高台、皿状。	
39	52	土師器	坏	SK10	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	13.2	6.6	4.4	全面摩滅。	
39	53	土師器	坏	SK10	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	4.0	(2.0)	底部。	
39	54	土師器	坏	SK10	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	13.0	－	(3.2)	口縁～胴部。一部に被熱焦げ痕。	
39	55	土師器	高台付坏	SK10	外面：ロクロナデ→柱状高台→回転糸切り、内面：ロクロナデ	13.4	4.6	2.3	柱状高台、皿状。全面摩滅。	
39	56	土師器	高台付坏	SK10	外面：ロクロナデ→柱状高台→切り離し不明、内面：調整不明	－	5.2	(2.1)	柱状高台部分。全面摩滅。高台えぐれ部分に沈線的ロクロメ1条。	
39	57	内黒土師器	高台付坏	SK10	外面：ロクロナデ→糸切り→高台、内面：ロクロナデ→黒色処理	－	6.5	(1.9)	全面摩滅。底部も一部黒色化。	
39	58	土師器	甕	SK10	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ヘラによるロクロナデ	－	9.6	(8.5)	底部。外面摩滅。内面全面被熱黒色化。	
39	59	土師器	甕	SK10	口縁部：緩く外反、外面：内面：共に調整不明	－	－	(6.5)	口縁部。全面摩滅。外面全面被熱黒色化。60と同一個体。	
39	60	土師器	甕	SK10	外面：ヘラナデ、内面：指ナデ	9.0	－	(5.6)	底部。全面摩滅。外面一部被熱黒色化。59と同一個体。	
39	61	土師器	甕	SK10	口縁部：緩く外反、外面調整不明、内面ヘラナデ	－	－	(7.7)	口縁部。全面摩滅。内面一部被熱黒色化。胎土砂礫多。	
39	62	土師器	甕	SK10	口縁部：緩く外反、外面：ロクロナデ、内面ロクロナデ	－	－	(5.2)	小型甕口縁部。全面摩滅。口縁部被熱。	
39	63	土師器	甕	SK10	外面：縦位ヘラケズリ→ハケメ、内面：横位ヘラ・ユビナデ	12.4	－	(11.6)	底部～胴部。胎土砂礫多。	
39	64	土師器	甕	SK10	外面：縦位ヘラケズリ、内面：横位指ナデ	12.6	－	(13.3)	底部～胴部。外面摩滅。内面一部被熱黒色化。胎土砂礫多。	
40	65	土師器	甕	SK10	外面：縦位ヘラケズリ→ハケメ、内面：横位ハケメ	11.2	－	(9.6)	甕底部～胴部。外面摩滅。内面一部被熱黒色化。胎土砂礫多。	
40	66	土師器	甕	SK10	外面：調整不明、内面：粘土紐痕→指頭オサエ・指ナデ	－	－	(14.8)	胴部。外面摩滅。内面全面被熱黒色化。	
40	67	土師器	坏	SK16	調整・切り離し不明	－	5.2	(1.6)	底部。全面摩滅。	
40	68	土師器	坏	SK16	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：調整不明	－	6.0	(1.4)	底部。内面摩滅。	
40	69	内黒土師器	坏	SK16	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ→黒色処理	－	5.4	(1.0)	全面摩滅。特に外面表面は剥離しているが黒色処理の形跡も見られる。	
40	70	内黒土師器	高台付坏	SK16	外面：ロクロナデ→回転糸切り→高台、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	－	7.4	(1.6)	底部。	
40	71	土師器	甕	SK16	外面：平行タタキメ、内面：平行アテ具痕	－	－	(3.7)	胴部。	
40	72	土師器	鍋	SK16	口縁下にヘラによる沈線的ロクロメ。	－	－	(6.1)	口縁～取手部。取手部下は大きく抉られて周る。	
40	73	鉄製品	不明	SK16		(2.2)×(2.4)×(0.8)			棒状鉄製品の一部。	
40	74	土師器	坏	SK47	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	12.4	5.7	4.3	全面摩滅。口縁部被熱焦げ痕。	
40	75	土師器	坏	SK47	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	13.0	5.2	4.2		
40	76	土師器	坏	SK47	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	12.6	5.9	4.5	全面摩滅。	
41	77	土師器	坏	SK47	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	4.4	(1.8)	全面摩滅。内面一部被熱焦げ痕。	
41	78	土師器	坏	SK50	調整・切り離し不明	－	5.8	(2.5)	全面摩滅。	
41	79	土師器	坏	SK50	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	4.8	(2.2)	内面摩滅。	
41	80	土師器	坏	SK77	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	12.0	－	(2.8)	口縁部。外面ヘラによる沈線状ロクロメ。	
41	81	土師器	甕	SK77	口縁部：緩く外反、外面：粘土紐痕、内面：横位ヘラナデ	19.6	－	(6.1)	口縁部。外面摩滅。内面一部被熱焦げ痕。	
41	82	土師器	甕	SS116	外面：ヘラケズリ・ハケメ、内面：指ナデ	－	－	(15.5)	甕胴部。外面摩滅。内面被熱。胎土砂礫多。	
41	83	土師器	坏	SN21	外面：調整・切り離し不明、内面：ロクロナデ	－	5.8	(1.9)	全面摩滅、被熱黒色化。剥離しているが本来は内外黒色土師器かも?。	
41	84	土師器	高台付坏	SN21	外面：ロクロナデ→柱状高台→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	5.1	(4.2)	柱状高台。全面摩滅。	
41	85	土師器	甕	SN21	口縁部:急に外反し口唇部は上に立ち上がる、外面:ロクロナデ、内面ロクロナデ	14.2	－	(4.6)	小型甕口縁部。外面摩滅。内面被熱焦げ痕。	
41	86	土師器	甕	SN21	口縁部：緩く外反、外面：内面：調整不明	－	－	(15.9)	口縁～胴部。全面摩滅。胎土砂礫多。	
41	87	土師器	甕	SN21	外面：内面：調整不明	－	11.2	(3.9)	底部。全面摩滅。形状から外面ケズリ成形と想定。底部被熱焦げ痕。	
41	88	土製品	支脚	SN21	粘土紐痕、無調整	－	11.0	(4.4)	全面被熱。胎土砂礫多。	
42	89	石製品	球状石製品	SN21		5.5×4.8×4.0			火成岩表面を丸く成形。全体被熱。	
42	90	土師器	坏	SN99	外面：ロクロナデ、内面ロクロナデ	11.8	－	(3.6)	口縁部。外面ヘラによる沈線状ロクロメ。	
42	91	土師器	甕	SN99	外面：ヘラケズリ、ハケメ、内面：調整不明	－	8.0	(2.8)	小型甕底部。全面摩滅。底部に痕跡は残るが何敷きかは不明。	
42	92	土師器	坏	SR15	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	12.8	4.8	4.2	93と2枚重ねで出土、内側。	10⑥
42	93	土師器	坏	SR15	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	13.2	4.7	4.5	92と2枚重ねで出土、外側。全面摩滅。	10⑤
42	94	土師器	甕	SR15	底面：ヘラ起こし、外面：ヘラケズリ、内面：指ナデ	－	8.6	(12.8)	上部欠損。92、93を収納した状況で出土。	10④
42	95	土師器	坏	SR73	調整・切り離し不明	12.3	5.1	3.9	全面摩滅。単独完形で出土。	10⑦

（　）内残存値

第５表　北区出土遺物一覧（３）

挿図番号	番号	種別	器種	出土位置	器面調整等	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	備　　考	図版番号
42	96	土師器	坏	SKP24	外面：ロクロメ、内面：ロクロメ	11.6	－	(3.9)	口縁～胴部。内外共にヘラによる沈線状ロクロメ。	
42	97	土師器	坏	LC94	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	6.0	(2.2)	底部。	
42	98	土師器	坏	LC93・LB94	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	5.0	(1.6)	底部。全面摩滅。底部に被熱。	
43	99	土師器	坏	LC93Ⅸa層	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	－	5.4	(2.5)	底部。全面摩滅。	
43	100	土師器	坏	LC94Ⅸa層	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	5.0	(2.6)	底部。内面摩滅。	
43	101	土師器	坏	確認調査1試掘溝	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	4.4	(2.1)	底部。全面摩滅。	
43	102	土師器	坏	LK95Ⅵ層	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	－	6.0	(2.2)	底部。全面摩滅。外面ヘラによる沈線状ロクロメ。	
43	103	土師器	坏	LC93Ⅰ層	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	12.6	5.2	(4.1)	口縁部被熱。外面ヘラによる沈線状ロクロメ。	
43	104	土師器	坏	LJ94Ⅵ層	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	13.2	5.8	(5.1)	口縁部被熱。外面ヘラによる沈線状ロクロメ。	
43	105	土師器	坏	LG104Ⅶ層	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	6.0	(4.5)	外面ヘラによる沈線状ロクロメ。	
43	106	土師器	坏	LG104Ⅶ層	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	－	5.8	(2.8)	外面ヘラによる沈線状ロクロメ。	
43	107	土師器	坏	LB94Ⅸa層	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	12.0	4.6	4.5	全面摩滅。剥離しているが元は内黒か?。	
43	108	土師器	坏	LC93Ⅰ層	外面：ロクロナデ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	12.6	5.2	4.8	全面摩滅。剥離しているが元は内黒か?。	
43	109	土師器	坏	LR87・LQ88Ⅵ層	外面：ロクロナデ→切り離し不明、内面：ロクロナデ	9.2	5.2	2.1	全面摩滅。口縁部を一度取り除き、再加工し口縁を作り利用。	
43	110	土師器	高台付坏	LA95Ⅰ層	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り→高台、内面：ロクロナデ	－	8.2	(2.6)		
44	111	土師器	高台付坏	LD93	外面：ロクロナデ→回転糸切り→高台、内面：ロクロナデ	－	7.6	(2.5)	全面摩滅。	
44	112	両黒土師器	高台付坏	LF94Ⅵ層	外面：ロクロナデ→回転糸切り→高台→黒色処理、内面：ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	11.0	(5.2)	(3.9)	外面摩滅。高台部欠損。	
44	113	土師器	甕	LM86Ⅵ層	外面：ハケメ、内面：指ナデ、底部：葉脈痕	－	7.4	(4.7)	小型甕底部。外面被熱。	
44	114	土師器	甕	LG93Ⅵ層	口縁部：急に外反、外面：調整不明、内面：ヘラナデ	－	－	(2.4)	小型甕口縁部。全面摩滅。	
44	115	土師器	甕	LL95Ⅵ層	口縁部：緩く外反、外面：粘土紐痕、縦位ハケメ、内面：横位ヘラナデ	－	－	(6.4)	口縁部。胎土砂礫多。全面摩滅。	
44	116	土師器	甕	LL94Ⅸa層・LB94Ⅰ層	口縁部:緩く外反、外面:指頭オサエ、指ナデ、ヘラナデ、内面:ヘラナデ	－	－	(10.0)	口縁～胴部。	
44	117	土師器	羽釜	LB94	取手部の破片。取手取り付けにヘラ使用。他の調整は不明	－	－	(6.7)	取手部分だが、取手は欠損。取り付け部のみ残る。胎土砂礫多。	
44	118	須恵器	坏	LN86Ⅵ層	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	－	－	(4.4)	口縁～胴部。	
44	119	須恵器	坏	LI94Ⅵ層	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ	－	－	(1.9)	口縁部。	
44	120	須恵器	壺	LR87Ⅵ層	外面：ロクロナデ→カキメ、内面：ロクロナデ	－	－	(3.7)	肩部。頸部根元にヘラによる沈線2条。	
44	121	須恵器	甕	LG89Ⅵ層	外面：カキメ、内面：ロクロナデ	－	－	(3.7)	胴部。	
45	122	須恵器	甕	LQ89Ⅵ層	外面：平行タタキメ、内面：平行アテグ	－	－	(10.4)	胴部。両面灰釉付着。	
45	123	須恵器	甕	LD96Ⅰ層	外面：平行タタキメ、内面：平行アテグ	－	－	(6.7)	胴部。	
45	124	須恵器	甕	LQ86Ⅵ層	外面：平行タタキメ、内面：青海波文アテグ	－	－	(5.6)	胴部。	
45	125	須恵器	甕	LC95	外面：平行タタキメ、内面：青海波文アテグ	－	－	(3.5)	胴部。	
45	126	須恵器	甕	LN87Ⅵ層	外面：平行タタキメ、内面：青海波文アテグ	－	－	(4.4)	胴部。	
45	127	須恵器	甕	LM81Ⅵ層	外面：平行タタキメ、内面：青海波文アテグ	－	－	(3.5)	胴部。	
45	128	須恵器	甕	LM97Ⅵ層	外面：平行タタキメ、内面：青海波文アテグ	－	－	(8.2)	胴部。胎土生焼けのため土師質。	
45	129	須恵器	甕	LM97Ⅵ層	外面：ヘラナデ、平行タタキメ、内面：ヘラナデ、青海波文アテグ	－	－	(7.0)	口縁～頸部。胎土生焼け（129 ～ 132同一個体）。	
45	130	須恵器	甕	LM97Ⅵ層	外面：平行タタキメ、内面：青海波文アテグ	－	－	(5.0)	胴部。胎土生焼け（129 ～ 132同一個体）。	
45	131	須恵器	甕	LM97Ⅵ層	外面：平行タタキメ、内面：青海波文アテグ	－	－	(8.7)	甕胴部。胎土生焼け（129 ～ 132同一個体）。	
45	132	須恵器	甕	LM97Ⅵ層	外面：平行タタキメ、内面：青海波文アテグ	－	－	(6.7)	胴部。胎土生焼け（129 ～ 132同一個体）。	
46	133	土製品	土錘	LH96Ⅵ層		5.7×5.7×5.6				
46	134	土製品	土錘	LP85Ⅰ層		4.5×4.5×(5.7)				
46	135	土製品	土錘	LG94Ⅵ層		5.5×5.5×(3.7)			貫通孔入口形状が方形（内部は円形）。	
46	136	石製品	砥石	LQ88Ⅵ層	残存する5面をすべて使用。下面には刃砥ぎ用切れ込み。	7.5×(8.9)×3.0			途中で折れ。滑らかで目の細かい石を使用。（仕上げ用）	
46	137	石製品	砥石	LE95	残存する5面をすべて使用。	5.5×(5.9)×1.7			途中で折れ。側面は丸く窪む。石質は荒い（荒削り用）。	
46	138	石製品	硯	LM89Ⅵ層	上面はしっかり成形、擦り痕が残る。下面は製作途中。	(4.6)×(4.8)×1.8				
	－	鉄滓	鍛冶滓	SI66P1		－			図版のみ	10⑩
46	139	弥生土器	壺	LM97Ⅵ層下位	口縁部LR縄文横位回転、頸部ナデ、肩部～胴部LR縄文横位回転	11.0	－	(10.7)	頸部～肩部に横位沈線５条。	10⑧
46	140	石器	石鏃	LP90Ⅵ層	両面刃	1.5×(2.1)×0.4			先端折れ。	
46	141	土師器質土器	椀	LI102Ⅰ層	外面：回転ヘラケズリ→回転糸切り、内面：ロクロナデ	15.6	9.2	7.0		10⑨

（　）内残存値

第３節　南区の調査

１　南区基本層序

横枕遺跡は、新第三紀に属する天徳寺層及び笹岡層、第四紀更新世の西目層から構成され、一般に「仁賀保高原」と呼ばれる仁賀保丘陵地の西端部に立地する。南区の調査開始前の現況は、北区と同様な西向き丘陵斜面に造成された畑地が過半を占める。尾根や山腹を削平・盛土し、造成した段々畑状を呈し、その他は灌木が繁茂する急斜面の荒れ地であった。調査においては、調査区の尾根と直交するように３本の基本層序観察用東西畦（１～３）を、さらに尾根の先端部の一部に１本の基本層序観察用東西畦（４）を設定した（第47図）。

調査区畑地造成前の旧地形は、丘陵西斜面に、西ないしは北西方向の地滑りが生じたことが要因で、尾根に囲まれた部分が西に開くように擂鉢状の窪地を形成する沢地であり、全体としてかなりの急斜面～緩斜面であったと判断される。また地滑りに伴い、調査区全域で、窪地に向かう方角へ割れて走る地割れの痕跡を多数確認している。地割れは、基盤層上面や一部の自然堆積層上面で確認され、黒色～黒褐色シルトによって比較的短期間のうちに埋まったものと判断される。この黒色～黒褐色シルトから縄文時代の石器が数点出土している。また東西畦１でＥ４～６の断面からは地割れが確認できるが、その上面では古代の土器埋設遺構（SR33）などの遺構が検出されている。このことから地滑りに伴った地割れは縄文時代～古代の間に起きたものと判断する。また地割れ埋積層は本来、調査区全体を覆っていた可能性が高いが、畑地に伴う造成により、調査区内では地割れやその上部に一部が堆積している様子が確認されるのみである。

また調査区は、近世以降、前述したように、全体的に畑地造成による改変を大きく受けている。擂鉢状に窪んでいる調査区南西下部を除いて、大部分が地山面まで掘削されている。唯一古代の造成と考えられる調査区南西下部では、沢地状の緩斜面に盛土をし、平坦面を作出している様子が東西畦３断面から確認できる。

また、それぞれの基本層序の観察から、尾根上の平坦部では薄く残る表土直下に基盤土層が現れ、反対に斜面の落ち込みや、山腹の平坦地では表土下には古代の土器及び近世～近代の陶磁器等を包含する厚い盛土が堆積して平坦面が形成されている様子が伺える。比較的平坦な尾根上から、斜面及び山腹へ土を移して畑地を造成したと推測される。

以上をふまえ、南区の基本層序は、推定堆積時期と成因を元に以下のⅠ～Ⅴ層に大きくまとめる。

Ⅰ層　にぶい黄褐色シルト～砂（10YR4/3）～黒褐色シルト（10YR3/2）　表土。主として耕作土である。調査区全体を覆う。

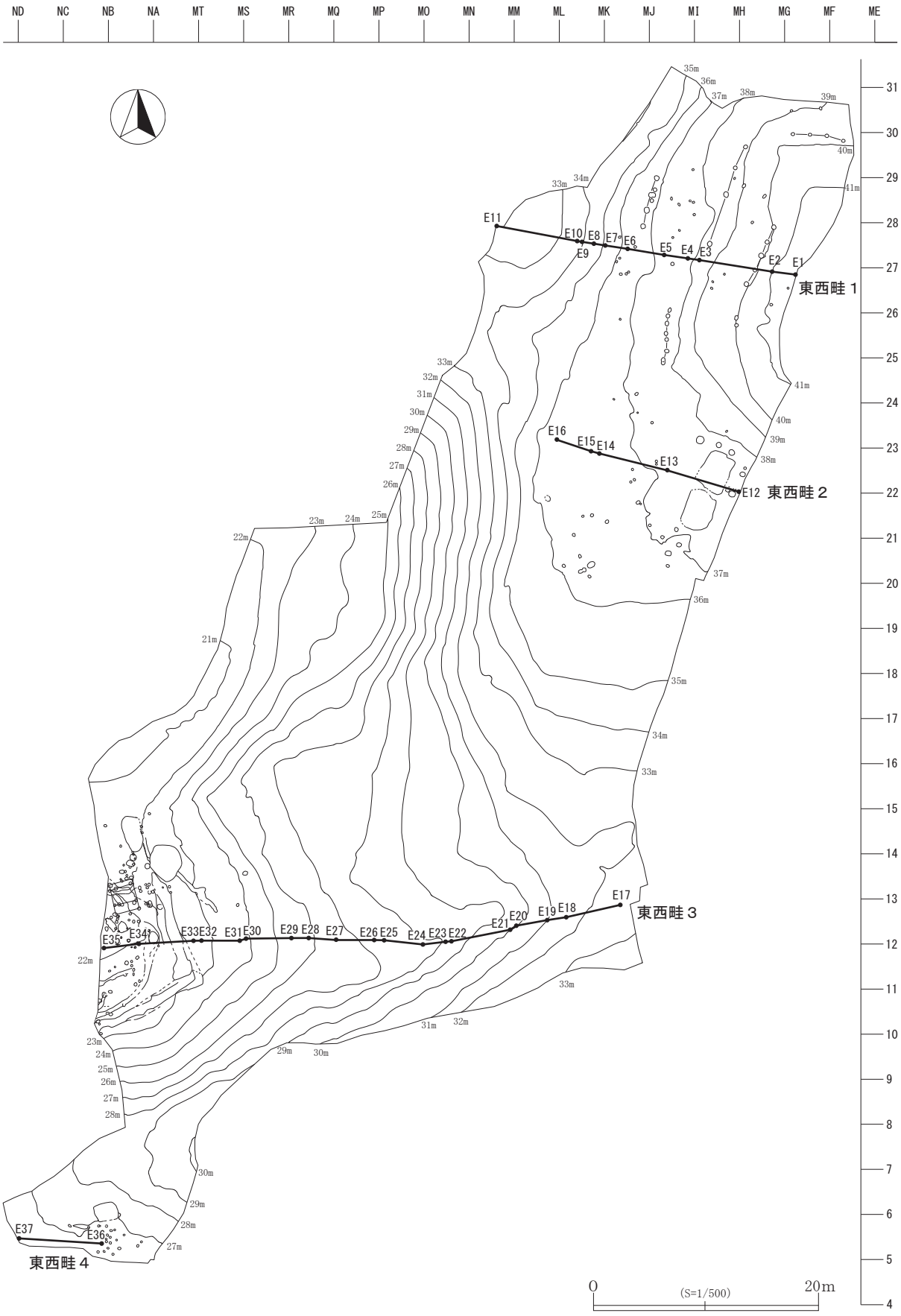
Ⅱ層　褐色（10YR4/4）～黒褐色シルト（10YR2/2）　畑地造成土。主として基盤土を供給源とする。斜面の相対的な高位部の削平土を低位部に盛り、平坦な畑地を造成したものと見られる。斜面近辺や山腹の平坦地で見られる。古代～近代の遺物が出土する。

Ⅲ層　にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）～暗褐色シルト（10YR3/2）～灰白色粘土（10YR7/1）とにぶい黄褐色粘土（10YR5/3）の混土。東西畦３の西端にあたる調査区南西下部にのみ確認される古代造成土である。古代の遺構確認面であり、古代の遺物包含層でもある。旧地形が沢地状に調査区外へ落ちていく緩斜面に盛土し、平坦面を作出した様子が見える。Ⅱ層同様、主として基盤土を供給源とする。

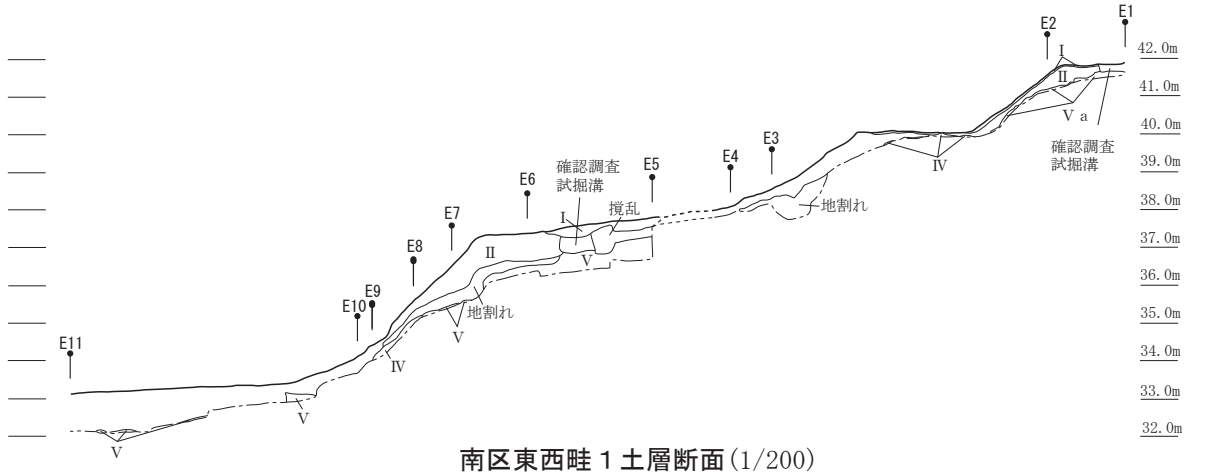
東西畦３の観察面だけでも６層に細分することができ、Ⅲ層各細分層上面からは、鍛冶工房に関わる焼土遺構や溝跡、土坑、柱穴様ピット等を検出していることや遺物の出土状況から、比較的短期間に盛土を繰り返し、その都度工房として使用していたと思われる。また東西畦３のⅡ層に分類される２層土と、Ⅲ層に分類される３層土とは土質が似ており見た目では区別ができないが、２層土からは近現代の遺物が出土するため、近代の整地に伴い３層土が撹乱されたものと判断する。また、Ⅲ層では各細分層上で遺構が確認されるが、都合上東西畦３～４層をⅢ上層、５～７層をⅢ中層、８層をⅢ下層と以後表記する。

Ⅳ層　褐灰色シルト～粘土(10YR6/1)～明黄褐色粘土(10YR6/8)～褐色シルト～粘土(10YR4/4)～暗褐色シルト(10YR3/3)。基盤層の直上に堆積する自然堆積層。一部では地滑りが原因と考えられる基盤土の崩落土が混入する。層上面で古代の遺構を東西畦２・３附近で検出した。

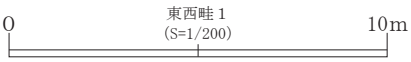
Ⅴ層　明黄褐色粘土(10YR7/6)～灰白色粘土(2.5Y8/2)、黄褐色砂質粘土(10YR5/6)。遺跡の基盤層で、仁賀保丘陵地構成層である。灰白色粘土層は、丘陵の岩盤層である。明黄褐色粘土(10YR7/6)～灰白色粘土(2.5Y8/2)は、遺跡全体で確認される。また黄褐色砂質粘土(10YR5/6)は、東西畦１・２で確認できる。他に、東西畦１のＥ５～６間では、確認調査試掘溝及び撹乱下にて非常に硬度の強い褐色砂層(10YR4/4)を検出している。黄褐色砂質粘土が酸化し鉄分が硬化したものと推定する。

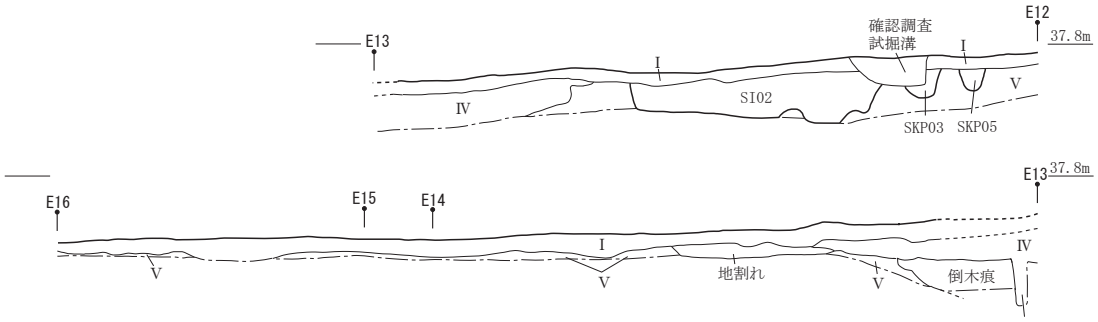


第47図　南区基本層序位置図

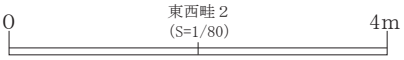


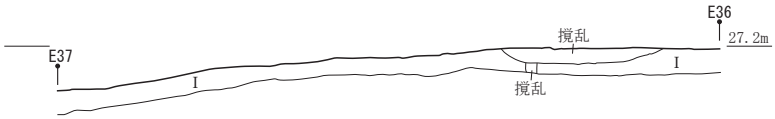
南区東西畦１土層断面(1/200)



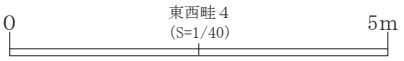


南区東西畦２土層断面(1/80)

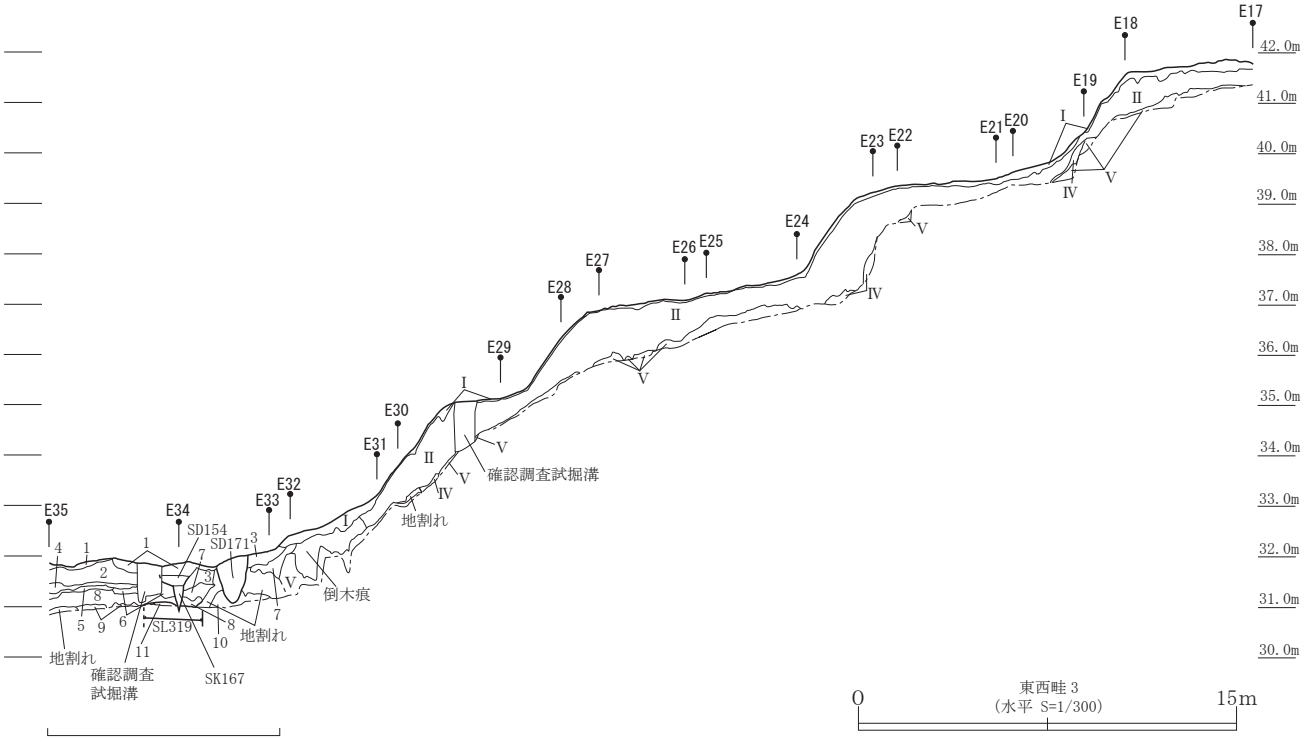




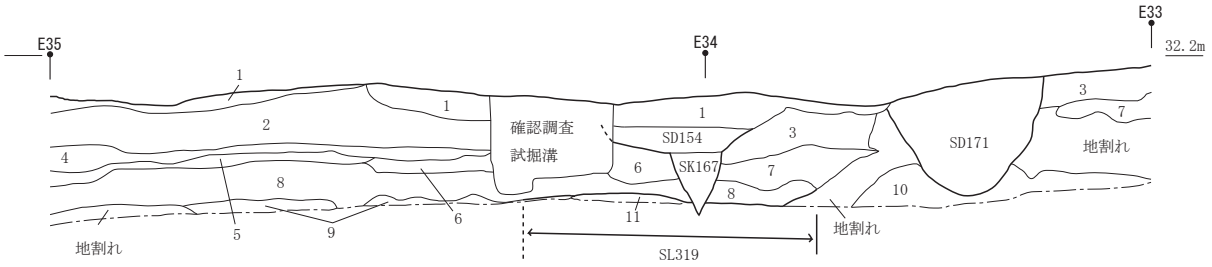
南区東西畦４土層断面(1/40)



第48図　南区東西畦１・２・４土層断面

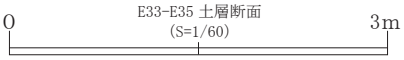


南区東西畦３土層断面（水平：1/300　垂直：1/150）

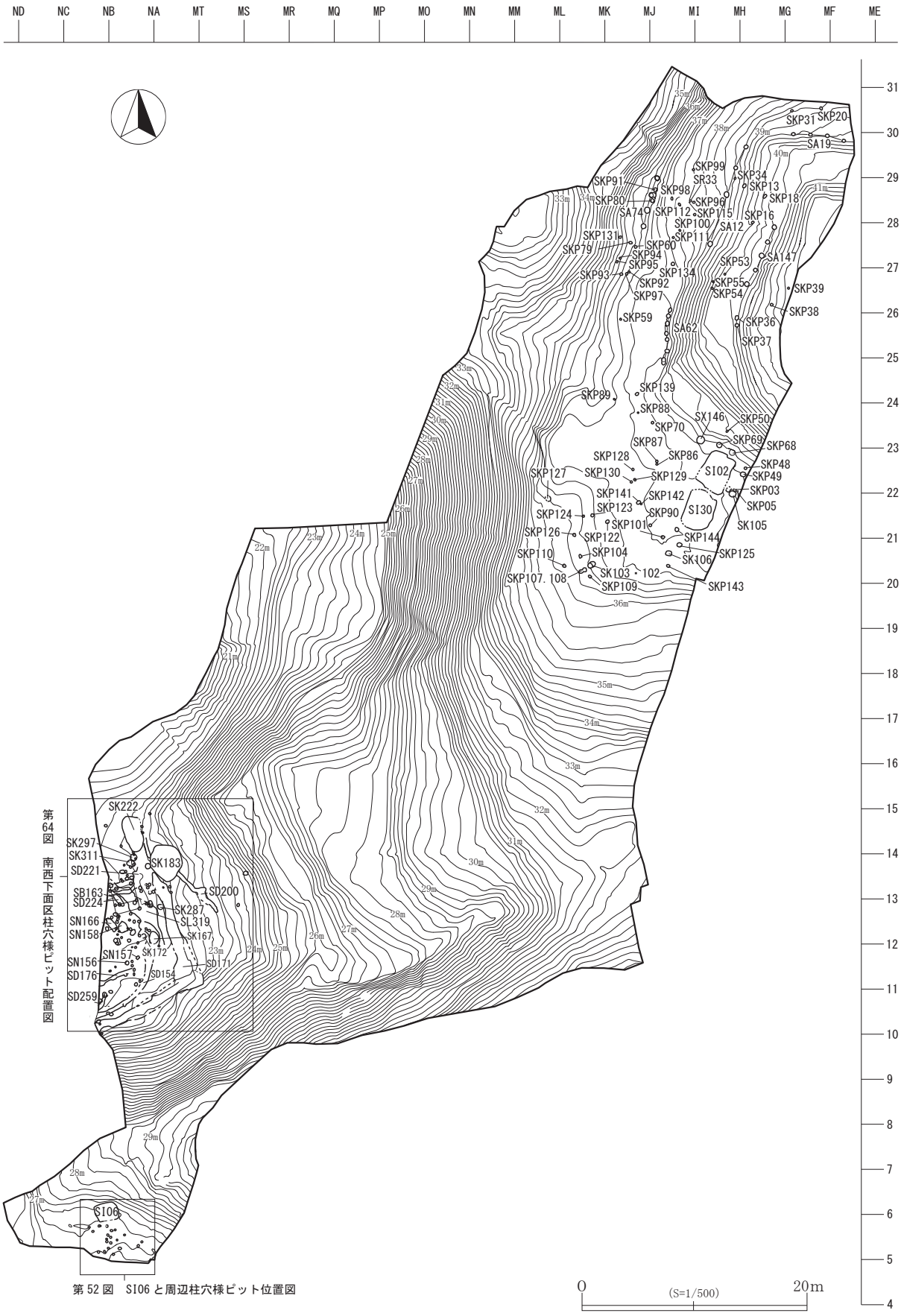


E33-E35土層断面（1/60）

Ⅰ層　1　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性弱　硬度強　径１～２㎜黄褐色土粒 10%を含む
Ⅱ層　2　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性強　硬度強　径１㎜黄褐色土粒 1%、径１㎜炭化物粒３%、径１㎜酸化物１%未満を含む
Ⅲ層　3　にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性強　硬度強　径１㎜黄褐色土粒３%、径１㎜炭化物粒３%、径１㎜酸化物３%未満を含む
Ⅲ層　4　褐色シルト(10YR4/4) 粘性強　硬度強　径１㎜炭化物粒１%未満、径１㎜黄褐色土粒３%を含む
Ⅲ層　5　暗褐色シルト(10YR3/2) 粘性中　硬度強　径１・10㎜炭化物粒１%、径５～10㎜灰白色粘土塊 10%を含む
Ⅲ層　6　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性中　硬度強　径１㎜炭化物粒１%未満、径１～５㎜灰白色粘土粒 30%を含む
Ⅲ層　7　暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性強　硬度強　径粒３～10㎜灰白色粘土５%、径１㎜炭化物粒１%未満を含む
Ⅲ層　8　灰白色粘土(10YR7/1) とにぶい黄褐色粘土(10YR5/3)の混土　粘性強　硬度強　径１～５㎜炭化物塊３%を含む
Ⅳ層　9　明黄褐色粘土(10YR6/8) 粘性強　硬度強
Ⅴ層　10　明黄褐色粘土(10YR7/6) 粘性強　硬度強
Ⅴ層　11　灰白色粘土(2.5Y8/2) 粘性強　硬度強
地割れ　黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性中　硬度強　径１以下～１㎜黄褐色土粒１%未満を含む



第49図　南区東西畦３土層断面



第 52 図　SI06 と周辺柱穴様ピット位置図

第50図　南区遺構配置図

２　南区検出遺構と遺物

（１）概要

横枕遺跡南区では、平安時代に属すると判断される遺構として、竪穴建物跡３棟、掘立柱建物跡１棟、溝跡７条、河川跡１条、土坑９基、焼土遺構４基、土器埋設遺構１基を確認した。このほか、柱穴様ピット173基を検出し、その内半数ほどは平安時代に属すると推定される。

当該期の遺構分布を見ると、北東上面の標高36 ～ 38mの平場部（北東上面区）、南西下部の地滑りによって形成された、周囲を馬蹄形の急斜面に囲まれた標高21 ～ 23mの緩斜面部（南西下面区）、南端に張り出した尾根上の標高26 ～ 28mの狭小な平場部（南端張り出し区）の３か所に限定される。現況は近現代の耕作による段々畑であったが旧地形は地割れ、地滑りの跡が多く残る斜面であった。竪穴建物跡のうち２棟は北東上面区に南北に並んで、残り１棟は南端張り出し区から検出した。いずれも、カマド等の生活の様子が窺えるものは検出されなかった。南西下面区には遺構が集中しており、溝跡に囲まれ、盛土整地された平坦面に掘立柱建物跡、土坑、焼土遺構などがまとまって分布している。当該地点周辺は、鍛錬鍛冶作業等に係わる工房施設群が営まれたものと想定される。

このほか、出土遺物や掘り込み面、覆土の特徴などから近世以降に属すると判断される遺構として、調査区北側頂上の山際に側し、土留めとみられる柱穴列を５条（SA12・19・62・74・147）、水溜遺構（SX146）を検出した。また、当該地区から検出され、時期が特定できない柱穴様ピットは、近世以降のものと推測する。これらは近世以降の畑地耕作等と係わる施設と推定されるが、本書では、遺構配置図（第50図）には位置を掲載し、個別の報告は割愛する。

（２）竪穴建物跡

SI02竪穴建物跡（第51図、図版11）

【確認状況】標高約37m、北東上面区の東端MH22区の基盤粘土層（Ｖ層）上面に位置する。2009年の確認調査において検出。東西畦２断面及び基盤粘土層面で基盤粘土塊を多量にを含む褐色土の広がりを認め、遺構の存在を確認した。

【重複】現代の畑作による撹乱は受けているが、切り合いはない。SI30の北側に並ぶ。

【規模・形態】南側は大きく撹乱を受けており、南西壁は高さ３㎝ほどしか残存しておらず全体の正確な形状は掴めなかった。平面主軸方位はほぼ北東－南西で、長軸約3.5m、短軸2.6mの隅丸長方形を呈する。北東壁は北東側の斜面上に位置し、40㎝ほど基盤粘土層を緩やかな角度で掘り込んでいる。北西、南東壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。南西壁は失われているが、土層断面部分から推測すると基盤土上面より26㎝ほどの掘り込みである。掘形底面は凸凹しており、貼床により水平に整えている。建物内の中央部分に３基、南西壁側両端に２基柱穴がある。山側の北東壁側の床面には柱穴はないが、壁の外側に２基の柱穴（SKP68・69）があり、付属のものと推測する。

【覆土の特徴】１層は基盤粘土塊を多く含む埋め戻した層である。２層は北壁側の地割れから黒色シルトが混入しており、埋め戻しの前に壁が崩落したものである。３層は基盤粘土塊から成る貼床層である。廃棄時には全体の一括埋め戻しが行われている。

【遺物等の検出状況】須恵器壺破片１点11.7g、貼床土内から石匙（第65図１）１点が出土した。

【所見】本遺構ではカマドは未確認であり、床面に焼土も炭化材も未検出なことから住居とは考えにくい。何らかの作業施設と思われる。また、遺物の出土も少なく、時代特定には根拠が薄い。周囲の状況から古代のものと推測したが、中世の竪穴建物である可能性も否定できない。

SI06竪穴建物跡（第52図、図版11）

【確認状況】標高約27m、南端張り出し区の狭小な平坦部、NA・NB5・6区基盤粘土層（Ｖ層）上面に位置する。確認調査において炭溜まり土坑として検出。基盤粘土層面で炭化物粒を多量に含む暗褐色土の広がりで確認した。

【重複】重複はない。

【規模・形態】竪穴の掘り込みは、東西長2.0m、南北幅1.6mの東西軸の方形平面をなす。確認面からの深さは山側の北壁が約0.48m、南壁が0.16mほどである。北壁は斜面部を掘り下げ、床面を水平としている。貼床はない。中央から北東側の床面に１㎝厚ほどの炭化物の層が広がっていた。また、中央北側と南半側に７基の柱穴を検出した。カマドは未検出であった。また、竪穴外の南側から直径20～30㎝の柱穴21基（SKP07～10、21～29、40～47）を検出した。この平坦面には竪穴とその南側に隣接する柱穴群以外に遺構がないことから、柱穴群は竪穴に付属するものと判断し、併せて図化した。掘立柱建物跡としての柱穴配置は認定できず、具体的な構造は不明である。

【覆土の特徴】北壁側下部に基盤粘土塊が多量に入る箇所があり、分層したが、基本的には一括埋め戻しが行われている。また北側壁の基盤土は地滑り、地割れを起こしており均質ではない。床面には前述した炭化物層が薄く広がる。

【遺物の出土状況】主に炭化物層から土師器坏12.0g、甕85.5gが出土した。隣接する柱穴群の間から土師器甕（第67図21）が出土したが、便宜上遺構外出土遺物として掲載した。また、竪穴床面の北西端と柱穴群の間の２か所から同一個体とみられる片面が平坦な礫が分かれて出土している。

【所見】カマドは未確認であり、炭化物層が残存していたが焼土の痕跡はない。竪穴の規模も小さいため住居ではなく、炭置き小屋などの作業施設の建物と考えられる。

SI30竪穴建物跡（第51図、図版11）

【確認状況】標高約37m、北東上面区の東端MH・MI21区の基盤粘土層（Ｖ層）上面に位置する。東西畦２断面、及び基盤粘土層面で基盤粘土粒を多量に含む褐色土の広がりを確認した。当初、SI02竪穴建物跡と一連のものと想定していたが、精査の結果、別の竪穴建物跡であることが判明した。

【重複】現代の畑作による撹乱を受けているが、切り合いはない。SI02の南側に並ぶ。

【規模・形態】全面に大きく撹乱を受け、北東壁は一部しか残存していない。そのため正確な形状は掴めなかった。平面主軸方位は北東－南西方向で、長軸約3.5m、短軸2.6mの隅丸長方形を呈する。全体が平坦面上にあり、20㎝ほど基盤粘土層を垂直に掘り込んでいる。掘形底面は凸凹しており、貼床により水平に整えている。竪穴の各壁際に計７基の柱穴を確認した。

【覆土の特徴】撹乱が多く、残りは極めて悪いため詳細は不明だが、基盤土塊を多く含む１層による一括埋め戻しが行われたと思われる。３層は基盤粘土塊から成る貼床層である。

【遺物等の検出状況】遺物は検出されなかった。

【所見】SI02と同様に本遺構でもカマドは未確認であり、床面に焼土も炭化材も未検出なことから住居とは考えにくい。何らかの作業施設と思われる。また、遺物が検出されなかったため、時代特定には

根拠がない。覆土の性質がSI02と同一であることから同時期に並んで建っていたと考えられ、同様に古代のものと推測したが、中世の竪穴建物である可能性も否定できない。

（３）掘立柱建物跡

SB163掘立柱建物跡（第53図）

【確認状況】標高約22m、南西下面区のNA12・13区のⅢ層及び基盤粘土層上面において、12基の柱穴様ピットを検出し、確認した。

【重複】P1・P4・P5・P9・P10・P12がSL319を切る。また、P4はSD221の下位に位置する。

【規模・形態】身舎は桁行（北西－南東）３間、梁行（北東－南西）２間の12基の柱穴様ピットにより構成されている。平面形は桁行総長（P1 ～ P11）は約2.72mで、柱間距離は、P1－P4－P7－P11間が、それぞれ0.52m、1.34m、0.86mであり、P3－P6－P10－P12間はそれぞれ0.50m、1.42m、0.80mである。梁行総長（P1 ～ P3）約2.05mで、P1－P2－P3間がそれぞれ、1.13m、0.92mで、P4－P5－P6間は0.54m、1.38mで、P7－P8－P10間はそれぞれ、0.32m、1.80m、P11－P12間は2.19mである。桁行柱筋は北から西へ19度傾いている。柱穴は円形および楕円形で径0.22 ～ 0.58m、深さは0.04 ～ 0.48mほどである。またP9はP10の作り替えと思われる。４角のP1・P3・P11・P12を本柱とし、桁行に２本、梁行に１本の支柱を置く構造となっている。

【遺物等の検出状況】P1より土師器甕片20.9g（第65図２）が出土している。

【所見】鍛錬鍛冶工房に伴う建物跡と推定される。

（４）溝跡

SD154溝跡（第54図、図版12）

【確認状況】南西下面区の南側、MT12・NA10 ～ 12・NB10区のⅢ上～中層上面及び東西畦３と確認調査試掘溝において、北東から南西に弧を描いて調査区外へと延びる状態を確認した。

【重複】SK167と重複するが、新旧は不明である。SKP159・258・323をそれぞれ切っている。

【規模･形態】全長11.49m（残存値）、幅0.32 ～ 0.92m（残存値）、確認面からの深さは0.21 ～ 0.27mである。底部は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。礫群が出土したA－B断面付近を頂上に、南西に向かい山際に添う形で底面は傾斜している。西の山裾にむけて排水が行われていたと想定する。

【覆土の特徴】４層に分層したが、全て古代造成土（Ⅲ層土）の暗褐色土を基調とする。１～３層には、基盤粘土や炭化物などの混入が見られ、一括埋め戻しと推定される。

【遺物等の検出状況】土師器坏42.8g、同甕40.9g、須恵器坏17.9g、鉄滓7.9g、粒状滓18.0gが出土している。また、A－B断面近辺では埋め戻し時に廃棄された礫を大小合わせて16個確認した。

【所見】SD171の内側を、同様に弧を描くように焼土遺構群を囲んで調査区外へ延びている様子から、斜面からの流水の排水および区画の役割を兼ねた溝と考える。層位から、SD171以前に作られたと考える。

SD171溝跡（第55図、図版12）

【確認状況】南西下面区、MS11・MT10 ～ 13・NA10・13・NB10区のⅢ上層～基盤粘土層上面及び東西畦３断面にて、北西から南東へ、平坦部を囲むように弧を描き調査区外へ延びる状態を確認した。

【重複】SK183・SKP161・201・257・318と重複する。SKP161・201・257に切られる。

【規模・形態】全長19.06m、幅0.60(推定値)～ 2.40m(残存値)、深さは0.22 ～ 0.66mである。中央の折れ曲がるMT11区付近を頂上に斜面に沿い西へ下る方向と、SK183へ向かう北への２方向を向く。

【覆土の特徴】３か所で計20層に分類した。Ⅳ層や基盤粘土に由来する土を基調としている。18 ～ 20層の下位層はグライ化が比較的進んでおり、自然堆積層と思われる。上～中位層は人為的な一括埋め戻しと推測される。

【遺物等の検出状況】土師器坏347.1g、土師器甕236.4g、内黒土師器坏126.4g、両黒土師器坏20.9g、須恵器坏11.2g、須恵器甕83.5g、鍛冶滓19.3gが出土。そのうち土師器坏(第65図３)、高台付内黒土師器坏(同４)、高台付両黒土師器坏(同５)、土師器甕口縁部(同６)の５点を図化した。また、鉄床石と思われる礫片も多数出土し、片面が平らで被熱し打痕があるもの１点を図化した(同７)。

【所見】SD154の外側を同様に弧を描くように鍛冶工房域を囲んで調査区外へ延びている様子から、流水の排水及び、区画のための溝と考えられる。層位からSD154より後に作られたものと考える。

SD176溝跡(第56図、図版12)

【確認状況】南西下面区の南側西端、NA・NB11区のⅢ中層上面で、北西から南東へ蛇行して調査区外へ延びる状態を確認した。確認調査試掘溝により東側は失われている。また上部は削平され、底部のみが残存している。

【重複】SKP205を切る。

【規模・形態】全長3.06m(残存値)、幅0.15 ～ 0.50m、確認面からの深さは0.04mである。

【覆土の特徴】Ⅲ上層である褐色粘土を基質とし、焼土粒や炭化物粒、浅黄色粘土塊などが微量に含まれる単一層で、一括埋め戻しと推定される。

【遺物等の検出状況】土師器坏78.1g、内黒土師器坏16.9g、土師器甕48.8g、須恵器坏16.9g、須恵器甕14.9gが出土している。

【所見】西方向への排水または区画のためと推定されるが、詳細は不明である。

SD200溝跡(第56図、図版13)

【確認状況】南西下面区の中央に落ち込んでいく緩斜面上のMS12・13、MT13区の基盤粘土上面で南東から北西へわずかに蛇行して延び、SK183に切られる状態を確認した。確認調査試掘溝により一部が失われている。また上部は削平を受けており、底部のみが残存した状況である。

【重複】SK183に切られる。

【規模・形態】全長9.45m(残存値)、幅は0.26 ～ 0.48m、確認面からの深さは0.03 ～ 0.08m、壁は緩やかに立ち上がる。

【覆土の特徴】基盤粘土に由来した灰黄褐色粘土がブロック状となった単一層である。周囲の土が流れ込み埋まったものと想定される。

【遺物等の検出状況】遺物は出土していない。

【所見】斜面に沿い北西方向に傾斜しており、排水のためのものと推定される。

SD221溝跡(第57図、図版13)

【確認状況】南西下面区の緩斜面部中央西端、NA13区のⅢ下層上面で北から南へ、その後大きく蛇行し、西方向へ調査区外に延びていく状態を確認した。確認調査試掘溝によりその大部分は失われており全

体形状は不明である。

【重複】SKP226に切られ、SD224を切る。また、SB163P4と重複し、その上位に位置する。

【規模・形態】全長5.47m（残存値）、幅0.23 ～ 0.43m（残存値）、確認面からの深さは0.04 ～ 0.12mで、壁は緩やかに立ち上がる。

【覆土の特徴】不明。

【遺物等の検出状況】土師器坏13g、流動滓24.7g、遺構廃絶時に埋めたと思われる礫が数点出土している。

【所見】西方向への排水及び区画に関わるものと考えるが、詳細は不明である。

SD224溝跡（第57図、図版13）

【確認状況】南西下面区の中央西端、NA12･13区の基盤粘土面で南東から北西へ延びる状態を確認した。平面形は楕円だが、上部は削平され深く掘られた部分だけが残ったものと推測する。

【重複】SD221に切られている。またSB163P8は本遺構の上面で確認している。

【規模・形態】全長1.26m、幅0.32 ～ 0.44m、確認面からの深さは0.24mで壁は緩やかに立ち上がる。

【覆土の特徴】基盤粘土に由来する灰黄褐色粘土の単一層で、一括埋め戻しと考える。

【遺物等の検出状況】土師器坏6.2gが出土。

【所見】排水に関わるものと推定される。SD221と合流し、排水をしていたものと考える。

SD259溝跡（第57図、図版13）

【確認状況】南西下面区の南西端、NB10区のⅣ層上面で北東から南西へ弧を描くように蛇行し、調査区外へ延びる状態を確認した。上部は削平され、残存状況は良くない。

【重複】SKP277 ～ 279・285を切っている。

【規模・形態】全長は1.98m（残存値）、幅は0.18 ～ 0.38m、確認面からの深さは0.07mで、壁は緩やかに立ち上がる。

【覆土の特徴】暗褐色シルトを基調とする単一層で、一括埋め戻しと考える。

【遺物等の検出状況】土師器坏片１点9.8gが出土している。

【所見】調査区外へ伸びている。排水や区画のためのものと推定される。

（５）河川跡

SL319河川跡（第58図、図版13）

【確認状況】標高約22m、南西下面区の中央、MT11・12、NA12・13、NB13区の基盤粘土上面で南東から北西へ蛇行し、調査区外へ延びる状態を確認した。本来は沢地であった地形を造成によって大きく変えているため、残存状況は良くない。11グリッドラインで西へ開口している沢と本来同一であったと推定する。

【重 複】SB163P1・P4・P5・P9・P10・P12、SK167、SKP282・283・286・294・298 ～ 301・304・314に切られている。

【規模・形態】平坦面にて確認されている状態で、全長6.96m（残存値）、幅0.58 ～ 1.70m、確認面からの深さは0.22 ～ 0.38mで、壁はそれぞれ緩急があり、底部には起伏がある。

【覆土の特徴】古代造成土（Ⅲ下層）がグライ化した暗褐色土を基調とした一括埋め戻しである。

【遺物等の検出状況】遺物は出土していない。

【所見】沢跡であるが、SD154と連結し排水溝として利用され、SN166鍛冶炉を囲んでいた可能性が考えられる。平場造成の際に埋められ、その役割をSD171に譲ったと思われる。

（６）土坑

SK105土坑（第58図、図版13）

【確認状況】標高約37m、北東上面区の東端、MH21・22区の基盤粘土層上面で確認した。

【重複】重複はない。

【規模・形態】SI02の東に位置し、長径0.60m、短径0.52mの楕円形平面を呈す。平面長軸方向はほぼ東西方向である。掘り込みは椀形で壁は緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは約0.25mである。

【覆土の特徴】SI02と同様の基盤粘土粒を多量に含む褐色土である。底部に基盤粘土塊が多量に堆積した部分があり分層してあるが、基本的に一括埋め戻しであると推定される。

【遺物等の検出状況】遺物は未検出である。

【所見】位置関係と覆土が同質なことからSI02と同時期と想定されるが、詳細な性格は不明である。

SK106土坑（第58図、図版13）

【確認状況】標高約37m、北東上面区の東端、MI20区の基盤粘土層上面で確認した。

【重複】重複はない。

【規模・形態】長径約0.55m、短径約0.45mの楕円形平面で、平面主軸方位は東西方向である。掘り込みは椀形で壁は緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは約0.14mである。

【覆土の特徴】基盤粘土塊を含む褐色土の単層で基本的に一括埋め戻しと推定される。

【遺物等の検出状況】遺物は未検出である。

【所見】SI30の南３mに位置し、覆土の性格も似ているため同時期のものと推定される。

SK167土坑（第59図、図版15）

【確認状況】標高約22m、南西下面区の平坦部、NA11 ～ 12、MT11区のSD154底面と基盤土層上面及び東西畦３断面にて確認した。

【重複】SD154と切合うが新旧関係は不明である。東西畦３の掘り込みにより南側が一部欠損している。

【規模・形態】長径約1.12m（推定）、短径約0.86mの、不整楕円形平面である。平面主軸方位は、北西－南東である。確認面からの深さは0.46mで、壁は急に立ち上がる。

【覆土の特徴】４層に分類した。いずれも基盤粘土に由来する灰黄褐色粘土を基質とし、炭化物や焼土粒などを含む。特に３層に炭化物が多く含まれている。各層は類似し一括の埋め戻しと推定する。

【遺物等の検出状況】土師器坏118.1g、甕53.6g、粒状滓18.3gが出土しているほか、小礫数個が底部近くで確認されている。

【所見】SD154と同時期に存在していた可能性があり、井戸のような水溜として使用していたことが考えられる。これと類似する遺構にSK183がある。

SK172土坑（第59図、図版15）

【確認状況】南西下面区のNA12区Ⅲ下層上面及び、確認調査試掘溝断面で確認した。

【重複】切合いはないが、確認調査試掘溝により西半分は欠損している。

【規模・形態】長径約0.38m（推定）、短径約0.36m（推定）の円形平面を呈するものと推測する。平面主軸方位は北西－南東である。確認面からの深さは約0.03m、底部は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。上部はかなりの削平を受けており、底部がかろうじて残されたものと考える。

【覆土の特徴】炭化物を多量に含む単一層である。

【遺物等の検出状況】土師器坏１点、5.5gが出土している。

【所見】上部削平により詳細な性格は不明である。炭溜か柱穴様ピットの底部の可能性がある。

SK183土坑（第60図、図版15）

【確認状況】標高約23m、南西下面区の緩斜面から平坦面にかけて、MT・NA13～14区の基盤粘土層上面にて、灰黄褐色の円形プランを確認した。

【重複】SD200を切り、SKP317に切られている。SD171とは接続していると思われる。

【規模・形態】長径約3.36m、短径約2.85mの不整円形を呈する。平面主軸方位は北西－南東である。確認面からの深さは約1.42m（E－F間）、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

【覆土の特徴】12層に分層した。下部は徐々に自然堆積していき、上部は廃絶時に一括して埋め戻しをしたものと考える。堆積土層中からそれぞれに炭化物や焼土が確認され、２・11層中では他の堆積土と比べ炭化物の入り方が多い。また７層と８層の間でも、薄く帯状に炭化物が堆積していた。

【遺物等の検出状況】土師器坏106.4g、同甕115.1g、須恵器坏115.1g、土製品40.3g、鍛冶滓35.7g、粒状滓24.6gが出土している。そのうち土師器甕口縁部１点を図化した（第65図８）。また、廃絶の際に投げ込まれた礫も約50点出土している。それらには鉄床石や一部被熱したものも含んでいる。そのうち片面が被熱し打痕の残る鉄床石２点を図化した（第65図９・第66図10）。

【所見】SD171と同時期に存在していたものと思われる。調査時においても、湧水が底部からしみ出すことや、SD171から水が流入する様子から、井戸や水溜としての機能を有していたものと推測する。東壁面にＰ１～Ｐ３の柱穴状の掘り込みが確認できるが、これは本遺構を掘削した工人が、登り降りの際に足をかけるために使用したものと推測する。また、大量の礫は廃絶時に儀礼として投げ込まれたものと推測する。

SK222土坑（第61図、図版15）

【確認状況】南西下面区の平坦面北部、NA14区のⅣ層～基盤粘土層上面にて、炭化物を含んだ不定形のプランを検出した。確認面周辺及び下層は基盤粘土面に近い色調であり、全形の確認は、掘削中にサブトレンチを設定し、掘り込みを確認した。

【重複】重複はない。

【規模・形態】長径約3.24m、短径約1.48mの不整楕円形平面を呈する。平面主軸方位は北西－南東方向である。底部は南北で若干の高低差があり、北側が低くなっている。壁は緩やかに立ち上がる。

【覆土の特徴】12層に分層した。炭化物が混入した暗褐色土と、基盤粘土を基調としたにぶい黄褐色土に大きく２分される。１・５・９層土は、他と比べ炭化物の混入が多く見受けられ、基盤土質の他の層と交互に堆積している。

【遺物等の検出状況】土師器坏50.4g、同甕12.0g、須恵器壺46.8g、鍛冶滓15.5gが出土した。そのうち須恵器壺肩部１点を図化した（第66図11）。

【所見】鍛錬鍛冶工房に関連する遺構と想定されるが、詳細な性格は不明である。

SK287土坑（第61図）

【確認状況】南西下面区の平坦面、MT12区のⅢ下層及び基盤粘土層上面で確認した。

【重複】重複はない。

【規模・形態】長径約0.48m（推定）、短径約0.46m（推定）の円形平面を呈すると推測する。平面主軸方位は北西－南東方向である。壁は南が緩やかに立ち上がるのに対し、北は急に立ち上がる。確認面からの深さは0.18mである。

【覆土の特徴】灰黄褐色土に基盤粘土塊が混じる単一層で、一括埋め戻しと推定される。

【遺物等の検出状況】土師器甕片が１点10.8g出土している。

【所見】鍛錬鍛冶工房に関連する遺構と想定されるが、詳細な性格は不明である。

SK297土坑（第61図、図版14）

【確認状況】南西下面区の北端、NA13区の基盤土層面にて、同規模の遺構SK311と南北隣接し並んでいる状態を確認した。

【重複】SKP217・218と重複し、SK297が下位に位置する。

【規模・形態】長径約0.60m、短径約0.56mの不整隅丸方円形を呈する。平面主軸方位は北西－南東方向である。確認面からの深さは0.24mで、壁は急に立ち上がる。

【覆土の特徴】褐灰色粘土を基調とし、地山ブロックが混入する。一括埋め戻しと考える。

【遺物等の検出状況】底部附近より、ほぼ完形の須恵器坏１点165.3g（第66図12）が、正位に置かれている状態で出土した。

【所見】完形の須恵器坏が出土していることや、南に隣接するSK311には大型礫が埋められている状況から、地鎮などの祭祀に関連する遺構と推測する。

SK311土坑（第61図、図版14）

【確認状況】南西下面区の北端、NA13区の基盤土層上面にて、隣接する同規模の遺構SK297と南北に並んだ状態を確認した。

【重複】SKP219と重複し、SK311が下位に位置する。また、SKP292と切り合うが、新旧は不明である。

【規模・形態】長径約0.72m、短径約0.50m（残存値）の不整楕円平面形を呈する。平面主軸方位は北西－南東方向である。確認面からの深さは0.44mであり、壁は急に立ち上がる。

【覆土の特徴】SK297同様に基盤土層上面褐灰色粘土を基調とし基盤粘土塊が混入する。一括埋め戻しと考える。

【遺物等の検出状況】長さ約42㎝、幅約12㎝、高さ約20㎝の大型礫が埋められていた。

【所見】大型礫が埋められていることや、北に隣接するSK297からは完形の須恵器坏が出土している状況から、地鎮などの祭祀に関連する遺構と推測する。

（７）焼土遺構

SN156焼土遺構（第62図、図版15）

【確認状況】標高約23m、南西下面区のNA11区上にて確認調査試掘溝を掘削中に、Ⅲ上層面上にて、焼土の広がりを確認した。

【重複】重複はない。

【規模・形態】被熱範囲は長径約0.34m、短径約0.30m、厚さ0.03mの隅丸方形平面である。

【覆土の特徴】掘り込みはない。焼土は３層に分層した。１層は燃焼部であり、２・３層は、被熱部で同心円状に熱が伝わっていく様子が伺える。

【遺物等の検出状況】鉄滓3.1g、粒状滓7.5gが出土した。

【所見】周囲に鍛冶滓が出土していることから、鍛錬鍛冶炉の可能性が考えられる。上部位はかなりの削平を受けている。Ⅲ層土直上で火を焚いたものと思われる。

SN157焼土遺構（第62図、図版15）

【確認状況】南西下面区のNA11区上に位置する。確認調査時にⅢ上層土上面で焼土の広がりを確認した。その際に断ち割りをしたため、一部が欠損している。上位部はかなりの削平を受けている。

【重複】重複はない。

【規模・形態】被熱範囲は、長径約0.32m（残存値）、短径約0.32m、厚さは0.04mの隅丸台形平面である。

【覆土の特徴】掘り込みはない。燃焼面は焼土化しており、被熱の度合いにより２層に分層した。

【遺物等の検出状況】鍛冶滓2.0g、粒状滓5.9gが出土した。

【所見】SN156同様、周囲に鍛冶滓が出土していることから、鍛錬鍛冶炉の可能性が考えられる。Ⅲ層土直上で火を焚いたものと思われる。

SN158焼土遺構（第62図、図版15）

【確認状況】南西下面区のNA12区Ⅲ上層土上面で、焼土の広がりを確認した。上部はかなりの削平を受けているものと思われる。

【重複】SKP212・265が直下で検出されている。

【規模・形態】長径約0.96m、短径約7.90m（推定値）、厚さ約0.07mの不整楕円平面である。

【覆土の特徴】掘り込みはない。サブトレンチ内で６層に分層したが、SN158にかかる覆土は１～４層である。３層は被熱を受けており、平面的にも２つの輪が重なったような広がりが確認できることから、遺構に２時期あった可能性が考えられる。２層土はⅢ層由来の暗褐色シルトであり、作り替えの際に、掘り返した地点に充填したものと推定される。１層、３層は赤褐色焼土ブロックを多量に含み、燃焼部が崩れたものと考えられる。５・６層は、Ⅲ層土に由来する。周辺に比較して灰白色粘土が多く含まれ、意識的に充填した上に火を焚いたと思われる。

【遺物等の検出状況】土師器坏片27.9g、土師器甕片160.9g、鍛造剝片0.2g、鍛冶滓29.1g、粒状滓40.6gが出土しており、甕の口縁部１点を図化した（第66図13）。

【所見】被熱の広がりが２つ重なった円を描くように見えることから、２時期が考えられる。周囲に鍛冶滓が出土していることから、鍛錬鍛冶炉の可能性が考えられる。Ⅲ層土直上で火を焚いたものと思われる。

SN166焼土遺構（第62図、図版15）

【確認状況】南西下面区のNA・NB12区Ⅲ上層土上面にて、焼土の広がりを確認した。上部はかなり削平を受けているものと思われる。

【重複】SKP267と重複し、SN166が上位に位置する。

【規模・形態】長径約1.28m、短径約0.54m、厚さ約0.06mの不整楕円形平面である。

【覆土の特徴】焼土は３層に分層した。いずれも黒褐色～暗褐色焼土である。１層土は特に強く被熱を

受けている。２層土は全体を囲うように広がる。３層土は赤褐色焼土塊をわずかに含み、土師器片が確認される。

【遺物等の検出状況】土師器坏片66.4g、土師器甕片76.9g、不明鉄製品の破片11.0g、鍛冶滓12.2g、粒状滓29.1gが出土している。

【所見】上部はかなりの削平を受け、被熱部底部のみ残ったものと思われる。他の焼土遺構同様、鍛錬鍛冶炉の可能性が考えられる。Ⅲ層土直上で火を焚いたものと思われる。

（８）土器埋設遺構

SR33土器埋設遺構（第63図、図版15）

【確認状況】標高約37m、調査区北東上面MI28区の倒木痕を埋積する黒色土層を掘り下げ時に、断面で土師器坏が正位に埋設されている状態を確認した。

【重複】重複はない。

【規模・形態】埋設するための掘り込みは、長径約0.18m（推定値）、短径約0.17m（推定値）の円形平面を呈するものと推測される。確認面からの深さは0.11mで、壁は緩やかに立ち上がる。掘り込み内には底径6.2㎝の坏１個体を正位に埋設していたと推測する。遺構の西半分及び上面に撹乱を受けており、正確な形状は把握できなかった。

【覆土の特徴】暗褐色シルトを基調とし、地山粒が微量に混じる。一括埋め戻しと考える。

【遺物等の検出状況】埋設された土師器坏（第66図14）は、西側半分及び口縁部が欠損した状態で出土したが、本来は、完形の状態で埋められたものと判断される。

【所見】遺構は西に向く急斜面の中間に位置し、周囲には多数の地割れ、地滑り跡が存在する。地鎮等の祭祀的な目的のために埋設されたものと推定される。

（９）柱穴様ピット

調査区全域から柱穴様ピット173基を検出した。鍛錬鍛冶工房跡と推定される南西下面区及び、SI06が立地する南端張り出し区の柱穴様ピット群は平安時代に属するものと推定される。北東上面の標高36 ～ 41mの山際にある柱穴列を含む柱穴様ピット群は、時代特定のための根拠に欠ける。一部の柱穴列から江戸時代の陶器が出土しており、柱穴列群は、近世～近代のものと想定する。なお、柱穴様ピットの各位置については近世のものも含め遺構配置図（第50図）に掲載した。また、密集する南西下面区、南端張り出し区に関しては別に南西下面区柱穴様ピット配置図（第64図）、SI06と周辺柱穴様ピット位置図（第52図）にそれぞれ掲載した。個々の規模については南区柱穴様ピット一覧（第６・７表）に掲載した。また、廃絶儀礼と思われる特徴的な遺物や礫が検出されたもの５基（SKP202・211・212・213・223）を図化し掲載した（第63図）。遺物に関してはSKP223からほぼ完形で出土した須恵器坏のみ図示した（第66図16）。

（10）遺構外・調査区外出土遺物（第67 ～ 74図、図版16・17）

遺構外からは、土師器坏4,576.6g、同甕9,719.1g、内黒土師器坏104.2g、両黒土師器坏5.8g、須恵器坏153.7g、同甕9,719.1g、他に土製品、石製品、鉄滓、鍛造剥片、粒状滓、縄文時代の石器、近代陶磁

器、寛永通宝等の銭貨が少量出土した。遺物の出土量は少なく摩滅し表面が剥落しているものが多く、成形、調整方法が不明なものが多かった。また、調査区外の北区と南区の間からも確認調査等で遺物が出土しており、調査区外遺物として掲載した（第73・74図92 ～ 103）。

【南端部出土土師器】調査区南端の狭小な平坦面のSI06に隣接する柱穴群の間から出土した土師器はSI06と関連する可能性が高いためまとめて掲載する。17・18は土師器坏でロクロ成形、切り離しは回転糸切りによるものである。19 ～ 22は甕の口縁～胴部である。20は割れた状態でまとまって出土した。

【土師器】23 ～ 30は、ロクロ成形で回転糸切りでの切り離しによる坏である。いずれも南西端下面から出土した。38は若干底部が柱状高台となっている。39・40は内黒土師器。41 ～ 44は高台付内黒土師器である。45・46は非ロクロ成形でケズリ、ハケメ調整を行い底部に網代痕を残す坏。47・49は同様に網代痕を残す甕底部である。48はロクロ成形、回転糸切りによる切り離しの甕底部。50は底部周囲にタタキメを残す甕底部である。51 ～ 59は甕の口縁部で、51のみ非ロクロ成形でハケ目調整を行っているものである。60 ～ 63は甕の胴部で、いずれも外面にタタキメを残し、63は内面にアテグ痕も残る。64は甑の取手部分である。

【須恵器】65は回転糸切りによる切り離しの坏である。遺構外からの須恵器の坏の出土量は少ない。66は丸底、67は高台付の甕底部である。68 ～ 70は甕口縁部。71 ～ 85は甕胴部で、71はロクロメが残るもの。72はカキメ調整のみのもの。73 ～ 85は外面にタタキメを残すもので、73 ～ 75は内面に指圧痕等人手の痕が残るもの。76 ～ 78は青海波文のアテグ痕の残るもの。79・80は同一個体でヘラをアテグに使用したもの。81 ～ 85は平行アテグ痕を残すものである。

【土製品】86・87は土錘である。いずれも調査区中段の地割れによる沢状落ち込み部より出土した。

【石器】88は南端尾根のNA6区地割れ部から出土した石鏃。中央下部MP・MQ15区の大規模な地割れの黒色土中からは、石匙（89）、石錘（90・91）が出土した。いずれも縄文時代前期の所産と推定される。

【調査区外遺物】遺物が出土した確認調査試掘溝の位置は、第５図　周辺地形図・掲載遺物出土確認調査試掘溝位置図に掲載した。92はロクロを使用した土師器坏。93は網代痕の残るハケメ調整をされた土師器坏。94 ～ 97は土師器甕の口縁～胴部。98は須恵器坏。99 ～ 103は須恵器甕の胴部である。92・95・101 ～ 103は101試掘溝からの出土。97は96試掘溝からの出土で、いずれも南区の北端に隣接する谷の底からの出土で上面から流れ落ち溜まったものと思われる。93は89試掘溝からの出土で、南北調査区の中間地点の地滑りを起こした急斜面の底部にあたる。94・99は標高38mと高位にある91試掘溝からの出土で前述の谷へ流れ落ちる途中のものである。96は60試掘溝、98は59試掘溝、100は80試掘溝からの出土で、いずれも北区の南に隣接する馬蹄形の地滑り部分の底部にあたる。横枕遺跡全域からこのように遺物は出土している。

註１　上位暗色帯及びその上下の層準採取土壌試料から、イネの植物珪酸体が比較的多量に検出されたことにより、当該層堆積時には稲作が行われていた可能性が高いとされている（第４章第１節）。ただし、調査区周辺は基本的に丘陵斜面であり、一定規模の水田耕作が行われたとは想定し難い。試料を採取した沢部分においても水田耕作と係わる可能性がある施設等は未確認である。あるいは、陸稲栽培が行われた可能性なども想定すべきかもしれないが、現状では、その実態は不詳である。

第６表　南区柱穴様ピット一覧（１）

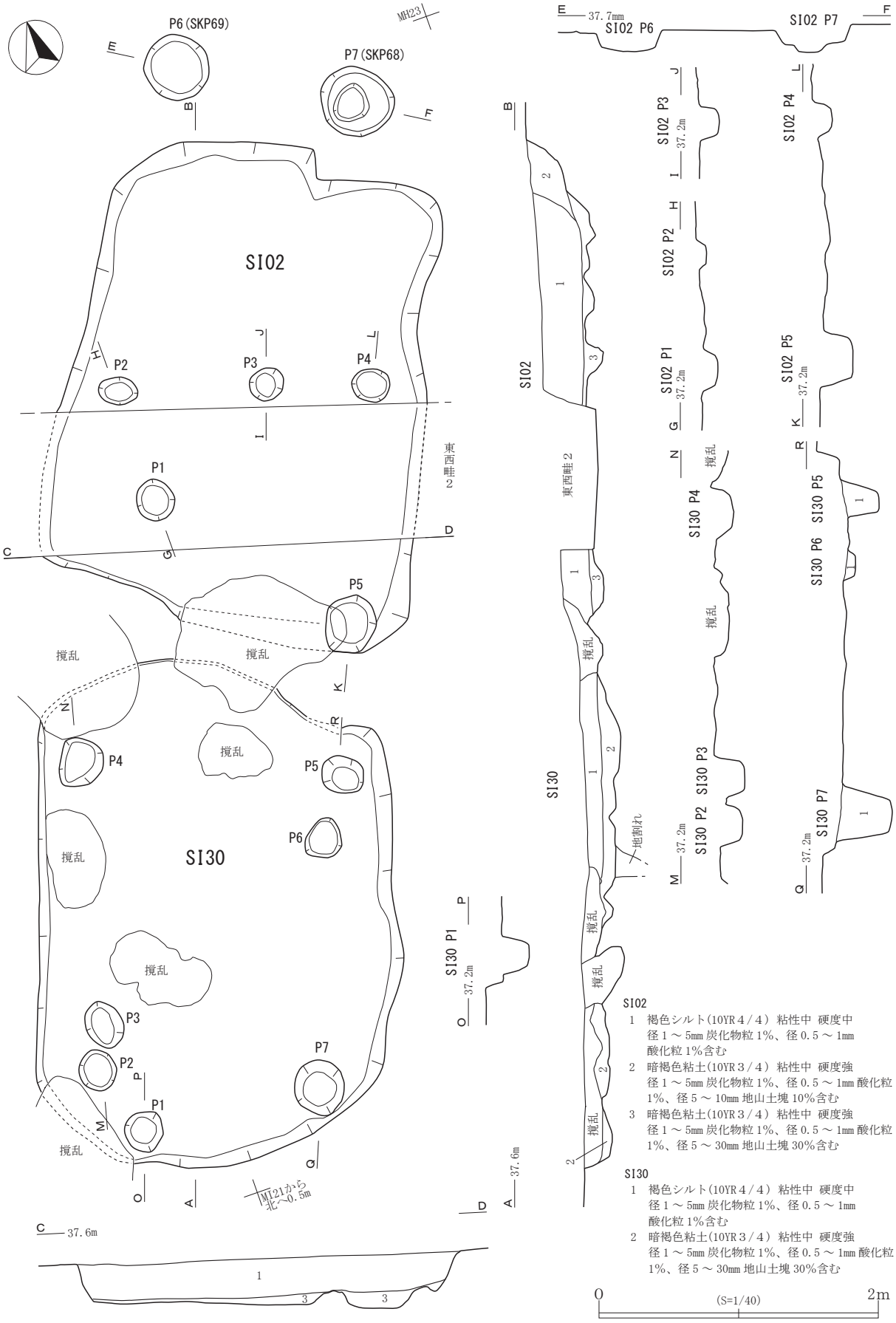
（　）内残存値

SKP	区	検出層位	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	時期	検出区域	特記事項
03	MH22	V	(32.0)	35.0	27.7	37.165	古代	北東上面区	東西畦2検出
05	MH22	V	30.0	(11.0)	15.9	37.300	古代	北東上面区	東西畦2検出
07	NA・NB5	V	20.0	18.0	19.1	26.717	古代	南端張り出し区	
08	NA5	V	17.0	17.0	16.2	26.690	古代	南端張り出し区	
09	NA5	V	22.0	20.0	19.0	26.660	古代	南端張り出し区	
10	NA5	V	30.0	23.0	14.7	26.591	古代	南端張り出し区	
SA12P1	MH27	V	42.0	39.0	26.0	38.175	不明		
SA12P2	MH28	Ⅳ	50.0	47.0	36.6	38.167	不明		
SA12P3	MH29	Ⅳ	33.0	32.0	22.0	38.522	不明		
SA12P4	MG29	V	36.0	35.0	22.6	38.701	不明		
13	MG28	Ⅳ	40.0	25.0	31.6	38.866	不明		
16	MG27・28	Ⅳ	25.0	22.0	25.9	39.273	不明		
18	MG28	V	36.0	29.0	33.6	39.623	不明		
SA19P1	MF29	V	35.0	25.0	26.4	39.212	不明		
SA19P2	MF29	V	33.0	23.0	26.4	39.333	不明		
SA19P3	MF29	V	36.0	32.0	28.0	39.292	不明		
SA19P4	ME29	V	35.0	28.0	51.6	39.622	不明		
20	MF30	V	29.0	22.0	29.4	38.809	不明		
21	NA5	V	20.0	20.0	37.2	26.291	古代	南端張り出し区	
22	NB5	V	20.0	15.0	21.9	26.785	古代	南端張り出し区	土師器出土
23	NA・NB5	V	20.0	15.0	15.5	26.699	古代	南端張り出し区	
24	NA5	V	20.0	20.0	17.2	26.702	古代	南端張り出し区	
25	NB5	Ⅳ	20.0	20.0	12.3	26.770	古代	南端張り出し区	土師器出土
26	NB5	V	20.0	15.0	20.3	26.665	古代	南端張り出し区	
27	NB5	V	20.0	20.0	4.9	26.788	古代	南端張り出し区	
28	NB5	V	15.0	15.0	11.9	26.718	古代	南端張り出し区	
29	NA5	V	18.0	18.0	26.5	26.637	古代	南端張り出し区	
31	MF30	V	22.0	20.0	26.4	38.753	不明		
34	MH28・29	V	20.0	15.0	27.1	38.404	不明		
36	MH25	V	40.0	28.0	18.0	41.908	不明		
37	MH25	V	32.0	30.0	25.6	41.879	不明		
38	MG26	V	25.0	20.0	17.5	41.164	不明		
39	MF26	V	17.0	17.0	23.9	41.299	不明		
40	NB5	V	12.0	12.0	5.1	26.197	古代	南端張り出し区	SKP46を切る
41	NA5	V	15.0	14.0	21.5	26.726	古代	南端張り出し区	土師器出土
42	NA5	V	15.0	13.0	5.8	26.813	古代	南端張り出し区	
43	NA5	V	15.0	15.0	20.3	26.747	古代	南端張り出し区	
44	NA5	V	25.0	18.0	14.0	26.802	古代	南端張り出し区	
45	NB5	V	21.0	19.0	10.3	26.854	古代	南端張り出し区	
46	NB5	V	18.0	16.0	13.9	26.836	古代	南端張り出し区	SKP40に切られる
47	NB5	V	19.0	16.0	18.4	26.802	古代	南端張り出し区	
48	MG22	V	25.0	20.0	7.6	37.506	古代	北東上面区	
49	MG22	V	46.0	44.0	25.4	37.245	古代	北東上面区	
50	MH23	V	20.0	15.0	14.5	38.076	古代	北東上面区	
53	MH26	V	20.0	18.0	16.2	39.550	不明		
54	MH26	V	24.0	21.0	13.4	39.476	不明		
55	MH26	V	20.0	13.0	31.6	39.270	不明		
59	MJ25	V	20.0	18.0	22.3	36.402	不明		
60	MJ27	Ⅳ	22.0	22.0	19.1	36.833	不明		
SA62P1	MI24	V	(35.0)	33.0	28.0	37.069	不明		P2を切る　近世陶器出土
SA62P2	MI24,MI25	V	(37.0)	32.0	12.6	37.153	不明		P1に切られる
SA62P3	MI25	V	38.0	30.0	29.8	37.111	不明		
SA62P4	MI25	V	31.0	30.0	16.2	37.124	不明		
SA62P5	MI25	V	37.0	30.0	33.0	37.091	不明		
SA62P6	MI25	V	42.0	32.0	36.5	37.058	不明		
SA62P7	MI25	V	40.0	32.0	30.5	37.129	不明		
SA62P8	MI26	V	43.0	25.0	27.2	37.165	不明		
68	MH22	V	50.0	50.0	20.1	37.454	古代	北東上面区	SI02に付属
69	MH23	V	44.0	44.0	17.9	37.448	古代	北東上面区	SI02に付属
70	MI23	V	20.0	20.0	6.6	37.101	不明		
SA74P1	MJ27	V	44.0	42.0	8.0	37.780	不明		
SA74P2	MJ28	V	52.0	45.0	18.0	37.720	不明		
SA74P3	MI28,MJ28	V	46.0	(22.0)	16.0	37.720	不明		
SA74P4	MI28	V	42.0	37.0	17.0	37.780	不明		
SA74P5	MI28,29	V	44.0	43.0	12.0	36.600	不明		
79	MJ27	Ⅳ	30.0	22.0	24.0	36.141	不明		
80	MI28	V	32.0	31.0	9.0	36.680	不明		SKP91と対
86	MI22	V	17.0	17.0	13.4	36.931	古代	北東上面区	
87	MI22	V	24.0	20.0	35.2	36.744	古代	北東上面区	
88	MJ23	V	18.0	11.0	10.2	36.992	不明		
89	MJ24	V	16.0	13.0	12.1	36.697	不明		
90	MI21,MJ21	V	25.0	22.0	8.5	36.855	古代	北東上面区	
91	MI28	V	34.0	31.0	16.0	36.670	不明		SKP80と対
92	MJ26	V	20.0	17.0	10.2	36.590	不明		
93	MJ26	Ⅳ	25.0	20.0	17.5	36.327	不明		
94	MJ27	Ⅳ	19.0	16.0	14.1	36.112	不明		
95	MJ27	Ⅳ	21.0	15.0	14.7	36.035	不明		
96	MI28	Ⅳ	20.0	17.0	24.8	37.634	不明		
97	MJ26	Ⅳ	20.0	20.0	14.7	36.540	不明		
98	MI28	Ⅳ	28.0	16.0	18.9	37.302	不明		
99	MI29	Ⅳ	20.0	15.0	24.2	37.570	不明		
100	MI27	Ⅳ	20.0	15.0	19.1	37.377	不明		
101	MI20・21	Ⅳ	32.0	30.0	14.5	36.933	古代	北東上面区	
102	MK20	V	44.0	43.0	26.7	36.248	古代	北東上面区	SKP103に切られる
103	MK20	V	48.0	(28.0)	26.8	36.163	古代	北東上面区	SKP102を切る
104	MK20	V	20.0	30.0	23.2	36.099	古代	北東上面区	
107	MK20	V	(40.0)	30.0	50.7	35.743	古代	北東上面区	SKP108に切られる
108	MK20	V	(36.0)	35.0	23.0	36.078	古代	北東上面区	SKP107を切る
109	MK20	V	27.0	25.0	33.5	36.007	古代	北東上面区	
110	MK20	V	(28.0)	28.0	15.5	35.976	古代	北東上面区	
111	MI27	Ⅳ	18.0	17.0	28.2	37.235	不明		
112	MI28	Ⅳ	26.0	16.0	20.4	37.526	不明		
115	MI28	Ⅳ	20.0	20.0	22.0	37.562	不明		
122	MJ21	V	30.0	30.0	33.1	36.449	古代	北東上面区	
123	MK21	V	30.0	28.0	45.4	36.163	古代	北東上面区	
124	MK21	V	20.0	20.0	29.9	36.150	古代	北東上面区	
125	MI20	V	40.0	34.0	41.7	36.697	古代	北東上面区	
126	MK21	V	28.0	26.0	38.0	35.993	古代	北東上面区	
127	ML21	V	(52.0)	(42.0)	55.6	35.749	古代	北東上面区	

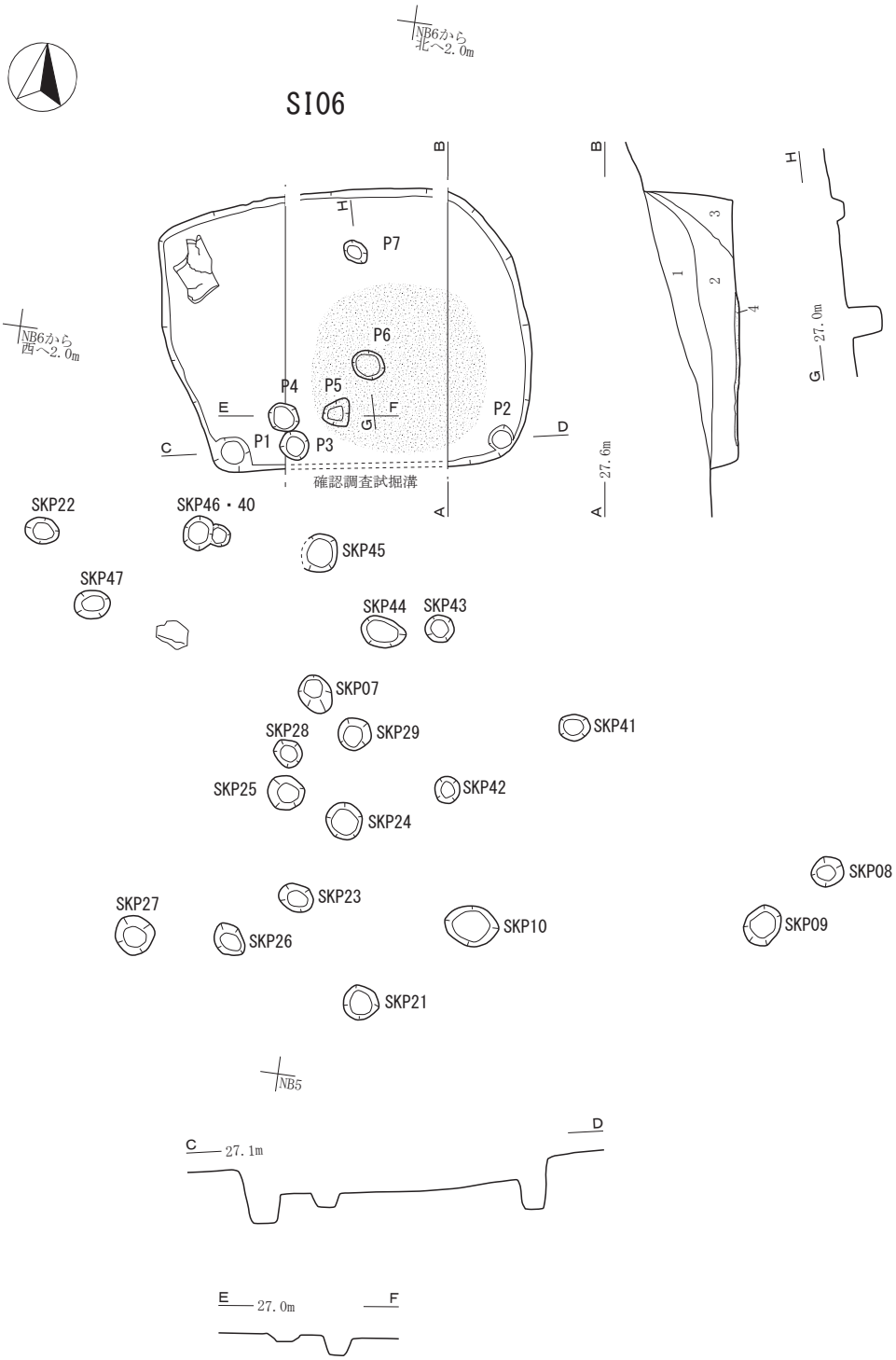
第７表　南区柱穴様ピット一覧（２）

（　）内残存値

SKP	区	検出層位	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	時期	検出区域	特記事項
128	MJ22	V	20.0	20.0	20.9	36.799	古代	北東上面区	
129	MJ22	V	24.0	20.0	8.5	36.855	古代	北東上面区	
130	MJ22	V	20.0	20.0	13.4	36.817	古代	北東上面区	
131	MJ27	Ⅳ	25.0	20.0	22.3	35.801	不明		
134	MI27	V	30.0	28.0	9.0	37.127	不明		
139	MJ24	V	30.0	26.0	18.3	36.939	不明		
141	MJ21	V	40.0	28.0	26.2	36.697	古代	北東上面区	
142	MJ21	V	15.0	14.0	19.5	36.775	古代	北東上面区	
143	MI20	V	30.0	25.0	10.0	36.810	古代	北東上面区	
144	MI21	V	(38.0)	33.0	18.0	36.897	古代	北東上面区	
SA147P1	MG26	V	45.0	40.0	10.3	39.786	不明		
SA147P2	MG26	V	35.0	35.0	17.2	39.792	不明		
SA147P3	MG27	V	45.0	45.0	17.6	39.834	不明		
SA147P4	MG27	V	35.0	35.0	13.0	39.832	不明		
SA147P5	MG27	V	40.0	40.0	11.5	39.916	不明		
159	NA10	Ⅲ中	30.0	30.0	16.2	22.434	古代	南西下面区	SD154と切り合う(旧)
161	NB10	Ⅲ中	(38.0)	(28.0)	16.4	22.108	古代	南西下面区	SD171と切り合う(新)
164	NA11	Ⅲ下	20.0	19.0	9.5	22.273	古代	南西下面区	
177	NA11	Ⅲ中	20.0	16.0	17.7	22.251	古代	南西下面区	
178	NA11	Ⅲ中	15.0	13.0	5.4	22.248	古代	南西下面区	
179	NA11	Ⅲ中	21.0	14.0	12.6	22.169	古代	南西下面区	
180	NA13	Ⅲ中	32.0	25.0	29.1	21.709	古代	南西下面区	
181	NA13	Ⅲ中	20.0	15.0	14.0	21.848	古代	南西下面区	
184	MT11	V	15.0	15.0	7.9	21.164	古代	南西下面区	東西畦3内底部
187	NA13	Ⅲ下	15.0	15.0	5.6	21.867	古代	南西下面区	
188	NA12	Ⅲ下	15.0	15.0	13.3	22.066	古代	南西下面区	
190	NA12	Ⅲ下	23.0	20.0	6.8	22.127	古代	南西下面区	
191	NA12	Ⅲ下	25.0	20.0	6.6	22.117	古代	南西下面区	
193	NA13	Ⅲ下	34.0	13.0	19.0	21.833	古代	南西下面区	
194	NA13	Ⅲ下	16.0	14.0	7.8	21.792	古代	南西下面区	
195	NB12	Ⅲ中	38.0	25.0	12.0	22.050	古代	南西下面区	
196	NA13	Ⅲ下	23.0	20.0	10.8	21.887	古代	南西下面区	
197	NA13	Ⅲ下	19.0	10.0	6.8	21.918	古代	南西下面区	
198	NA13	Ⅲ下	25.0	23.0	13.8	21.899	古代	南西下面区	
199	MT13	Ⅳ	22.0	20.0	16.5	22.343	古代	南西下面区	
201	MT13	Ⅲ下	20.0	15.0	3.7	22.491	古代	南西下面区	SD171を切る
202	NA12	Ⅲ下	25.0	21.0	11.4	22.096	古代	南西下面区	礫出土、第63図
203	NA11	V	30.0	26.0	15.3	22.110	古代	南西下面区	
204	NA11	V	25.0	15.0	28.5	21.945	古代	南西下面区	
205	NA11	V	26.0	21.0	27.3	22.127	古代	南西下面区	SD176を切る
206	NA11	V	29.0	19.0	6.1	22.164	古代	南西下面区	
207	NA11	V	25.0	13.0	6.3	22.134	古代	南西下面区	
208	MR13,MS13	V	45.0	35.0	53.0	23.852	古代	南西下面区	
209	NA11	V	19.0	18.0	5.9	21.945	古代	南西下面区	東西畦3内底部
210	NA11	V	11.0	9.0	4.2	21.968	古代	南西下面区	東西畦3内底部
211	NA12	Ⅲ中	27.0	25.0	11.3	22.155	古代	南西下面区	礫出土、第63図
212	NA12	Ⅲ中	26.0	22.0	9.6	22.150	古代	南西下面区	SN158の下位　礫出土、第63図
213	NA12	Ⅲ中	23.0	20.0	10.2	22.153	古代	南西下面区	礫出土、第63図
214	NA12	Ⅲ中	25.0	23.0	8.1	22.091	古代	南西下面区	
215	MS12	V	30.0	22.0	11.4	23.804	古代	南西下面区	
216	NA14	V	20.0	15.0	5.0	21.950	古代	南西下面区	
217	NA13	Ⅲ下	20.0	20.0	5.2	21.970	古代	南西下面区	SK297の上位
218	NA13	Ⅲ下	15.0	15.0	6.8	21.955	古代	南西下面区	SK297の上位
219	NA13	Ⅲ下	25.0	19.0	17.6	21.875	古代	南西下面区	SK311の上位
220	NA14	V	22.0	20.0	9.3	22.121	古代	南西下面区	
223	NA12	Ⅲ下	23.0	23.0	8.9	22.140	古代	南西下面区	須恵器坏出土、第63図
226	NA13	Ⅲ下	(16.0)	17.0	22.0	21.751	古代	南西下面区	SD221を切る
257	NB10	Ⅳ	18.0	17.0	12.7	22.124	古代	南西下面区	SD171を切る
258	NA10	V	35.0	28.0	39.0	22.055	古代	南西下面区	SD154に切られる
263	NA11・12	V	30.0	17.0	15.3	21.814	古代	南西下面区	SKP264・268・269に切られる
264	NA12	V	(44.0)	20.0	13.1	21.842	古代	南西下面区	SKP268に切られ、SKP263・269を切る
265	NA12	V	15.0	10.0	13.4	21.786	古代	南西下面区	SN158の下位
266	NA12	V	30.0	20.0	4.6	21.865	古代	南西下面区	
267	NA12	V	20.0	19.0	23.5	21.605	古代	南西下面区	SN166の下位
268	NA12	V	(40.0)	(35.0)	31.7	21.617	古代	南西下面区	SKP264を切る
269	NA11・12	V	(25.0)	(15.0)	20.7	21.748	古代	南西下面区	SKP264に切られSKP263を切る
270	NA12	V	20.0	20.0	14.8	21.724	古代	南西下面区	
271	NA11・12	V	20.0	18.0	13.9	21.857	古代	南西下面区	
272	NA12	V	30.0	30.0	9.7	21.908	古代	南西下面区	
273	NA12	V	20.0	15.0	15.3	21.725	古代	南西下面区	
274	NA10,NB10	V	35.0	25.0	32.3	21.804	古代	南西下面区	
277	NB10	V	45.0	42.0	7.8	21.960	古代	南西下面区	SD259・SKP278・279に切られる
278	NB10	V	(20.0)	(16.0)	25.3	21.822	古代	南西下面区	SD259に切られSKP277を切る
279	NB10	V	(22.0)	(22.0)	24.1	21.841	古代	南西下面区	SD259に切られSKP277を切る
282	NA12	V	25.0	19.0	23.9	21.714	古代	南西下面区	SL319を切る
283	NA12	V	21.0	21.0	31.8	21.798	古代	南西下面区	SL319を切る
285	NB10	V	(22.0)	20.0	14.0	21.890	古代	南西下面区	SD259に切られる
286	NA12	V	25.0	20.0	17.4	21.764	古代	南西下面区	SL319を切る
291	MT13,NA13	V	26.0	26.0	12.2	21.867	古代	南西下面区	
292	NA13	V	(20.0)	20.0	8.2	21.660	古代	南西下面区	
293	NA14	V	20.0	15.0	16.2	21.625	古代	南西下面区	
294	NA12	V	20.0	17.0	11.9	21.708	古代	南西下面区	SL319を切る
298	NA12	V	40.0	30.0	26.0	21.708	古代	南西下面区	SL319、SKP300を切る
299	NA12	V	10.0	10.0	7.4	21.752	古代	南西下面区	SL319、SKP300を切る
300	NA12	V	42.0	(28.0)	24.0	21.759	古代	南西下面区	SL319、SKP298・299・301に切られる
301	NA12	V	20.0	14.0	9.1	21.755	古代	南西下面区	SK319、SKP300を切る
302	NA14	V	15.0	15.0	8.3	21.811	古代	南西下面区	
303	NA14	V	20.0	15.0	5.2	21.863	古代	南西下面区	
304	NA12	V	17.0	10.0	16.6	21.709	古代	南西下面区	SL319を切る
305	NA12	V	25.0	20.0	9.9	21.808	古代	南西下面区	
306	NB14	V	30.0	20.0	11.7	21.456	古代	南西下面区	
307	NA13	V	30.0	23.0	15.5	21.565	古代	南西下面区	
308	NA13	V	25.0	23.0	23.0	21.496	古代	南西下面区	
310	NA13	V	21.0	17.0	19.5	21.501	古代	南西下面区	
315	NB9・10	V	25.0	23.0	19.0	22.568	古代	南西下面区	
317	NA13	V	48.0	45.0	28.0	22.700	古代	南西下面区	SK183を切る
318	MT13	V	13.0	10.0	3.4	22.218	古代	南西下面区	SD171と重複
321	NA12	V	57.0	40.0	17.7	21.778	古代	南西下面区	
322	NA13	V	45.0	30.0	16.1	21.769	古代	南西下面区	
323	NA10,NB10	V	30.0	25.0	15.8	22.105	古代	南西下面区	SD154に切られる


P6(SKP69)
P7(SKP68)
MH23
SI02
P1
P2
P3
P4
P5
東西畦2
撹乱
SI30
P6
P7
MI21から北へ0.5m
37.6m
SI02 P6
SI02 P7
37.7mm
SI02 P3
SI02 P2
SI02 P1
SI02 P4
SI02 P5
37.2m
東西畦2
地割れ
SI30 P4
SI30 P3
SI30 P2
SI30 P1
SI30 P5
SI30 P6
SI30 P7
SI02
1　褐色シルト(10YR４/４) 粘性中 硬度中
径１～5mm 炭化物粒 1%、径 0.5～1mm
酸化粒 1%含む
2　暗褐色粘土(10YR３/４) 粘性中 硬度強
径１～5mm 炭化物粒 1%、径 0.5～1mm 酸化粒
1%、径５～10mm 地山土塊 10%含む
3　暗褐色粘土(10YR３/４) 粘性中 硬度強
径１～5mm 炭化物粒 1%、径 0.5～1mm 酸化粒
1%、径５～30mm 地山土塊 30%含む
SI30
1　褐色シルト(10YR４/４) 粘性中 硬度中
径１～5mm 炭化物粒 1%、径 0.5～1mm
酸化粒 1%含む
2　暗褐色粘土(10YR３/４) 粘性中 硬度強
径１～5mm 炭化物粒 1%、径 0.5～1mm 酸化粒
1%、径５～30mm 地山土塊 30%含む
0
(S=1/40)
2m

第51図　SI02・30



SI06

1　暗褐色粘土(10YR３/４）粘性中 硬度強 径１～5mm 炭化物粒 1%、径 0.5 ～ 1mm 酸化粒 1%含む

2　暗褐色粘土(10YR３/４）粘性中 硬度強 径１～5mm 炭化物粒 1%、径 0.5 ～ 1mm 酸化粒 1%、径５～ 10mm 地山土塊 10%含む

3　暗褐色粘土(10YR３/４）粘性中 硬度強 径１～5mm 炭化物粒 1%、径 0.5 ～ 1mm 酸化粒 1%、径５～ 30mm 地山土塊 30%含む

4　黒色炭(10YR1.7/1）粘性弱 硬度弱 炭化物層

0　(S=1/40)　2m

第52図　SI06と周辺柱穴様ピット位置図